の舊邸は荒廢させたくないと存じて居りますから、如何にも適宜の處置をお執り下されましたら有り難う存じます。

かく憎き氣色もなき……薫と中の君との間はこんな風に綺麗な交情なのだと匂宮は御覽になりながらも、御自分の浮氣癖から推量して。

露をつらぬきとむる玉の緒―露の玉を貫きとほす緒に、尾花即ち薄を見立てゝの喩。

穂にいでぬ……そぶりにも出てゐますよ、心を動して物案じて居られるらしい貴女の樣子は、何しろ薫の情をこめた誘ひの手紙が度々ですからね。

女君も……中の君も琵琶は熱心に嗜んで居られる事とて拗ね通す事もお出來にならず、機嫁を直し。

脇息に凭りかゝりて―中の君が身重なので脇息にもたれて。

秋はつる……芒にそよめく風によつて秋も終らうとする野邊の趣がしみ〴〵感じられます、その如く時たま委をお見せになる貴方の御態度によつて私にお飽きなされた御樣子がよく分りますとの意。秋に飽きをかけた。

我が身一つの―古今、「月見れば千々に物こそ悲しけれわが身一つの秋ひながら、我が御心ならひに、たゞならじと思すが安からぬなるべし。

枯れ〳〵なる前栽の中に、尾花の、物より殊に手をさし出でて招くがをかしく見ゆるに、まだ穂に出でさしたるも、露をつらぬきとむる玉の緒、はかなげにうち靡きたるなど、例の事なれど、夕風なほあはれなる頃なりかし。

「穂にいでぬもの思ふらし篠すゝき
まねくたもとの露しげくして」

懷かしきほどの御衣どもに、直衣ばかり著給ひて、琵琶を彈きゐ給へり。黄鐘調の掻き合はせを、いとあはれに彈きなし給へば、女君も心に入れ給へる事にて、物怨じもえし果て給はず、小さき御几帳のつまより、脇息に凭りかゝりて、ほのかにさし出で給へる、いと見まほしくらうたげなり。

「秋はつる野べの氣色もはなすゝき
ほのめく風につけてこそ知れ

にはあらねど」。

かゝればこそ……こんなに可憐だからこそ薫も中の君を斷念しきれないのだらうと。

移ろひ果てゞ―すつかり霜で色が變つてしまひきらず。

わざと繕ひ立て……特別にお手入をなされたのは却て色變りが遲いのに。白菊は霜に變色したのをも當時は賞した。

花のなかに偏に―朗詠、元稹、「不二是花中偏愛菊、此花開後更無レ花」。

なにがしの御子の……西宮左大臣高明(醍醐天皇の皇子)が頗る菊を愛しこの句を誦してゐた處が唐土の琵琶の妙手廉承武の靈が來て、開後は開書の誤傳の由を告げ、且石上流泉の琵琶の秘曲を授けて去つたといふ故事。

昔を傳へたらむ……古の名手から傳はつた手法までが何のそんなに劣る筈がありませうか。

覺束なき手など……中の君自身に不確な彈法などの箇處を聞きたがつていらつしやるので。

さらば獨ごとは……では獨奏は物足らない故合奏なさいよ。

昔こそ……昔は教へて下さる父宮もお出でしたが碌々覺込みもせずに終りましたものを。

我が身一つの」とて涙ぐまるゝが流石に恥かしければ、扇を紛らはしておはする心の中も、らうたく推し量られるれど、かゝればこそ、人もえ思ひ放たざるらめと、疑はしき方たゞならで、怨めしきなっめり。菊のまだよくも移ろひ果てゞ、わざと繕ひ立てさせ給へるはなか〳〵遲きに、いかなる一本にかあらむ、いと見所ありて移ろひたるを、取り分きて折らせ給ひて、「花のなかに偏に」と誦じ給ひて、「なにがしの御子の、この花めでたる夕べぞかし、古へ天人の翔りて琵琶の手教へけるは。何事も淺くなりにたる世は物憂しや」とて、御琴さしおき給ふを、(中君)口惜しと思して、「心こそ淺くもあらめ、昔を傳へたらむ事さへは、などてか、さしも」とて、覺束なき手などをゆかしげに思したれば、「さらば獨ごとはさう〳〵しきに、さしいらへし給へかし」とて、人召して箏の御琴とり寄せさせて彈かせ奉り給へど、「昔こそまねぶ人も物し給ひしかど、はか〳〵しく彈きもとめずなりにしものを」と、つゝましげにて手も觸れ給はねば、「かばかりの事も、隔て給へるこそ心憂けれ。

かばかりの事も—こんな些細な慰み事ですら。
この頃見るあたりは……近頃娶つた六の君はまだ大して打解けて馴染む程ではないけれど、未熟な初心な手つきも隠さずに見せます。
その中納言も……貴女のお好きな薫もいはれたやうです。
かの君にはた……薫にはまさかこれ程遠慮もなされますまい。
ゆるびたりければ……紘が。
伊勢の海—催馬樂「伊勢の海の、伊勢の海の、清き渚の潮がひに、なのりそや摘まん、貝や拾はむ、イヤ、玉や拾はむ、イヤ」。
笑みひろごり……樂しさうに笑ひこぼれてゐた。
二心おはしますは……匂宮樣が六の君をも愛していらつしやるのは心外だけれど、それも男として無理ならぬ事ゆゑ、矢張中の君樣は御好運な方と申してよからう。
かゝる御有樣に……こんな立派な方にお附合が出來さうもなかつた年來の御生活だつたのに、中の君樣が又宇治へ歸りたく思召して。
御物忌など……六の君へは物忌ゆゑ伺ひませんなど、かこつけて引籠つていらつしやるのを。
かの殿には—六の君の方では。

この頃見るあたりは、まだいと心解くべき程にもあらねど、片なりなる初ごとをも隠さずこそあれ。すべて女は、やはらかに心美しきなむよき事とこそ、その中納言も定むめりしか。かの君にはた、かくもつゝみ給はじ。こよなき御中なめれば」など、まめやかに怨みられてぞ、（中君ハ）うち歎きて少し調べ給ふ。ゆるびたりければ、盤渉調に合はせ給ふ。搔き合はせなど、爪音をかしげに聞ゆ。伊勢の海うたひ給ふ（匂宮ノ）御聲のあてにをかしきを、女ばら物のうしろに近づき參りて、笑みひろごりて居たり。「（女房）二心おはしますはつらけれど、それも道理なれば、猶わが御前をば幸人とこそは申さめ。かゝる御有樣にまじらひ給ふべくもあらざりし年頃の御住居を、また歸りなまほしげに思して宣はするこそ、いと心憂けれ」など、たゞいひにいへば、若き人々は「あなかまや」など制す。（匂宮ハ）御琴ども教へ奉りなどしつゝ、三四日籠りおはして、御物忌などことつけ給ふを、かの殿には怨めしく思して、大臣内裏より出で給ひけるまゝに、此處に參り給へれば、宮「（匂）事々しげなる樣して、何しにいま

大臣—夕霧。
此處に—匂宮の邸に。
むつかり給へど—蓋でぶつ〳〵いつていらつしやるけれど。
あなたに渡り……中の君の部屋から御自分の居間へ入らしつて。
異なる事なき……格別用事が無い時はこの二條院を訪問も致しませんで暫くになりますのも、感慨深い事で御座います。
引き連れ聞え給ひて—夕霧が匂宮を御同伴申上げて。
御子どもの殿ばら—夕霧の子息達。
姉ぶべくも……中の君の方では六の君方に及びもつかぬのが、侍女達の心では全くがつかりした。
似給ふべきも……瓶立の夕霧に似ていらつしやる方も無い。
さばかりやむごとなげ……夕霧はあれ程立派な御威勢で悠々御自身で匂宮樣を迎へに入らしつたのが憎らしい。
安げなの世の中や—それにしても氣の揉める世の中だなあ。
御自ら—中の君御自身も。
かの華やかなる……はでな六の君方との張合が出來さうもなく。
なほ心安く……矢張氣樂に宇治に退居してゐるのが一番人目にも無難であらうなどと。

しつるぞよ」とむつかり給へど、あなたに渡り給ひて對面し給ふ。「（夕霧）異なる事なき程は、この院を見で久しうなり侍るもあはれにこそ」など、昔の御物語ども少し聞え給ひて、やがて引き連れ聞え給ひて、出で給ひぬ。御子どもの殿ばら、さらぬ上達部、また殿上人なども、いと多くひき續き給へる御勢こちたきを見るに、竝ぶべくもあらぬぞ屈し痛かりける。人々覗きて見奉りて、「（女房）さも清らにおはしける大臣かな。さばかり、何れともなく若く盛にて清げにおはさうずる御子どもの、似給ふべきもなかりけり。あなめでたや」といふもあり。又「（女房）さばかりやむごとなげなる御樣にて、わざと御迎に參り給へるこそ憎けれ。安げなの世の中や」などうち歎くもあるべし。御自らも、來し方を思ひ出づるより始め、かの華やかなる御中らひに、立ち交るべくもあらず、かすかなる身の覺をと、いよ〳〵心細ければ、なほ心安く籠り居なむのみこそ目安からめなど、いとゞ覺え給ふ。はかなくて年も暮れぬ。
正月の晦日方より、例ならぬ樣に惱み給ふを、宮まだ御覽じ知らぬ事

例ならぬ樣に……中の君が御出産が近づいてお惱みなさるのを。
后の宮より—明石中宮からも。
かくて三年に……中の君が匂宮に緣付かれてもう三年になるが、匂宮の御愛情こそ疎略ではないが、一般の人々は中の君を表立つて重んじてもゐなかつたのに、この御出産といふ時になつて始めて。
中納言の君は……薫は匂宮が御心配なさるのにも劣らぬ位。
限ある御訪らひ……一通りの御見舞だけはなさるけれど、薫は餘り度度もえうお出にならず。
女二の宮—今上の第二皇女。お腹は藤壺女御(女院とは別人)。薫に降嫁の筈の方。この卷の冒頭參照。
帝の御心一つ……帝が御自分お一人取切つての御配慮のやうにしてお支度なさるので、母女御のいらつしやらないのが結句却て立派に事が運ぶやうに見えた。
女御の……母女御が生前女二宮の爲に支度をして置かれた事は勿論。
作物所—禁中の諸調度を造る所。
さるべき受領—相當身分の國守。當時は朝廷で事あれば諸國に入用の財物を課し、國守に進獻せしめた。
やがてその程に……早速裳着の式の濟んだ頃から薫が女二宮に通ふやにて、いかならむと思し歎きて、御修法など、所々にて數多せさせ給ふに、又々始め添へさせ給ふ。いといたう煩ひ給へば、后の宮よりも御訪らひあり。かくて三年になりぬれど、一所の御志こそ疎ならね、大方の世には、物々しうもてなし聞え給はざりつるを、この折ぞ、何處にも何處にも聞し召し驚きて、御訪らひども聞え給ひける。中納言の君は、宮の思し騷ぐらむにも劣らず、いかにおはせむと歎きて、心苦しく後めたく思さるれど、限ある御訪らひばかりこそあれ、餘りも、えまうで來給はで、忍びてぞ御祈などもせさせ給ひける。さるは、女二の宮の御裳著たゞこの頃になりて、世の中ひゞき營みのゝしる。よろづの事、帝の御心一つなるやうに思し急げば、御後見なきしもぞ、なか〳〵めでたげに見えける。女御のしおき給へる事をばさるものにて、作物所、さるべき受領どもなど、とり〴〵に仕うまつる事ども、いと限なし。やがてその程に、參りそめ給ふべきやうにありければ、男方も心づかひし給ふ頃なれど、例の事なれば、そなた樣には心も入らで、この御事のうにとの帝の御内意があつた故。
男方も—薫の邸でも。
例の事なれば……例の薫の癖だから
この御事のみ—中の君の事ばかり。
直物—定期の除目が濟んで後、追加して行はるゝ任官式をいふ。
權大納言に……薫は中納言から權大納言に昇進して。
右の大殿の左にて……紅梅右大臣が兼任の左大將を今度辭職されて、右が左に轉じたその後任であつた。
よろこびに—薫は御禮の挨拶に。
この宮にも—匂宮の邸へも。
いと苦しくし給へば……中の君が苦しがつて居られるので匂宮も丁度その方にいらつしやる折柄だつたから、薫もその儘中の君のお部屋の方へ參上なされた。
いと便なき方に—大變むさくろしい處へ恐入ります。
おりて—階下に下りて。
答の拜—御答禮。
つかさの人に……就任披露の爲右近衛府の人々に祿を與へ饗宴を催す
その席に御列坐を願ひます。
惱み給ふ人によりてぞ—苦しんでいらつしやる中の君ゆゑに。
左の大殿の……夕霧の任大臣の大饗の時の通りにといふので、薫の饗みいとほしう思し歎かる。
二月の朔日頃に、直物とかいふことに、權大納言になりて、右大將かけ給ひつ。右の大殿の左にておはしけるが、辭し給へるところなりけり。よろこびに、所々歩き給うて、この宮にも參り給へり。いと苦しくし給へば、此方におはします程なりければ、やがて參り給へり。「僧など侍ひて、いと便なき方に」と驚き給ひて、あざやかなる御直衣御下襲など奉り、ひき繕ひ給ひて、おりて答の拜し給ふ御有樣ども、とり〴〵にいとめでたし。「やがて今宵、つかさの人に祿賜ふあるじの所に」と請じ奉り給ふを、惱み給ふ人によりてぞ、思したゆたひ給ふめる。左の大殿のし給ひけるまゝにとて、六條院にてなむありける。垣下の親王達上達部、大饗に劣らず、あまり騷がしきまでなむ集ひ給ひける。この宮も渡り給ひて、靜心なければ、まだ事果てぬに急ぎ歸り給ひぬるを、大殿の御方には、「いと飽かず目ざましう」と宣ふ。劣るべくもあらぬ御程なるを、只今の覺の華やかさに思し傲りて、おし立ちもてなし給へる

宴も六條院で行はれた。
垣下―相伴役。
この宮も……匂宮も御出席なされて中の君の事が心配なので。
大殿の御方―六の君。
いと飽かず目ざましう―ちらと姿をお見せになつたのみで誠にあつけなく憎らしいと。
劣るべくも……中の君も種性をいへば六の君に劣らう筈もない御身分だのに、六の君は今や飛ぶ鳥落す夕霧の豪華に氣位高くなり。
大將殿も……薫も御自分の昇進の喜に重ねて嬉しく思召す。
夜べ……昨夜の饗宴に匂宮が御出席下されたそのお禮言上に。
この御喜も―御出産の御祝詞も。
立ちながら―薫が一寸顔出しだけに。
かく籠りおはしませば……匂宮がかうして二條院にいらつしやるので御喜に參上せぬ人もない。
宮の御私事にて―匂宮のお内祝で。
屯食―强飯を丸く固めた物。
菲手の錢―菲の勝負の賭物にする錢。
椀飯―椀に堆く飯を盛つたもの。
子持の御前―産婦、中の君。
衝重―重箱に類する器物。
わざと目馴れぬ……特別に並々ならぬお心盡しの跡が見えた。
宮の御膳にも―匂宮の御前へも。

なめりかし。辛うじてその曉に、男にて生まれ給へるを、宮もいとかひありて嬉しく思したり。大將殿もよろこびに添へて、嬉しくおぼす。夜べおはしましたりし畏まりに、やがてこの御喜もうち添へて、立ちながら參り給へり。かく籠りおはしませば、まゐり給はぬ人なし。御産養、三日は例のたゞ宮の御私事にて、五日の夜は、大將殿より屯食五十具、菲手の錢、椀飯など、世の常のやうにて、子持の御前の衝重三十、兒の御衣五重襲にて、御襁褓などぞ事々しからず、忍びやかにしなし給へれど、こまかに見れば、わざと目馴れぬ心ばへなど見えける。宮の御前にも淺香の折敷、高坏どもにて、粉熟まゐらせ給へり。女房の御前には、衝重をばさるものにて、檜破籠三十、さま〳〵仕盡したる事どもあり。人目に事々しくは殊更にしなし給はず、七日の夜は、后の宮よりの御産養なれば、參り給ふ人々いと多かり。宮の大夫をはじめて、殿上人上達部、數知らず參り給へり。内裏にも聞し召して、宮のはじめて大人び給ふなるには、いかでかは」と宣はせて、御佩刀奉らせ給

淺香の折敷高坏―沈の若木の平膳や一本足の坏。
粉熟―五穀を粉にして餅の如くにこれ製した物といひ、或は饂飩の類ともいふ。點心にする物。
檜破籠―檜物作りの辨當箱。
さま〳〵仕盡したる……色々手を盡したお料理がある。
后の宮―明石中宮。
宮の大夫―中宮職の長官。
宮のはじめて……匂宮が始めて父親になられた事なら、何で祝をせずに置かれよう。
御佩刀―生兒のお守の御刀。
大殿より―夕霧から。
よろしからず思す……夕霧は好感を持たぬ中の君の事だけれど。
御子の君達など……夕霧の子息達がお祝に參上なされて。
御自らも―中の君御自身も。
大將殿はかくのみ……薫は中の君が母となつておしまひなされたのでその後一層自分の方へは疎遠になられるだらう、又匂宮の御愛情もこれから並大抵ではあるまいと。
また初よりの……然し又最初から中の君の爲よかれと思つてゐたお心持を考へると。
藤壺の宮―藤壺のお腹なる女二宮。
又の日なむ……その翌日から薫が女

へり。九日も、大殿よりつかうまつらせ給へり。よろしからず思すあたりなれど、宮の思さむ所あれば、御子の君達など參り給ひて、すべていと思ふこと無げにめでたければ、御自らも月ごろ物思はしく、心地の惱ましきにつけても、心ぼそう思し渡りつるに、かく面正しく、今めかしき事どもの多かれば、少しは慰みもやし給ふらむ。大將殿は、かくのみ大人びはて給ふめれば、いとゞ我が方ざまは氣遠くやならむ、又宮の御志もいと疎ならじと思ふ心は口惜しけれど、また初よりの心掟を思ふには、いと嬉しくもあり。
かくてその月二十日あまりにぞ、藤壺の宮の御裳著の事ありて、又の日なむ大將參り給ひける。その夜の事は忍びたる樣なり。天の下ひゞきて、いつくしく見えつる御かしづきに、たゞ人の具し奉り給ふぞ、なほ飽かず心苦しく見ゆる。さる御ゆるしはありながらも、只今かくしも急がせ給ふまじき事ぞかしと、謗らはしげに思ひ宣ふ人もありけれど、思し立ちぬる事、すが〳〵しくおはします御心にて、來し方の

二宮へお通ひなされた。
天の下……大した世の評判にもなつた位大事にされた女二宮に、平人の薫がお連添なさるのが、矢張多少物足らずお氣の毒に見える。
さる御ゆるしは……帝が女二宮を薫にお許しにはなつたにしても。
思し立ちぬる事……思立たれた事は
ずん〳〵決行なさる帝の御氣性で。
同じくはもてなさむと—どうせ婿に
した上は薫を大事に扱はうと。
左の大臣—夕霧。
珍しかりける人の……まあすばらし
い薫の御信望と御幸運だ。
故院だに—源氏ですら。
今はと宴し給ひし際……朱雀院が御
出家遊ばす時になつて始めて薫の
母君、即ち女三宮を手にお入れに
なつたのであつた。
人も許さぬものを……世間の人も納
得しない他人のお古の落葉宮をや
つと手に入れた事だつたわい。
宮はげにもと……落葉宮はほんに尤
と思召すので。
三日の夜—薫と女二宮との婚姻の三
日目の夜。
大藏卿—女二宮の母方の伯父。
かの御方の……女二宮方の重臣にし
て居られた人達を家令家扶の役に
お命じになつて。

例なきまで、同じくはもてなさむと思し掟つるなるめり。帝の御婿になる人は、昔も今も多かれど、かく盛の御世に、たゞ人のやうに、婿どり急がせ給へる類は少なくやありけむ。左の大臣も、夕霧珍しかりける人の御おぼえ宿世なり。故院だに、朱雀院の御末にならせ給ひて、今はと饗し給ひし際にこそ、かの母宮を得奉り給ひしか。我はまいて、人も許さぬものを拾ひたりしや」と宣ひ出づれば、宮はげにもと思すに、恥かしうて、御答もえし給はず。三日の夜は大藏卿よりはじめて、かの御方の心寄せになさせ給へる人々、家司に仰言たまひて、忍びやかなれど、かの御前、隨身、車副、舍人などまで祿賜はす。その程の事どもは、私事のやうにぞありける。かくて後は忍び〳〵に參り給ふ。心のうちには、なほ忘れ難き古へ樣のみ覺えて、晝は里に起き臥し詠め暮して、暮るれば心よりほかに急ぎ參り給ふをも、(薫八)ならはぬ心地に、いと物憂く苦しうて、まかゞでさせ奉らむ事をぞ思しおきてける。母宮はいと嬉しきことに思して、おはします寢殿を讓り聞え給ふべく宣へど、い

かの御前—薫の御前驅の人々。
隨身—舍人の兵仗を帶して供奉する者の稱。
車副—車脇の侍。
私事のやうにぞ……種々こまゞ〳〵と
した事をなされたのは平人の婿取
見たやうであつた。
古へ樣のみ—大君の事ばかり。
里—自邸。
心よりほかに……好まぬながら女二
宮の處へ急いでお通ひなさるのも。
まかゞでさせ奉らむ……薫は女二宮
を自邸にお移し申さうと御計畫な
された。
母宮は—女三宮は。
おはします寢殿を……御自分のいら
つしやる御殿を女二宮にお讓しよ
うと。
いと辱なからむ—それは餘り勿體な
いでせう。
西面に……同じ寢殿の西廂の間に女
三宮がお移りなさる爲だと見える。
程なくうち解け……結婚後何程も立
たないのに打解けて、女二宮が薫
の方へお引移りなさるのを、どう
したものかなあと帝は思召した。
心の闇は—子を思ふ愛は。拾遺「人
の親の心は闇にあらねども子を思
ふ道にまどひぬるかな」。
母宮の御許に……女三宮の處へお使

と辱なからむとて、御念誦堂のあはひに、廊をつゞけて造らせ給ふ。西面に移ろひ給ふべきなゝめり。東の對どもなども燒けて後、うるはしく新しくあらまほしきを、いよ〳〵磨き添へつゝ、こまかにしつらはせ給ふ。(薫七)かゝる御心づかひを、内裏にも聞し召して、程なくうち解け移ろひ給はむを、いかゞと思したり。帝と聞ゆれど、心の闇はおなじことになむおはしましける。母宮の御許に、御使ありける御文にも、只この御事をのみなむ聞えさせ給ひける。故朱雀院のとり分きて、この尼宮の御事をば聞え置かせ給ひしかば、(女三宮が)かく世をそむき給へれど衰へず、何事ももとのまゝにて、奏せさせ給ふことなどは必ず聞し召し入れ、御用意深かりけり。かくやむごとなき御心どもに、かたみに限もなくもてかしづき騷がれ給ふ面正しさも、いかなるにかあらむ、心の中には殊に嬉しくも覺えず、猶ともすればうち詠めつゝ、宇治の寺造ることをぞ急がせ給ふ。
宮の若君の五十日になり給ふ日、(薫八)數へとり給ひて、その餅のいそぎを

が持參した帝のお手紙にも。
この御事をのみ—女二の宮の事についてばかり。
この尼宮の御事……この女三宮の事を帝にお願み置きなされたので。
何事も……何事も御出家以前に同じく、女二宮から奏請なさる事は必ずお聞入れになり。
御用意深かりけり—お會釋が一方ならなかつた。
かくやむごとなき御心……こんなに帝といひ女三宮といひ高貴な御身から、共に限もなく立派に待遇され、ちやほやされる名譽も、どうしたものか薫は。
宮の若君—中の君のお腹の若君。
數へとり給ひて—何時〳〵と勘定をなさいまして。
その餅の……五十日のお祝の餅の準備を入念にして。
籠物—鬚籠類。
見入れ給ひ—薫自身に面倒を見て。
世の常の……尋常一樣の竝々でなく。
もつと立派にと薫はお考になつて。
我劣らじと—細工人等が互に我こそ負けまいと。
自らも例の宮の……薫自身でも例の匂宮の御不在を狙つてお見舞に入らしつた。
心のなしにや—薫の御樣子が大納言になつたといふ思ひなしのせゐか。
今はさりとも……女二宮の婿君になつた今は何が何でも嫁らしかつた私への懸想のお心持などは忘れておしまひになつたらうと、中の君は安心をして。
されどありしながらの……然し薫は全く元同樣の御態度で。
心にもあらぬ……氣にも染まぬ婚姻で愈儘ならぬものだわいと、世を悲觀することが深くなりました。
あいだちなく—分け隔てなく。
いとあるまじき……そんな御不滿は以ての外で御座いますねえ。
かばかりめでたげなる……中の君は薫がこれ程結構な御緣組にも滿足せず、私を忘れかねる者に思つて下さるお心持の深さよと。
おはせましかばと—大君が御存命ならなあと。
それも我が有樣の……然し大君が御存命でも矢張私同樣な境遇となつて、萎みつこなく我が身の數ならぬのを悔む事になるに相違ないさ。
いとどかのうち解け果てず……大君が薫に肌身許さずに終らうと思つて居られた御決心は、矢張實に落着いたものだつたと中の君は思ひ出される。
若君を切に……薫が中の君の若君を心に入れて、籠物檜破籠などまで見入れ給ひつゝ、世の常のなべてにはあらずと思し心ざして、沈、紫檀、白銀、黃金など、道々の細工どもいと多く召し侍はせ給へば、我劣らじと、樣々の事どもを仕出づめり。
自らも、例の宮のおはしまさぬ隙におはしたり。心のなしにやあらむ、今少し重々しく、やむごとなげなる氣色さへ添ひにたりと見ゆ。今はさりとも、むつかしかりしすゞろ事などは、思ひ紛れ給ひにたらむと心安くて、對面し給へりされどありしながらの氣色に、先づ涙ぐみて、
薫「心にもあらぬまじらひ、いとゞ思の外なるものにこそと、世を思ひ給へ亂るゝことなむ勝りにたる」と、あいだちなくぞ愁へ給ふ。中君いとあるまじき御事かな。人もこそ、自らほのかにも漏り聞き侍れ」などは宣へど、かばかりめでたげなる事どもにも慰まず、忘れ難う覺え給ふらむ心深さよと、あはれに思ひ聞え給ふに、疎にもあらず思ひ知られ給ふ。おはせましかばと、口惜しく思ひ出で聞え給へど、それも我が有樣のやうにて、萎みなく身を怨むべかりけるかし、何事も數ならで
は、世の人めかしき事もあるまじかりけりと覺ゆるにぞ、いとゞかのうち解け果てゞやみなむと、思ひ給へりし御心掟は、なほいと重々しく思ひ出でられ給ふ。若君を切にゆかしがり聞え給へば、恥かしけれど、何かは隔て顏にもあらむ、わりなき事一つにつけて怨みらるゝより外には、いかでこの人の御心に違はじと思へば、自らはともかくも答へ聞え給はで、乳母してさし出でさせ給へり。更なる事なれば、憎げならむやは。ゆゝしきまで白く美しくて、高やかに物語し、うち笑みなどし給へる顏見るに、我が物にて見まほしく羨ましきも、世の思ひ離れ難くなりぬるにやあらむ。されど、いふかひなくなり給ひにし人の、世の常の有樣にて、かやうならむ人をも、とゞめおき給へらましかばとのみ覺えて、この頃面正しげなる御あたりにも、いつしかなどは思ひ寄られぬこそ、餘りすべなき君の御心なゝめれ。かく女々しくねぢけて、まねびなすこそいとほしけれ。然わろび、片ほならむ人を、帝の取りわき切に近づけて、睦び給ふべきにもあらじものを、まことしき方

顔に御覧になりたがるので。

わりなき事一つに……理不盡な戯を受入れぬ事で怨まれる以外には、どうか薫の思召に逆らふまいと中の君は思つて居られるので。

さし出でさせ……若君を薫の前へ。

更なる事なれば—勿論若君のお顔立が悪からう筈もない事ゆゑ。

物語し—幼兒が何かいはうとして聲を出す。今も語るといふ。

我が物にて—自分の子で。

世の思ひ離れ難く……世を捨てるに未練が出て來たのか知らん。

いふかひなく……果敢なく死なれた大君が普通の女のやうに私の妻となり、こんな可愛い子でも殘して死なれたのなら、同じ死んだにしてもまだよかつたにとのみ薫は考へられて。

この頃面正しげ……最近定まつた光榮ある妻即ち女二宮のお腹に、いつは若君が出來る事かなどとは全く思付もなさらぬのは、餘りに仕樣のない困つた薫のお心のやうではある。

かく女々しく……こんなに愚癡つぼくくね〳〵と書記すのは薫にお氣の毒だと記者の語。

然わろび……薫がこゝに書いたやうな惡い惑服せぬ人なら。

樣の御心掟などこそは、目やすく物し給ひけめとぞ推し量らるべき。げにいとかく幼き程を見せ給へるもあはれなれば、例よりは物語などこまやかに聞え給ふ程に、暮れぬれば、心やすく夜をだに更かすまじきを、苦しう覺ゆれば、歎く〳〵出で給ひぬ。「をかしの人の御匂や。『折りつれば』とかやいふやうに、驚も尋ね來ぬべかゝめり」など、煩はしがる若き人もあり。

夏にならば、三條の宮ふたがる方になりぬべしと定めて、四月朔日ごろ節分とかいふこと、まだしき先に渡し奉り給ふ。明日とての日、藤壺に上渡らせ給ひて、藤の花の宴せさせ給ふ。南の廂の御簾あげて、御倚子たてたり。おほやけ業にて、あるじの宮の仕うまつり給ふにはあらず。上達部、殿上人の饗など、藏司より仕うまつれり。左の大臣、按察の大納言、藤中納言、左兵衛の督、親王達は三の宮、常陸の宮などさぶらひ給ふ。南の庭の藤の花のもとに、殿上人の座はしたり。後涼殿の東に、樂所の人々召して、暮れゆくほどに、雙調に吹き立て、上の御あそび

まことしき方樣の……薫の眞面目な政務方面の手腕などは。

幼き程を……幼少な若君をお見せ下された中の君の親しいお心持も薫は嬉しいので。

心やすく夜をだに……女二宮の處へ行かねばならぬ故、氣樂に夜更けまでゐる事すら出來ぬのを。

折りつれば—古今「折りつれば袖こそ匂へ梅の花ありとやこゝに鶯のなく」。

三條の宮……女二宮の住む藤壺から薫の三條邸は方角が惡くなる筈だといつて。

節分とか……夏の季節にまだ入らぬ前に薫が女二宮を自邸にお引取り申すといふ前日、女二宮の住む藤壺へ帝が入らしつて。

藤の花の宴—藤壺は庭に藤ある故の稱。本名飛香舍。

おほやけ業にて……この宴は帝のなさる宴で、女二宮が主人役としてお取賄なさるのではなく。

藏司—内藏寮。種々の御料の物を納めおく處。

左の大臣—夕霧。

按察の大納言—紅梅右大臣を元の官位で呼んだもの。

藤中納言、左兵衛督—共に髭黑の子。

三の宮—匂宮をいふ。

に、宮の御方より、御琴ども笛など出ださせ給へば、大臣をはじめ奉りて、御前に取りつゝ、參り給ふ。故六條院の御手づから書き給ひて、入道の宮に獻らせ給ひし琴の譜二卷、五葉の枝につけたるを、大臣取りたまひて奏し給ふ。つぎ〳〵に、琴、箏の御琴、琵琶、和琴など、朱雀院の御物どもなりけり。笛はかの夢に傳へし古への形見のを、またなき物の音なりと、めでさせ給ひければ、この折の清らより、又はいつかは榮え〳〵しき序のあらむと思して、取うで給へるなゝめり。大臣和琴、三の宮琵琶など、とり〳〵に賜ふ。大將の御笛は、今日ぞ世になき音の限は吹きたて給ひける。殿上人のなかにも、唱歌につきなからぬどもは召し出でて、いとおもしろく遊ぶ。宮の御方より、粉熟まゐらせ給へり。沈の折敷四つ、紫檀の高坏、藤の村濃の打敷に、折枝縫ひたり。銀の樣器、瑠璃の御盃、瓶子は紺瑠璃なり。兵衛の督まかなひ仕うまつり給ふ。御盃まゐり給ふに、大臣、しきりては便なかるべし、宮達の御中には、はたさるべきおはせねば、大將にゆづり聞え給ふを、憚り申し

常陸の宮―系圖外の人。
後涼殿―清涼殿の西に竝んだ御殿。
雙調―十二律の一。
宮の御方―女二宮。
大臣をはじめ……夕霧を始め皆帝の御前で樂器を取つて演奏なさる。
故六條院―源氏。
入道の宮―女三宮。
取り給ひて奏し給ふ―取次いで獻られた。
笛はかの夢に……笛は柏木の靈が夕霧の夢に見えて樣々物語をしたあの形見の品であるのを、豫て帝が又とないよい音色だと御賞美なされたので、今日の御宴の美々しさよりも晴れがましい機會が又と何時あらうかいと、薫が思召して。
大將の御笛は―薫の吹く笛は。
つきなからぬども―不似合でない人達、即ち上手な人々。
宮の御方より―女二宮から。
藤の村濃―藤色のぼかし染。
折枝縫ひたり―その打敷に藤の枝を刺繍してある。
樣器―皿の類。一定の樣式ある器の義。
兵衞の督―髭黑の子息。
大臣しきりては……夕霧は自分だけ屋帝の御盃を戴いては不都合であらう、然し宮樣方の中に又丁度適當な方もいらつしやらぬので薫にお讓りなさるのを、薫は御辭退なさるれど、天機もどうあつたか多分薫に傾いて居られたと見え、薫が御盃を戴き捧げて。
をし―鶯蹕の聲。
人に似ず……薫が人より格別優れて見えるのも、今日は帝の御婿だと思つて見るせゐで一層立派さが加はつて見えるのかも知れぬ。
さし返し―天盃を戴く時は他の土盃に酒を移して飲み天盃を懷中するのが作法で、その土盃をさし返しといふと、舊註の說。
おりて舞蹈し給へる程―庭上に下りてお禮の舞蹈をなさる樣子が。
賜はり給ふだに……天盃を。
限あれば……薫は身分に限があるので、もとの末座の方に歸つて御着席なさるのが。
我こそかゝる……自分こそ女二宮の御婿となつて、こんな光榮にも浴しようと思つてゐたのに。
この宮の御母女御……一體紅梅は女二宮の御母藤壺女御を嘗て戀してゐたのであるが、御入内の後も矢張斷念されぬ樣子で文を上げたりなどなされて。
果は宮を―しまひには女二宮を。
御後見のぞむ……婿君になりたい意

給へど、御氣色もいかゞありけむ、御盃さゝげて「をし」と宣へる聲遣ひもてなしさへ、例の公事なれど、人に似ず見ゆるも、今日はいとゞ見なしさへ添ふにやあらむ。さし返し賜はりて、おりて舞蹈し給へる程、いと儔なし。上蔦の親王達大臣などの賜はり給ふだにめでたき事なるを、これはまして御婿にて、もてはやされ奉り給へる御覺疎ならず珍しきに、限あれば、くだりたる座に返り着き給へるほど、心苦しきまでぞ見えける。按察の大納言は、我こそかゝる日も見むと思ひしか、妬の業やと思ひ居給へり。この宮の御母女御をぞ、昔心がけ聞え給へりけるを、參り給ひて後も、なほ思ひ離れぬ樣に聞え通はしなど し給ひて、はては宮を得奉らむの心つきたりければ、御後見のぞむ氣色洩らし申しけれど、聞し召しだに傳へずなりにければ、いと心やましと思ひて、「人がらはげに契殊なめれど、なぞ時の帝のかくおどろ〳〵しきまで、婿かしづき給ふべき。又あらじかし、九重の內に、おはします殿近き程にて、たゞ人のうち解け侍ひて、はては宴や何やと、もて騷が

るゝことは」など、いみじく誹りつぶやき申し給ひけれど、流石にゆかしかりければ、參りて、心のうちにぞ腹立ちゐ給へりける。紙燭さして歌どもたてまつる。文臺のもとに寄りつゝ置くほどの氣色は、おのおのしたり顏なりけれど、例のいかに怪しげに古めきたりけむと思ひやれば、あながちに皆も尋ね書かず。かみの町の 上蔦とて、御口付どもは、殊なること見えざめれど、しるしばかりとて、一つ二つぞ問ひ聞きたりし。これは大將の君の、下りて御かざし折りて參り給へりけるとか。

「薫すべらぎのかざしに折ると藤の花
　　およばぬ枝に袖かけてけり」

うけばりたるぞ憎きや。

「帝よろづ世をかけて匂はむ花なれば
　　今日をも飽かぬ色とこそみれ」

また誰とか、

志を藤壺に漏したりなされたけれど、藤壺は帝の御耳へもお入れ申さずにしまつたので。

人がらは……薫は人柄は成程格別の御幸運に生れついて居られるが。又あらじかし—倒句法で、「もて騒がるゝことは」の次に置いて見よ。

九重の内に……禁中で而も帝の御座所近い藤壺に、平人の薫が卿々しく通つて行つて。

流石にゆかし……今日の藤の宴は何といつても行きたかつた故。

例の—それらの歌は例の如く。

かみの町の……上々の階級の人達だからとて歌の詠み振は必しも格別優れても見えないけれど、形式だけと思つて一二聞いて書いた。

これは大將の君の……この歌は薫が庭上に降りて帝の御冠に挿す爲の藤の花を折つて、一緒にお上げになつたものとやら。

すべらぎの……主上の御冠の挿頭に折らうといつて藤の花の高い枝を辛うじて手にしました。裏は、帝の御心を安んじ奉る爲ゆゑに及びもつかぬ貴い女二宮の夫となりましたとの意。

うけばりたるぞ—呑込み顔なのが。

よろづ世を……この藤はいつまでも榮え匂ふべき花ゆゑ今日も美しく

「君がため折れるかざしは紫の
雲におとらぬ花のけしきか」

「紅梅」世のつねの色とも見えず雲居まで
たちのぼりたる藤なみの花」

これやこの腹だつ大納言のなりけむとこそ見ゆれ。なほ片へは僻言にもやありけむ。かやうに、殊なるをかしき節も無くてのみぞあゝなりし。夜更くるまゝに御遊いと面しろし。大將の君の「あな尊」謠ひ給へる聲ぞ限なくめでたかりける。按察も、昔すぐれ給へりし御聲の名殘なれば、今もいと物々しくて、うち合はせ給へり。左の大殿の御七郎、童にて笙の笛ふく。いと珍しかりければ、御衣賜はす。大臣おりて舞蹈し給ふ。曉近くなりてなむ歸らせ給ひける。祿ども、上達部、親王達には、上より賜はす。殿上人樂所の人々には、宮の御方よりしなゝに賜ひけり。その夜さりなむ宮まかでさせ奉り給ひける。儀式いと心ことなり。上の女房さながら御送り仕うまつらせ給ひける。廂の御

中々見飽かぬ色に見る。裏は薫は末長く變らぬ婿ゆゑ今日の宴にも立派な姿よと見てゐるとの意。

君がため……主上に差上げる爲に折つた挿頭の藤の花は紫の雲にも劣らぬ美しい色だなあとの意。これは單に藤の花を賞美した歌。

世のつねの……この禁中の園にまで持つて來て植ゑられた藤は尋常一樣の色とも見えぬ美しい事よ。裏は、帝の御婿とまで成つた薫の容姿は流石に並々のものとも見えませんとの意。

これやこの……この歌は例の不平をいつた紅梅の作だと見える。

片へは……これらの中には或は一部は聞き間違もあつたらう、然しこんな風で格別面白い歌とても無かつたものである。

大將の君—薫。

あな尊—傳馬樂、安名尊、「あな尊、あな尊、今日の尊さヤ、古もハレ、古もかくやありけむ、今日の尊さ、アハレソコヨシヤ、今日の尊さ。」

按察も—按察大納言も。紅梅のこと。

昔すぐれ給へりし……美しい聲で高砂謠つた事が賢木の卷に見えた。(三九一頁本文參照)

うち合はせ給へり—合唱なされた。

左の大殿の御七郎—夕霧の七男。

上より賜はす―帝から下された。
宮の御方より―女二宮から。
宮まかでさせ……女二宮を薫が三條の自邸にお引取り申された。
上の女房さながら―主上にお附の女房達がそつくり皆。
廂の御車―四方に廂のある絲毛車。
檳榔毛―蒲葵の葉で覆ひ飾つた車。
黄金づくり―黄金張の金具ある車。
網代―網代車。檜の網代で車の外部を覆うたもの。
出だし車―女車で美しい袖口を簾の外に出したものをいふ。
本所の人々―薫の本邸の人々。
こゝはと見ゆる所なく―此處は瑕だと思はれる點もなく。
宿世の程……こんな美しい人を妻にする事が出來たのは前世の運が拙くはなかつたわいと。
過ぎにし方の……亡き大君の事が忘れられるものなら結構だが。
この世にては……生きてゐる間は到底慰める事が出來さうもない悲みなのだ、死んで成佛した上でこそ不思議な程儘にならず心外だつた大君との緣を、これは何々の報でこんな事になつたのだと知つて斷念もしよう。
寺のいそぎにのみ……薫は宇治の山莊を寺に改造する支度にばかり。

車にて、廂なき絲毛三つ、檳榔毛の黄金づくり六つ、たゞの檳榔毛二十、網代二つ、女房三十人、童、下仕八人づつさぶらふに、又御迎の出だし車ども十二、本所の人々乘せてなむありける。御送りの上達部殿上人、六位など、いふ限なき清らを盡させ給へり。かくて心安くうち解けて見奉り給ふに、（女二宮八）いとをかしげにおはす。さゝやかにあてにしめやかにて、こゝはと見ゆる所なくおはすれば、宿世の程口惜しからざりけりと、心傲りせらるゝものから、過ぎにし方の忘られぬこそはあらめ、猶紛るゝ折なく、物のみ戀しく覺ゆれば、この世にては慰めかねつべき業なつめり、佛になりてこそは、怪しくつらかりける契の程を、何の報とあきらめて思ひ離れめと思ひつゝ、寺のいそぎにのみ、心をば入れ給へり。

賀茂の祭など、騷がしき頃過して、二十餘日のほどに、（薫八）例の宇治へおはしたり。造らせ給ふ御堂見給ひて、すべき事ども掟て宣ひなどして、さて、例の朽木のもとを見給ひ過ぎむが猶あはれなれば、そなた樣にお

二十餘日―四月二十日過ぎ。
朽木のもとを……辨に逢はずに暮るのが矢張可愛さうだから、その住む方へいらつしやると。朽木とは辨の歌に由りいふ。（一八四四頁本文參照）
殿は先づ……薫は先づ山莊にお入りになつて。
この宮をさして―山莊を目ざして。
靡うちゆがみたる者―詞の訛つた男。
常陸の前司殿の姫君―浮舟。
初も―往きがけにも。
おいや聞きし人……おゝさ、それこそ豫て聞いてゐた浮舟だな。
はや御車……早く浮舟のお車をお引入れなさい、此處に又他のお客が泊つて居られるけれどそれは陰の方だから構ひませんと、薫が邸内の人を以ておいはせなされた。
狩衣姿にて―狩衣は輕裝の略服。
猶けはひや……矢張普通の人でない樣子が際立つて見えるものか、浮舟方の人々が困つたらしく思つて。
引きさけなどしつゝ―脇の方へ引き寄せたりなどして。
おろし籠めたる―格子を卸して締切つた。
御衣の鳴れば―薫は衣摺れの音がするので。
直衣指貫の限―直衣指貫だけ。

はするに、女車の事々しきさまにはあらぬ一つ、荒ましき東男の、腰に物負へる數多具して、下人數おほく賴もしげなる氣色にて、橋より今渡りくる見ゆ。田舍びたるものかなと見給ひつゝ、殿は先づ入り給ひて、御前どもいまだ立ち騷ぎたる程に、この車もこの宮をさして來るなりけりと見ゆ。御隨身どもかや〳〵といふを制し給ひて、「何人ぞ」と問はせ給へば、聲うちゆがみたる者、「常陸の前司殿の姫君の、初瀬の御寺にまうでて歸り給へるなり。初もこゝになむ宿り給へりし」と申すに、おいや、聞きし人なゝりと思し出でて、人々をば異方に隱し給ひて、「はや御車入れよ。此處にまた人宿り給へれど、北面になむ」といはせ給ふ。御供の人も皆狩衣姿にて、事々しからぬ姿どもなれど、猶けはひや著からむ、煩はしげに思ひて、皆馬ども引きさけなどしつゝ、畏まりつゝぞ居る。車は入れて、廊の西のつまにぞ寄する。この寢殿はまだあらはにて、簾もかけず、おろし籠めたる中の二間に立て隔てたる障子の穴よりのぞき給ふ。（薫八）御衣の鳴れば、脱ぎおきて、直衣指貫の

とみにも下りで―急にも浮舟は車から下りないで。
案内するなるべし―尋ねてゐるのであらう。
君は車を……薫はあの車の人が浮舟だとお聞きになるとすぐ。
ゆめその人に……決して〳〵浮舟に私が此處にゐると仰しやるな。
まづ口固め……取敢へず邸内の一同に口止めをなされたので。
客人は……別にお客はありますけれど他の部屋に居られます故。
若き人のある―若い侍女の浮舟の車に同乗してゐたのが。
御前どもの……供人などの田舎めいてゐる割合には、この侍女殿は物馴れて無難である。お許は敬稱。
例の御こと―いつもと同樣で御座いますよ。
心を遣りて―得意顏になつて。
つゝましげに……浮舟がしとやかに車から下りるのを御覽になると。
いとよう物思ひ出でられ……實によく大君の御樣子が聯想されるやうである。
くだりたるを―低くなつてゐるのに。
この人々は―侍女達は。
久しくおりて―長い事かゝつて車からおりて。
濃き袿―濃い紅の袿。

限を著てぞ おはする。とみにも下りで、尼君に消息して、「かくやむごとなげなる人のおはするを、誰ぞ」など案内するなるべし。君は、車をそれと聞き給ひつるより、「ゆめ、その人にまろありと宣ふな」と、まづ口固めさせ給ひてければ、皆さ心得て、「はやく下りさせ給へ。客人はものし給へど、異方になむ」といひ出だしたり。若き人のある、先づ下りて、簾うち上ぐめり。御前どもの樣よりは、この御許は馴れて目やすし。また大人びたる人今一人おりて、「早う」といふに、「怪しくあらはなる心地こそすれ」といふ聲、仄かなれどいとあてやかに聞ゆ。「例の御こと。此方は前々もおろし籠めてのみこそ侍るめれ。さては又何處のあらはなるべきぞ」と、心を遣りていふ。つゝましげに下るゝを見れば、まづ頭つき樣體ほそやかにあてなる程は、いとよう物思ひ出でられぬべし。扇をつとさし隱したれば、顏は見えぬ程心もとなくて、胸うち潰れつゝ見給ふ。車は高く、おるゝ所はくだりたるを、この人々は安らかにおりなしつれど、いと苦しげにやゝ見て、久しくおりてゐざり

若苗色―薄青の稍濃い色。
この障子―薫の覗いてゐる襖。
殘る所なし―すつかり中が見える。
此方をば……薫のいらつしやる方を浮舟が氣にして。
泉河―今の木津川のこと。
この二月には……今年二月にも初瀨詣をした事がこの句で分る。
いでやありきは……さあ然し旅行は關東の事を考へると、この邊は何處が恐しい處がありませうか、樂なものですよ。
二人して―先程の侍女達が二人で。
主は―浮舟は。
常陸殿など……常陸介風情の娘などいふべき低い身分とも見えず。
若き人―若い方の侍女。
老人―年寄つた方の侍女。
京人は猶―尼になつても都の人は矢張。辨の事をいふ。
天下に……御主人常陸介樣の奥方が世にもすばらしい事に自慢していらしつたけれど。
御湯など……御湯でも召上り下さいまし。
物けたまはる―物承はるの約で、もし〳〵などの意。
これ―これを召上れ。
驚かねば―浮舟が目覺めないので。
聞き知らぬ心地には―こんな樣子を

入る。濃き袿に、瞿麥とおぼしき細長、若苗色の小袿著たり。四尺の屏風を、この障子に添へて立てたるが、上より見ゆる穴なれば、殘る所なし。此方をば後めたげに思ひて、彼方ざまに向きてぞ添ひ臥しぬる。「さも苦しげにおはしましつるかな。泉河の船渡りも、まことに今日はいと恐ろしうこそありつれ。この二月には、水の少なかりしかばよかりしなりけり。いでや、ありきは、東路を思へば、いづこか恐ろしからむ」など、二人して、苦しとも思ひたらずいひ居たるに、主は音もせでひれ臥したり。腕をさし出でたるが、まろらかにをかしげなる程も、常陸殿などいふべくも見えず、實にあてなり。やう〳〵腰痛きまで立ちすくみ給へど、人のけはひせじとて、猶動かでぞ見給ふに、若き人「あな芳ばしや。いみじき香の香こそすれ。尼君の炷き給ふにやあらむ」と驚く。老人「まことに、あなめでたの物の香や。京人は猶、いとこそみやびかに今めかしけれ。天下にいみじき事と思したりしかど、東にてかゝる薫物の香は、え合はせ出で給はざりきかし。この尼君の住居は、かく

見聞し馴れぬ薫の心持では。
これより勝る際の……薫は浮舟よりも優れた身分の。
后の宮―明石中宮。
こゝら飽くまで見集め給へど―澤山見て來られたけれど。
おぼろげならでは……餘程の美人でなくては薫は率きつけられず、餘り謹直過ぎると人に非難される位でいらつしやるお心持だのに。
何ばかり優れて……浮舟は何程優れた美人でもないけれど、薫がこれ程立去り難くむやみに率きつけられてゐるのも。
尼君は……辨は薫の方へも何かいつてよこしたけれど。
心しらひして―氣を利かせて。
この君を尋ねまほしげに……薫が浮舟を見たさうに豫て仰しやつたから、こんな機會に接近しようと思召すので態と日の暮れるのを待つていらつしやるか、と辨は思つて。
例の御庄の……前にも述べた莊園の役人達が調進して來た辨當や何かを辨の方にもくれたのを。
東人―浮舟の侍女供人等をいふ。
客人の方に……辨が浮舟の部屋に音づれた。
譽めつる裝束……辨は先程浮舟の侍女達の褒めた服裝が成程小ざつぱいとかすかにおはすれど、裝束のあらまほしく、鈍色青鈍といへど、いと清らにぞあるや」など譽め居たり。あなたの簀子より童來て、御湯など參らせ給へ」とて、折敷ども取り續きてさし入る。菓子とり寄せなどして、侍女「物けたまはる。これ」など起せど驚かねば、二人して、栗などやうの物にや、ほろ〳〵と食ふも、聞き知らぬ心地には、かたはら痛くて退き給へど、又ゆかしくなりつゝ、猶立ち寄り立ち寄り見給ふ。これより勝る際の人々を、后の宮を始めて、此處彼處に、容貌よきもあてなるも、こゝら飽くまで見集め給へど、おぼろげならでは、目も心もとゞまらず、餘り人にもどかるゝまで物し給ふ御心地に、只今は、何ばかり優れて見ゆる事もなき人なれど、かく立ち去り難く、あながちにゆかしきも、いと怪しき心なり。
尼君はこの殿の御方にも、御消息聞え出だしたりけれど、供人御心地惱ましとて、今の程うち息ませ給へるなり」と、御供の人々心しらひしていひたりければ、この君を尋ねまほしげに思し宣ひしかば、かゝる序にりとして。
などか今日も……どうして今日もこんなに遲くなつて御着になつたのですか。
この老人―浮舟の侍女。
今朝も無期に……今朝もいつまでも浮舟樣の御氣分を見計らつて居りましてねえ。
そばみ居たる……脇を向いてゐる浮舟の横顏が、薫の方からは大變よく見える。
髮ざしのわたり―頭髮の邊一帶。
彼をも委しく……薫は大君にしても委しくつく〳〵とお顏を御覽になつたといふのではないけれど、浮舟を見るにつけ全く大君そつくりと思ひ出されるので。
尼君の答……辨への應答をする浮舟の聲や調子が。
宮の御方にも―中の君にも。
あはれなりける人かな―可憐な人だなあ。薫の心。
これより口惜しからむ……浮舟よりも劣つた身分で關係も薄いのですから、これ程大君に似た女を見ては。
ましてこれは……まして浮舟は實父八宮に知られなかつたけれど。
只今も……たつた今でも接近して、貴女はまだこの世に生きていらしつたものを、私は今まで死なれた物いひ觸れむと思ほすによりて、日を暮し給ふにやと思ひて、かく覗き給ふらむとは知らず、例の御庄の預どもの參れる破籠や何やと、此方にも入れたるを、東人どもにも食はせなど、事ども行ひ掟て、うち化粧じて客人の方に來たり。譽めつる裝束げにいとかはらかにて、みめも猶よし〳〵しく清げにぞある。昨日おはし著きなむと待ち聞えさせしを、などか今日も日闌けては」といふめれば、この老人いと怪しく、苦しげにのみせさせ給へば、昨日はこの泉河のわたりにとゞまりて、今朝も無期に御心地ためらひてなむ」と答へておこせば、今ぞ起き居たる。尼君を恥らひてそばみ居たる傍目、これよりはいとよく見ゆ。まことにいと由あるまみの程、髮ざしのわたり、彼をも、委しくつくづくとしも見給はざりし御顏なれど、これを見るにつけて、只それと思ひ出でらるゝに、例の涙おちぬ。尼君の答うちする聲けはひの、仄かなれど、宮の御方にもいとよく似たりと聞ゆ。あはれなりける人かな、かりけるものを、今まで尋ねも知らで過しけることよ、これより口惜

とばかり思つて居りましたよ、といつて慰めてやりたい。浮君を大君に見立てゝいふ。

蓬萊まで……楊貴妃の魂の在處を蓬萊山まで方士に尋ねさせ形見の簪だけを手に入れて御覽になつたといふ玄宗皇帝は、矢張それでも心が慰まなかつたらう、浮舟は大君と別人だが大君によく似てゐるから私の慰めにはなりさうな御樣子だと薫が思召すのは、つまり浮舟に宿緣がおありなのだらう。

人の咎めつる……先程浮舟の侍女達が怪んだ香を、辨は薫が近く寄つて覗いていらつしやるのだと感づいたので。

君もやをら……薫も靜に覗いてゐた處を立去つて。

折しも嬉しく……丁度都合よく浮舟と落合つたのに、どうしましたか、あの頼んで置いた浮舟への傳言は。

初瀬まうでのたよりに―浮舟が初瀬參りをなされた折に。

かの母君に……浮舟の母中將の君に、貴方の思召の趣はそれとなく申して置きました處が。

いとかたはら痛く辱なき……浮舟を大君の代りとは誠に極り惡く勿體ないお比べ物で御座いますわなど中將の君が申して居りましたけれ

しからむ際の品ならむゆかりなどにてだに、かばかり通ひ聞えたらむ人を見ては、疎にえ思ふまじき心地するに、ましてこれは知られ奉らざりけれど、まことに故宮の御子にこそはありけれと見なし給ひては、限なくあはれに嬉しく覺え給ふ。只今も這ひ寄りて、世の中にはしけるものをといひ慰めまほし。蓬萊まで尋ねて、簪のかぎりを傳へて見給ひけむ帝は、猶いといぶせかりけむ。これは異人なれど、慰どころありぬべき樣なりと覺ゆるは、この人に契のおはしけるにやあらむ。尼君は物語すこしして疾く入りぬ。人の咎めつる薫を、近くて覗き給ふなゝめりと心得てければ、うち解け言も語らはずなりぬるなるべし。

日暮れもて行けば、君もやをら出でて、御衣など著給ひてぞ、例召し出づる障子口に、尼君召し出で給ひて、（浮舟ノ）有樣など問ひ給ふ。「（薫）折しも嬉しくまうで來合ひたるを、いかにぞ、かの聞えし事は」と宣へば、「（辨）しか仰言侍りし後は、さるべき序侍らばと待ちはべりしに、去年は過ぎて、こ

ど、その頃は貴方は女二宮との御婚禮でお暇がないと承はりましたし、折が惡いと遠慮致しまして御返事も申上げませんでしたが。

まうでて―浮舟が初瀬に參詣して。

かく睦び寄らるゝも……こんなに親んで寄つて戴くのも、只八宮樣の御緣故をお慕ひなされての事で御座います。

かの母君―浮舟の母、中將の君。

かくおはしますとも……貴方がかうして來ていらつしやるといふ事も何の話すに及ばうかと存じて、浮舟には申さずに居ります。

忍び窶れたる……見苦しくした微行姿を見られまいと思つて、自分といふことを固く口止めしたけれど。

下衆どもは……下賤の者共は、私の供だと浮舟の方にすつかり分つてしまつた事でせうな。

一人物し給ふ……浮舟一人で來られたのが却て氣易い事です、こんなに前世の宿緣が深くて私も此處に落合つたのですと、浮舟にお傳へ下さい。

うちつけに……餘り唐突でまあ、いつの間になすつたお約束でせうか。

かほ鳥の……浮舟の聲だけでもせめて大君に似てゐるか知らんと、繁つた樹々を分けて今日尋ね求めるの二月になむ、初瀬まうでのたよりに對面して侍りし。かの母君に思し召したる樣は仄めかし侍りしかば、『いとかたはら痛く辱なき御よそへにこそは侍るなれ』などなむ侍りしかど、その頃ほひは、のどやかにもおはしまさずと承はりし。折便なく思ひ給へつゝみて、かくなむとも聞えさせ侍らざりしを、又この月にもまうでて、今日歸り給ふなゝめり。往き返りの中宿には、かく睦び寄らるゝも、只過ぎにし御けはひを尋ね聞えらるゝ、故になむ侍るめる。かの母君は障ることありて、この度は（浮舟ガ）ひとり物し給ふめれば、かくおはしますとも、何かは物し侍らむ」と聞ゆ。「（薫）田舍びたる人どもに、忍び窶れたるありきも見えじとて、口固めつれど、いかゞあらむ。下衆どもは隱れあらじかし。さていかゞすべき。一人物し給ふらむこそなか〳〵心安かゝなれ。『かく契深くてなむ參り來合ひたる』と傳へ給へかし」と宣へば、「（辨）うちつけに、いつの程なる御契にかは」とうち笑ひて、「（辨）さらばしか傳へ侍らむ」とて入るに、

事ではあるとの意。かほ鳥を浮舟に譬へた。かほ鳥は美しい羽毛ゆゑについた名であらうが詳かでない。

入りて語り聞えけるとや―辨は浮舟の部屋に入つて、お話申し上げたとさ。

薫「かほ鳥のこゑも聞きしに通ふやと
　　しげみをわけて今日ぞ尋ぬる」
たゞ口ずさみのやうに宣ふを、入りて語り聞えけるとや。

筑波山を……薫は浮舟を手に入れたいお心持はありながら、身分の低い相手にまで強ひて執着しようのも誠に世間の聞えも輕々しく極り悪い有様だから。古今「筑波山端山繁山繁けれど思ひ入るにはさはらざりけり」による。浮舟は表面常陸介の娘ゆゑ筑波山に擬した。傳へさせ給はず―辨を介して浮舟にお遣りにならない。

かの尼君―辨の尼。

母北の方に……浮舟の母北方へ、薫の仰しやつた趣などを度々それとなくいひ送つたけれど。

まめやかに御心……北方は薫が眞面目に思込んでいらつしやる事とも考へず、只それだけでもまあ浮舟の事を尋ね知つて下された事よと。

東屋（あづまや）

この巻は薫二十六歳の秋の事。浮舟の母は八ノ宮との間に浮舟を生んだ後、常陸ノ介に嫁してゐるが、薫が近頃浮舟に執心の由を聞いたものゝ、身分違ひゆゑ躊躇して、左近少將にやることにした。然し少將は元來常陸ノ介の財産が目當だつたから、浮舟が繼子と聞くとすぐ違約して實子の方と結婚した。母は恨んで暫く浮舟を二條院の姉夫人に託した。親子で二條院に行つてゐる所に來合はせた薫の立派な姿を見て、母はこの人ならと思ひ、ともかくも萬事を夫人に託して歸つた。折しも宮中から退出した匂宮は、西の對に見馴れぬ美人のゐるのを怪み、近づいて手を執つたが、侍女に諫められて夫人の方へ行つた。母はこれを聞いて不安を感じ、浮舟を三條邊の小家に隠した。薫は秋の一日、久々で宇治に行き、辨に頼んで自分の思を浮舟に傳へさせ、その夜自分も窃かに三條を晉づれた。翌朝薫は浮舟を自分の車に載せ、辨と侍女の侍從とを連れて宇治の山莊に歸つた。大君に似た浮舟の面影と大樣な態度とに、薫は愈愛情を率かれた。

巻の名は薫の歌、「さしとむる葎や繁きあづま屋のあまりほどふる雨そゝぎかな」に由る。

筑波山を分け見まほしき御心はありながら、端山の茂りまであながちに思ひ入らむも、いと人聞かろ〳〵しう、かたはら痛かるべき程な

人の御程の―薫の御身分が。
數ならましかば……當方が相應の身分なら薫を婿にも取らうものをなど北の方（もとの中將の君）は樣々に思つた。
守の子供は……常陸介の子息達は先妻腹のなどが澤山。常陸は親王の任國ゆゑ臣下で守となる者は無いが、常陸に限らず當時の國守は遙任が多く、實務は介が執るので介を守といふ事は珍しくない。
この腹―今の妻卽ち中將の君の腹。
樣々にこの扱ひ……常陸介がこれ等の子供の世話を色々に燒いて、浮舟のみを他人と思つて分け隔てをする氣持があつたので。
いかで引き優れて……何とかして浮舟を優れてよい緣に付け面目ある身分にしてやりたいものだと。
樣容貌の……浮舟の容姿が並々で常陸介の子達と一緒にして置いてもよい程なら、母君もまあこんなに苦しいまで心配もすまいし、同じ常陸介の子のやうに世間體もして置かれる譯だが、浮舟は他と混同出來ぬ位優れて。
あたらしく―惜しく。
音なひいふ―懸想文などよこす者が。
はじめの腹の……先妻腹の娘二三人は皆それ〳〵緣付けて。

れば、思し憚りて、御消息をだにえ傳へさせ給はず。かの尼君の許よりぞ、母北の方に、宣ひし樣など度々ほのめかしおこせけれど、まめやかに御心とまるべき事とも思はねば、只さまでも尋ね知り給ふらむこととばかりをかしう思ひて、人の御程の只今、世にあり難げなるをも、數ならましかばなどぞ、よろづに思ひける。守の子供は、母なくなりにけるなど數多、この腹にも姫君とつけてかしづくあり、まだ幼きなどすぎ〳〵に五六人ありければ、樣々にこの扱ひをしつゝ、異人と思ひ隔てたる心のありければ、常にいとつらきものに、守をも怨みつつ、いかで引き優れて面正しき程に、しなしても見えにしがなと、且暮この母君は思ひ扱ひける。樣容貌のなのめに、取り混ぜてもありぬべくは、いとかうしも、何かは苦しきまでも、もて惱ましし、同じごと思はせてもありぬべきを、物にもまじらず、あはれに辱なく生ひ出で給へば、あたらしく心苦しきものに思へり。女多かりと聞きて、なま君達めく人々も音なひいふ、いと數多ありけり。はじめの腹の一二三人は、

我が姫君を―母君が浮舟を。
中らひも―一門達も。
德嚴めしう……財產も非常に多かつたりなどするので、身分相應には威張つてゐて。
事好したる程よりは―物數寄らしくしてゐる割合には。
聲など……言葉の調子など殆ど田舍訛になつてしまひさうに、物いふのも少し聲が濁つたやうで。
豪家のあたり……權門勢家に對しては恐しく面倒なものに憚りおぢ、萬事に行屆いて拔目ない用意もある。
直々しきあたり……こんな詰らぬ屋敷にも拘はらず。
よき若人―見苦しからぬ侍女。
庚申―庚申の夜睡ると三尸蟲といふ蟲が上天してその人の惡事を天帝に告げるといふ佛說があるので、この夜起きてゐるのを庚申待といひ、退屈凌ぎに樣々の遊をする。
まばゆく見苦しく―けば〳〵しく見苦しい位に。
この懸想の君達―娘達に懸想してゐる若者達。
らう〳〵じくこそ……浮舟の容姿は可憐な事であらうなあ。
をかしき方に……浮舟の器量をよい方に取沙汰して。

みな樣々にくばりて大人びさせたり。今はわが姫君を、思ふやうにて見奉らばやと、且暮まもりて、撫でかしづく事限なし。守も賤しき人にはあらざりけり。上達部の筋にて、中らひも物ぎたなき人ならず、德嚴めしうなどあれば、程々につけては思ひあがりて、家の內もきらきらしく物淸げに住みなし、事好したる程よりは、あやしう荒らかに田舍びたる心ぞ著きたりける。若うより、さる東の方のはるかなる世界にうづもれて、年經ければにや、聲などほと〳〵うち歪みぬべく、物うちいふ、少したみたるやうにて、豪家のあたり怖ろしく煩はしきものに憚りおぢ、すべていと全く、隙間なき心もあり。をかしき樣に琴笛の道は遠う、弓をなむいとよく引きける。直々しきあたりともいはず、勢に惹かされて、よき若人ども集ひ、裝束有樣はえならず整へつゝ、腰折れたる歌合はせ、物語、庚申をし、まばゆく見苦しく、遊び勝ちに好めるを、この懸想の君達、「らう〳〵じくこそあるべけれ、容貌なむいみじかなる」など、をかしき方にいひなして心を盡し合へる中に、左

才ありと……學才があるといふ事は人にも認められてゐるが。
きら〳〵しう今めいて……ばつぱと花やかな事は出來かねるかして。
その貧乏なのをいふ。
通ひし所なども……今まで通つた女とも縁が切れて、ひどく熱心に浮舟に懸想して來た。
この母君……浮舟の母は、澤山からして浮舟にいひ寄る男達の中で。
心定まりて……料簡もしつかりして
譯が分つてもゐさうだし人柄も上品だ、この人より立派な身分の人は我々づれの娘を如何に威張つた處で思ひ寄つてもくれまいと北方は思つて、浮舟に少將の手紙を取次いで。
守こそ……常陸介こそ浮舟を疎略にしようとも。
八月ばかりと……母君は浮舟との婚姻を八月頃と少將に約束して。
はかなき遊物を……つまらぬ玩びの道具を作らせるにしても。
こまやかなる心ばへ—念入れた趣。
この御方にと……浮舟の物にと母君が取隱し置き。
劣りのを—劣つた方の品を。
そこはかとなき……何ときまつた物でもなく、道具といふ道具類は皆具もう何でも集めて陳列して置き

近の少將とて、年二十二三ばかりの程にて、心ばせしめやかに、才ありといふ方は人に許されたれど、きら〳〵しう今めいてなどはえあらぬにや、通ひし所なども絶えて、いと懇にいひ渡りけり。この母君、數多かゝる事いふ人々の中に、この君は人がらも目安かゝなり、心定まりて物思ひ知りぬべかゝめるを、人もあてなりや、これより勝りて事々しき際の人はた、かゝるあたりを、さはいへど尋ね寄らじと思ひて、この御方に取り次ぎて、さるべき折々は、をかしき樣に返事などせさせ奉る。（北方ハ）心一つに思ひ設けて、守こそ疎に思ひなすとも、われは命をも讓りてかしづきてむ、（浮舟ノ）樣容貌のめでたきを見つきなば、さりとも疎になどは、よも思ふ人あらじと思ひ立ちて、八月ばかりと契りて、調度をまうけ、はかなき遊物をせさせても、樣殊に樣をかしう、蒔繪螺鈿のこまやかなる心ばへ勝りて見ゆる物をば、この御方にと取り隱して、劣りのを「これなむよき」とて見すれば、守はよくしも見知らず。そこはかとなき物どもの、人の調度といふかぎりは、たゞ取り集めて並べす

その中からやつと首を出して覗いてゐる位にして。
内教坊—宮中の樂人を養成する所。
習はす—娘達に稽古させた。
手ひとつ……娘達が一曲習得すれば。
はやりかなる……調子のはづんだ許し物など稽古させて。
師と—娘達がその師匠と。
物めでしたり—常陸介が賞美してゐる。
物のゆゑ知りて—物の筋道が分つて。
殊にあへしらはぬを—格別もてはやさぬのを。
あこをば……私の子を浮舟よりも輕蔑していらつしやると。
契りし程を……約束の期を待てず。
わが心一つに……北方は自分の一料簡でそんなに事を急ぐのも憚られるし、少將の眞意も十分呑込めないのを考慮して。

初より……最初少將の手紙を取次いだ人の偶〻屋敷に來たのを。
よろづ多く……萬事色々と浮舟の事について氣兼する事があるのですが、少將がこれまであんなに婚姻を申込まれて暫く日が立ちますので、並々のお身分でもおありなさらぬ事ゆゑ私の方では勿體なくお氣の毒で、とにかく八月に婚姻と思立ちましたが。

心一つなる……私の手一つで世話するやうなもので極りわるく、何事も行屆かぬやうに少將に見られる事もあらうかと。

若き人々……他にも娘達が澤山居りますが、夫に連添うてゐるのは自然もう安心と、その夫に任せる氣になつて。

この君の御事—浮舟の身の上。はかなき世の中を……無常な世相を觀ずるにつけてもわが亡き後はと氣がかりで情けないのを。

物思し知りぬべき……少將は人情も御存じの御氣象と聞きましてすべての遠慮も忘れ緣組する氣になりましたが、若し婚姻後に案外な少將の冷淡なお心持でも見えたら。まうでて—媒した男が行つて。

守の御女に……浮舟が常陸介の實子でないといふ話は聞かなかつた。

人聞も……繼子の婿では人に聞かれても輕く見られる氣がして。

ようも案内せで……よく確めもせず

に好い加減な話をしたのはお前が不都合だ。

女どもの知る便……妹が常陸邸に奉公して居る緣故で。

中にかしづく……浮舟は娘達の中で最も大事にしてゐる娘だとだけ聞きましたので守の實子だと思つたのです、別に繼子があるとも尋ねも聞きもしなかつたのです。

母上の……母君が浮舟をお愛しなされて光榮ある上品な婿取をしようといつて。

いかでかのあたりの事……どうか常陸介の家の事を知つた人があればよいがと貴方が仰せられましたので、それで私がさういふ便宜を存じて居りますと、お世話致した譯で御座います。

君いと……少將も上品ならぬ態度で。

さやうのあたりに……國守風情の娘に通ふ事は世間でも餘りよくいはぬ事だけれど、それも當世の風で必しも咎めるべき事でもなく、娘の親達が尊敬してよく世話してくれるのにすべての缺陷も寛假されてゐる類例もあるものを。

同じごと内々に……浮舟も内實は實子同樣かも知れぬが、他人の思はくでは私が詔つてやつと繼娘の婿になつたやうにいふだらう。

源少納言讃岐の守—共に常陸介の實の娘の婿、系圖は不明。

うけばりたる氣色—おつけ晴れた樣子。

守にもをさ〳〵……私だけ常陸介にも餘りもて囃されぬ有樣で。

この人……この媒の男は追從心があ

ゐつゝ、目をはつかにさし出づるばかりにて、琴琵琶の師とて、内教坊のわたりより迎へ取りつゝ、習はす。手ひとつ彈き取れば、師を立ち居をがみて喜び、祿を取らすること埋づむばかりにて、もて騷ぐ。はやりかなる曲の物など教へて、師と、をかしき夕暮などに彈き合はせて遊ぶ時は、涙もつゝまず、嗚咽がましきまで、さすがに物めでしたり。かゝる事どもを、母君はすこし物のゆゑ知りて、いと見ぐるしと思へば、殊にあへしらはぬを、「常陸あこをば思ひ貶し給へり」と、常に怨みけり。

かくてかの少將、契りし程を待ちつけで、「おなじくは疾く」と責めければ、わが心一つにかう思ひ急ぐも、いとつゝましう、人の心の知り難きを思ひて、初より傳へそめける人の來たるに、近う呼び寄せて語らふ。「北方よろづ多く思ひ憚ることのあるを、月頃かう宣ひて程經ぬるを、竝々の人にも物し給はねば、辱なう心苦しうて、かう思ひ立ちにたるを、親など物し給はぬ人なれば、心一つなるやうにて、かたはら痛う、うち合はぬ樣に見え奉ることもやと、かねてなむ思ふ。若き人々あまた侍れど、思ふ人具したるは、自らと思ひ讓られて、この君の御事をのみなむ、はかなき世の中を見るにも後めたくいみじきを、物思し知りぬべき御心樣と聞きて、かうよろづのつゝましさを忘れぬべかめるに、もし思はずなる御心ばへも見えば、人笑へに悲しうなむあるべき」といひけるを、少將の君にまうでて、しか〳〵なむと申しけるに、「少將ハ氣色あしくなりぬ。」「初より更に守の御女にあらずといふ事をなむ聞かざりつる。同じごとなれど、人聞も氣劣りたる心地して、出入せむにもよからずなむあるべき。ようも案内せで、浮びたること傳へける」と宣ふに、いとほしくなりて、「委しくも知り給へず。女どもの知る便にて、仰言を傳へ始め侍りしに、中にかしづく女とのみ聞き侍れば、守のにこそはとこそ思ひ給へつれ。異人の子持給へらむとも問ひ聞き侍らざりつるなり。」「浮舟ノ容貌心も勝れて物し給ふこと、母上のかなしうし給ひて、面正しう氣高きことをせむと崇めかしづかると聞き侍りしかば、

り嫁な性質で、この緣談の破れるのを悔しく變方へ氣の毒に思つたゆゑ。

まことに守の女と……眞に貴方が常陸介の實子の婿になりたく思召すなら、まだその娘は年弱ではあつてもお取次致しませう。

中にあたるなむ—今のお腹で三人ある娘の眞中に當るのを。

いさや……されば、どんなものかなあ、最初いひ寄つた浮舟を中止して置いて、又他の娘を望むのは面白くなからう。

品あてに—種性貴く。

寂しう事うち合はぬ……貧しく不如意でゐて上品ぶつてゆかうとする人の最後は、小綺麗な生活も出來ず、他人からも人間らしく思はれもせぬのを見れば。

さもと許す……實の娘の婿にしてもよいと承諾する樣子があつたら、何のそれも惡くはあるまい。

この人は……この媒の男は妹が浮舟に仕へてゐる便宜で。

西の御方—浮舟が西の對に住む故の稱。

とり申すべき……申上げたい事が御座いまして參上致しましたと、取次にいはせた。

このわたりに—その男は當家に。

『いかでかのあたりの事傳へつべからむ人もがな』と宣はせしかば、『さる便知り給へり』と取り申し、なり。更に浮びたる罪侍るまじきことなり」と、腹惡しく詞多かる者にて申すに、君いとあてやかならぬ樣にて、「さやうのあたりに行き通はむ人のをさ〳〵許さぬ事なれど、今樣の事にて咎あるまじう、もてあがめて後見だつに、罪隱してなむある類もあ〻めるを、おなじごと內々には思ふとも、よその覺なむ、諂ひて人いひなすべき。源少納言、讃岐の守などの、うけばりたる氣色にて出で入らむに、守にもをさ〳〵受けられぬ樣にて交らはむなむ、いと人氣なかるべき」と宣ふ。この人追從あり、うたてある人の心にて、これをいと口惜しう、此方彼方に思ひければ、「まことに守の女と思さば、まだ若うなどおはすとも、しか傳へ侍らむかし。中にあたるなむ、姫君とて守はいとかなしうし給ふなる」と聞ゆ。「いさや、初よりしかひ寄れる事をおきて、又いはむこそうたてあれ。されどわが本意は、かの守の主の、人柄も物々しく大人しき人なれば、後見にもせまほしう、見る所ありて思ひ始めし事なり。もはら顏容貌の勝れたらむ女の願もなし。品あてに艶ならむ女は、願はゞ易く得つべし。されど、寂しう事うち合はぬみやび好める人の果て〳〵は、物淸くもなく、人にも人とも思はれたらぬを見れば、少し人に誘らるとも、なだらかにて世の中を過さむことを願ふなり。守にかくなむと語らひて、さもと許す氣色あらば、何かはさも」と宣ふ。

この人は、妹のこの西の御方にある便に、かゝる御文なども取り傳へ始めけれど、守には委しくも見え知られぬ者なりけり。たゞ行きに、守の居たりける前に行きて、「とり申すべき事ありてなむ」といはす。守、このわたりに時々出入はすと聞けど、前には呼び出でぬ人の、何事いひにかあらむと、なま荒々しき氣色なれど、「左近の少將殿の御消息にてなむ侍ふ」といはせたれば會ひたり。語らひ難げなる顏して、近う居寄りていふやう、「月ごろ內の御方に消息聞えさせ給ふを、御許ありて、この月の程にと契り聞えさせ給ふこと侍るを、日を計らひて、いつし

前には呼び出でぬ……日通りさせた事もない男が、何事をいひに來たのだらう。

語らひ難げなる顏して—媒の男は相談しにくさうな顏をして。

月ごろ內の御方に……近頃北方に左近少將から姫君を所望して文をお上げになつたのをお許しがあつて、今月中に婚姻させようとお約束なされましたが。

日を計らひて—吉日を卜して。

まことに北の方の……浮舟樣は本當に北方のお腹ではいらつしやるが。

守の殿—卽ち常陸介をさす。

受領の御婿に……一體國守の婿になる貴公子達は、只娘の親が內々の主君のやうに婿を崇めて掌に載せるやうに大事にお世話するといふ厭によつて、さうおなりなさる方もいらつしやるのに。

流石に……何といつても繼娘の婿ではさうした待遇を望むのも無理なやうで、大して厚遇もされず他の相婿よりも輕く思はれながらお通ひになるのは、具合わるいだらうといふ趣を。

初より只……少將は元々貴方が富貴で後援者と額むに十分だといふ御聲望を見込んで申込んだ譯です、全く繼娘がいらつしやらうといふ

事は知りませんでしたから。
もとの御志の……少將の素志の通り、まだお若い姫君達もいらつしやる事ゆゑお許し下されたら有難い仕合で、御意向を伺つて來いと仰しやつたので參りました。
更にかゝる御消息……少將からそんなお申込があつたといふ事は私は全く委しく聞いてゐません。
同じごとに……浮舟は實子同樣に扱はねばならぬ人ですが、碌でもない實子が澤山居りまして、甲斐性もない私の事で色々その方の面倒を見てゐる中に。
これを他人と……浮舟を他人扱にして分け隔をすると。
ともかくも口入れさせぬ……何とも浮舟の事については私に容喙させぬ妻の事ゆゑ。
然なむ仰せらるゝ……少將から浮舟を御所望の仰があるといふ事は。
某を取所に……私を取得に思召した少將の御芳志は知りませんでした。
女の童―次女をいふ。今の北方の腹。
宣ふ人々―婿にならうと望む人々。
なか〳〵胸痛き……生中な婿を取つて却て心配の種にならうかとの懸念から。
故大將殿―少將の父であらう。
若くより―私も若い時分から。

かと思す程に、ある人の申しけるやう、まことに北の方の御腹にものし給へど、守の殿の御女にはおはせず、君達のおはし通はむに、世の聞えなむ諂ひたるやうならむ、受領の御婿になり給ふやうの君達は、ただ私の君のごとく思ひかしづき奉りて、手に捧げたるごと思ひ扱ひ、後見奉るにかゝりてなむ、さる振舞し給ふ人々ものし給ふめるを、流石にその御願はあながちなるやうにて、をさ〳〵うけられ給はで、氣劣りておはし通はむこと、便なかりぬべきよしをなむ、切に謗り申す人々あまた侍るなれば、只今おぼし煩ひてなむ。初より只きら〳〵しう、人の後見と頼み聞えむに堪へ給ふべき御覺を擇び申して、聞え始め申しゝなり。更に異人物し給はむといふこと知らざりければ、もとの御志のまゝに、まだ幼きも數多おはすなるを、許い給はばいと嬉しくなむ『御氣色見てまうで來』と仰せられつれば」といふに、守「更にかかる御消息侍るよし委しく承はらず。實に同じごとに思ひ給ふべき人なれど、よからぬ童べあまた侍りて、はか〳〵しからぬ身に、樣々思

家の子にて……私が昔御家來として少將をお見上げして居つたに誠にお人柄優れて。
警策―對策の秀逸をいひ、轉じて詩文にも人物の優れたのにもいふ。
遙なる所に―遠い田舍に赴任して。
うひ〳〵しく……疎遠となつたやうな氣が致しまして。
奉らむは―娘を差上げることは。
月頃の御心……これまでの少將の御意向を私が妨害でもしたやうに妻が思ひさうな事を、私は憚つて居ります。
よろしげなめりと……これはうまく運びさうだと媒は思つた。
かの御志―少將のお心持。
たゞ一所の―只貴方お一人の。
いはけなく……その姫君御當人が。
ほとりばみたらむ振舞―只近寄ればよいといふ振舞。繼娘の婿になる事をさす。
若き君達とて……少將は若い貴公子だとて、よくあるやうな浮氣つぽく風流がつても居られません。
このごろの御德……さし當つての敎人の御けはひの―少將の御人品の。
直人の……普通人の非常な富貴と稱してゐる威勢に比しては立勝つて居られます。

ひ給へ扱ふほどに、母なる者も、『これを他人と思ひ分けたること』と、くねりいふこと侍りて、ともかくも口入れさせぬ人の事に侍れば、ほのかに然なむ仰せらるゝ事侍りとは聞き侍りしかど、某を取所に思しける御心は知り侍らざりけり。さるはいと嬉しく思ひ給へらるゝ御事にこそ侍るなれ。いとらうたしと思ふ女の童侍り。數多の中に、これをなむ命にも代へむと思ひ侍る。宣ふ人々あれど、今の世の人の御心定めなく聞え侍るに、なか〳〵胸痛き目をや見むの憚に、思ひ定むる事もなくてなむ。いかで後安くも見給へ置かむと、旦暮かなしく思ひ給ふるを、少將殿におき奉りては、故大將殿にも若くより參り仕うまつりき。家の子にて見奉りしに、いと警策に、仕うまつらまほしと心づきて思ひ聞えしかど、遙なる所にうち續きて過し侍る年頃のほどに、うひ〳〵しく覺え侍りてなむ、參りも仕うまつらぬを、かゝる御志の侍りけるを、返す〳〵畏まりながら、仰のごと奉らむは易き事なれど、月頃の御心違へたるやうに、この人の思ひ給へむ事をなむ、思ひ

こたびの頭は……今度の藏人頭はこの少將がなるに相違なく、帝御自身の御口から洩れたのです。ごては言へ（ゴチ）の轉語。

よろづの事足らひて……萬事具足して感心なお前が。

さるべき人擇りて……相當な者を擇んで介錯人即ち妻にするがよい。

なし上げてむ—昇進させてやらう。

この君ぞ—この少將こそ。

あたら人の御婿……少將はあつたら得難い婿君ですものを、折角こんなに先方から申込まれた機會に御決定なさるがよいでせう。

かの殿には—少將に對しては娘持つ親達から。

こゝに澁々なる……貴方がお澁りなさる氣ぶりが見えたら少將は他へ氣がお變りになりませう。

これ只……これ只貴方の爲御安心のいく事を申上げる次第です。

この頃の御德……少將の現在の收入などの不十分な事は仰しゃる必要がありません。

頂にも—頭の上にでも。

何を飽かぬとか……何を不自由な思をさせ申しませうぞ。

たとひ命敢へずして……假令私の壽命が堪へきれずに中途で死んで、お世話をしさしても。

給へ憚り侍る」と、いとこまやかにいふ。よろしげなゝめりと嬉しく思ふ。（樣）「何かと思し憚るべきにも侍らず。かの御志は、『たゞ一所（少將）の御許し侍らむを願ひ思して、いはけなく年足らぬ程におはすとも、眞實の親のやむごとなく思ひ掟て給へらむをこそ、本意叶ふにはせめ。もはらさやうの、ほとりばみたらむ振舞すべきにもあらず』となむ宣ひつる。人柄（少將ハ）はいとやむごとなく、覺心にくゝおはする君なりけり。若き君達とて、好き〳〵しくあてびてもおはしまさず。世の有樣もいとよく知り給へり。領じ給ふ所々もいと多く侍り。このごろの御德なきやうなれど、自ら人の御けはひのありけるやう、直人の限なき富といふめる勢には勝り給へり。來年四位になり給ひなむとす。こたびの頭は疑ひなく、帝の御口づからごて給へるなり。『よろづの事足らひて目やすき朝臣の、妻をなむ定めざゝなるはや。さるべき人擇りて後見を設けよ。上達部には、我しあれば、今日明日といふばかりになし上げてむ』とこそ仰せらるなれ。何事も、只この君ぞ、帝にも親しく仕うまつり給

赤取り爭ふべき……この娘の外に所有を爭ふ者はありません。

これは樣殊に……この娘は格別に愛してゐる子なのです。

大臣の位を……少將が大臣の高位を望んでその運動の爲に世に無雙の寶をありたけ求めようとなさる場合には、私の手で間に合はぬ物はありますまい。

御後見は……少將の後援者となる事は御安心なさい。

かの御爲にも—少將の爲にも。

幸とあるべき……幸福となる事だらうと思ひますが、よくも分りません。卑下してかくいふ。

彼方にも……北方の處へも頻出さずに少將邸へ參上した。

君少し……少將は常陸介の態度を少し田舍じみてゐると思はれたが。

贖勞—今の運動費のやうなもの。

かくと物しつや—かく〳〵と違約の旨を話したか。

かの志は……あの北方がこの緣談には格別熱心に思つて居られるだらうに違約をしようのは。

いさや—さあどうしようかしら。

かの姫君—常陸介の二女、即ち少將に與へようとしてゐる娘。

中のこのかみにて—浮舟は子供達の中での姉で。

ふなる。御心（ハ）はた、いみじう警策に重々しくなむおはしますめる。あたら人の御婿を、かう聞え給ふほどに、思ほし立ちなむこそよからめ。かの殿には、われも〳〵、婿とり奉らむと申す所々侍るなれば、こゝに澁々なる御けはひあらば、外樣にも思しなりなむ。これ只後やすき事をとり申すなり」と、いと多くよげにいひ續くるに、いと淺ましくあるべき事にやとも知らず」と、よろ

鄙びたる守にて、うち笑みつゝ聞き居たり。『この頃の御德などの心もとなからむ事は、な宣ひそ。某命侍らむ程は、頂にも捧げ奉りてむ。心もとなく何を飽かぬとか思すべき。たとひ命敢へずして仕うまつりさしつとも、のこりの寶物、領じ侍る所々、一つにても亦取り爭ふべき人なし。子ども多く侍れど、これは樣殊に思ひそめたるものに侍り。（少將ガ）たゞ眞心（まこころ）に思し顧みさせ給はば、大臣の位を求めむと思し願ひて、世になき寶物（たからもの）をも盡さむとし給はむに、なき物侍るまじ。當時の帝、しか惠み申し給ふなれば、御後見は心もとなかるまじ。これかの御爲にも、某（なにがし）が女の童（わらは）の爲にも、幸（さいはひ）とあるべき事にやとも知らず」と、よろ

其方にと趣けて……貴方のお申込を浮舟に振向けて返事をされた譯で御座います。

又なく世の常ならず……竝びもなく非常に北方が浮舟を大事にしてゐると、この媒は話してゐた癖に、今になつて突然こんな事をいふのもどうした事かと。

永らへての頼もしき……後々までの力になる方を擇まうと。

いと全く—實に拔目がなく。

契りし暮にぞ……浮舟の方へ約束した期日のその夜から通ひ始めた。

しつらひなど—室内の装飾など。

御方をも—浮舟をも。

少將などいふ……少將などいふ低い官位の男に與へるのも。

おはせずなりにたりとも—父君八宮が御逝去なされても。

親に知られ—實父八宮に認められ。

大將殿の……薫のお言葉の通り、分不相應ではあるが何の差上げまいものでもない。

ほかの音聞は……世間の人の聞く所では浮舟は常陸介の實子と同じ受領の子と思つてをり、又實情を探知してゐる人も、實父八宮に認められなかつたので却て見縊りさうなのが悲しい。

目やすき程の人の—見苦しからぬ身分風采の少將が、折角懇切に仰しやるものを應ずるがよからうと。

言よく—口先うまく。

明日明後日と……婚姻の日が一兩日中だと思へば。

此方にも……北方は浮舟の部屋にもおち〳〵居られず。

吾子の御懸想人を……私の二女を望んで申込んで來た少將を横取して浮舟の婿にしようとなされたのは僭上な幼稚な細工ですよ。

めでたからむ……お立派な親王樣の姫君をほしがる君達があるものですか。餘りお立派過ぎますからねえとの皮肉。

いやしうも—苟もの意。

畏く思ひ企てられ……貴女はうまく計畫なされたけれど、少將の方では全く元々の考が違ふといつて永女の方に決定なされたので、同じ婿にするならと思つて、それでは少將のお心任せにといつて承諾したのです。

奥なく—あけすけに。

人の思は—相手の氣持などむ所も……は斟酌しない人で。

落ちぬばかり—落ちるほど。「ぬ」は否定でなく完了の助動詞。

此方に—浮舟の部屋に北方が。

さりとも人には……何といつても浮しげにいふ時に、(媒ハ)いと嬉しくなりて、妹にもかゝる事ありとも語らず、彼方(かなた)にも寄りつかで參りぬ。守のいひつる事を、(少將ニ)いとも〳〵よげにめでたしと思ひて聞ゆれば、君少し鄙びてぞあるとは聞き給へど、憎からずうち笑みて聞き居給へり。大臣(おとど)にならむ贖勞(しやくらう)を取らむなどぞ、餘りおどろ〳〵しき事と、耳とまりける。「さてかの北の方には、かくと物しつや。かの志は殊に思ひ始め給へらむに、ひき違(たが)へたらむ、僻々(ひがひがし)くねぢけたるやうに取りなす人もあらむ。いさや」と思したゆたひたるを、(媒)「何か、北の方もかの姫君をば、いとやむごとなきものに思ひかしづき奉り給ふなりけり。たゞ中(なか)のこのかみにて、年も大人び給ふを心苦しき事に思ひて、其方(そなた)にと趣(おもむ)けて申されけるなり」と聞ゆ。月頃は、「又なく世の常ならずかしづく」といひつるものの、うちつけにかくいふも如何(いか)ならむと思へども、(少將ハ)猶一わたりはつらしと思はれ、人には少し誘らるとも、永らへての頼もしき事をこそと、いと全(また)く賢(さか)き君にて思ひ取りてければ、日をだに取り換へで、契りし暮にぞおはし始めける。

北の方は人知れずいそぎ立ちて、人々の裝束(さうぞく)せさせ、しつらひなど、よしよししうし給ふ。御方(おんかた)をも頭沐(かしらあら)はせ、取り繕(つくろ)ひて見るに、少將などいふ程の人に見せむも、惜しくあたらしき樣(さま)を、あはれや、親に知られ奉りて生(お)ひ立ち給はましかば、おはせずなりにたりとも、大將殿の宣ふらむ樣(さま)にも、おほけなくとも、などかは思ひ立たざらまし、されど内(うち)にこそかく思へ、ほかの音聞(おとづき)は、守の子とも思ひ分かず、また實(じち)を尋ね知らむ人も、なか〳〵貶(おと)しめ思ひぬべきこそ悲しけれなど、(北方ハ)思ひ續く。いかゞはせむ、(浮舟ガ)盛過ぎ給はむもあいなし、賤しからず目やすき程の人の、かく懇に宣ふめるをなど、(北方ハ)心一つに思ひ定むるも、媒(なかだち)のかく言(こと)よくいみじきに、女(をんな)はまして嫌(いや)されたるにやあらむ。明日明後日(あすあさて)と思へば、心あわたゞしく急がしきに、此方(こなた)にも心のどかに居(ゐ)られたらず、そゝめきありくに、守(かみ)、外(と)より入り來て、なが〳〵と滯(とゞこほ)る所もなくいひ續けて、「我(わ)を思ひ隔てゝ、吾子(あこ)の御懸想人(おんけさうびと)を奪はむとし給ひけ

舟の容色は人には負けまいと。おのれは同じごと……私は娘達の婿は皆同様に大切に取扱つてはゐるにしても、浮舟の婿と思ふ人の爲には特に。

親なしと……浮舟に父が無いと聞いて馬鹿にして、まだ年端もゆかず一人前にもならぬ次女だのに、姉をさし越えてこんな申込が出來る筈のものだらうか、こんな嫌な人と交渉を保つて色々見たり聞いたりしたくないと思ふけれど。うけ取り騒ぐめれば—引受けて、ちやほやするので。

合ひ〳〵にたる……夫も少將もどちらも似合つた人々の態度なので、一切自分はこんな事に容喙すまいと思ふゆゑ、どうか餘所へ暫く行つてゐたいものだ。

我も君を—浮舟を。

これも御幸にて……これも結局浮舟樣の御幸福を齎す事になる違約かも知れません、こんなに心卑しい少將の事ゆゑ折角の浮舟樣の美點も認め得ますまい。

我が君をば—浮舟樣を。

大將殿—薫。

あはれにはた……しんみりしたお心持でまた浮舟樣の事を仰しやつて御座います、御宿緣に任せて薫君に上げる御思案をなさいまし。

おぼろげならむ人をば……薫は並大抵の女は娶らぬと仰しやつて。

左の大殿—夕霧。

按察の大納言—紅梅の事であらう。

ほのめかし給ひけれど—婿に取らうと謎をかけられたけれど。

帝の御かしづき女—女二宮。

かの母宮などの……薫の母君女三宮の許にでも浮舟を侍女に上げて。

それはたげに……女三宮の御殿も亦成程結構な處ではあるが、浮舟をさらして置くのも氣懸りな次第です。

宮の上—匂宮の奥方、中の君。

思はしげに……氣苦勞があるらしくしていらつしやるのを見れば。

いかにも〳〵……どうしても一人の妻を守つてくれる實直な人が。

わが身にても……私自身の上で思ひ當りました。

故宮—八宮。

人數にも—私を人並のものとも。

このいといふかひなく……今の夫常陸介が誠にお話にもならぬ程趣もなく無骨な人ながら、一本氣で。

折節の心ばへの—何か時に觸れての常陸介の心立が。

かたみにうち諍ひても……互に口喧嘩をしてまあ氣に合はぬ事は筋道

るか。おほけなく心をさなきこと。めでたからむ親王の御女をば用せさせ給ふ君達あらじ。賤しく異樣ならむ某等が女子をこそ、いやしうも尋ね宣ふめれ。畏く思ひ企てられたれど、もはら本意なしとて、外樣へ思ひなり給ひぬべかゝなれば、同じくはと思ひてなむ、さらば御心と許し申しつる」など、あやしく奥なく、人の思はむ所も知らぬ人にて、いひ散らし居たり。北の方、あきれて物もいはれで、とばかり思ふに、世の中の心憂さをかき列ね、涙も落ちぬばかり思ひ續けられて、やをら立ちぬ。此方に渡りて見るに、（浮舟へ）いとらうたげにをかしげにて居給へるに、さりとも人には劣り給はじとは思ひ慰む。乳母と二人（北方）心憂きものは人の心なりけり。おのれは同じごと思ひ扱ふとも、この君のゆかりと思はむ人の爲には、命をも讓りつべくこそ思へ。親なしと聞きあなづりて、まだ幼くなり合はぬ人を、さし越えてかくはいひなるべしや。かく心憂く近きあたりを見じ聞かじと思ひぬれど、守のかく面正しき事に思ひて、うけ取り騒ぐめれば、あさましく合ひ〳〵にたる世の人の有樣を、すべてかゝる事に口入れじと思ふに、「いかで此處ならぬ所に、暫しありにしがな」とうち歎きつゝいふ。乳母もいと腹立たしく、我が君をかく貶しむること、思ひて、「何か、これも御幸にて、違ふことゝも知らず。かく心くち惜しくいましける君なれば、あたら御樣をも見知らざらまし。我が君をば、心ばせあり、物思ひ知りたらむ人にこそ見せ奉らまほしけれ。大將殿の御樣容貌の、ほのかに見奉りしに、さも命延ぶる心地のし侍りしかな。あはれにはた聞え給ふなり。御宿世にまかせて、さも思し寄りねかし」といへば、「あな怖ろしや。人のいふを聞けば、『年頃、おぼろげならむ人をば見じ』と宣ひて、左の大殿、按察の大納言、式部卿の宮などの、いと懇にほのめかし給ひけれど、聞き過して、帝の御かしづき女を得給へる君は、いかばかりの人をか、まめやかには思さむ。かの母宮などの御方にあらせて、時々も見むとは思しもしなむ。それはた、げにめでたき御あたりなれども、いと胸痛かるべき事なり。宮の上の、かく幸人と世に申すなれ

を明かにしたものです。
みやびかに心恥かしき……優雅で氣が引ける程立派な人に連添ふにしても、自分が妻といふ身分でなくては。
よろづにかなしくこそ……浮舟が何かと可愛さうに思はれます。
いそぎ立ちて……少將と次女との婚禮を急いで。
此方に目やすき……浮舟の方によいのが澤山ゐるものを、當分は借して下さい。
やがて帳など……帳なども新調してあるこの浮舟の部屋を、何しろ急場の事ゆゑそつくりその儘次女の用に充て、何かと別に支度する事は見合はせよう。
この西の方―浮舟の部屋。
目やすき樣に……この部屋は北方が體裁よくさつぱりと彼方此方きまりを附けて飾つてゐるものを。
厨子―觀音開きの戸棚。
二階―二段になつて扉のない棚。
口入れじと……一切容喙すまいといつた事ゆゑ默つて見てゐる。
御方―浮舟。
人の御心は……北方の腹の中はすつかり分つた、只次女とても同じ自分の產んだ子だから、何といつてもか程までは構はぬ事はあるまいと

ど、物思はしげに思したるを見れば、いかにも〳〵、二心なからむ人のみこそ、目やすく頼もしき事にはあらめ。わが身にても知りにき、故宮の御有樣は、いとなさけ〳〵しく、めでたくをかしくおはせしかど、人數にも思さざりしかば、いかばかりかは心憂くつらかりし。このいといふかひなく、なさけなく樣惡しき人なれど、ひた赴きに二心なきを見れば、心安くて年頃をも過しつるなり。折節の心ばへの、かやうに愛敬なく用意なきことこそ憎けれ、歎かしく怨めしきこともなく、かたみにうち諍ひても、心に合はぬことをばあきらめつ。上達部、親王達にて、みやびかに心恥かしき人の御あたりといふとも、わが數ならではかひあらじ。よろづの事わが身からなりけりと思へば、よろづにかなしくこそ見たてまつれ。いかにして人笑へならず、仕たて奉らむ」と語らふ。
守はいそぎ立ちて、「女房など、此方に目やすき數多あゝなるを、この程はあらせ給へ。やがて帳なども新しく仕たてられたゝめる方を、事俄

私は思つてゐたのだ、儘よそれならそれでよい、世間には母の無い子は幾らもあるさ、構はぬ母なら無くてもよい。
憎げにもあらず―次女の容姿も醜くもない。
ふくらかなる人の―丸々肥えた娘で。
小袿の程なる……小袿の丈と同じ位の長さで毛先が誠にふさ〳〵としてゐる。
何か人の……何の、北方が浮舟の婚にしようともくろまれた人を、達てこちらへ横取にするでもあるまいとは思ふが。
謀られ―だまされ。
男君も……少將の方でも媒の言葉によつて、この間からの常陸介の話を立派な思はく通りの事と信じ、何等の缺點も無ささうに思つて、浮舟に約束した期日も變へずにその夜から次女の方へ通ひ初めた。
御方の乳母―浮舟の乳母。
かく見扱ふも……浮舟を何やかやと面倒見るのも氣まづいので。
宮の北の方―中の君。
その事と侍らでは……しかとした用が無くてはお便りするのも狎々しく失禮だらうかと遠慮しまして、平素は思ふ通りに御音信も申上げませんが。

になりにたゝめれば、取り渡し、とかく改むまじ」とて、この西の方に來て、立ち居とかくしつらひ騷ぐ。目やすき樣にさはらかに、あたりあたりあるべき限したる所を、さかしらに屏風ども持て來て、いぶせきまで立て集めて、厨子、二階など、怪しきまで仕加へて、心を遣りて急げば、北の方見苦しく見れど『口入れじ』といひてしかば、たゞに見聞く。御方は北面に居給へり。守、「人の御心は見知り果てぬ。只おなじ子なれば、さりともいとかくは思ひ放ち給はじとこそ思ひつれ。さばれ、世に母なき子は無くやはある」とて、女を、晝より乳母と二人、撫で繕ひ立てたれば、憎げにもあらず。年十五六の程にて、いと小さやかにふくらかなる人の、髮美しげにて、小袿の程なる、裾いと總やかなり。これをいとめでたしと思ひて、撫で繕ろふ。「何か、人の異樣に思ひ構へられける人をしもと思へど、人柄のあたらしく、警策に物し給ふ君なれば、我も〳〵と婿に取らまほしくする人の多かゝなるに、取られなむも口惜しくてなむ」と、かの媒に謀られていふも、いと嗚滸な

所換へさせむと……浮舟に居所を換へさせようと存じますが、窃に置いて戴けるやうな目立たぬお部屋がありましたら。

數ならぬ身一つの……つまらぬ私の手一つでは保護もしきれず。

頼もしき方には……お縋り申す方としては先づ貴女様と存ずる次第で御座います。

我ひとり……自分一人生き殘つてゐて姉妹の名乗をするのも誠に憚られるし、又浮舟が見苦しい有様で零落するやうな場合にも。

異なる事なくて……格別な事情もなく姉妹互にばら〳〵にならう事も。

亡き人―八宮。

大輔―中君の侍女。

いひ遣りたりければ―浮舟の母から事情を申送つたので。

さるやうこそは……何かこれには仔細が御座いませう、人に憎がられるすげない御挨拶はなさいますな、浮舟のやうな母の卑しい者が立派な兄弟中にまじるといふのも世間に有り勝で御座います。

かの西の方―二條院の西の對。

いとむつかしげ……甚だむさくるしいけれど、それでも御辛抱下さるなら當分お預り申しませう。

御方もかの……浮舟も中の君を。

り。男君も、この程の嚴めしく思ふやうなる事と、よろづの罪あるまじう思ひて、その夜もかへず來そめぬ。母君、御方の乳母いと淺ましく思ふ。僻々しきやうなれど、かく見扱ふも心づきなければ、宮の北の方の御許に御文奉る。「その事と侍らでは、狎れ〳〵しくやと畏まりて、え思ひ給ふるまゝにも聞えさせぬを、慎むべき事侍りて、暫し所換へさせむと思ひ給ふるに、いと忍びて侍ひ給ひぬべき隠れの方候はば、いとも〳〵嬉しくなむ。數ならぬ身一つの蔭に隠れも敢へず、あはれなる事のみ多く侍る世なれば、頼もしき方には先づなむ」と、うち泣きつゝ書きたる文を、あはれとは見給ひけれど、故宮のさばかり許し給はで止みにし人を、我ひとり殘りて知り語らはむも、いとつゝましく、又見苦しき樣にて世にあふれむも、知らず顔にて聞かむこそ心苦しかるべけれ、異なる事なくてかたみに散りぼはむも、亡き人の御爲に見苦しかるべき業と思し煩ふ。大輔が許にも、いと心苦しげにいひ遣りたりければ、「さるやうこそは侍らめ。人憎くはしたなくも

なか〳〵かゝる事ども……少將が遣わした結果こんな事になつたのを却て嬉しいと思つた。

守少將の……常陸介は少將の待遇をどんなに立派にしようかと思ふについて。

東絁―東國產の粗末な絹。

のゝしりけるを―わや〳〵どさくさしてゐるのを。

畏き情―えらい恩惠。

君もいとあらまほしく……少將も大變思ふ壺で我ながらうまい緣組をしたわいと思つた。

この程を見捨てゝ……かうした婚禮騒を餘所事に見て他へ避けるも。

客人の御出居……これは少將の御休息所だ、これはお供部屋だと手を加へて大騒やるので。

源少納言―先妻腹の娘の婿。

所もなし―居場所も無い位である。

この御方に客人……浮舟の部屋だつた所に少將がゐるので、廊などの端近い所に浮舟をお置申すのも氣が濟まず可愛さうに思はれて。

宮にとは……中の君に預けようとは思つた次第である。

この御方樣に……浮舟の方にこれぞといふ程の身寄の無いのを常陸守が侮るのだと北方は思ふので、格別認めてお許し下されなかつた宮

な宣はせそ。かゝる劣りのものの、人の御中にまじり給ふも、世の常のことなり。餘りいと情なく宣ふまじき事なり」など聞えて、「さらばかの西の方に隠ろへたる所仕出でて、いとむつかしげなめれど、さても過い給ひつべくは、暫しの程」といひ遣はしつ。いと嬉しと思ほして、人知れず出で立つ。御方も、かの御あたりをば睦び聞えまほしと思ふ心なれば、なか〳〵、かゝる事どもの出で來たるを嬉しと思ふ。守、少將の扱を、いかばかりめでたき事をせむと思ふに、そのきら〳〵しかるべき事も知らぬ心には、たゞ粗らかなる東絁どもを、押しまろがして投げ出でつ。食物も所せきまでなむ運び出でてのゝしりけるを、下衆などは、それをいと畏き情に思ひければ、君も、いとあらまほしく、心かしこく取り寄りにけりと思ひけり。北の方、この程を見捨てゝ知らざらむも僻みたらむを思ひ念じて、只するまゝに任せて見居たり。客人の御出居、侍としつらひ騒げば、家は廣けれど、源少納言東の對には住む、男子などの多かるに、所もなし。この御方に客人住みつきぬれ

樣のお屋敷だのに、强ひて浮舟を
產上げたのである。
二三人ばかりして—二三人浮舟に附
添うて二條院に移り。
遙なりつれど—疎遠だつたけれど。
疎く思すまじき……中の君が疎くは
思召さぬ筈の人ゆゑ北方の參上す
る時は中の君は疎遠になさらない。
我も故北の方には……私も中の君の
母君とは他人ではないのに。姪に
當る北方の心。
仕うまつると……奉公人といふ名前
だつたばかりに私は八宮に人らし
くも扱はれず。
思ふには—思ふにつけては。
こゝには御物忌……二條院に浮舟が
來たのは惡い方角をよける爲とい
ひふらしてゐるから。
こたみは—北方が今度は。前にも來
た事あるのがこの句で分る。
宮渡り給ふ—匂宮が入らしつた。
ゆかしくて—北方は好奇心が動いて。
わが頼もし人に思ひて—北方が杖柱
とも思つて。
樣容貌も……風采容貌も人品もずつ
と立勝つて見える四位五位の人々
が、匂宮の前に跪き伺候して。
あたり〳〵の事ども—銘々の受持の
事などを。
わが繼子—常陸介の先妻腹の子。

ば、廊など邊ばみたらむに住ませ奉らむも、飽かずいとほしく覺えて、とかく思ひめぐらす程、宮にとは思ふなりけり。この御方樣に數まへ給ふ人のなきを、侮るな。めりと思へば、殊に許い給はざりしあたりを、あながちに參らす。乳母若き人々、一二三人ばかりして、西の廂の北に寄りて、人氣遠き方に局したり。年頃かく遙なりつれど、疎く思すまじき人なれば、參る時は恥ぢ給はず、(中君ノ)いとあらまほしく、けはひ殊にて、若君の御扱をしておはする御有樣、羨ましく覺ゆるもあはれなり。我も故北の方には離れ奉るべき人かは、仕うまつるといひしばかりに、數まへられ奉らず、口惜しくて、かく人には侮らるゝと思ふには、(中君ニ)かく强ひて睦び聞ゆるもあぢきなし。こゝには御物忌といひてければ、人も通はず。一二三日ばかり母君も居たり。こたみは心のどかに、この御有樣を見る。
宮渡り給ふ。ゆかしくて、物の間より見れば、(匂宮ハ)いと清らに、櫻を折りたる樣し給ひて、わが頼もし人に思ひて、つらう怨めしけれど心には違

御あたりにも—匂宮の御前近くも。
こよなき人の—格別優れた匂宮の。
あはれこは何人ぞ—あゝこれはまあ
何たる御立派な方だらう。
めでたさよ—中の君の御運のよさ。
餘所に思ふ時は……脇から想像する
と、假令立派なお方でも浮氣でも
して妻に辛い思をさせるやうなら
つまらぬと、今までは匂宮をも餘
り結構でもなささうに御推量申し
てゐたのは淺はかであつたわい。
七夕ばかりにても……牽牛織女の緣
のやうに一年一夜の逢瀨でも、こ
んな風に出遣入なさらうのは。
女君—中の君。
故宮—八宮。
宮達と聞ゆれど……同じ親王樣でも
八宮と匂宮とでは實に格段の違が
あるものだと。
御帳の內に—匂宮も中の君も御帳臺
の內にお遣入になつたので。
御臺こなたに……御食膳は中の君の
お部屋に調進された。
心殊に見ゆれば—立派に見える故。
我がいみじき事を……自分が家では
萬事立派にしてやるつもりでも、
何でもない身分の者の程度では矢
張駄目で悔しいものだと、北方は
感じたので。
わが女も……浮舟もこんな風に宮樣

はじと思ふ常陸守より、樣容貌も人の程もこよなく見ゆる五位四位ども、あひ跪きさぶらひて、この事かの事と、あたり〳〵の事どもなど、家司ども申す。又若やかなる五位ども、顏も知らぬども、多かり。わが繼子の式部の丞にて藏人なる、內裏の御使にて參れり。御あたりにも近く參らず、こよなき人の御けはひを、あはれこは何人ぞ、かゝる御あたりにおはするめでたさよ、餘所に思ふ時は、めでたき人々と聞ゆるとも、つらき目見せ給はばと、もの憂く推し量り聞えさせつらむ淺ましさよ、この御有樣容貌を見れば、七夕ばかりにても、かやうに見奉り通はむは、いといみじかるべき業かなと思ふに、(中君ハ)若君抱きてうつくしみおはす。女君、短き几帳を隔てゝおはするを、(匂宮ハ)推しやりて、物など聞え給ふ御容貌ども、いと清らに似合ひたり。故宮の寂しくおはせし御有樣を思ひ比ぶるに、宮達と聞ゆれど、いとこよなき業にこそありけれと覺ゆ。御帳の內に入り給ひぬれば、若君は乳母などもてあそび聞ゆ。人々參り集まれど、(匂宮ハ)惱ましとて、大殿籠り暮しつ。御臺こなたに參

に連添はせても不都合あるまい。ゆたけき勢を……富裕な生活を頼みにして父親常陸介が后妃にも差上げたいと思つてゐる娘達は、矢張同じく我が生んだ子ではあるが樣子が非常に劣つてゐると、北方は思ふにつけても。心は高く……理想は高く持つべきものだと。

あらまし事―將來の豫期。

宮―匂宮。

后の宮―明石中宮。

此方より―中の君の處から。

侍の方に……控所の方に控へてゐた人々が、今こそ匂宮の御前に進んで何事かを申上げてゐる中に。

清げだちて……めかし込んで、何といふ特長もない男の面白くもない顏付したのが。例の左近少將。

御前にて何とも……立派な匂宮の御前では一向目にも立たぬのを。

この御方にと―浮舟の婿君にと。

勞られめ―大事がられよう。

かじけたる女の童―痩せこけた常陸介の次女。輕侮してかういふ。

この御あたりの……この二條院の人達はてんでそんな尊もしません。

かんの君―常陸介をいふ。一本「かの君」とある。これは左近少將をさす。

聞くらむとも知らで―北方が聞いてゐるとも氣が附かず。

少將を……今まで少將を見苦しくない相當の人物と思つてゐたのも悔しく、ほんに格別の人でもなかつたわいと北方は思つて。

御心地よろしく……明石中宮の御病氣がお宜しかつたら直に歸つて來ませう、矢張お苦みのやうなら今晩はお伺致します。

今は一夜を……今では一夜外泊するのも氣になるのが苦しいのです。

若君の愛をも兼ねていふ。

女君の御前に……北方が中の君の前に出て匂宮の事を盛にお褒め申上げると。

故上―中の君の母君。

いふかひなく幼き……貴女は東西も分らぬ御幼少の頃で。

こよなき御宿世の……後々こんな結構な身におなり遊ばす御運があつたので、あんな宇治の山里にも。

故姫君の……大君の御逝去なされたのがあつけない事で御座います。

古へ頼み聞えける……以前力にして居つた兩親に死別れた事は、世間の定例と諦めもついて、殊に母君はお頼も覺えぬのでかうして居りますが。

この御事は―大君の御逝去の事は。

大將殿の……薫君が大君の事のみ思

る。よろづの事氣高く、心殊に見ゆれば、我がいみじき事を盡すと思へど、なほ〳〵しき人のあたりは口惜しかりけりと思ひなりぬれば、わが女も、かやうにてさし竝べたらむに、片はならじかし、ゆたけき勢を頼みて、父ぬしの、后にもなしてむと思ひたる人々は、同じわが子ながら、けはひこよなきを思ふも、なほ今より後も心は高く使ふべかりけりと、夜一夜あらまし事に思ひ續けけり。宮、日闌けて起き給ひて、后の宮例の惱ましくし給へば、參るべしとて、御裝束などし給ひておはす。(北方が)ゆかしう覺えて覗けば、(匂宮ハ)うるはしくひき繕ひ給へる、はた似るものなく氣高く、愛敬づき清らにて、若君をえ見捨て給はで、翫びおはす。御粥、强飯など參りてぞ、此方より出で給ふ。今朝より參りて、侍の方にやすらひける人々、今ぞ參りて物など聞ゆる中に、清げだちてなでう事なき人のすさまじき顏したる、直衣著て太刀佩きたるあり。御前にて何とも見えぬを、(女房)かれぞ、この常陸の守の婿の少將な。初はこの御方にと定めけるを、守の女を得てこそ勞られめなどいひて、かじけたる女の童を得たるなり。いさ、この御あたりの人はかけてもいはず、かんの君の方より、よく聞く便のあるぞ」など、おのがどちいふ。聞くらむとも知らで、人のかくいふにつけても、(北方ハ)胸潰れて、少將を目やすき程と思ひける心も口惜しく、げに殊なる事なかゝべかりけりと思ひて、いとゞしく悔らはしく思ひなりぬ。若君の這ひ出でて、御簾のつまより覗き給へるをうち見給ひて、(匂宮ハ)立ち返り寄りおはしたり。「御心地よろしく見え給はば、やがてまかゝでなむ。なほ苦しくし給はゞ、今宵は宿直にぞ。今は一夜を隔つるも覺束なきこそ苦しけれ」とて、(若君ヲ)暫し慰め遊ばして出て給ひぬる樣の、返す〳〵見るとも見るとも飽くまじく、匂ひやかにをかしければ、出で給ひぬる名殘さう〳〵しくぞ詠められる。

女君の御前に出で來て、いみじくめで奉れば、田舍びたると思して笑ひ給ふ。(北方ニ)「故上の失せ給ひし程は、いふかひなく幼き御程にて、いかにならせ給はむと、見奉る人も故宮も思し歎きしを、こよなき御宿世

續けて、他には何事にも心が移らぬとお歎きになつて。

帝のかしづき……女三宮の婿君として帝が大事にして居られるのに。おはしまさましかば……大君が御存命で薫君に連添はれたら、矢張女二宮との御緣を拒む事はお出來にならず、辛い思をなさいましたらうよ。

樣のものと……姉妹共に同樣の運命だと物笑にならうのも、成程生きてゐて却て不幸かも知れません。

見果てぬに……大君も長生なさらなかつたにつけて猶更ゆかしくも感ぜられる譯だらうと思すが。

かの君―薫。

故宮の……八宮の後生の事まで。

かの過ぎにし……亡き大君のお代りとして求めて逢はうと。

この數ならぬ人―不束な浮舟。

さもやと……薫君に上げようなどとは思多くて思ひ寄りもすべき事では御座いませんが、これも大君に繋がる緣の妹ゆゑ、さうまで仰しやつて下さるのだと。一本ゆゑに『けふ古今、紫の一本ゆゑに武藏野の草は皆がら哀とぞ見る』による。

この君をもて煩ふ……浮舟の身の始末に困つてゐる旨を。

こまかには……委しくは話さぬが左の程なりければ、さる山懷のなかにも、生ひ出でさせ給ひしにこそありけれ。口惜しく故姫君のおはしまさずなりにたるこそ、飽かぬ事なれ」などうち泣きつゝ聞ゆ。君もうち泣き給ひて、「世の中の怨めしく心ぼそき折々も、又かく永らふれば、少しも思ひ慰めつべき折もあるを、古へ頼み聞えける影どもにおくれ奉りけるは、なか〳〵に世の常に思ひなされて、見奉り知らずなりにければあるを、なほこの御事は盡きせずいみじくこそ。大將殿の、よろづの事に心の移らぬ由を愁へつゝ、淺からぬ御心の樣を見るにつけても、いとこそ口惜しけれ」と宣へば、「北方大將殿は、さばかり世に例なきまで、帝のかしづき思したゝなるに、心驕し給ふらむかし。おはしまさましかば、猶この事堰かれしもし給はざらましや」など聞ゆ。「いさや、樣のものと、人笑はれなる心地せましも、なか〳〵にやあらまし。見果てぬにつけて、心にくゝもある世にこそはと思へど、かの君はいかなるにかあらむ、怪しきまで物忘れせず、故宮の御後の世をさへ、思ひやり深く後見ありき給ふめる」

近少將と浮舟との經緯は世人の耳に入つてゐるのだと思ふので。

命侍らむかぎりは……私の生きて居ります間は何の、朝夕の話相手に側に置きも致しませう、私の死後は思ひも寄らぬひどい情態で落魄致しませうそれが悲しさに。

仕するて―置いて。

さる世の中を……さうした緣邊沙汰を斷念して。

かやうになりぬる人の……私や浮舟のやうに親兄弟もなくなつた身の常なのです。

さりとても……さうかといつて出家はとても辛抱出來ぬ譯のものゆゑ、全く世捨人になる覺悟で居りました私ですから。

まいていと……浮舟を尼にする事は まして以の外です。

寢い給はむも―浮舟が妻を寢して尼になられるのも。

ねびにたる……北方は年ふけた樣子ではあるけれど。

常陸殿とは……常陸介風情の妻らしく下品に見えた。

故宮のつらう……八宮樣が浮舟を情なく子とも思召さなかつたので。

かう聞えさせ……かうして貴女にお話も申上げお詞も賜はるにつけ。

浮島―陸奥の名所。常陸介は元陸奥

など、心うつくしう語り給ふ。「北方かの過ぎにし御代りに尋ねて見むと、この數ならぬ人をさへなむ、かの辨の尼君には宜ひける。さもやと思ひ給へ寄るべきことには侍らねど、『一本ゆゑに』こそはと、辱なけれど、あはれになむ思ひ給へらるゝ御心深さなる」などいふ序に、この君をもて煩ふこと、泣く〳〵語る。こまかにはあらねど、人も聞きけりと思ふに、少將の思ひ侮りける樣などほのめかして、「北方命侍らむかぎりは、何か、朝夕の慰めぐさにて見過しつべし。うち捨て侍りなむ後は、思はずなる樣に散りぼひ侍らむが悲しさに、尼になして、深き山にや仕するて、さる世の中を思ひ絶えて侍らましなどなむ、思う給へ侘びては、思ひより侍る」などいふ。「中君げに心苦しき御有樣にこそはあ〻なれど、何か、人に侮らるゝ御有樣は、かやうになりぬる人の性にこそ。さりとてもえ堪へぬわざなりければ、むげにその方に思ひ掟て給へりし身だに、かく心よりほかに永らふれば、まいていとあるまじき御事なり。寢い給はむもいとほしげなる御樣にこそ」など、いと大人びて

守であつた故、その頃の話を北方がしたのであらう。

我が身一つの—古今「世の中は昔よりやは憂かりけむ我身一つの爲になれるか」。

筑波山の有樣—常陸にゐた頃の物語との意。

彼處には……私の屋敷ではつまらぬ子供達がどんなに大騒して私を捜して居りませう。

流石に心あわたゞしく……承知の上で出て來たものゝ流石に落ち着かぬ氣がします。

かゝる程の有樣に……こんな地方官風情の妻に身を落すのは。

この君たゞ……浮舟は只貴女の御裁量にお任せして私は一切構ひますまい。

げに見苦しからでも……ほんに浮舟が見苦しく落魄する事のないやうにありたいものと中の君も思召す。

物恥も……含羞むのも餘り仰山らしくはなく。

兒めいたる—おぼこらしい。

かど無からず—才氣も無いではない。

昔の人の……大君の御樣子に不思議な位似て居られる。

かの人形……あの大君の身代りを捜して居られる薫に、浮舟をお目にかけたいものだと。

宣へば、母君いと嬉しと思ひたり。ねびにたる樣なれど、よしなからぬ樣して清げなり。いたく肥え過ぎにたるなむ、常陸殿とは見えける。

「故宮のつらう情なく思し放ちたりしに、いとゞ人げなく、人にも侮られ給ふと見給ふれど、かう聞えさせ御覽ぜらるゝにつけてもなむ、古への憂さもなぐさみ侍る」など、年頃の物語、浮島のあはれなりしことも聞え出づ。「我が身一つのとのみ、いひ合はする人もなき筑波山の有樣も、かくあきらめ聞えさせて、いつも〳〵、いとかくて侍はまほしく思ひ給へなり侍りぬれど、彼處には善からぬあやしの者ども、いかに立ち騒ぎもとめ侍らむ。流石に心あわたゞしく思ひ給へらるゝ。かる程の有樣に身を窶すは、口惜しきものになむ侍りけると、身にも思ひ知らるゝを、この君たゞ任せ聞えさせて、知り侍らじ」など、かこち聞えかくれば、げに見苦しからでもあらむと見給ふ。容貌も心樣も、え憎むまじうらうたげなり。物恥もおどろ〳〵しからず、樣よう兒めいたるものから、かど無からず、近く侍ふ人々にも、いとよく隱れて居給へり。物などいひたるも、昔の人の御樣にあやしきまで覺え奉りてぞあるや。かの人形もとめ給ふ人に見せ奉らばやと、うち思ひ出で給ふ折しも、大將殿參り給ふと、人聞ゆれば、例の御几帳ひき繕ひて心づかひす。

この客人の母君「いで見奉らむ。仄かに見奉りける人の、いみじきものに聞ゆめれど、宮の御有樣にはえ竝び給はじ」といへば、御前に侍ふ人々、「いさや、えこそ聞え定めね」と聞え合へり。「向ひておはせし樣、宮はいと情なげに、見にくゝこそ見え給ひしか。取り放ちては、何れもともかくも分かれず、容貌よき人は、人を消つこそ憎けれ」と宣へば、人々笑ひて「されど御前には、おされ奉り給はざめり。いかばかりならむ人か、宮をば消ち奉らむ」などいふ程に、今ぞ車より降り給ふなると聞く程、かしがましきまで追ひのゝしりて、とみにも見え給はず。待たれたる程に歩み入り給ふ樣を見れば、げにあなめでた、をかしげとも見えずながらぞ、なまめかしうあてに清げなるや。すゞろに見え苦

大將殿—薫。

この客人—浮舟をいふ。

仄かに見奉りける人……薫君を一目見た人々が、ひどく立派なものに尊するけれど。

宮の御有樣—匂宮の御樣子。

いさや……さあどんなものか、容易に判定は出來ないなあ。

向ひておはせし……お二人相對していらつしやる樣は、匂宮は誠に情趣がなく。

取り放ちては……別々に見ればどちらがどうとも判斷されず。

容貌よき……器量のいゝ人は他人を見る影なしにするのが憎らしい。

されど御前には……然し匂宮樣は薫君に壓倒されはなさいますまい。

追ひのゝしりて—先拂ひ警蹕をして。

歩み入り給ふ樣……薫の入つて來られるのを北方が見れば。

見え苦しう……何だか薫に見られるのが極りがわるくて。

際もなき……この上もない立派な樣子をなされた。

御前共のけはひ—御先拂の者のゐる樣子。

后の宮—明石中宮。

宮達—明石中宮腹の皇子方。

宮の御代りに……匂宮の御代理で今までお伽致して居りました。

いと懈怠して……匂宮が大變怠慢でお出が遲かつたやうですが、これは不都合にも貴女が引留めていらつしやる罪と推量致します。

げに疎ならず……代理をお勤め下されたとは、ほんに並々ならず思ひやり深い御厚志で御座います。

宮は内裏に……匂宮は今夜宮中にお泊りなされるのを薫が見定めて置いて、何か野心があつて來られたのであらう。

古への忘れ難く――亡き大君の事が忘れられず。

かすめ愁へ給ふ――それとなくお訴なさる。

さしもいかでか……そんなにまあどうして、何時までも大君の事が忘れられずにゐられよう、矢張薫が最初深い心持から大君を思込んだといふ話だつたから、今更綺麗に忘れたとは見られまい爲にさう仰しやるのか知らんなど、中の君は御覽なさるが。

あはれなる御心樣を――薫の本當に大君を思慕して居られる心持を。

かゝる御心を……中の君は自分に對する薫の戀心をやめさせようと思召すのか、身代りの浮舟の事をお話し出しなされて。御禊のことは伊勢物語、「戀せじと御手洗川に

しう恥かしくて、額髪などもひき繕はれて、心恥かしげに用意多く、際もなき樣ぞし給へる。内裏より參り給へるなるべし。御前どものけはひ數多して、「夜べ后の宮の惱み給ふよし承はりて參りたりしを、宮達の侍ひ給はざりしかば、いとほしく見奉りて、宮の御代りに今までさぶらひ侍りつる。今朝もいと懈怠して參らせ給へるを、あいなう御過ちに推し量り聞えさせてなむ」と聞え給へば、「げに疎ならず思ひやり深き御用意になむ」とばかり答へ聞え給ふ。宮は内裏にとまり給ひぬるを見おきて、たゞならずおはしたるなゝめり。例の物語いと懷かしげに聞え給ふ。事に觸れて、只古への忘れ難く、世の中の物憂くなりまさるよしを、あらはにいひなさでかすめ愁へ給ふ。さしもいかでか、世を經て心は離れずのみはあらむ、猶淺からずいひそめてし事の筋なれば、名殘なからじとにや、など見なし給へど、人の御氣色は著きものなれば、見もてゆくまゝに、あはれなる御心樣を、岩木ならねば思ほし知る。（薫が）恨み聞え給ふことも多かれば、（中君ハ）いとわりなくうち歎きて、かゝる

せし御禊神は受けずもなりにけるかなとこのわたりになむ――浮舟は此處らに潜んで居ります。

彼もなべての……浮舟をも薫は等閑の氣はなさらず見たくなつたが、出しぬけに中の君から浮舟に思ひ換へる氣も矢張なさらない。

その本尊……その浮舟が私の貴女に對する戀を醒してくれるなら有難い譯ですが、矢張時々貴女に思を焦すやうでは、折角浮舟を宇治に本尊のやうにして置いても却て煩惱の種でせう。

傳へ果てさせ……私が浮舟を望んでゐる旨を母君によくお傳へ下さい。

この御遁れ詞……浮舟に讓る貴女の遁口上が丁度大君の貴女に讓られた時に似て、思出せば不吉です。

見し人の……浮舟が亡き大君の代りならば大事にして置いて、大君の戀しさを拂ひ落す呪物にしませうとの意。なで物は祓の時身を撫でて罪穢をそれに移す人形をいふ。

みそぎ河……なで物は禊河の瀨に放ち棄てる物だのに、浮舟をなで物にしようとのお言葉では、一生連添へるものとして誰が信頼出來ませうぞ。

引く手あまたに――伊勢物語「大幣の御心をやむる禊を、せさせ奉らまほしく思ずにやあらむ、かの人形宣ひ出でて、（中君）いと忍びてこのわたりになむ」と、仄めかし聞え給ふを、彼もなべての心地はせず、ゆかしくなりにたれど、うちつけにふと移らむ心地はたせず。（薫）いでや、その本尊、願滿て給ふべくはこそ尊からめ、時々心やましくは、なか〳〵山水も濁りぬべく」と宣へば、（中君）「果て〳〵は、うたての御聖心や」と、仄かに笑ひ給ふも、をかしう聞ゆ。（薫）「いで、さらば傳へ果てさせ給へかし。この御遁れ詞こそ、思ひ出づればゆゝしく」と宣ひて、また涙ぐみぬ。

（薫）「見し人のかた代ならば身に添へて
戀しきせゞのなで物にせむ」

（中君）「みそぎ河せゞにいださむなで物を
身に添ふかげとたれか頼まむ

『引く手あまたに』とかや。さかしらなれど、いとほしくぞ侍るや」と

引く手數多になりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ。方々の女に引張風の貴方では、如何に戀しくても信頼は出來かねますとの意。大幣も祓して後水に流すもの。

さかしらなれど……出過ぎた事乍らそれでは浮舟が可愛さうです。

つひに寄る瀬……浮氣といふ評判はあつても結局一人の女に落着く處があるのは勿論で、矢張貴女に落着くのがさ情ないやうです。伊勢物語「大幣と名にこそ立てれ流れても遂に寄る瀬はありてふ物を」によつた。「なるや」は諸本「なりや」とあるが、意が通じないので假に改めて「や」を疑辭と解する。

水の泡……さう寄る瀬はあるといふ條、それは何時の事やら不明だから、結句は壽命任せで、水の泡とその果敢なさを爭ひますことさ。

撫き流さるゝ撫物……貴女に拋り出される私は全く川瀬に流される物で、いやそれは本當の事です。

かりそめに物したる……一寸來合せてゐる浮舟の母も、貴方が長居遊ばしては變に思ふでせうと、氣が置けますから。

その客人―浮舟の母北方。

うちつけになど……突然氣まぐれでいふのだなどと浮舟の母君が私の宜へば「つひに寄る瀬はさらなるや、いとうれたきやうなる。水の泡にも爭ひ侍るかな。搔き流さるゝ撫物、いでまことぞかし。いかで慰むべき事ぞ」などいひつゝ、暗うなるもうるさければ、「かりそめに物したる人も、あやしと思ふらむとつゝましきを、今宵はなほ疾く歸り給ひね」と拵へやり給ふ。「さらばその客人に、かゝる心の願年經ぬるを、うちつけになど、淺う思ひなすまじう宣はせ知らせ給ひて、はしたなげなるまじうはこそ。いとうひ〳〵しう慣らひにて侍る身は、何事も嗚滸がましきまでなむ」と、語らひ聞え置きて出で給ひぬるに、この母君、いとめでたく思ふやうなる御樣かなとめでて、乳母のゆくりかに思ひ寄りて度々いひしことを、あるまじき事にいひしかど、この御有樣を見るには、天の川を渡りても、かゝる彦星の光をこそは待ちつけさせめ、わが女はなのめならむ人に見せむは惜しげなる樣を、夷めきたる人をのみ見慣らひて、少將をかしこき者に思ひけるを、悔しきまで思ひなりにけり。憑りる給へりつる眞木柱も茵も、名殘匂へるうつ

心を淺く取らぬやう、貴女からお話し下されて、先方で不都合でないなら浮舟を私の物にしませう。いとうひ〳〵しう……戀の道にかけて豫て初心な私は。

乳母のゆくりかに……浮舟の乳母が卒然と思ひついて薫を婿にしたいと度々いつたのを。

天の川を……假に年に一度の逢瀬でもこんな夫を持たせたいものだ、浮舟は竝大抵の男に與へるのは惜しい委だのに。

眞木柱―柱の美稱。

あり難し―類稀である。

經などを―經など讀んで見ると。

かの芳ばしきを……薫香のかうばしいのを特別結構な事に佛樣の仰せられたのも尤な事である。

藥王品―法華經中の第二十三章。

牛頭栴檀―藥王品に「若有人聞是藥王菩薩本事品、能隨喜讚善者、是人現世、口中常出牛頭栴檀香」とある。毛孔中常出牛頭栴檀香―身牛頭とは山の名。

かの殿の……薫が現に實例をお示しなさるので佛は嘘を仰しやらぬと思はれます。

行―佛道の修行。

前の世こそ……前世にどんな善因を積まれたものか知りたい程の御樣り香、いへばいと殊更めきたるまであり難し。時々見奉る人だに、度ごとにめで聞ゆ。「經などを讀みて、功德の勝れたる事あ」めるにも、かの芳ばしきをやむごとなき事に、佛の宣ひ置けるも道理なりや。藥王品などにも取りわきて宣へる、牛頭栴檀とかや、おどろ〳〵しき物の名なれど、まづかの殿の近く振舞ひ給へば、佛はまことし給ひけりとこそ覺ゆれ。幼くおはしけるより、行もいみじく仕給ひければよ」などいふもあり。また「前の世こそゆかしき御有樣なれ」など、口々めづる事どもを、すゞろに笑みて聞き居たり。

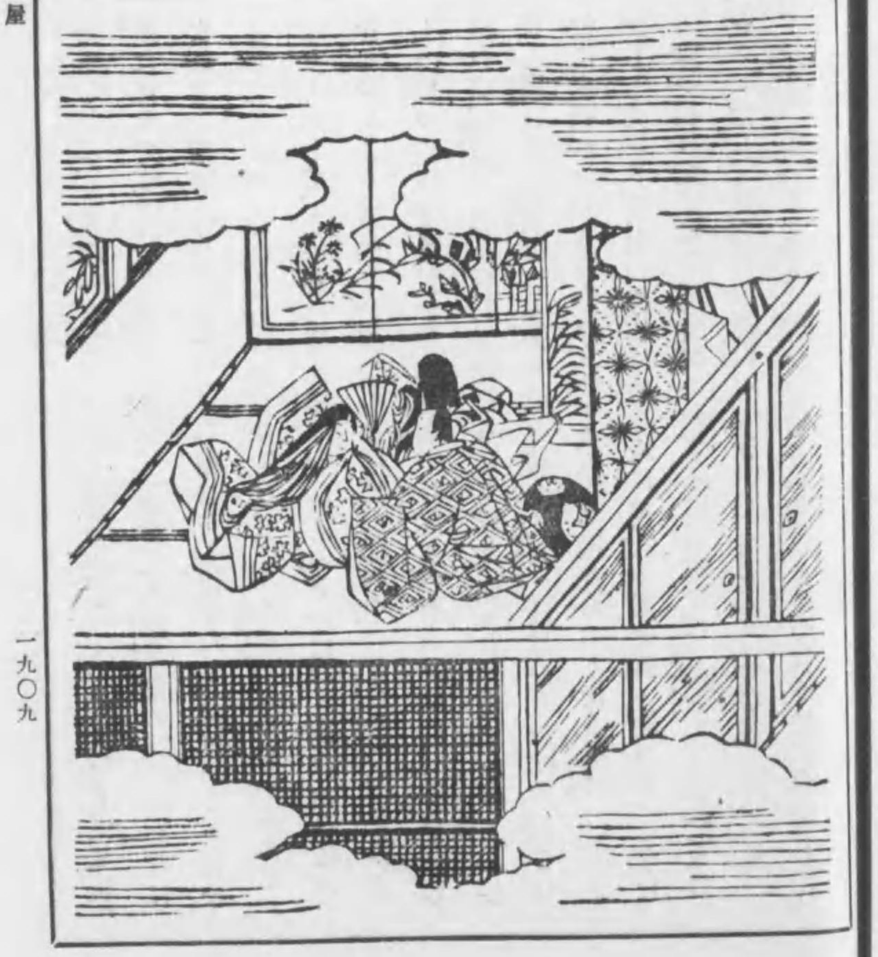
君は、忍びて宣へる事をほのめかし宣ふ。「思ひそめつる事、執念きまで輕々しからず物し給ふめるを、げに只今の有樣などを思ふは、煩はしき心地すべけれど、かの世を背きてもなど思ひより給ふらむも、同じ事に思ひなして、試み給へかし」と宣へば、「つらき目見せず、人に侮られじの心にてこそ、鳥の音聞えざらむ住居まで思ひ給へ掟つれ。げに人の御有樣けはひを見奉り思ひ給ふるに、下仕の程などにても、か

子だこと。
すゞろに笑みて……浮舟の母君が。
君は忍びて……中の君は内々で、薫の仰しやつたのを浮舟の母君にお話になる。
輕々しからず……薫は慎重にして容易に遊戯なされませんが。
げに只今の……成程現在の情態などを考へると、既に女二宮がいらつしやるのでは浮舟をやるのは面倒を釀す氣がしさうですけれど、あの尼になつてでもと御決心なされた程ゆゑ、尼にした積りになつて薫に上げて見てはどうでせう。
つらき目見せず―浮舟に苦勞させず。
鳥の音聞えざらむ……遁世させよとまでも思ひ立つたのです。
人の御有様―薫の御容姿。
下仕の程……假令下女奉公などの身分でも。
數ならぬ身に……浮舟を上げたら、不東な身に心配の種を猶更求めさせて見てゐるやうな結果になりませう。
かゝる筋―夫婦愛の關係。
いとほしく思ひ給へ侍る―浮舟を可愛さうに思ひます。
それも只……然しそれも只貴方の御謀らひにお任せ致します。
いさや……さあどんなものか、從來の籠のお情深さに安心して身を任せても、將來は又どうなるやら知りませんがねえ。
車など率て來て―常陸介から迎の車など持つて來て。
辱けなく……浮舟の事は恐れながら萬事お頼み致します。
巖のなかに……出家させようか、どうしようかと思案を廻らして居ります間、不東者でもお見捨なさらずに。巖の中は隱者の住居にいふ。
この御方も―浮舟も。
立ち離れむ……母君と別れ〳〵になる事を心細く思ふけれど、花やかに立派に見えるこの御殿に暫くでもお馴染み申す事を思へば。
宮内裏より―匂宮が宮中から。
若君覺束なく……匂宮は若君の事が氣がかりに思召されたので。
御車なども……お車なども平素のやうに美々しい行粧でなく簡略にしていらつしやるのに、北方の車が行き逢つて。
かやうにてぞ……こんな風にして忍び女の處からは人目をごまかして歸るものだわいと、御自分の經驗から考へつきなさるのも嫌らしい。
薫ではないかとの邪推。
御前ども―匂宮のお供人ども。
殿こそ……常陸介風情の妻に殿呼ばかる人の御あたりに馴れ聞えむは、かひありぬべし。まいて若き人は心つけ奉りぬべく侍るめれど、數ならぬ身に、物思の種をやいとゞ蒔かせて見侍らむ。貴きもみじかきも、女といふ者はかゝる筋にてこそ、この世後の世まで苦しき身になり侍るなれと思ひ給へ侍ればなむ、いとほしく思ひ給へ侍る。それも只御心になむ。ともかくも思し捨てず物せさせ給へ」と聞ゆれば、いと煩はしくなりて、「いさや、來し方の心深きにうち解けて、行く先の有様は知り難きを」とうち歎きて、殊に物も宣はずなりぬ。明けぬれば車など率て來て、守の消息など、いと腹立たしげに脅したれば「辱けなくよろづに頼み聞えさせてなむ。猶暫し隱させ給ひて、巖のなかにとも、いかにとも思ひ給へ廻らし侍る程、數に侍らずとも思ほし放たず、何事をも教へさせ給へ」などうち泣きつゝ聞え置きて、この御方もいと心細くならはぬ心地に、立ち離れむことを思へど、今めかしくをかしく見ゆるあたりに、暫しも見馴れ奉らむと思へば、流石に嬉しくも思ほえけり。車ひき出づる程の少し明うなりぬるに、宮、内裏よりまかでて給ふ。若君おぼつかなく思ひ給ひければ、忍びたる樣にて、御車なども例ならでおはしますに、さしあひて、推しとゞめて立てたれば、廊に御車寄せており給ふ。「なぞの車ぞ。暗き程に急ぎ出づるは」と、目とゞめさせ給ふ。かやうにてぞ忍びたる所には紛れ出づるかしと、御心ならひに思し寄るもむくつけし。
侍人「常陸殿のまかでさせ給ふ」と申す。若やかなる御前ども、「殿こそあざやかなれ」と笑ひ合へるを聞くも、げにこよなの身の程やと、悲しく思ふ。只この御方の事を思ふ故にぞ、おのれも人々しくならまほしく覺えける。まして正身を直々しく窶して見むことは、いみじくあたらしく思ひなりぬ。宮入り給ひて、「常陸殿といふ人や、こゝに通はし給ふ。心ある朝ぼらけに、急ぎ出でつる車副などこそ、殊更めきて見えつれ」など、なほ思し疑ひて宣ふ。聞き憎くかたはら痛しと思して、「大輔などが若くての頃、友達にてありける人は、殊に今めかしうも見えざめるを、故々しげにも宣ひなすかな。人の聞き咎めつべきことをのみ、

はりは御大層な。
げにこよなの……北方はほんにひどく成下つた身分だなあと。
この御方の事を―浮舟の事を。
正身を……浮舟その人をつゝらぬ身分の者の妻に落してしゝふ事は。
あたらしく―惜しく。
こゝに通はし給ふ―當家に出入おさせになるのですか。
車副―車脇の侍。
なほ思し疑ひて―薫ではないかとまだお疑ひになつて。
大輔などが……侍女の大輔などが若い頃友達だつたあの常陸介の妻は、格別當世風のいゝ器量とも思はれませんのに、大層らしく問題になさいますこと。
人の聞き咎めつべき……それに人聞の悪いやうな事ばかり何時も仰しやるのが辛い事で御座います。
無き名は立てじ―後撰、「思はむと頼めしこともあるものを無き名は立てじたゞに忘れぬ」。
后の宮―明石中宮。
左の大殿―夕霧。
韻塞―古い詩句の韻字を隠してそれを當てる遊。掩韻。
宮こなたに―匂宮が中の君の方へ。
女君―中の君。
御ゆする―髪洗ひ。

常に取りない給ふこそ。無き名は立てじ」とうち背き給ふも、らうたげにをかし。(匂宮)明くるも知らず大殿籠りたるに、人々あまた參り給へば、寢殿に渡り給ひぬ。后の宮は、事々しき御惱にもあらで、おこたり給ひにければ、心地よげにて、左の大殿の君達なぞ、碁うち、韻塞などしつゝ遊び給ふ。
夕つ方、宮こなたに渡らせ給へれば、女君は御ゆするの程なりけり。人人もおの〳〵うち休みなどして、御前には人もなし。小さき童のあるして、「(匂)折惡しき御ゆするの程こそ見苦しかゝめれ。さう〳〵しくてや詠めむ」と聞え給へば、「(大輔)げにおはしまさぬ隙々にこそ、例は清ませ。あやしう日頃も物憂がらせ給ひて、今日過ぎば、この月は日もなし。九十月はいかでかはとて、仕うまつらせつるを」と、大輔いとほしがる。
若君も寢給へりければ、其方にこれかれある程に、宮はたゝずみ歩き給ひて、西の方に例ならぬ童の見えつるを、今參のあるかなど思して、さし覗き給ふ。中の程なる障子の細目にあきたるより見給へば、障子

さう〳〵しうてや……折角來たのに生憎貴女が髪洗ひで、私は一人寂しくぼんやりしてゐる事でせうかなあ。
げにおはしまさぬ……ほんに貴方の御不在の時にばかりいつもは髪洗をなされますのに。
物憂がらせ給ひて―髪洗ひを態劫がり遊ばして。
日もなし―吉日が外に無い。
九十月は……九月は正月五月と共に佛事を營む月、十月は神無月ゆゑ髪洗を忌むと舊註の說。
仕うまつらせつるを―お洗ひなされました。「を」は歎辭。
其方にこれかれ……若君の方へ侍女の誰彼が行つてゐる間に。
西の方―西の對、卽ち浮舟の隱れてゐる方。
今參のあるか……新參の侍女が來たのか知らんと思召して。
紫苑色―表は薄紫、裏は青。
女郎花の織物―經青、緯黃の織物。
心にもあらで―先方は氣もつかずにゐて。
今參の口惜しからぬ……新參の侍女の氣のきいたのだらうと匂宮は思召して。
人知らず―浮舟は氣がつかず。
こなたの廊の……浮舟のゐる方の廊



に面した中庭の植込の。
添ひ臥して―浮舟が身を横にして。
例の御心は……例の浮氣な匂宮の御氣質ではお見遁しなさらず。
屏風のはざまに……障子と屏風との間にお坐りになつた。
さし隱して―顔に翳して。
扇を……浮舟に扇を持たせた儘その手をお握りになつて。
名のりこそ……お名前が聞きたいものです。
さる物のつらに……そんな屏風などの際で顔を外向に隱して、大變に身分を秘していらつしやるので。
この只ならず……あの自分に一方ならず懸想の心を仄めかしていらつしやるといふ薫君なのか知らん。
思ひ渡さるゝに―如何にも薫らしく想像されるのに。
乳母人げの……浮舟の乳母が、いつもと違つて人のゐる樣子を變な事だと思つて。
憚り給ふべき……匂宮は遠慮なさる事でもなく平氣である。
言葉おほかる……匂宮は色々口前の達者な御性質であるから。
誰と聞かざらむ程は……誰だか御名前を聞かぬ中は放しませんよ。
今渡らせ給ひなむ―中の君の方では追つ付け匂宮がお出ででせうと侍

のあなたに、一尺ばかりひき下げて、屏風立てたり。そのつまに、几帳簾に添へて立てたり。帷子一重をうち懸けて、紫苑色の花やかなるに女郎花の織物と見ゆる重なりて、袖口さし出でたり。屏風のひと枚疊まれたるより、心にもあらで見ゆるなめり。今參の口惜しからぬなめりと思して、この廂に通ふ障子を、いとみそかにおし開け給ひて、やをら歩みより給ふも人知らず。こなたの廊の中の壺前栽の、いとをかしう色々に咲き亂れたるに、遣水のわたりの石高きほど、いとをかしければ、端近く添ひ臥して詠むるなりけり。開きたる障子を今すこし押し開けて、屏風のつまより覗き給ふに、宮とは思ひもかけず、例こなたに來馴れたる人にやあらむと思ひて、起きあがりたる樣體、いとをかしう見ゆるに、例の御心は過し給はで、衣の裾を捉へ給ひて、こなたの障子引きたて給ひて、屏風のはざまに居給ひぬ。あやしと思ひて、扇をさし隱して見返りたる樣いとをかし。扇を持たせながら、捉へ給ひて、誰そ。名のりこそゆかしけれ」と宣ふに、むくつけくなりぬ。さる物

女達はいつてゐる。
御前ならぬ方の……中の君のお部屋の前だけあけて置いて他は皆格子を卸してゐる。
こなたは離れたる……浮舟の部屋は離れた方に拵へて。
屏風の袋に……屏風が袋に入れた儘なのを。
何か荒らかなる……何だか亂りがはしく取散してある。
かく人の物し給へばとて―かうして浮舟が居られるからといふので。
格子おろして―此處に中の君の方の格子をしめて浮舟の部屋に。
御格子を苦しきに……お格子を骨が折れるのに早く卸して、お蔭で喧さにまごつくわい。
宮もなま苦しと……匂宮も何だか厭が悪い事と聞いていらつしやる。
物づつみせず……この乳母は無遠慮でそゝつかしい斟酌のない女で。
見給へ困じてなむ……始末に困つて出も入も出來ずにゐるのです。
例の怪しからぬ……又いつもの匂宮樣のとんでもないお戯れだと、右近は感づいた。
女の心合はせ給ふまじき……これは浮舟の同意なされたらしくもない事と推量されるので。
右近は……私は何と申上げたもので

のつらに、顔を外樣にもて隱して、いといたう忍び給へれば、この只ならず仄めかし給ふらむ大將にや、芳ばしきけはひなども思ひ渡さるるに、いと恥かしくせむ方なし。乳母、人げの例ならぬを怪しと思ひて、彼方なる屏風を押し開けて來たり。「これはいかなる事にか侍らむ。あやしき業にも侍るかな」と聞ゆれど、憚り給ふべきことにもあらず。かくうちつけなる御仕業なれど、言葉おほかる御本性なれば、何やかやと宣ふ。暮れ果てぬれど、「誰と聞かざらむ程は許さじ」とて、馴れ〳〵しく臥し給ふに、宮なりけりと思ひ果つるに、乳母いはむ方なくあきれて居たり。
大殿油は燈籠にて、「今渡らせ給ひなむ」と、人々いふなり。御前ならぬ方の御格子どもぞおろすなる。こなたは離れたる方に仕なして、高き棚廚子一具ばかり立て、屏風の袋に入れ込めたる所々に寄せかけ、何か荒らかなる樣にし放ちたり。かく人の物し給へばとて、通ふ道の障子一間ばかりぞ開けたるを、右近とて、大輔が女のさぶらふ來て、格子

御座いませう、今中の君の許に行つて、そつとお告げ申しませう。
片はに……中の君に知らせることは不都合に。
淺ましきまであてに……ひどくまあ上品で美しい人だ。匂宮の心。
いとおしなべての……並々の新參の侍女ではなささうだ。
心づきなげに……浮舟は嫌な顔して開き直るやうな態度もせぬが。
死ぬばかり……死ぬ程恥かしがつてゐる浮舟が可愛さうなので、匂宮は穩かにお賺しなさる。
上に—中の君に。
いとほしくいかに……お可愛さうに浮舟はどうお思ひでせうか。
かの母も—浮舟の母も。
後安くと—安心出來るやうに預つてほしいと。
いかど聞えむ—何といはれよう、全くいひやうも無い。
侍ふ人々も……侍女達でも少し若くて可なりの器量なのは只は捨置かず、困つた匂宮のお癖だから、どうしてまあ浮舟のゐる事をお氣づきなされたのかと。
上達部あまた……上達部などが澤山入らしつた時で、匂宮樣は樣々の遊び戯れをなされたら平素だつてそんな折は遲くなつてから中の君の方へ入らつしやるゆゑ、女房達も皆油斷して寢てゐるのだ。
おずましかりけれ—氣がきかない。
鈍(オヅ)ましの轉語。
つと添ひて居て……浮舟の側にぴつたり附いてゐて保護して上げ、匂宮樣をお引離し申上げでもしさうなものと思つてゐましたのに。
少將—中の君の侍女。
大宮—明石中宮。
聞えさせむ—匂宮樣に申上げよう。
今はかひなくも……今は最いだとてどうせ無駄な事らしいのに。
まださりげも—まだ浮舟と本當に打解けたやうでもなかつた。
上はいと聞きにくき……中の君は、誠に不體裁な匂宮の御性質ではある、少し物の分つた人なら私までを嫌ひさうな事だと思召す。
參りて—右近が匂宮の側に行つて。
誰か參りたる—使には誰が來たか。
宮の侍—中宮職の下僚。
出で給はむことの……匂宮は浮舟をこの儘にして御出掛になる事が無暗に殘念さに、體裁もお構ひなさらぬので。
西面にて—寢殿の西庇の間で。
申し次ぎつる人—使の口上を右近まで取次いだ匂宮の御家來。
中務の宮—匂宮の弟皇子。

おろして此處に寄り來なり。「あな暗や。まだ大殿油も參らざりけり。御格子を、苦しきに急ぎまゐりて、闇に惑ふよ」とて引き上ぐるに、宮もなま苦しと聞き給ふ。乳母はたいと苦しと思ひて、物づつみせず、はやりかにおぞき人にて、「物聞え侍らむ。こゝにいと怪しきことの侍るに、見給へ困じてなむ、え動き侍らでなむ」。「何事ぞ」とて探り寄るに、袿姿なる男の、いと芳ばしくて添ひ臥し給へるを、例の怪しからぬ御樣と思ひ寄りにけり。女の心合はせ給ふまじきことと推し量らるれば、「げにいと見苦しき事にも侍るかな。右近はいかにか聞えさせむ。今參りて、御前にこそは忍びて聞えさせめ」とて立つを、淺ましく片はに、誰も〳〵思へど、宮は怖ぢ給はず。淺ましきまであてにをかしき人かな、なほ何人ならむ、右近がいひつる氣色も、いとおしなべての今參にはあらざめりと、心得がたく思されて、といひ、かくいひ怨み給ふ。心づきなげに氣色ばみてももてなさねど、只いみじう死ぬばかり思へるがいとほしければ、情ありて拵へ給ふ。右近、上に、しか〳〵こそおはしませ。いとほしくいかに思ほすらむ」と聞ゆれば、「例の心憂き御樣かな。かの母も、いかに淡々しく怪しからぬ樣に思ひ給はむとすらむ。後安くと、返す〳〵いひ置きつるものを」といとほしく思せど、いかゞ聞えむ。侍ふ人々も、すこし若やかによろしきは見捨て給ふなく、あやしき人の御癖なれば、いかでかは思ひより給ひけむと、淺ましきに物もいはれ給はず。「上達部あまた參り給ふ日にて、遊び戯れ給ひては、例もかゝる時は遲くも渡り給へば、皆うち解けて休み給ふぞかし。さてもいかにすべき事ぞ。かの乳母こそおずましかりけれ。つと添ひて居てまもり奉り、引きもかなぐり奉りつべくこそ思ひたりつれ」と、少將と二人していとほしがる程に、內裏より人參りて、大宮この夕暮より御胸惱ませ給ふを、只今いみじく重く惱ませおはしますよし申さす。右近、「心なき折の御惱かな。聞えさせむ」とて立つ。少將、「いでや、今はかひなくもあゝべい事を、嗚滸がましく、餘りなき聞え給ひそ」といへば。「いな、まださりげもなかりつ」とてさゝ

大夫は……中宮大夫は只今私がこちらへ參ります途中で、參内の車の準備をしてゐるのを見ました。

人の思すらむ事も……匂宮は他人の思はくも工合わるくなつて。

いみじう恨み……浮舟の容易く應じなかつたのを恨んで、あと約束をして。

かゝる御住居は—かうしたお屋敷に寄寓していらつしやる事は。

かくおはしまし初めて……匂宮がかうして貴女の許へ入らつしやり初めたからには、決してよい事はありますまい。

限なき人と……相手が非常に高貴なお方だといつても、此方が中の君と姉妹ゆゑ圓滿に行くまじく、そんな有樣では誠に面白くありますまい、他の全く差障りのない男にこそ善くも惡くも緣組なさるがよう御座いませう。

人聞も……他に聞えて不體裁と存じまして、私が惡魔を降伏させる不動樣のやうな類付をして匂宮樣を睨んだところが。

手をいといたく……私の手をひどくお抓りなされましたのが、丁度下々の者の戀見たやうで。

かの殿には……常陸介邸では今日もひどく御夫婦で口爭ひをして居られました。

たゞ一所の上……浮舟一人の面倒を見るといつて私の實子を構はず、花婿君が來て居られる際に泊りあるきは不都合だ。

すべてこの少將ぞ……一體この婿君の少將の仕打が誠に面白からず思はれます、この婚姻一件さへなかつたら内々で揉めて氣まづい事は時々あるにしても、まあ無事で從來のまゝ皆樣一緒にお暮し遊ばす事が出來ますものを。

君は—浮舟は。

いかに思すらむと—自分の事を中の君がどう思召すだらうと。宣長いふ中の君にあらず母君なりと。

何かかく思す—何をさう御心配なされますか。

よその覺は—他人の氣受は。

さがなき纖母に—實父がありながら意地惡い纖母に憎まれてゐるより貴女はまだ氣樂です、母君が何とかしてお上げになりませう。

ならはぬ御身に—歩き馴れぬ御身で。

詣で給ふことは—長谷の觀音に御參詣なさるのは。

人のかく……動もすると人が貴女を馬鹿にしようとして居りましたのを、こんな風にもなるものだと思ふ位の御幸福があれかしとこそ祈めきかはすを、上は、いと聞きにくき人の御本性にこそあゝめれ、少し心あらむ人は、我があたりをさへ疎みぬべかゝめりと思す。參りて、御使の申すよりも今少しあわたゞしげに申しなせば、(匂宮ハ)動き給ふべき樣にもあらぬ御氣色に、「誰か參りたる。例のおどろ〳〵しく脅す」と宣はすれば、「(右近)宮の侍に、平の重經となむ名告り侍りつる」と聞ゆ。出で給はむことのいとわりなく口惜しきに、人目も思されぬに、右近立ち出でて、この御使を西面にて問へば、申し次ぎつる人も寄りきて、「中務の宮も參らせ給ひぬ。大夫は只今なむ、參りつる道に御車ひき出づる見侍りつ」と申せば、げに俄に時々惱み給ふ折々もあるをと思すに、人の思すらむこともはしたなくなりて、いみじう恨み、契り置きて出で給ひぬ。

(浮舟ハ)恐ろしき夢の覺めたる心地して、汗に押し浸して臥し給へり。乳母うち扇ぎなどして、「(乳母)かゝる御住居はよろづにつけて、つゝましう便なかりけり。かくおはしまし初めて、更によき事侍らじ。あな恐ろしや。限なき人と聞ゆとも、安からぬ御有樣は、いと味氣なかるべし。餘所のさし離れたらむ人にこそ、善しとも惡しとも覺えられ給はめ。人聞もかたはら痛き事と思ひ給へて、降魔の相を出だして、つと見奉りつれば、いとむくつけく、下衆下衆しき女と思して、手をいといたく抓ませ給へるこそ、直人の懸想だちて、いとをかしくも覺え侍りつれ。かの殿には、今日もいみじく諍ひ給ひてけり。たゞ一所の上を見扱ひ給ふとて、わが子どもをば思し捨てたり。客人のおはする程の御旅居見ぐるし』と、荒々しきまでぞ聞え給ひける。下人さへ聞きいとほしがりけり。すべてこの少將の君ぞ、いと愛敬なく覺え給ふ。この御事侍らざらましかば、内々安からず、むつかしき事は折々侍るとも、なだらかに年頃のまゝにておはしますべきものを」などうち歎きつゝいふ。君は、只今はともかくも思ひ廻らされず、只いみじくはしたなく、見知らぬ目を見つるに添へても、いかに思すらむと思ふに、侘しければ、うつぶし伏して泣き給ふ。いと苦しと見扱ひて、(乳母)何かかく思す。母おはせぬ人こそ、

つて居りますので。
世を安げに―暢氣らしく。
宮は―匂宮は。
内裏近き……こちらが内裏へ行くに近い方なのか。
此方の御門―浮舟の部屋に近い門。
心ばへある故言―趣深い古歌。
移し馬―乗換の馬。
上いとほしく……中の君は浮舟が可愛さうで、嘸嫉らしく思つてゐるだらうと思召し、今夜の一件は何も知らぬ振をなされて。
大宮―明石中宮。
出で給はじ―匂宮は御歸邸にはなりますまい。
ゆするの名殘にや―髪を洗つた加減なのか。
渡り給へ―私の方へ入らつしゃい。
ためらひて―加餐して居ります。
少將右近―二人の侍女。
目まじろぎ―目くばせ。
かたはら痛くぞ……怪しいと思つて中の君が苦々しく思召す事でせうねえ。
いと口惜しく……誠に悔しくもあり氣の毒でもあることよ、浮舟へは薫が執心のやうに仰しやつて居られたのに、薫がどんなに浮舟を淺慮な人と蔑視なさる事だらう。中の君の心。

たづきなう悲しかるべけれ。よその覺は、父なき人はいと口惜しけれど、さがなき繼母に憎まれむよりは、これはいと安し。ともかくもし奉り給ひてむ。な思し屈しそ。さりとも長谷の觀音おはしませば、あはれと思ひ聞え給はむ。ならはぬ御身に、度々しきりて詣で給ふことは、人のかく侮り樣にのみ思ひ聞えたるを、かくもありけりと思ふばかりの御幸おはしませとこそ念じ侍れば、わが君は人笑はれにては止み給ひなむや」と、世を安げにいひ居たり。

宮は急ぎて出で給ふなり。内裏近き方にやあらむ、此方の御門より出で給へば、物のたまふ御聲も聞ゆ。いとあてにかぎりもなく聞えて、心ばへある故言などうち誦じ給ひて過ぎ給ふほど、すゞろに煩はしく覺ゆ。移し馬ども引き出だして、宿直にさぶらふ人、十餘人ばかりして參り給ふ。上、いとほしくうたて思ふらむとて、知らず顏にて、「大宮惱み給ふとて參り給ひぬれば、今宵は出で給はじ。ゆするの名殘にや、心地も惱ましくて起き居侍るを、渡り給へ。徒然にも思さるらむ」と、聞

かくのみ亂りがはしく……匂宮のやうに女にだらしの無い人は無實の事をも聞きづらく難癖をつけ、又事實少々不都合な事があつても、その儘寛假するやうな事もおありなさるものだ。
この君は……薫は口先には出さず腹でばかりつらいと思込むのが。
あいなく思ふ事……生憎に心配事の重なる浮舟の身の上ではある。
年頃見ず知らざりつる……從來一向顏も何も知らなかつた浮舟だが。
え思ひ放つまじう―見捨てゝ置けさうもなく。
あり難く―暮しにくゝ。
わが身の有樣は……私自身の境遇は不滿な事が多い氣もするけれど、浮舟のやうにつまらぬ目にも遇ひさうな身だつたにも拘はらず、そんな風にまごつかずに濟んだからこそ、ほんに見苦しい事もなく暮してゐる次第である。
この憎き心……嫌な懸想を自分にして居られる薫が穩に斷念して下されたら、全く何の心配もなく暮して行けようにと中の君は思召す。
この君はまことに―浮舟は實際。
事しもあり顏に……中の君の處に行かないでは却て匂宮と實際關係でもあつたやうに中の君が思召しま

え給へり。「浮舟みだり心地のいと苦しう侍るを、ためらひて」と、乳母して聞え給ふ。「中君いかなる御心地ぞ」と、立ち返り訪らひ聞え給へば、「浮舟何心地とも覺えず、只いと苦しく侍り」と聞え給へば、少將、右近、目まじろぎをして、「二人かたはら痛くぞ思すらむ」といふも、たゞなるよりはいとほし。いと口惜しく心苦しき業かな。大將の心とゞめたる樣に宣ふめりしを、いかに淡々しく思ひ貶さむ、かくのみ亂りがはしくおはする人は、聞きにくゝ實ならぬ事をもくねりいひ、又まことに少し思はずならむ事をも、流石に見宥しつべうこそおはすめれ、この君は、いはで憂しと思はむことといと恥かしげに心深きを、あいなく思ふこと添ひぬる人の上なゝめり、年頃見ず知らざりつる人の上なれど、心ばへ容貌を見れば、え思ひ放つまじう、らうたく心苦しきに、世の中はあり難くむつかしげなるものかな、わが身の有樣は飽かぬこと多かる心地すれど、かく物はかなき目も見つべかりける身の、さはふれずなりにけるにこそ、げに目安きなりけれ、今は只この憎き心添ひ給へる人

せうから、只大樣な態度でお逃ひなさいませ。

語り侍らむ—私が話しませう。

此方の御障子—中の君の方の障子。

身も熱うなり……浮舟樣は發熱なされて。

御前にて慰め聞えさせ……中の君のお手で慰めて下さるやうにと存じましてねえ。

流石にこそ—流石にうぶだからです。

聊かにても……多少でも男を知つていらつしやる人ならともかく、全くうぶの浮舟樣ではそれが當然と御尤にもお可愛さうにもお見上げ申します。

おほどき過ぎ—大樣すぎ。

押し出でられて—無理に中の君の前に押出されて。

上を儔なく……侍女達は中の君を無類の美人と思つてゐたのに、浮舟も劣つてゐるとも見えず。

これに思しつきなば……浮舟に匂宮が執心なされたら、怪しからん騒が起るだらう。

いとかゝらぬをだに……浮舟ほど美人でない女でさえ、新し好きの匂宮の御氣質だからと。

二人ばかりぞ—右近と少將と二人。

この句は「見居たりける」に續く。

御前にて……浮舟が中の君の御前ゆゑ二人の侍女に隠れも出來ずにゐるので。

例ならずつゝましき……此處を自分の邸と違つて窮屈な處だなどと思召すな。

故姫君—大君。

いとよく思ひよそへられ……大君に似ていらつしやる貴女の御樣子を見れば。

思ふ人もなき……親しい身寄も持たぬ私を、嘗て大君が私を愛して下されたやうに貴女が思つて下されたら、どんなに嬉しいでせう。

いと遙にのみ……私は貴女とは全くかけ離れたものゝやうにのみ存じて居りましたが。

向ひて物恥も……浮舟が中の君と相對して遠慮も忘れて、熱心に繪を見て居られる燈下のお姿が。

こゝと見ゆる所なく—此處は缺點と思はれる所がなく。

只それとのみ……全く大君かと思はれる位だから。

いとあはれなる人の……誠に可愛らしい浮舟の御姿だなあ。

故姫君は……大君は父宮に似て。

げに似たる人は……ほんに似た人はひどく懐かしいものだわい。

かれは—大君は。

片はなるまで……こゝは反語として

の、なだらかにて思ひ離れなば、更に何事も思ひ入れずなりなむと思ほす。いと多かる御髪なれば、とみにもえ干しやらず、起きゐ給へるも苦し。白き御衣一襲ばかりにておはする、細やかにてをかしげなり。この君はまことに心も惡しくなりにたれど、乳母、いとかたはら痛し。事しもあり顔に思すらむを、たゞおほどかにて見え奉り給へ。右近の君などには、事の有樣はじめより語り侍らむ」と、せめてそゝのかし立てゝ、此方の御障子のもとにて、「右近の君に物聞えさせむ」といへば、立ち出でたれば、「いとあやしく侍りつる事の名殘に、身も熱うなり給ひて、まめやかに苦しげに見えさせ給ふを、御前にて慰め聞えさせ給へとてなむ。過ちもおはせぬ御身を、いとつゝましげに思し侘びにたゝめるも、流石にこそ。聊かにても世を知り給へる人こそあれ、いかでかはと、道理にいとほしく見奉る」とて、ひき起して參らせ奉る。我にもあらず、人の思ふらむことも恥かしけれど、いとやはらかにおほどき過ぎ給へる君にて、押し出でられて居給へり。額髪などのいたう濡れたるをもて隠して、火の方にそむき給へるさま、上を儔なく見奉るに、氣劣るとも見えず、あてにをかし、これに思しつきなば、目醒ましげなる事はありなむかし、いとかゝらぬをだに、珍しき人をかしうし給ふ御心をと、二人ばかりぞ御前にて、え恥ぢあへ給はねば見居たりける。物語いと懐かしく給ひて、「例ならずつゝましき所など、な思ひなし給ひそ。故姫君のおはせずなり給ひし後、忘らるゝ世なくいみじく、身もうらめしく儔なき心地して過すに、いとよく思ひよそへられ給ふ御樣を見れば、慰む心地してあはれになむ。思ふ人もなき身に、昔の御志のやうに思さば、いと嬉しくなむ」など語らひ給へど、いと物つゝましくて、また鄙びたる心に、答へ聞えむこともなくて、「年ごろいと遙にのみ思ひ聞えさせしに、かう見奉り侍るは、何事も慰む心地し侍りてなむ」とばかり、いと若びたる聲にていふ。繪など取り出でさせて、右近に詞讀ませて見給ふに、向ひて、物恥もえしあへ給はず、心に入れて見給へる火影、更にこゝと見ゆる所なく、こまかにをかしげな

用ゐた。

これはまだもてなしの……浮舟はまだ態度がうぶらしくて。

故々しきけはひだに……しつとり落着いた様子さへ加味したら薫の妻としては少しも不都合はあるまい。

このかみ心に―姉君氣取で。

おはせし御有様……御存命中の御様子などを、取りとめた事はないけれどお話しなさる。

夜べの心知りの人々―昨夜の匂宮と浮舟との事情を知つてゐる右近や少將達。

いかなりつらむな―昨夜匂宮様と浮舟との間は實際どうだつたのでせうな。

いみじう思すとも……中の君が可愛がりお世話なされても、匂宮様と關係が出來ては何の役に立ちませうねえ。

さもあらじ……まだ實際關係が出來た譯ではありますまい。

引きすゑて……私を引留めて色々語り訴へた様子では、お二人がまだ實際關係が無ささうに申しました。

宮も逢ひても……匂宮様も、假初には逢つても打解けて逢ひはしなかつたといふやうな意味の古歌を微吟して居られました、だが然しさあ、それは故意に反對な事を仰しゃつたのでもありませうか、それは何とも分りません。引歌未詳、

細流に引いたのは當らぬ。

夜べの火影……昨夜燈火の下の浮舟のお姿が大様だつたのを見ても。

車乞ひて―車を借りて。

かう〳〵といへば―乳母が匂宮と浮舟との一條を話すと。

人も―女房達やその他の人々も。

正身も―中の君御本人も。

かゝる筋の物憎みは……こんな事件に關しての嫉妬には貴人も何も無いのだと、自分の心にひき較べ別して容易ならぬ事と思込んで。

夕つ方參りぬ……北方が二條院へ。

心幼げなる人を……思慮の至らぬ浮舟をお預け申して置いて。

馳の侍らむ……馳の致しますやうな心持が。馳はその性驕がしく所定めず行き歩り走り歩くもので、北方が浮舟の事のみならず夫や子供の心をも取らうとして、此處彼處と尻も据ゑず心も空にしてゐる様をいふと契沖説。

よからぬ者ども―つまらぬ子供等。

いとさいふばかりの……浮舟はそんなにまあ仰しやる程の頑是なさでもないでせうに、心配さうに仔細ありげに仰しやるのが迷惑ですこと。まかげは目の上に手を翳して

り、額つき、まみの薫りたる心地して、いとおほどかなる貴さは、只それとのみ思ひ出でらるれば、繪は殊に目もとゞめ給はで、いとあはれなる人の容貌かな、いかでかうしもありけるにかあらむ、故宮にいとよく似奉りたるなゝめりかし、故姫君は宮の御方ざまに、我は母上に似奉りたるとこそは、蔑人どもいふなりしか、げに似たる人はいみじきものなりけりと思し比ぶるに、涙ぐみて見給ふ。かれは、限なくあてに氣高きものから、懷かしうなよゝかに、片はなるまで、なよ〳〵と撓みたる様のし給へりしにこそ。これは、まだもてなしの初々しげに、よろづの事をつゝましうのみ思ひたるけにや、見所多かるなまめかしさぞ劣りたる。故々しきけはひだにもてつけたらば、大將の見給はむにも、更に片はなるまじなど、このかみ心に思ひ扱はれ給ふ。物語などし給ひて、曉方になりてぞ寢給ふ。かたはらに臥せ給ひて、故宮の御事ども、年頃おはせし御有様など、まほならねど語り給ふ。いとゆかしう、見奉らずなりにけるを、いと口惜しう悲しと思ひたり。夜べの心知りの人々は、「いかなりつらむな。いとらうたげなる御様を、いみじう思すとも、かひあるべき事かは。いとほし」といへば、右近ぞ「さもあらじ。かの御乳母の引きすゑて、すゞろに語り愁へし氣色、もて離れてぞいひし。宮も、逢ひても逢はぬやうなる心ばへにこそ、うち嘯き口すさび給ひしか。いさや、殊更にもやあらむ。そは知らずかし。夜べの火影のいとおほどかなりしも、事あり顔には見え給はざりしを」など、うちさゝめきていとほしがる、

乳母、車乞ひて、常陸殿へ去ぬ、北の方にかう〳〵といへば、胸つぶれ騒ぎて、人も怪しからぬ様にいひ思ふらむ、正身もいかゞ思すべき、かかる筋の物憎みは、貴人もなきものなりと、おのが心ならひに、あわただしく思ひなりて、夕つ方參りぬ。宮おはしまさねば心安くて、「あやしく心幼げなる人を參らせ置きて、後やすくは頼み聞えさせながら、馳の侍らむやうなる心地のし侍れば、よからぬ者どもに憎み怨みられ侍る」と聞ゆ。「いとさいふばかりの幼きにはあらざゝめるを、うしろめ

日光を遮る事で、鏡が躊躇する時にする動作ゆゑ北の方の種々配慮するに譬へた。

心の鬼に……北方は中の君が内心怒つて居られるだらうとの疑念ゆゑ極りがわるい。

いかに思すらむと……中の君がどう思つていらつしやるかと北方は思ふので、匂宮のお仕打についてはいひ出さない。

かくて侍ひ給ふは―浮舟がかうしてお手元にお仕して居りますのは。

人の漏り聞き……他人に漏れ聞かれても體裁よく。

流石につゝましき……とは申すものの許せぬ次第で御座います。匂宮の一條を諷していふ。

深き山の本意は……本意の通り出家して山に住ませたら何時ゞ變る事なく安心で御座いませうものを。

こゝには何事か……私の處になて何が氣遣ひな事がありませう。

疎々しく……私が浮舟を疎んじ顧みぬとでもいふならともかく。

怪しからずだちて……とんでもない料簡を起し勝で困つた事する人が此處には時々來られますけれど。

匂宮の事をいふ。

(又)ならは……浮舟の爲に惡いやうには謀らふまいと思ひますが。

たげに氣色ばみたる御目陰こそ煩はしけれ」とて笑ひ給へるが、心恥かしげなる御まみを見るも、心の鬼に恥かしくぞ覺ゆる。いかに思すらむと思へば、えもうち出で聞えず「かくて侍ひ給ふは、年ごろの願の滿つ心地して、人の漏り聞き侍らむも、目やすく、面正しきことになむ思ひ給ふるを、流石につゝましき事になむ侍りける。深き山の本意は、操になむ侍るべきを」とてうち泣くも、いといとほしくて、「こゝには何事か後めたく覺え給ふべき。とてもかくても、疎々しく思ひ放ち聞えばこそあらめ、怪しからずだちて、よからぬ人の時々ものし給ふめれど、その心を皆人見知りたゞめれば、心づかひして、便なうはもてなし聞えじと思ふを、いかに推し量り給ふにか」と宣ふ。「更に御心をば、隔ありても思ひ聞えさせ侍らず、かたはら痛う許なかりし筋は、何にかかけても聞えさせ侍らむ。その方ならでも思し放つまじき綱も侍るをなむ、捉へどころに頼み聞えさする」など、疎ならず聞えて、「明日明後日かたき物忌に侍るを、おほぞうならぬ所にて過して、またも參

更に御心……全く貴女のお心持に隔があるとは存じて居りません。

かたはら痛う許なかりし……八宮樣が浮舟を子としてお認め下さらなかつた事については、何の今更彼是申しませう。

思し放つまじき……然し私をお見限り下さらぬ筈と思ふ續合ひも御座いますそれを縋り所として、浮舟をお頼み申すので御座います。北の方と中の君とは從姉妹ゆゑいふ。

おほぞうならぬ所にて……大ざつぱでない然るべき所でその期間を過させて。

いざなふ―浮舟を連れ出す。

淺ましう片はなる事―とんでもない不都合な事。卽ち昨夜の匂宮のお仕打。

かやうの―こんな時の。

この御身一つを―浮舟一人を。

自らばかりは……自分一人だけなら只一途に、立派な身分でなくとも、さうした運と思つて引籠つても居られよう。

この御ゆかりは……中の君の許は浮舟が親子姉妹を認めて貰へなかつたので心外にお思ひ申してゐた處であつたものを、何事も浮舟の爲と考へてお親しみ申したのに面白からぬ事件でも引起したら。

らせ侍らむ」と聞えていざなふ。いとほしく本意なき業かなと思せど、えとゞめ給はず、淺ましう片はなる事に驚き騷ぎたれば、をさ〳〵物も聞えで出でぬ。

かやうの方違所と思ひて、ちひさき家設けたりけり。三條わたりに、さればみたるが、まだ造りさしたる所なれば、はか〴〵しきしつらひもせでなむありける。「あはれこの御身一つを、よろづにもて惱み聞ゆるかな。心に叶はぬ世には、あり經まじきものにこそありけれ。自らばかりは、只ひたぶるにしな〴〵しからず。人氣なう、さる方に這ひ籠りて過しつべし。この御ゆかりは心憂しと思ひ聞えしあたりを、睦び聞ゆるに、便なき事も出で來なば、いと人笑へなるべし。あぢきなしや。異樣なりとも、こゝを人にも知らせず忍びておはせよ。自らともかくも仕うまつりてむ」といひ置きて、自らは歸りなむとす。君はうち泣きて、世にあらむこと所狹げなる身と、思ひ屈し給へる樣いとあはれなり。親はたまして、あたらしく惜しければ、恙なくて思ふごと見なさむと思

異樣なりとも……よし變な處でもこの隱れ家を誰にも知られぬやうにして。

君は―浮舟は。

世にあらむこと……この世に生きてゐる事が厄介至極な我が身ではあると屈託して居られる有樣が。

親はたまして……母君はまして浮舟を埋木にするのが惜しいので無事に育てゝ希望通り立派な身にして眺めたいと思ひ。

さるかたはら痛き……あんな匂宮との一條のやうな困つた事があつたら、それにつけて人にも思慮淺いやうに思はれ、彼是いはれさうなのが。

心地なくなどは……この北方は無分別ではない人ながら。

思ひのまゝにぞ……我儘な處が少しはあつた。

かの家には……常陸介の家にでも浮舟を隱しては置けたであらうが、そんな風に隱して置くのを可愛さうに思つてこんな處置を執つたが。

見慣らひて―顏を見馴れてゐた事ゆゑ別々にゐるとなつては。

あばれて―十分整はず。

曹司曹司にある者―部屋々々に居る者。侍女のこと。

いひ捻て侍るも……申付けて置いたひ、さるかたはら痛きことにつけて、人にも淡々しく思はれいはれむが安からぬなりけり。心地なくなどはあらぬ人樣の、なま腹立ち易く、思ひのまゝにぞ少しありける。かの家には隱ろへてはすゑたりぬべけれど、しか隱ろへたらむを、いとほしと思ひてかく扱ふに、年頃かたはら去らず、旦暮見慣らひて、かたみに心細くわりなしと思へり。「此處は、まだかくあばれて、危げなる所なゝめり。さる心し給へ。曹司曹司にある者どもゝ、召し出でて使ひ給へ。宿直人の事などいひ捻て侍るもいと後めたけれど、かしこに腹立ち怨みらるゝがいと苦しければ」とうち泣きて歸る。

少將の扱を、守は又なきものに思ひ急ぎて、「諸心に樣惡しく營まず」と怨ずるなりけり。いと心憂く、この人によりかゝる紛れどももあるぞかしと、又なく思ふ方の事のかゝれば、つらく心憂くて、をさ〳〵見入れず。かの宮の御前にて、いと人氣なく見えしに、多く思ひ貶してければ、私物に思ひかしづかましをなど、思ひしことは止みにたり。

のもまだ甚だ不安心ではありますが、私がいつまでもゐては又夫に怒られ小言いはれるのが苦しいので歸ります。

少將の扱を……次女の婿左近少將の世話を常陸介は又とない大事なものに思つて支度をし、北方が意地惡くも心を合せて世話を燒かぬと怨むのであつた。

いと心憂く……北方は誠に心外で、この少將の仕打ゆゑ浮舟の身にこんな面倒も起つたのだと。

又なく思ふ方の……無類に可愛ゆく思ふ浮舟の方がこんな困つた破目になつたので。

見入れず―少將の事は構はぬ。

かの宮の御前にて……過日匂宮の御前で少將が誠につまらぬ者に見えたのに、北方は主として輕侮の念を起してゐるので。

私物に……最初浮舟の婿にしてわが占有物のやうに大事にお扱ひ申さうものをなど思つてゐた心持はもう無くなつてしまつた。

こゝにてはいかゞ……匂宮の前では見窄らしく見えたが此處ではどんな風に少將が見えるか知ら、まだ少將の打解け姿を見た事がないから見てやらうと北の方は思つた。

こなたに渡りて―北方が少將のゐる

こゝにてはいかゞ見ゆらむ、まだうち解けたるさま見ぬにと思ひて、（少將ノ）のどかに居給へる晝つ方、こなたに渡りて物より覗く。白き綾の懷かしげなるに、今樣色の擣目なども清らなるを著て、端の方に前栽見るとて居たるは、いづくかは劣る、いと清げなゝめるはと見ゆ。女まだいと片なりに、何心もなき樣にて添ひ臥したり。宮の上の並びておはせし御樣どもを思ひ出づれば、口惜しの樣どもやと見ゆ。前なる御達に、物などいひ戲れてうち解けたるは、いと見しやうに、匂なく人わろげにも見えぬを、かの宮なりしは異少將なりけりと思ふ折しも、いふ事（少將）よ、「兵部卿の宮の萩の、なほ殊に面白くもあるかな。いかでさる種ありけむ。同じ枝さしなどの、いと艶なるこそ。一日參りて、出で給ふ程なりしかば、え折らずなりにき。『事だに惜しき』」と、宮のうち誦じ給へりしを、若き人達に見せたらましかば」とて、我も歌よみ居たり。「いで（北方）や、心ばせの程を思へば、人とも覺えず、出で消えはいとこよなかりけるに、何事いひ居たるぞ」と呟かるれど、いと心地なげなる樣は流石に

方へ行つて。
今様色―薄紅梅をいふ。
いづくかは劣る―どこがまあ悪からうぞ。
片なりに―十分成熟せず。
宮の上の……中の君が匂宮と並んで居られた御様子など北方は思ひ出されるので。
前なる御達に―少將が前にゐる侍女達に。
いと見しやうに―過日二條院で見た時のやうに。
かの宮なりしは……あの時二條院にゐたのはこの人でなく他の少將であつたわいと思ふ時も時、いふに事缺いて少將がこんな事をいふ。
兵部卿の宮―匂宮。
一日參りて……先日參上して、丁度匂宮樣のお出掛の處だつたので。
事だに惜しき―拾遺、「うつろはむ事だに惜しき秋萩に折れぬばかりも置ける露かな」。
我も―少將自身も。
心ばせの程を……浮舟との約束を破つて財產に目をつけた少將の心の卑しさを思へば。
出で消えは……匂宮の御前に出ての見窄らしきは甚しかつたに、一體どれ程の歌を詠んでゐるのか。
いと心地なげなる……少將が全く無

したらねば、いかゞいふと試みに、

北方「しめゆひし小萩がうへも迷はぬに
いかなる露にうつる下葉ぞ」

とあるに、いとほしく覺えて。

少將「宮城野の小萩がもとゝ知らませば
露も心をわかずぞあらまし

いかで自ら聞えさせ明らめむ」といひたり。故宮の御事聞きたるなつめりと思ふに、いとゞ、いかで人と等しくとのみ思ひ扱はる。あいなう、大將殿の御樣容貌そ、戀しう面影に見ゆる。おなじうめでたしと見奉りしかど、宮は思ひ離れ給ひて、心もとまらず。侮りて押し入り給へりけるを、思ふもねたし、この君は、流石に尋ね思す心ばへのありながら、うちつけにもいひかけ給はず、つれなし顏なるしもこそいたけれ、よろづにつけて思ひ出でらるれば、若き人はまして、かくや思ひ出で聞え給ふらむ、我が物にせむと、かく憎き人を思ひかけむこそ、見

骨らしい樣子は流石にしてゐないので、どんな返歌をするか知らんと北方は試みに。
しめゆひし……圖を結うた小萩は亂れもせずにゐるのに下葉の色の變つたのはどうした露の爲やら。約束した浮舟は心變りもせぬのに、貴方はどうしてお變りなされたのでせうとの意。
宮城野の……これを萩の名所なる宮城野の萩と知つたら露も隔をせず一樣に置いたものを。浮舟を宮樣の御子と知つたら決して他に心を移すのではなかつたにとの意。
いかで自ら……どうか私自身お目にかゝつて申開きしたいものです。
故宮の御事……八宮と我等親子との關係を少將が聞いたのであらうと。
いかで人と……どうか浮舟を人並には終らせたくないとのみ母君は案じられる、すると生憎に薫のお妻が戀しく目先にちらついて來る。
おなじうめでたしと……匂宮も薫も同樣に御立派とお見上げ申したけれど、匂宮の方は最初から北方が斷念して。
侮りて……處が匂宮の方で此方を侮つて浮舟の處へ無理にお入りなされたのを考へると心外である。
この君は……薫は浮舟を等ね求める

苦しき事なるべかりけれなど、只心にかゝりて詠めのみせられて、とてやかくてやと、よろづに善からむあらまし事を思ひ續くるに、いと難しや、やむごとなき御身の程、御もてなし見奉り給へらむ人は、今少しなのめならず、いかばかりにてかは心をとゞめ給はむ、世の人の有樣を見聞くに、劣り勝り、賤しうあてなる品に隨ひて、容貌も心もあるべきものなりけり、わが子どもを見るに、この君に似るべきやはある、少將をこの家の內に、又なきものに思へども、宮に見比べ奉りしかば、いとも口惜しかりしに推し量らる。當帝の御かしづき女を得奉り給へらむ人の御目移しには、いとも〳〵恥かしく、つゝましかるべきものかなと思ふにも、すゞろに心地もあくがれにけり。
旅の宿はつれ〴〵にて、庭の草もいぶせき心地するに、あやしき東聲したる者どもばかりのみ出で入り、慰めに見るべき前栽の花もなし。
うちあばれて、晴れ〴〵しからで明し暮すに、宮の上の御有樣思ひ出づるに、若い心地に戀しかりけり。あやにくだち給へりし人の御けは

お心はありながら流石にぶつ附けに仰しやらず、表面は濟ましていらつしやるのがえらい。

思ひ出でらるれば……私にも薫の事が思出されるから、若い浮舟はまして。

我が物にせむと……浮舟の婿にしようと、こんな憎らしい少將づれを思つた事が。

只心にかゝりて……北方は只浮舟の事のみが心にかゝつて動もすれば茫然となり。

善からむあらまし事—浮舟の爲によささうな計畫。

やむごとなき御身の程……立派な身分の女をお見馴れになつていらつしやる薫は、浮舟よりも今少し立勝つたどの位の女なら心をお留めなさるだらうか。

劣り勝り……身分の貴賤に隨つて容貌も心證も侮劣があるものだなあ。

劣り勝りは「あるべき」にかゝる副詞句。

わが子ども—常陸介との間の子供。

この君に—浮舟に。

宮に……匂宮に御比較申上げたので少將が非常に劣つて見えた、それによつても以上の事が推量される。

當帝の……今上の御愛子の女二宮を娶つていらつしやる薫に、女二宮を見馴れた目で浮舟を見られては。

すゞろに心地も……北方は全體どうしてよいのか譯が分らず茫然となられた。

旅の宿—三條なる浮舟の隱れ家。

あやしき東屋—變な東國訛。これは常陸介の家來筋の人々と見える。

宮の上—中の君。

あやにくだち……憎らしい事をお仕懸けなされた匂宮の御樣子も。

何事にかありけむ……何事だつたか知らぬが、あの時は匂宮が隨分色々な事をしみ〳〵した調子で仰しやつた事であつた。浮舟の心。

母君だつやと—この句には必ず誤脫があらう、宣長は「母君いかにやと」の誤寫かといつて居る。

疎ならず心苦しう……並々ならず母君が可愛く思つて世話して下さるのに、世話され甲斐もない不運な我が身よと浮舟は泣けて。

つれ〳〵は何か……寂しい位は何のまあ、却て氣樂で御座います。

ひたぶるに……此處が全く世間離れた處だつたら宿更非常に嬉しい事でせうものを。

幼げに……子供らしく詠んだのを母君が見るにつけ。

かう憑はし……可愛さうに浮舟をこんなに方向を迷はせ落着く處も無

ひも、流石に思ひ出でられて、何事にかありけむ、いと多くあはれげに宣ひしかな、名殘をかしかりし御移り香も、まだ殘りたる心地して、恐ろしかりしも思ひ出でらる。母君だつやと、いとあはれげなる文を書きておこせ給ふ。疎ならず心苦しう思ひ扱ひ給ふめるに、かひなうも扱はれ奉ることゝ、うち泣かれて、北方ノ文「いかにつれ〴〵に、見習はぬ心地し給ふらむ。しばし忍び過し給へ」とある返事に、浮舟ノ文「つれ〴〵は何か。心安くてなむ。

ひたぶるに嬉しからまし世の中に
あらぬ所と思はましかば」

幼げにいひたるを見るまゝに、北方ハ「ほろ〳〵とうち泣きて、かう惑はしはふるゝやうにもてなす事と、いみじければ、

北方「憂き世にはあらぬ所をもとめても
君がさかりを見るよしもがな」

と、なほ〳〵しき事どもを、いひ交してなむ心をのべける。

かの大將殿は、例の秋深くなりゆく頃、ならひにし事なれば、寢覺寢覺に物忘れせず、あはれにのみ覺え給ひければ、宇治の御堂つくり果てつと聞き給ふに、自らおはしましたり。久しう見給はざりつるに、山の紅葉もめづらしう覺ゆ。毀ちし寢殿、こたみはいと晴れ〴〵しう造りなしたり。昔いと事そぎて聖だち給へりし住居を思ひ出づるに、故宮も戀しう覺え給ひて、樣變へてけるも口惜しきまで思さるれば、常よりも詠め給ふ。もとありし御しつらひは、いとたふとげにて、今片つ方を女しくこまやかになど、一方ならざりしを、網代屏風、何かの荒々しきなどは、かの御堂の僧坊の具に、ことさらになさせ給へり。山里めきたる具どもを殊更にせさせ給ひて、いたうも事そがず、いと清げに故々しく仕つらはれたり。遣水のほとりなる岩にゐ給ひて、とみにも立たれず。

薫「絶えはてぬ清水になどか亡き人の
おも影をだにとゞめざりけむ」

いやうな目に遇はせることよと。憂き世には……假令この世ならぬどんな處を覓めてでも、貴女を立派な身にして眺めたいものです。なほ〳〵しき事どもを―平凡な歌などを。

かの大將殿―薫。

物忘れせず―大君の事を忘れず。

自らおはしましたり―御自身宇治へお出になつた。

毀ちし寢殿……取壞した古い寢殿の跡に今度は飽る晴々しく又改築してある。

事そぎて―八宮が簡素になされて。

故宮も戀しう……薫は八宮をも戀しく思はれて。

樣變へてけるも―模樣がへをして改築した事をも。

もとありし……以前からあつた室内裝飾はお寺めいた莊嚴なもので、あとの一部分を姫君達の爲に女らしく入念になど考慮して、すべてが一律ではなかつたのを。

何かの荒々しき……その他何やかやの素朴な道具類は。

かの御堂―例の寢殿を改造した寺。

殊更にせさせ給ひて―特に新しくお造らせなされて。

絶えはてぬ……昔ながらに涸れ果てぬ清水は流れてゐるものを、どう涙を拭ひつゝ、辨の尼君の方に立ち寄り給へれば、(俳八)いと悲しと見奉るに、たゞ顰みにひそむ。長押にかりそめに居給ひて、簾のつまをひき上げて物語し給ふに、几帳に隱ろへて居たり。事のついでに、「(薫)かの人形は、さいつ頃宮にと聞きしを、流石にうひ〳〵しく覺えてこそ音づれ寄らね。猶これより傳へはて給へ」と宣へば、「(俳)一日、かの母君の文侍りき。忌違ふとて、此處彼處になむあくがれ給ふめる。この頃も(北方ノ文)あやしき小家に隱ろへ物し給ふめるもいと心苦しく、すこし近き程ならましかば、そこにも渡して心安かるべきを、荒ましき山道に、たは易くもえ思ひ立たでなむ』と侍りし」と聞ゆ。「(薫)人々のかく恐ろしくすめる道に、まろこそ舊りがたく分け來れ。何ばかりの契にかと思ふはあはれになむ」とて、例の涙ぐみ給へり。「(薫)さらば、その心安からむ所に消息し給へ。自らやは、かしこに出で給はぬ」と宣へば、「(俳)仰言を傳へ侍らむことは易し。今更に京を見侍らむことは物憂くて、宮にだにえ參らぬを」と聞ゆ。「(薫)などてか、ともかくも人の聞き傳へばこそあらめ、愛宕して亡き八宮や大君の面影だけでもせめて殘してくれないのか。

たゞ顰みにひそむ―悲みの爲に泣顔を作つてゐる。

長押に―薫は闕に。

かの人形は……あの浮舟は先日から中の君の處にゐると聞いたに。

猶これより……矢張貴女から私の心持を傳へて話を取極めて下さい。

かの母君の文……浮舟の母から私に手紙が參りました。

忌違ふとて……惡い方角を避けるといつて浮舟は諸處へ轉々して居られます。

すこし近き程……宇治がもう少し近い處だつたら、浮舟を貴女の處にでもお預けして安心して居られようものを。

人々のかく……誰でも皆そんな風に恐しく考へてゐるこの宇治の山路を、私だけは昔に變らず踏分けて來るのです。

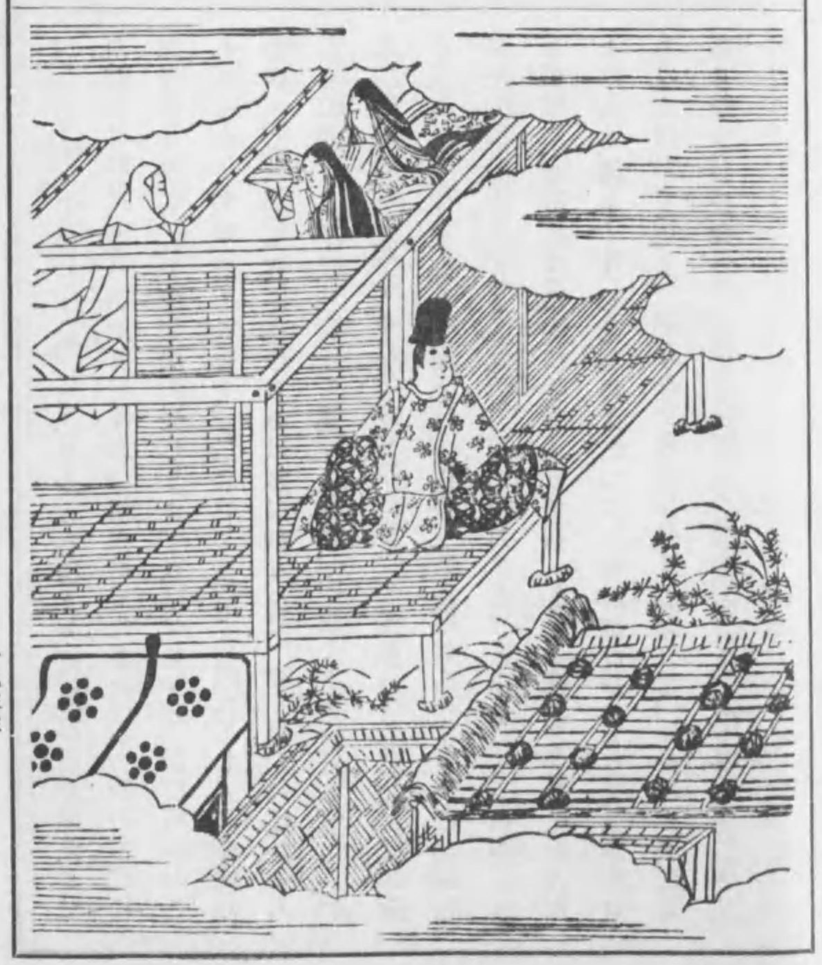
何ばかりの……どれ程の宿緣によつての事かと思ふと感慨が起ります。

その心安からむ所に……その氣の置けないらしい浮舟の隱れ家へ手紙をやつて下さい、それとも貴女自身に出かけて下さらぬか。

宮にだにえ參らぬを―中の君の御許にすら參りませぬものを、浮舟の聖だに、時に從ひては出でずやはありける。深き誓を破りて人の願を滿て給はむこそ、たふとからめ」と宣へば、「(俳)人わたす事も侍らぬに、聞きにくき事もこそ出でまうで來れ」と、苦しげに思ひたれど、「(薫)なほよき折なゝなるを」と、例ならず强ひて、「(薫)明後日ばかり車奉らむ。その旅の所尋ねおき給へ。ゆめ嗚滸がましく僻業すまじうを」と、ほゝ笑みて宣へば、わづらはしく、いかに思すことならむと思へど、(俳八)奥なく淡々しからぬ御心樣なれば、おのづから我が御爲にも人聞などはつゝみ給ふらむと思ひて、「(俳)さらば承はりぬ。近き程にこそ。御文などを見せさせ給へかし。振りはへさかしらめきて、心しらひのやうに思はれ奉らむも、今更に伊賀姥にやと、つゝましくてなむ」と聞ゆ。「(薫)文は易かるべきを、人の物いひうたてあるものなれば、『右大將は、常陸の守の女をなむ呼ばふなる』などや取り成してむをや。その守のぬし、いと荒々しげなゝめり」と宣へば、(俳八)うち笑ひていとほしと思ふ。(薫八)暗うなれば出で給ふ。下草のをかしき花ども、紅葉など折らせ給ひて、宮に御覽せさせ給

慮へ行く事は御至下さいまし。
などてか……何の斟酌が入りませうぞ、人が聞傳へたら何かとうるさいでせう、内密ならそんな心配はありませんよ。
愛宕の聖だに—愛宕山の奥深く籠る聖ですら。
深き誓を……京へは出ないと極めた誓を鑽して、人の願事を聞いて下さつたら。
人わたす事も……衆生濟度の爲といふでもないのに、うか〳〵京へなど出ましたら嫁な評判なども立ちさうな心配が御座います。
その旅の所……浮舟の隱れ家を調べて置いて下さい。
ゆめ鳴滝がましく……決しく私は浮舟に愚な無理業などはしない積りだからその含みで話して下さい。
奥なく……淺はかに輕卒といふやうな點の無い薫のお心持だから、自然御自身にも外聞惡い仕打などはお慎みなさるだらうと思つて。
近き程にこそ……浮舟の隱れ家は貴方の御本邸から近い所で御座います、前以て御文をお遣はし置き下さいませ。
振りはへ……さもなければ態々才覺でお取持でもするやうに思はれよふ。かひなからずおはしぬべけれど、畏まり置きたる樣にて、いたうも馴れ聞え給はずぞあめる。内裏より、たゞの親めきて、入道の宮にも聞え給へば、いとやむごとなき方は、限なく思ひ聞え給へり。此方彼方とかしづき聞え給ふ宮仕に添へて、むつかしき私の心の添ひたるも苦しかりけり。
宣ひしまだつとめて、睦ましく思す下臈の侍一人、顏知らぬ牛飼つく り出でて遣はす「御庄の者どもの田舍びたる召し出でてつけよ」と宣ふ。必ず出づべく宣へりければ、いとつゝましく苦しけれど、うち化粧じ繕ひて乘りぬ。野山の氣色を見るにつけても、古へよりの故言ども思ひ出でられて、詠め暮してなむ來著きける。いと徒然に人目も見えぬ所なれば、心やすく引き入れて、「かくなむ參り來つる」と、しるべの男していはせたれば、初瀨の供にありし若人出で來て、おろす。怪しき所に詠め暮し明すに、昔語りもしつべき人の來たれば、嬉しくて呼び入れ給ひつ。親と聞えける人の御あたりの人と思ふに、睦ましきなる

うのも今更伊賀姥のやうに見えようかと極り惡う御座いますから。
伊賀姥—伊賀出身の巫女が傍ら媒をやつてゐたものか、又それが元で好んで媒をする者をもさう呼んだものか、それとも伊賀姥といふ女が人の媒をして非難された物語でもあつたか。姥は老女。
人の物いひ……他人の口といふものはうるさいから、薫は常陸介風情の娘を娶るのだなどともいひ立てさうですからなあ。
その守のぬし—常陸介。
宮に御覽ぜさせ給ふ—女二宮にお見せする爲にお持歸りなさる。
かひなからず……女二宮が薫の妻となつてその甲斐もないといふ程には薫の愛が冷くはなさうだが、薫は女二宮を畏敬したやうな風にして。
内裏より……帝から平人の親が娘を緣付けるやうな態度で薫の母君女三宮へもお賴み込みになつてあるので、非常に大切にお扱ひ申すべき點では、薫も女二宮をこの上なく思つていらつしやる。
此方彼方と……薫は諸方へ氣を兼ねて女二宮を大切にせねばならぬのに、搗て加へて厄介至極な浮舟に對する戀心の生じたのも。



宣ひしまだつとめて、薫は弁に約束した日の朝まだ早く。
遣はす―宇治へお遣りになつた。
つけよ―弁の車に附き従はせよ。
必ず出づべく……きつと浮舟の隠家に行くやうに薫が仰しやつたので弁は甚だ氣恥かしく迷惑だが。
乗りぬ―迎の車に乗つた。
故言ども―古歌など。
来著きける―浮舟の家に著いた。
いと徒然に……浮舟の隠れ家は寂しくて人も訪ひ来ぬ處故、弁は安心して車を挽き入れた。
初瀬の供にありし……浮舟が初瀬詣をした時お供してゐた若い女房が出て来て、弁を車からおろす。
怪しきに……こんな勝手のちがつた家に浮舟は朝夕茫然として物思ひ勝に過してゐるのに。
呼び入れ給ひつ……原本には「て」とあるが誤寫かと思ふ。「つ」ならば次の句に快く意が疏通する。
親と聞えける……父君と聞いてゐる八宮の所縁の人と思へば。
あはれに人知れず―しみ〴〵と一人寄に。この句「思ひ出で聞えさせぬ」にかゝる副詞句。
かの宮だに―中の君の處にすら。
この大將殿―薫。
思ひ給へおとしてなむ―やつと思立べし。尼君。「あはれに人知れず、見奉りし後よりは、思ひ出で聞えさせぬ折なけれど、世の中かばかり思ひ給へ捨てたる身にて、かの宮だに參り侍らぬを、この大將殿の怪しきまで宣はせしかば、思ひ給へおこしてなむ」と聞ゆ。君も乳母も、めでたしと見置き聞えてし人の御樣なれば、忘れぬ樣に宣ふらむもあはれなれど、俄にかく思したばかるらむとは思ひも寄らず。宵うち過ぐる程に、「宇治より人參れり」とて、門忍びやかに打ち叩く。さにやあらむと思ひて、辨開けさせたれば、車をぞ引き入るなる。怪しと思ふに、「尼君に對面賜はらむ」とて、この近き御庄の預の名告をせさせ給へれば、戸口にゐざり出でたり。雨少しうち洒ぐに、風はいと冷かに吹き入りて、いひ知らず薫り來れば、かうなりけりと、誰も〴〵、心ときめきしつべき御けはひをかしければ、用意もなく怪しきに、まだ思ひあへぬ程なれば、心騒ぎて、「いかなる事にかあらむ」といひ合へり。「心安き所にて、月頃の思ひあまる事も聞えさせむとてなむ」といはせ給へり。いかに聞ゆべき事にかと、君は苦しげに

つて參りました。
めでたしと見置き……立派なお方よと見上げ申して置いた薫の御樣子だから、その人が私を忘れぬといふ風に仰しやつて下さるのも身に沁む譯だけれど、急にこんな相談をお持懸けなさらうとは思ひも寄らなかつた。
さにやあらむと……多分薫からの使だらうと思つたので。
この近き御庄の……宇治の山莊近い御自分の莊園の支配人の名を薫がおいはせなされたので、弁は何氣なく戸口に出て來た。
かうなりけりと―さては薫の御來訪なのだと思はれて。
用意もなく……浮舟の家では何の準備もなくごたゴたしてゐるのに、まだどうした御來訪やら合點ゆかぬ中なので。
心安き所にて―かうした氣の置けない隱れ家で。
君は―浮舟は。
然はしましたらむを―折角そんな思召で薫のお出下されたものを。
かの殿にこそ―常陸介邸なる母君の許へ。
初々しく……初心らしく何のまあそんな必要がありませう。
若き御どち……お若い同士逢つてお思ひて居給へれば、乳母見苦しがりて「然おはしましたらむを立ちながらやは返し奉り給はむ。かの殿にこそ、かくなむと忍びて聞えめ、近き程なれば」といふ、「初々しく、などてかさはあらむ。若き御どち物聞え給はむは、ふとしも滲みつくべくもあらぬを、怪しきまで心のどかに物深うおはする君なれば、よも人の許なくてうち解け給はじ」などいふ程、雨やゝ降りくれば、空はいと暗し。宿直人のあやしき聲したる、夜行うちして、「やかの辰巳の隅のくづれいと危し。この人の御車入るべくは引き入れて、御門さしてよ。かゝる人の供人こそ心はうたてあれ」などいひ合へるも、むく〳〵しく聞きならはぬ心地し給ふ。「佐野のわたりに家もあらなくに」など口ずさびて、里びたる簀子の端つ方に居給へり。

「薫」さしとむるむぐらや繁き東屋の
あまりほどふる雨そゝぎかな」

と、うち拂ひ給へる追風、いと片はなるまで、東の里人も驚きぬべし。

話をなさるのは、さう早速深い仲になるものでもありませんのに。人の許―浮舟の同意。夜行うちして―夜廻りをして。やかの辰巳の……家の東南隅の崩れた處が不用心だ。やかは家處の義、宅又は家をいふ。心はうたてあれ―いやに氣がきかぬ。むく〳〵しく―氣味わるく。佐野のわたりに……萬葉―苦しくも降り來る雨か三輪が崎佐野のわたりに家もあらなくに。さしとむる……この家の門口に立つてゐる私を餘りいつまでも待たせる貴女は、きてはと戸をあける事を引止める人でもあつての事かとの意。常陸介の家なので、あづまの縁語を取つて、催馬樂―東屋のまやのあまりの雨そゝき、我れ立ちぬれぬこの戸開かせ―に據つた歌。うち拂ひ給へる追風―袖にかゝる雨を拂ふ拍子に薫る匂が。東の里人―東國の田舍者ども、即ちこの家の人々をいふ。上の催馬樂の歌に緣を引いた。聞えぬがれむ……浮舟はいひ遁れて薫をお歸し申す策もないので。これかれ……乳母や侍女達が薫の前に押出した。飛驒の工匠も……造つた大工が怨めしいこの隔の戸ではある。飛驒の工匠は大工の總名に用ゐた。入り給ひぬ―浮舟の側に。かの人形の願も……例の大君の代りとして浮舟を手に入れたいといふやうな、豫ての御希望の趣は薫が仰しやらずに。覺なき……思ひがけない物越に浮舟の委を見て以來。語らひ給ふべき―薫は浮舟にお話しなさるのであらう。おほどれたる聲―暢氣らしい聲。いかにとか……何といつてゐるのか聞いたとか。物賣の呼聲をして。物賣の樣子が。蓬生の丸寢―賤しい伏屋の一つ寢。おの〳〵―夜番の人々など皆。敢へなきこと―早急な事。九月にも……九月は佛事を嘗む月で婚姻を忌む習慣ゆゑいふ。思すやうあらむ―薫君に御思案があります。九月は明日こそ……九月といつても明日こそ本當に九月の節に入るのだと聞きましたよ。こたみは……今度浮舟をお連れ遊ばすに就ては私はお供致しますまい、中の君のお耳もありますのに、折角京に出てこの儘こつそり宇治へ

とざまかうざまに聞えのがれむ方なければ、南の廂に御座ひきつくろひて入れ奉る。(浮舟心)心やすくしも對面し給はぬを、これかれ押し出でたり。遣戸といふ物さして、いさゝか開けたれば、「(薫)飛驒の工匠もうらめしき隔かな。かゝる物の外には、まだ居ならはず」と愁へ給ひて、いかがし給ひけむ、入り給ひぬ。かの人形の願も宣はで、たゞ「(薫)覺なき物のはざまより見しより、すゞろに戀しきこと、さるべきにやあらむ、怪しきまでぞ思ひ聞ゆる」とぞ語らひ給ふべき。(浮舟心)人の樣いとらうたげにおほどきたれば、見劣りもせず、(薫心)いとあはれと思しけり。程もなう明けぬる心地するに、鳥などは鳴かで、大路近き所に、おほどれたる聲して、いかにとか、聞きも知らぬ名告をして、うち群れて行くなどぞ聞ゆる。かやうの朝ぼらけに見れば、物戴きたる者の、鬼のやうなるぞかしといふを聞き給ふも、かゝる蓬生の丸寢にならひ給はぬ心に、をかしうもありけり。宿直人も門あけて出づる音す。おの〳〵入りて臥しなどするを聞き給ひて、(薫心)人召して、車妻戸に寄せさせ給ふ。(浮舟ヲ)かき抱きて乘せ給ひつ。誰も〳〵怪しう、敢へなきことを思ひ騒ぎて、(侍女たち)九月にもありけるを、心憂のわざや。いかにしつることぞ」と歎けば、尼君も、いといとほしく、思のほかなる事どもなれど、「(尼)おのづから思すやうあらむ。後めたうな思ひ給ひそ。九月は明日こそ節分と聞きしか」といひ慰む。今日は十三日なりけり。尼君「こたみはえ參らじ。宮の上聞し召さむこともあるに、忍びて行きかへり侍らむも、いとうたてなむ」と聞ゆれど、まだきにこの事を聞かせ奉らむも心恥かしく覺え給ひて、「(薫)それは後にも罪さり申し給ひてむ。彼處もしるべなくては、たづきなき所を」とせめて宣ふ。「(薫)人一人や侍るべき」と宣へば、この君に添ひたる侍從と乘りぬ。乳母、尼君の供なりし童なども、後れて、いとあやしき心地して居たり。

近き程にやと思へば、宇治へおはするなりけり。牛などひき換ふべき心設し給へり。河原過ぎ法性寺のわたりおはしますに、夜は明け果てぬ。若き人は、いと仄かに見奉りて、めで聞えて、すゞろに戀ひ奉るに、

歸りますのも誠に工合わるい譯で御座います。中の君の方へ行きたいとの意。

まだきに……取敢へず浮舟の事を中の君にお聞かせ申すのも。

それは後にも……その事なら中の君にあとでお詫申されてもよい事です、今から行く處も案内者が無くては仕樣のない處だものを。

人一人や侍るべき—浮舟一人でどうして行かれようぞ、誰か附いて來なくては。

この君に……浮舟に附添うてゐる侍從と共に辨は車に乘つた。

後れて—御供が出來ずに。

牛など……遠い路ゆゑ牛なども豫備を御用意なされた。

河原過ぎ—加茂川原を過ぎ。

法性寺—京の九條河原にある。

若き人は……侍從はそれとなく薫をお見上げ申して。

君ぞ—浮舟は。

石高きわたり—石高道。

車のなかに……車の天井にある鉤に懸け垂れてあるので。

故姫君の御供……大君のお供をしてこそ、かうした場合にも臨むべき筈であつたに。

物のはじめに……めでたい浮舟の婚姻の最初に辨が尼姿で同乘してゐるのすら不吉と思ふのに。

いやめ—涙を含んだ目をいふと。

老いたる者は……老人は譯もなく涙脆いものだと、深い事情を知らぬ侍從は好い加減に推量するのであつた。記者の註。

君も見る人は……薫も目前の浮舟は無論可愛いけれど。

來し方の……亡き大君の戀しさが一入勝つて。

霧立ち渡る心地……涙に目の霞む故。

袖の重なりながら……直衣の袖と下著の袖とが重なりながら車の外に出てゐたのが。

花の—花色の。

おとしかけの……降り勾配の急な處で、車の動搖の爲に居ずまひを直す時に發見して。

かたみぞと……浮舟を大君の形見だと思つて見るにつけても、朝霧の一面に立塞つて袖が濡れる事よ。

若き人……侍從は、訝しく見つともない事だなあ、今は嬉しい旅だのに誠に不祥な事が加はつたやうな氣がする。

我も忍びやかに……薫も密に鼻をすすつて。

そこはかとなく……何となしにしみじみした心持になりますよ。

いと埋もれたりや—餘り沈み込んで世の中のつゝましさも覺えず。君ぞ、いと淺ましきに物も覺えで、うつぶし臥したるを、「石高きわたりは苦しきものを」とて抱き給へり。羅の細長を車のなかに引き隔てたれば、花やかにさし出でたる朝日影に、尼君はいとはしたなく覺ゆるにつけて、故姫君の御供にこそ、かやうにても見奉りつべかりしか、あり經れば思ひかけぬ事をも見るかなと、悲しう覺えて、つゝむとすれど、うち顰みつゝ泣くを、侍從はいと憎く、物のはじめに、形異にて乘り添ひたるをだに思ふに、なぞやかくいやめなると、憎く嗚滸にも思ふ。老いたる者は、すゞろに涙もろにあるものぞと、疎にうち思ふなりけり。君も、見る人は憎からねど、空の氣色につけても、來し方の戀しさまさりて、山深く入るまゝに、霧立ちわたる心地し給ふ。(薫が)うち詠めて凭り居給へる、袖の重なりながら、長やかに出でたりけるが、川霧にぬれて、御衣の紅なるに、御直衣の花のおどろ〳〵しう映りたるを、おとしかけの高き所に見つけて、引き入れ給ふ。

(薫)「かたみぞと見るにつけても朝霧の
ところせきまで濡るゝ袖かな」

と心にもあらず獨言ち給ふを聞きて、いとゞ絞るばかり、尼君の袖も泣き濡らすを、若き人、あやしう見苦しき世かな、心ゆく道にいとむつかしき事添ひたる心地す。(緋!)忍び難げなる鼻ずすりを聞き給ひて、我も忍びやかにうちかみ給ひて、(浮舟が)流石にいかゞ思ふらむといとほしければ、(薫)あまたの年頃、この道を行きかふ度重なるを思ふに、そこはかとなく物あはれなるかな。少し起きあがりて、この山の色も見給へ。いと埋もれたりや」と、強ひてかき起し給へば、(浮舟が)をかしき程にさし隱して、つゝましげに見出だしたるまみなどは、いとよく思ひ出でらるれど、おいらかに、餘りおほどき過ぎたるぞ心もとなかめる。いといたう兒めいたるものから、用意の淺からず物し給ひしはやと、猶行く方なき悲しさは、むなしき空にも滿ちぬべかめり。

おはし著きて、あはれ亡き魂や宿りて見給ふらむ、誰によりて、かくす

いらつしやいますよ。
さし隠して―扇で顔を隠して、
いとよく思ひ出でらるれど―大變よく似てゐて大君が聯想されるが。
心もとなかめる―大君の身代りとしてはどうかと氣遣はれる。
見めいたるものから―大君は大變にうぶでありながら。
猶行く方なき……やはり遣り場もない薫の悲歎は。
むなしき空にも……古今、我が戀はむなしき空に滿ちぬらし思ひやれども行く方もなし。
おはし著きて……宇治に。
あはれ亡き魂や……亡き大君の魂が此處に宿つて見て居られるだらう、
私は謹故にかうしてさ迷ひ歩くのでもない全く大君の戀しさ故なのだと、薫はお考へ續けなされて。
下りては……車から下りると少し斟酌して浮舟から立離れていらつしやる。
女は―浮舟は。
こなたに殊更に……殊更に遠慮して別の方に下りて。それは廊。
わざと思ふべき……こゝは假住居で特にそんな斟酌をせねばならぬ程でもないのに、用意が周到だと薫は思召す。
女の御臺―浮舟の食膳。

ずろに惑ひありくものにもあらなくにと、思ひ續け給ひて、下りては、少し心しらひて立ち去り給へり。女は母君の思ひ給はむ事など、いと歎かしけれど、艶なる樣に心深くあはれに語らひ給ふに、思ひ慰めておりぬ。尼君は、こなたに殊更におりて廊にぞ寄するを、わざと思ふべき住居にもあらぬを、用意こそ餘りなれと見給ふ。御庄より例の人々、騒がしきまで參り集まる。女の御臺は尼君の方より參る。道は繁かりつれど、この有樣はいと晴れ〴〵し。河の氣色も山の色も、もてはやしたる造り樣を見出だして、日頃のいぶせさ慰みぬる心地すれど、いかにもてない給はむとするにかと、浮きてあやしう覺ゆ。殿は京に御文書き給ふ。まだなり合はぬ佛の御飾など見給へ掟て、今日よろしき日なりければ、急ぎ物し侍りて、亂り心地の惱ましきに、物忌なりけるを思ひ給へ出ててなむ、今日明日こゝに慎み侍るべき」など、母宮にも姫宮にも聞え給ふ。うち解けたる御有樣今少しをかしくて、入りおはしたるも恥かしけれど、もて隠すべくもあらで居給へり。女の御裝束な

道は繁かりつれど……道中は樹木が繁つて薮蒼としてゐたけれど、この改築した寢殿は晴々と明るい。
もてはやしたる―一層見ばえのするやうな構造でそこから見やつて。
いかにもてない……薫が私をどうなさるお積りなのかと落着かず。
殿は―薫は。
まだなり合はぬ……まだ完成しない佛前の裝飾などを先日指圖しておいて。浮舟の事を寺の見分を口實にしていふ。
物し侍りて―宇治に參りまして。
母宮にも―御母女三宮へも
奥方女二宮へも。
うち解けたる御有樣……打寛いだ薫の御風采が、きちんとして居る時よりはもつと趣があつて、浮舟の方へ入つて來られるのも浮舟は恥かしいけれど、身を隠す譯にもいかず坐つていらつしやる。
女の御裝束……浮舟の服裝などは乳母などが色々氣を附け立派にと調へたのであるが。
昔のいと……大君が少し着馴れて柔になつたのをお召になつたお姿の。
宮の御髪―女二宮の御髪。
この人をいかに……浮舟をどう處置したものだらう、今すぐ公然の妻のやうに三條の邸に迎へ取らうのど、いろ〳〵によくと思ひて仕襲ねたれど、少し田舍びたる事もうちまじりてぞ、昔のいと奏えばみたりし御姿の、あてになまめかしかりしのみ思ひ出でられて。髪の裾のをかしげさなどは、こま〳〵とあてなり。宮の御髪のいみじくめでたきにも劣るまじかりけりと見給ふ。
且は、この人をいかにもてなしてあらせむとすらむ、只今物々しげにて、かの宮に迎へすゑむも、音聞便なかるべし、さりとて、これかれある列にて、おほぞうに交らはせむは本意なからむ、暫し此處に隠してあらむと思ふも、見ずはさう〳〵しかるべく、あはれに覺え給へば、疎ならず語らひ暮し給ふ。故宮の御事も宣ひ出でて、昔物語をかしうこまやかにいひ戯れ給へど、只いとつゝましげにて、ひたみちに恥ぢたるを、さう〳〵しう思す。過りても、かう心もとなきはいとよし、教へつゝも見てむ、田舍びたるさ心もてつけて、しな〳〵しからず、はやりかならましかばしも、形代不用ならましと、思ひなほし給ふ。此處にありける琴、箏の琴召し出でて、かゝる事はた、ましてえせじかしと、

も外聞が面白くあるまい。
これかれある列にて……幾人もゐる侍女達と同列にして並々の地位で仕へさせて置くのは。
見ずは……薫は遠路の處で始終逢へなかつたら物足らぬ感がしさうで。
過りても……間違つてもこんな風のしつかりしないのなら結構だ、うまく教育して連添はう、土臭い酒落ッ氣などがあつて品格もなく輕はづみでもあつたら、折角大君の身代りと思つても無益な事だつたらうにと。
かゝる事はた……こんな音樂などは又まして田舍育の浮舟は出來まいと、薫は殘念なので。
宮うせ給ひて……八宮御逝去の後この—八宮敷では。
宮の。
昔誰も〳〵……昔八宮も大君も御存命の頃貴女が此處で成長されたら。
親王の御有樣—八宮の御樣子。
よその人だに—他人の私共ですら。
などてさる處には……どうして貴女は常陸のやうな田舍には永く暮して居られたのですか。
いとよく思ひ出でられて—よく似てゐる故大君の面影が思出されて。
まいてかやうの事も……琴なども自分の愛人として不似合でないやう

口惜しければ、ひとり調べて、宮うせ給ひて後、こゝにてかゝる物に、いと久しう手觸れざりつかしと、珍しく我ながら覺えて、いと懷かしくまさぐりつゝ詠め給ふに、月さし出でぬ。宮の御琴の音の、おどろおどろしくはあらで、いとをかしくあはれに彈き給ひしはやと思し出でて、「昔誰も〳〵おはせし世に、こゝに生ひ出で給へらまかしば、今すこしあはれは勝りなまし。親王の御有樣は、よその人だに、あはれに戀しくこそ思ひ出でられ給へ。などてさる所には年ごろ經給ひしぞ」と宣へば、(浮舟ハ)いと恥かしくて、白き扇をまさぐりつゝ、添ひ臥したるかたはら目、いと隈なう白うて、なまめいたる額髪の隙など、いとよく思ひ出でられてあはれなり。まいて、かやうの事もつきなからず教へなさばやと思して、「これは少しほのめい給ひたりや。あはれ吾が妻といふ琴は、さりとも手馴らし給ひけむ」など問ひ給ふ。(浮舟)「その大和詞だに、つきなく慣らひにたれば、ましてこれは」といふ。いと片はに心おくれたりとは見えず。此處に置きて、え思ふまゝにも來ざらむことを思す

に仕込みたいものだと。
これは少し……琴は多少はお習ひなされたか。
吾が妻といふ琴—東琴、大和琴。
さりとも手ならし……吾妻の國に居られた故、吾妻琴だけは彈き馴れていらつしやるでせう。
大和詞だに……歌すら不調法にも詠み馴れずに來ましたから、まして琴などはとの意。歌は大和詞で、吾妻は一名大和琴と稱する故言葉をあやなしていつた。
片はに心おくれ……その返辭の具合では見苦しく氣が利かないとは思はれない。
此處に置きて……薫は浮舟を宇治に置いても。
なのめには……通り一遍の御愛情ではないと見える。
楚王の臺の上の……朗詠「班女閨中秋扇色、楚王臺上夜琴聲」。
かの弓をのみ……弓筈の技ばかりを事とするあたり、即ち常陸介の屋敷に居馴れて。
いとめでたく……今更薫のお樣子を誠にお立派で理想的だと。
扇の色も……漢の成帝の宮女であつた班女が後に君寵を失つて我が身を秋の扇に比して詩を作り悲を抒べたが、今薫が扇の色云々とこの

が、今より苦しきは、なのめには思さぬなるべし。琴は押しやりて、「楚王の臺の上の夜の琴の聲」と誦じ給へるも、かの弓をのみ引くあたりに慣らひて、いとめでたく思ふやうなりと、侍從も聞き居たりけり。
さるは、扇の色も心おきつべき閨のいにしへをば知らねば、ひとへにめで聞ゆるぞ、後れたるなめりかし。事こそあれ、怪しくもいひつるかなと思す。尼君の方より菓子まゐれり。箱の蓋に、紅葉、蔦など折り敷きて、故なからず取りませて敷きたる紙に、ふつゝかに書きたるもの、限なき月にふと見ゆれば、目とゞめ給ふほどに、菓子いそぎにぞ見えける。
(拝)「やどり木は色かはりぬる秋なれど
昔おぼえて澄める月かな」
(薫)「里の名も昔ながらに見し人の
面がはりせるねやの月かげ」

詩を誦はれたのは氣になる嫌な句であるのに、その故事を侍從は知らないので只管感心してゐるのは、用意至らぬ事ではあるよ。

事こそあれ……誦ふべき句もあらうに變な詩を我ながら誦つたものだと薫は思召す。

ふつゝかに書きたるもの—何か無器用らしく書いてあるのが。

目とゞめ給ふほど……薫が目をとめて見ていらつしやるので丁度菓物に早く手を出したがつてゐるやうな恰好に見えた。

やどり木は……この家の宿木は紅葉して趣變つた秋になつたけれど、昔貴方がお泊り遊ばした時のやうに月は變らず澄んで居ります。裏の意は、大君と浮舟と人は變つても昔に變らぬ薫君の御眞情よ。

里の名も……處の名も昔ながらに宇治といつてその儘であるが、嘗て見た大君は既に亡く、浮舟に顔が變つて、閑にさす月影も昔を思はせるとの意。

わざと返事……特に返歌といふ改つた樣子でもなく口ずさまれたのを侍從が尼君に傳へたといふ話さ。

わざと返事（かへりごと）とはなくて宣ふを、侍從なむ傳へけるとぞ。

宮猶……匂宮は矢張、あのちらりと浮舟を見た夕暮の事をお忘れになる時がない。

事々しき程……重々しい身分の女ではありさうもなかつたけれど。

口惜しくて止みにしことと—殘念にも本意を遂げなかつた事よと。

女君をも……中の君をもこんなつまらぬ事の爲に、匂宮はひどく嫉妬深い事よとお憎みなされた。浮舟を中の君が隱したと思つたゆゑ。

ありのまゝにや……浮舟の事をいつそ有りの儘に申上げたものか知らんと思召すけれど。

やむごとなき樣には……薫が正式の妻としては待遇しないけれど。

人の隱し置き給へる人を—薫が隱して居られる浮舟を。

聞え出でたらむにも—匂宮にお打明

浮舟（ふね）

この卷は薫二十七歳の春の事。匂宮は二條院にちらと見えた美人を不審に思つたが、正月に浮舟から夫人に來た手紙を奪つて讀んだので、それが夫人の異母妹であつたと知り、殊に薫の手に歸してゐると知れたので、妬ましく思つた。薫は重い身分柄さう〳〵は宇治へも行けぬ。匂宮はその虚に乘じて一夜宇治に行き、閑に紛れて浮舟の室に入つた。浮舟は薫と思つてたのに、匂宮と分つて驚いたがもう致し方が無い。その後薫は一日閑を得て宇治に行つたが、浮舟は物思はしげに打沈んでゐるので、薫は樣々に慰めた。匂宮も或雪の日又密に宇治を訪ひ、對岸の小家に浮舟を連れ出して戀を語つた。浮舟も今は心が兩方に率かれて悶え惱んだ。薫は浮舟を京に迎へることにしたが、匂宮は先んじて物に奪ひ隱さうとした。女は身一つの進退きはまつて、宇治河に身を投げようとさへ思つた。或日薫の家來と匂宮の使とが、偶然一緒に宇治に來合はせた事から、薫は宮と浮舟との關係を知つた。浮舟は愈思ひ餘つて死を思ひ、窃に文殼を燒き捨てたりした。

卷の名は浮舟の歌、「橋の小島は色もかはらじをこの浮舟ぞゆくへ知られぬ」に由つてつけた。

宮、猶かのほのかなりし夕べを思し忘るゝ世なし。事々しき程にはあるまじげなりしを、人柄（ひとがら）のまめやかにをかしうもありしかなと、いと

け申さうにも。
さて聞き過し……その儘聞流しになされさうな匂宮の御氣質でもないやうだ。
侍ふ人の中にも……匂宮は侍女達の中にでも、一時の心持から手をつけてやらうとお思付きなされた以上は、行くべき處でないやうな邊までも附纏ふ程の、體裁よくない御氣質だのに。
さばかり月日を……あれ程いつまで立つても思込んでいらつしやる浮舟については。
外より……浮舟の事を他の人から御傳聞なされようのは何とも仕方がない。
いづ方樣にも……薫へも浮舟へもお氣の毒ではあつても、その爲に引留める事の出來る匂宮の御氣質でもないから、結局浮舟を手にお入れになるだらうが、さうなれば私は姉妹だけに他人よりは一層外聞わるい思をする事にならう。
我がおこたりにては……私の輕擧から事情を打明けて事を起すやうな事はすまいと。
異樣に……然し又他に拵へ事をして似合つたらしくごまかす事はお出來にならないので、口を緘して只嫉妬してゐる普通の女になりきつあだなる御心には、口惜しくて止みにしことと、妬う思さるゝまゝに、女君をも、かうはかなき事ゆゑ、あながちにかゝる筋の物憎みし給ひけり。（中君ヲ）思はずに心憂しと、辱しめ怨み聞え給ふ折々は、（中君ハ）いと苦しうて、ありのまゝにや聞えてましと思せど、やむごとなき樣にはもてなし給はざなれど、淺はかならぬ方に心とゞめて、人の隱し置き給へる人を、物いひさがなく聞え出でたらむにも、さて聞き過し給ふべき御心樣にもあらざめり、侍ふ人の中にも、はかなう物をも宣ひ觸れむと思し立ちぬるかぎりは、さるまじき里までも尋ねさせ給ふ、御樣よからぬ御本性なるに、さばかり月日を經て思し沁むめるあたりは、まして必ず見苦しきこと取り出で給ひてむ、外より傳へ聞き給はむはいかゞはせむ、いづ方樣にもいとほしくこそはありとも、防ぐべき人の御心樣ならねば、よその人よりは聞きにくゝなどばかりぞ覺ゆべき、とてもかくても、我がおこたりにてはもてそこなはじと、思ひ返し給ひつゝ、いとほしながらも聞え出で給はず。異樣につき〳〵しく

て居られた。
かの人は—薫は。
のどかに思し掟てゝ—ゆつくりと計畫して。
所狹き身の程を—お手輕ならぬ御身分なので。
神の諫むる……伊勢物語に「戀しくば來ても見よかし千早振る神の諫むる道ならなくに」とあるが、薫の場合は神に禁止されたよりも猶困つた。
今いとよく……今に浮舟をよい目に遇はせてやらう。以下薫の心。
山里の慰めと……宇治へ行く時の慰めにと計畫して浮舟を彼處に置いたものを、少し日數のかゝるやうな用事を拵へて、ゆつくり行つて見よう。
さて暫しは……さうして當分は人の知らないあの宇治を浮舟の住處にして置いて。
かの心をも……浮舟の心をも和げて置き。
人のもどき—人の非難。
なのめにてこそよからめ—目立たぬ處置をするがよからう。
俄に何人ぞ……薫は突然女をお引取なされたが一體何者だらう、何時から愛していらつしやるのか知らなどと、他人に怪まれようのもうは、えいひなし給はねば、おし籠めて物怨じたる世の常の人になりてぞおはしける。
かの人は、譬しへなくのどかに思し掟てゝ、（浮舟ガ）待遠なりと思ふらむと、心苦しうのみ思ひやり給ひながら、所狹き身のほどを、さるべき序なくて、かやすく通ひ給ふべき道ならねば、神の諫むる道よりもわりなし。
されど、今いとよくもてなさむとす、山里の慰めと思ひ掟てし心あるを、少し日數も經ぬべき事ども作り出でて、のどやかに行きても見む、
さて暫しは人の知るまじき住所して、やう〳〵さる方に、かの心をもの、どめ置き、わが爲にも人のもどきあるまじく、なのめにてこそよからめ、俄に何人ぞ、いつよりなど、聞き咎められむも物騒がしく、はじめの心にたがふべし。また宮の御方の聞き思さむことも、もとの所を際々しう率て離れ、昔を忘れ顏ならむも、いと本意なしなど思し靜むるも、例のいとのどけさ過ぎたる御心がらなるべし。渡すべき所思し設けて、忍びてぞ造らせ給ひける。少し暇なきやうにもなり給ひにた

るさく。
宮の御方―中の君。
もとの所を……宇治を思切りよく見限つて浮舟を京へ連れて來、あの舊邸を忘れてしまつたやうな形にならうのも。
渡すべき所―浮舟を移すべき家を。
少し暇なき……薫は大納言になつて政務の爲稍お忙しくなられたけれど、中の君に對しては。
世の中を……中の君が男女の間の事を段々御理解なされ。
人の有樣―薫の御樣子。
これこそは―薫の態度こそは。
宮の御心の―匂宮の御愛情が。
思はずなりける……我ながら意外な運命だつたなあ、大君が私を薫に與へようと計畫なされたに結局さうもならないで、何故こんなに心配や氣遣ばかりせねばならぬ匂宮に關係し初めた事だつたらうと。
對面し給ふことは―中の君が薫に御面會なさる事は。
年月もあまり……年月も重なり昔の事になつてしまつて内實の事情を知らぬ人けり。中の君の心。
なほ〳〵しき……平人に於てこそその位の緣故を辿る交情をも忘れぬのにふさはしからうが、何でまあこんな貴い御身分でありながら立

れど、宮の御方には、猶たゆみなく心寄せ仕うまつり給ふこと、同じやうなり。見奉る人も怪しきまで思へれど、世の中をやう〳〵思し知り、人の有樣を見聞き給ふまゝに、これこそは、まことに昔を忘れぬ心永さの名殘さへ、淺からぬためしなめれと、あはれも少なからず。（薫ハ）ねびまさり給ふまゝに、人柄も世のおぼえも、樣殊に物し給へば、宮の御心のあまり賴もしげなき時々は、思はずなりける宿世かな、故姫君の思し掟てしまゝにもあらで、かく物思ひ憚るべき方にしもかゝり初めけむよと、思す折々多くなむ。されど對面し給ふことは難し。年月もあまり昔を隔てゆき、うち〳〵の御心を深う知らぬ人は、なほ〳〵しきたゞ人こそ、さばかりのゆかり尋ねたる睦をも忘れぬに、つき〴〵しけれ、なぞかう限ある程に、例に違ひたる有樣ぞなど、いひ思はむもつゝましければ、宮の絶えず思し疑ひたるに、（中君ハ）いよ〳〵苦しう思し憚り給ひつゝ、おのづから疎き樣になりゆくを、（薫ハ）さりとても絶えず、なほおなじ心の變り給はぬなりけり、宮もあだなる御本性こそ、見ま憂き

はづれた深い御交際なのだらうなどと。
宮の絶えず……匂宮が始終薫と自分との中を疑つていらつしやるので。
宮もあだなる……匂宮も浮氣な御氣質こそ中の君は嫉氣を催す點もあるけれど。
外には……中の君以外の女にはこんな若君も出來さうでないと、中の君を大事なものに思召して。
ありしより―中の君も以前よりは。
わたり給ひて―匂宮が中の君の處に入らしつて。
鐵籠―籠の編み殘しの部分を、飾として鐵の如く出したもの。
すく〳〵しき―飾り氣もない。
立文―竪に疊んで上下を捻つた手紙。
これは浮舟の侍女右近の文。
奥なく―前後の分別もなく。
女君に―中の君に。
宇治より……宇治の辨から侍女大輔にあげる文といつて來た使が屆け煩つて居たのを、宇治からの文ゆゑ、例の通り御前で御覽なさらうと思ひまして、それで私が受取りました。
金を造りて―銅線を以て細工して。
我ももてはやし……私もその贈物や文を賞翫しよう。
女君いと……中の君は非常に迷惑に

節もまじれ、若君のいと美しうおよずけ給ふまゝに、外にはかゝる人も出で來まじきにやと、やむごとなきものに思して、うち解け懷かしき方には、人にまさりてもてなし給へば、ありしよりは少し物思ひ靜まりて過し給ふ。

正月の一日過ぎたる頃わたり給ひて、若君の年まさり給へるを、翫びうつくしみ給ふ。書つ方、ちひさき童、緣の薄樣なる包み文の大きやかなるに、ちひさき鬚籠を小松につけたる、又すく〳〵しき立文取りそへて、奥なく走り參る。女君に奉れば、宮、「それはいづくよりぞ」と宣ふ。「宇治より大輔の殿にとて、もて煩ひ侍りつるを、例の御前にてぞ御覽せむとて、取り侍りぬる」といふも、いとあわたゞしき氣色にて、「この籠は金を造りて色どりたる籠なりけり。松もいとよう似て造りたる枝ぞよ」と笑みていひ續くれば、宮も笑ひ給ひて、「（匂）いで我ももてはやしてむ」と召すを、女君いとかたはら痛く思して、「（中君）文は大輔がりやれ」と宣ふ御顏の赤みたれば、宮、大將のさりげなくしたる文にや、

思召して。
大將のさりげなく……薫が何食はぬ顔してお送りなされた文ではないか知らん、宇治からと稱するのも何だかそれらしいと感づかれて。それならむ時に……若し本當に薫の文であつた時は引込がつくまいと思召すと頗る極りがわるいので。怨じやし給はむとする—御立腹なさいますか。
騷がぬ氣色なれば—中の君が別に狼狽した御樣子もないから。覺束なくて—御無沙汰致して居りますので。
あやしう侍るめれど—變な品で御座いますけれど差上げます。殊にらう〳〵じき節も……その手紙は特に巧なといふ點も見えないけれど、誰のだか見當がつかぬのに匂宮は目をお見張りなされて。何事かさぶらふ—如何お暮しで御座いますか。
御私にも—中の君樣の御身にも。頼もしき御よろこび……新年ゆゑ。此處にはいとめでたき……當方では誠に結構な浮舟樣の御生活が落着いてしんみりしては居るものゝ、矢張不相應な氣が致します。
時々は……たまには浮舟樣が中の君樣の方へお出かけ遊ばして。

宇治の名告もつき〴〵しと思し寄りて、この文を取り給ひつ。流石にそれならむ時にと思すに、いとまばゆければ、「開けて見むよ。怨じやし給はむとする」と宣へば、「見苦しう、何かは、その女どちのなかに書きかはしたらむうち解け文をば、御覽せむ」と宣ふが、騷がぬ氣色なれば、「さば見むよ。女の文書きはいかゞある」とて開け給へれば、いと若やかなる手にて、「覺束なくて年も暮れ侍りにける山里のいぶせさこそ、峰の霞も絶間なくて」とて、端に「これ若君の御前に、あやしう侍るめれど」と書きたり。殊にらう〳〵じき節も見えねど、覺なきを、御目たてゝこの立文を見給へば、げに女の手にて、「年改まりて何事かさぶらふ。御私にも、いかに頼もしき御よろこび多く侍らむ。此處にはいとめでたき御住居の心深きを、猶ふさはしからず見奉る。かくてのみつくづくと詠めさせ給ふよりは、時々は渡り參らせ給ひて、御心も慰めさせ給へと思ひ侍るに、つゝましく恐ろしきものに思し懲りてなむ、物憂きことに歎かせ給ふめる。若君の御前にとて、卯槌まゐらせ給ふ。お

つゝましく—浮舟樣はお邸はきまりの惡い恐しいものと懲り〳〵なさいまして、參上するのは氣の進まぬことゝ歎いていらつしやる。匂宮に挑みかけられたゆゑ。
卯槌參らせ給ふ—浮舟樣から卯槌を進上遊ばされます。卯槌は正月初卯の日の祝ひ物で木製の小さな槌、これで邪氣を拂ふといふ。
おほき御前の……匂宮樣のお目にとまらぬ時に、御覽下さいまし。
言忌も……めでたい新年に緣起でもない言葉を避けもせず。
誰がぞ—誰の手紙ですか。
昔かの山里……以前宇治の山莊に仕へて居つた者の娘で仔細あつて。おしなべて……並々に奉公などしてゐる女とは見えぬ手紙の書きぶりだのにと。
煩はしき事と……右近の手紙の中に、厄介な事があつた爲出かけにくいとあるので、さてはあの女かと匂宮は思ひ當られた。
徒然なりける……如何にも無聊に屈託してゐる人の細工と思はれた。
またぶり—殷になりたる樹の枝。
山橘つくり……藪柑子の實を拵へて通して付けた小松の枝に。
まだふりぬ……この木はまだ千歳の壽を保つた古木ではありませんが

ほき御前の御覽せざらむ程に、御覽せさせ給へとてなむ」と、こま〴〵と、言忌もえしあへず、物歎かしげなる樣の、頑しげなるも、うち返しう里にありける人の女の、さるやうありて、この頃彼處に侍るとなむ聞き侍りし」と聞え給へば、おしなべて仕うまつるとは見えぬ文書きを、と心得給ふに、かの煩はしき事とあるに思し召し合はせつ。卯槌をかしう、徒然なりける人の仕業と見えたり。またぶりに、山橘つくりて貫き添へたる枝に、

「まだふりぬ物にはあれど君がため
深き心にまつと知らなむ」

と、殊なる事なきを、かの思ひ渡る人のにやと思し寄りぬるに、御目とまりて、「返事し給へ。情なし。隱い給ふべき文にもあらざめるを、など御氣色のあしき。退りなむよ」とて立ち給ひぬ。女君、少將などして、「いとほしくもありつるかな。幼き人の取りつらむを、人はいかでか見

若君の爲に深い心を以て長壽を待つ松の木と御承知下さいとの意。
まだ古りぬにまたぶりを懸けた。
殊なる事なきを……格別うまい所もない歌なのを、日頃思ひ續けてゐるあの浮舟の歌だと匂宮は思ひつかれたので。
など御氣色のあしき……どうして貴女は御機嫌が惡いのですか、それでは私は引下りませうよ。
幼き人の……子供が取次いだのだらうに女房達は何で氣を附けなかつたのですか。
見給へましかば……私が見當りましたら何の此處へ持出しませう。
この子—文を取次いだ童女をいふ。
心地なう……分別がなく出過ぎて居ります、一體人は成長の後が嘸と想像されるやうに、小い時は大樣なのがよいのです。
幼き人な腹だてそ—子供を捉へて怒らぬがよい。
宮も—中の君も。
わが御方に—匂宮は自分のお室に。
大將—薫。
いと餘りなる……如何に大君の形見でもあんな山里に薫が泊られるのは餘りだと思つてゐたが、さてはあんな女を隠していらつしやるのだらうと。

ざりけるぞ」など、忍びて宣ふ。「見給へましかば、いかでかは參らせましぞ。すべてこの子は、心地なうさし過して侍り。生先見えて、人はおほどかなるこそをかしけれ」など憎めば、「あなかま。幼き人な腹だてそ」と宣ふ。去年の冬、人の參らせたる童の、顏はいと美しかりければ、宮もいとらうたくせさせ給ふなりけり。
わが御方におはしまして、怪しうもあるかな、宇治に大將の通ひ給ふことは、年頃絶えずと聞くなかにも、忍びて夜泊り給ふ時もありと、人のいひしを、いと餘りなる人の形見とて、さるまじき所に旅寢し給ふらむことゝ思ひつるは、かやうの人隱し置き給へるなるべしと、思し得ることもありて、御文の事につけて使ひ給ふ大内記なる人の、かの殿に親しき便あるを思し出でて、御前に召す。まゐれり。韻塞すべきに、集ども選り出でて、此方なる厨子につむべき事など宣はせて、「右大將の宇治へいますること、なほ絶えはてずや。寺をこそいと畏く造りたゝなれ。いかでか見るべき」と宣へば、「嚴めしく造られて、不斷の三昧

大内記—中務省被官の官吏。詔勅を草し、位記をしるす。
かの殿に—薫の邸に。
集—詩集。
いかでか見るべき—どうしたら見られるか知ら、行つて見たいものだ。
不斷の三昧堂—常行堂。
ありしよりも—前々よりも。
けしうはあらず……薫君が憎からず思召す人なのでせう、あの附近の御領地の人が皆薫君の御命令でその女の許に御用を勤めて居ります。
宿直にさし當て—所領の者を宇治の邸の宿直に當らせ。
京よりも……薫君の御本邸からも密に然るべき面倒は見てお上げになります。
流石に心細くて—深く愛せられてはゐるものゝあんな片田舎の心細い生活で。
只この十二月の……その女を宇治に圍つたのは。
たしかにその人……私が聞いたのは確にさうした女とはいはぬわい。
この人は—浮舟をさす。
今建てられたるに—新築になつた寢殿に。
何の心ありて—どういふ薫のお積りで。
なべての人に似ぬ……普通の平凡人

堂など、いと尊く掟てられたりとなむ聞き給ふる。通ひ給ふことは、去年の秋頃よりは、ありしよりも屢物し給ふなり。下の人々の忍びて申しゝは「女をなむ隱しすゑさせ給へる。けしうはあらず思す人なるべし。あのわたりに領じ給ふ所々の人、みな仰にて參り仕うまつる、宿直にさし當てなどしつゝ、京よりも、いと忍びてさるべき事など問はせさせ給ふ。いかなる幸人の、流石に心細くて居給へるならむ」となむ、只この十二月の頃ほひ申すと聞き給へし」と聞ゆ。いと嬉しくも聞きつるかなと思ほして、「たしかにその人とはいはずや。彼處にもとよりある尼をぞ訪らひ給ふと聞きし」「尼は廊になむ住み侍るなる。この人は今建てられたるになむ、きたなげなき女房なども數多して、口惜しからぬけはひにて居て侍る」と聞ゆ。「をかしき事かな。何の心ありて、いかなる人をか居ゑ給へらむ。なほいと氣色ありて、なべての人に似ぬ御心なりや。左の大臣など、この人のあまり道心に進みて、山寺に夜さへともすれば泊り給ふなる、輕々しと、もどき給ふと聞きしを、げに、

と造つた御氣象だなあ。
左の大臣―夕霧。
この人の―薫が。
げになどか……成程どうしてまあ、あんなに佛道の事といへば暇を偸んでお歩きなさるのだらう、矢張懇しい大君の住んだ處に心が牽かれるのだらうと私も思つてゐたが。いづら……どんなものだかなあ、普通の人よりは實直だと利口顔してゐる薫がさ、殊に人の思ひも附かぬやうな巧な隱し事をやつてゐる事よ。
この人は―大内記は。
隱し給ふ事も―薫の祕密をも。
如何にして……どうしてその女を先夜接近した人だと確めよう、何とかして突留めたいものだ。
かの君の―薫が。
よろしき人―好い加減の女。
このわたりには……中の君とはどうして親しいのか知らん。
心をかはして―中の君が薫とぐるになつて。
只その事を―全く浮舟の事のみを。
賭弓―毎年正月十八日、禁中の弓場殿(ゆばどの)で行はれる弓の競射。
内宴―正月二十一日文人博士達が祝司召の詩を作り御前で講ずる御催。
など……任官式などといつて多

などかさしも佛の道には忍びありくらむ。猶かの故郷に心をとゞめたるとなむ聞きしは、かゝる事こそはありけれ。いづら、人よりはまめなるとさかしがる人しも、殊に人の思ひ到るまじき隈ある構よ」と宣ひて、いとをかしと思いたり。この人は、かの殿にいと睦ましく仕うまつる家司の婿になむありければ、隱し給ふ事も聞くなるべし。(句宮ハ)御心のうちには、如何にして、この人を見し人かとも見定めむ、かの君のさばかりにて居ゐたるは、なべてのよろしき人にはあらじ、このわたりにはいかで疎からぬにかあらむ、心をかはして隱し給へりけるも、いと妬うおぼす。只その事を、(句宮ハ)この頃は思し沁みたり。賭弓、内宴など過して心のどかなるに、司召などいひて、人の心盡すめる方は、何とも思さねば、宇治へ忍びておはしまさむ事をのみ思しめぐらす。この内記は望む事ありて、夜晝いかで御心に入らむと思ふ頃、(句宮ハ)例よりは懷かしう召し使ひて、「(句)いと難き事なりとも、わがいはむ事はたばかりてむや」など宣ふ。(内記ハ)かしこまりて侍ふ。「(句)いと便なき事なれど、かの宇治に住む

くの人達が氣を揉む事件も匂宮は無關心なので。
いかで御心に……何とかして匂宮のお氣に入らうと苦心してゐる時で。
わがいはむ事は……私が頼むことは取計らつてくれようか。
いと便なき事なれど―誠に工合のわるい話だが。
早うほのかに……私が嘗て一寸關係のあつた女で。
聊か人に……少しも薫などに感づかれぬやうな用意はどうしたらよからうか。
亥子の時―亥の刻から子の刻までの間、今の夜十時から十二時まで。
たゞ御供に……只お供申上げる者どもだけが知る譯で、その他には知れる筈が御座いません。
それも深き心は……そのお供の者も深い事情は何で知りませう。
輕々しきもどき……あんな處に出掛けて輕卒だといふ非難を受けさうなのが外聞憚られる譯なのです。
うち出で給へれば―御いひ出しなされた事ゆゑ。
昔もかしこの……以前にも宇治へお供して勝手知つた者。
かうぶり得たる―叙爵した、即ち五位に叙せられた。これは六位の藏人を認めてなつた人。

らむ人は、早うほのかに見し人の、行方も知らずなりにしが、大將に尋ね取られにけりと聞き合はする事こそあれ。たしかには知るべきやうも無きを、只物より覗きなどして、それかあらぬかと見定めむとなむ思ふ。聊か人に知らるまじき構は、いかゞすべき」と宣へば、あな煩はしと思へど、「(内記)おはしまさむ事は、いと荒き山越になむ侍れど、殊に程遠くは侍はずなむ。夕つ方出でさせおはしまして、亥子の時にはおはしまし著きなむ。さて曉にこそは歸らせ給はめ。人の知り侍らむことは、たゞ御供にさぶらひ侍らむこそは。それも深き心はいかでか知り侍らむ」と申す。(句)さかし。昔もひと度ふた度かよひし路なり。輕々しきもどき負ひぬべきが、物の聞えのつゝましきなり」とて、返す〳〵あるまじき事に、わが御心にも思せど、かうまでうち出で給へれば、え思ひとゞめ給はず。御供に、昔もかしこの案内知れりし者二三人、この内記、さては御乳母(おんめのと)子の藏人よりかうぶり得たる若き人、睦ましきかぎりを選り給ひて、大將は今日明日はよにおはせじなど、内記によく

大將は今日明日……薫が今明日は宇治に絶對にお出はあるまいなど。古へを一瞥て宇治に行つた頃を。怪しきまで心を……瞥て不思議な位私に同心して中の君に手引してくれた薫の爲に氣の毒だなあと。むげに人知らぬ……全く人に知られずにお出歩きなさる事は、何といつても出來ぬ御身分だのに。やゝましけれど一慎ましいけれど。物のゆかしき方一好奇心。如何ならむ……どうだらう、顔見る事も出來ずに歸るやうな事になつたら物足らず嫌なものだらうと。法性寺一九條河原にある。案内よく知れる……この宇治の勝手をよく知つてゐる薫の家來に豫め聞いて來たので。入りぬ一大内記一人で入つた。我も一大内記も。たど〳〵しけれど一勝手がはつきりしないけれど。參りて一匂宮の待つていらつしやる處に引返して來て。只これより……この寢殿からお入りなさいまし。やをら上りて一匂宮はそろりと寢殿に上つて。誰かは來て……誰がこんな處に來て覗く者があらうぞと安心してゐて。

案内聞き給ひて、出で立ち給ふにつけても、古へを思し出づ。怪しきまで心を合はせつゝ、率てありきし人の爲に、うしろめたき業にもあるかなと、思し出づる事も樣々なるに、京の内だに、むげに人知らぬ御ありきは、さはいへどえし給はぬ御身にしも、怪しき樣のやつれ姿して、御馬にておはする心地も物恐ろしく、やゝましけれど、物のゆかしき方は進みたる御心なれば、山深うなるまゝに、いつしか、如何ならむ、見合はすることもなくて歸らむこそ、さう〳〵しく怪しかるべけれと思すに、心もさわぎ給ふ。法性寺のほどまでは御車にて、それよりぞ御馬には奉りける。

急ぎて、宵過ぐる程におはしましぬ。内記、案内よく知れるかの殿の人に問ひ聞きたりければ、宿直人ある方には寄らで、葦垣しこめたる西面を、やをら少し壞ちて入りぬ。我も流石にまだ見ぬ御住居なれば、いとたど〳〵しけれど、人繁うなどしあらねば、寢殿の南面にぞ、火ほの暗う見えて、そよ〳〵と音する。參りて、「内記まだ人は起きて侍るべし。

うち懸けて一はね上げて懸けて。かの火影に……二條院であの時灯影に御覽になつた童女である。うちつけ目かと一ふと見た目の迷か知らんと。君は一浮舟は。對の御方に……中の君に非常によく似通つてゐる。物折るとて一縫物に折目をつけようとして。かくて渡らせ給ひなば一かうして浮舟樣がお出かけ遊ばしたら。母君に連れられて明日石山參詣に行く筈の事が下文に見える。殿は一薫君は。御文には……昨日の薫君のお手紙には何と御座いましたでせう。折しも……折も折丁度薫君の入らつしやる時御不在では、忍び隱れでもしたやうに見えるのが。向ひたる人一對坐してゐる侍女。かくなむ渡り給ひぬると……かやうかやうで石山詣をなされましたと薫君へお手紙を上げて置くがよう御座いませう。

只これよりおはしまさむ」と、しるべして入れ奉る　やをら上りて、格子の隙あるを見つけて寄り給ふに、伊豫簾はさら〳〵と鳴るもつゝましく。新しう清げに造りたれど、流石にあら〳〵しくて隙ありけるを、誰かは來て見むとうち解けて、穴も塞がぬなるべし。几帳の帷子うち懸けておし遣りたり。火明うともして、物縫ふ人三四人ゐたり。童のをかしげなる、絲をぞよる。これが顔、まづかの火影に見給ひしそれなり。うちつけ目かと猶疑はしきに、右近と名のりし若き人もあり。君は肘を枕にて火を詠めたるまみ、髪のこぼれかゝりたる額つき、いとあてやかになまめきて、對の御方にいとよう覺えたり。この右近、物折るとて、「かくて渡らせ給ひなば、とみにしもえ歸り渡らせ給はじを」殿はこの司召のほど過して、朔日頃には必ずおはしましなむ』と、昨日の御使も申しけり。御文にはいかゞ聞えさせ給へりけむ」といへど、いらへもせず、いと物思ひたる氣色なり。折しも這ひ隱れさせ給へるやうならむが見苦しさ」といへば、向ひたる人、「それは、かくなむ渡り給ひぬ

耶も旅の氣持がなさいませうよ。
なほ暫し……猶當分この儘何處へも動かず薫君のお通ひをお待ち申さるゝのが。
京へなど……薫君が貴女を京へお引取遊ばされましたらその後。
おだしくて―氣安くゆつくりと。
このおとゞの……乳母殿が性急でこんなに俄に石山詣などをお勸め申したのでせうよ。
物念じてのどかなる人―物事に辛抱して氣永の人。
などてこのまゝを……どうしてこの乳母をお引留め申す事が出來なかつたのか殘念な事をしました。乳母が母君の處に打合せに行つたものと思はれる。まゝは乳母。
げに憎き者……成程二條院で浮舟に接近した時邪魔だてした憎い老女がゐるわいと、匂宮がお思出しなさるのも。
宮の上―中の君。
左の大殿の……夕霧はあれ程立派な御威勢で匂宮樣をえらくちやほやなさるけれど。
こよなくぞ……中の君の方が六の君よりも甚しく立勝つて大事にされていらつしやいます。
かゝるさかしら人……中の君にはこの乳母のやうなおせつかひな介添がゐないで。
殿だに……薫君さへ眞實で御愛情が變らなかつたら、浮舟樣の御幸福も何の中の君に劣りませうかい。
かの御事……中の君の御事は決して口にせぬがよい。
何ばかりの親族……浮舟と中の君とはどの程度の親戚關係か知らん。
匂宮の心。
彼はいと……中の君は非常に勝れてゐる。
これは只……この女(浮舟)は全く可憐で娘らしい點が。
いとをかしき……の下「と思す」などの語落ちたるか。
よろしうなり合はぬ……十人竝でまだ十分調はぬ程度のを見つけてすらも、あれ程までゆかしい人と思込んだ女を、それと發見してその儘引込んでゐるやうな匂宮の御氣質でない故。
物へ行くべき……何處か物詣に行くらしいな。匂宮の心。
いかでこの此處ならで……此處で機會を逃してはどうして再び尋ね逢ふ事が出來よう、といつて今夜の中に又どう出來ようぞと。
まもり給へば―見詰めて入らつしやると。
つとめての程にも……明日早朝でも

ると、御消息聞えさせ給へらむこそよからめ。輕々しう、いかでかは音なくては這ひ隱れさせ給はむ。御物詣の後は、やがて渡りおはしましねかし。かくて心細きやうなれど、心にまかせて安らかなる御住居に慣らひて、なか〳〵旅心地すべしや」などいふ。又あるは「なほ暫しかくて待ち聞えさせ給はむぞ、のどかに樣よかるべきにや。京へなど迎へ奉らせ給へらむ後、おだしくて親にも見え奉らせ給へかし。このおとゞのいと急に物し給ひて、俄にかう聞えなし給ふなゝめりかし。昔も今も、物念じてのどかなる人こそ、幸は見はて給ふなれ」などいふなり。右近、「などて、このまゝをとゞめ奉らずなりにけむ。老いぬる人はむづかしき心のあるにこそ」と憎むは、乳母やうの人を謗るなゝめり。げに憎き者ありかしと思し出づるも、夢の心地ぞする。かたはら痛きまで、うち解けたる事どもをいひて、「宮の上こそいとめでたき御幸なれ。左の大殿のさばかりめでたき御勢にて、嚴めしうのゝしり給ふなれど、若君生まれ給ひて後は、こよなくぞおはしますなる。かゝるさかしら人どものおはせで、御心のどかに、畏うもてなして、おはしますにこそはあゝめれ」といふ。「殿だにまめやかに思ひ聞え給ふこと變らずば、劣り聞え給ふべきことかは」といふを、君少し起きあがりて、「いと聞きにくき事。よその人にこそ、劣らじともいかにとも思はめ、かの御事なかけてもいひそ。漏り聞ゆるやうもあらば、かたはら痛からむ」などいふ。何ばかりの親族にかはあらむ、いとよくも似通ひたるけはひかなと思ひ比ぶるに、心恥かしげにあてなる所は、彼はいとこよなし、これは只らうたげに、こまかなる所ぞいとをかしき。よろしうなり合はぬ所を見付けたらむにてだに、さばかりゆかしと思し召したる人を、それと見てさて止み給ふべき御心ならねば、まして隈もなく見給ふに、いかでかこれを我が物にはなすべきと、わりなく思し惑ひぬ。物へ行くべきなゝめり、親はあるべし、いかで此處ならでまたは尋ね逢ふべき、今宵の程には又いかゞすべきと、心も空になり給ひて、猶まもり給へば、右近「いとねぶたし。夜べもすゞろに起き明してき。つとめての程にも……明日早朝でも

これは縫へよう。
御車は―母君からの迎のお車は。
仕さしたる物……縫ひかけた物など取纏めて。
君も―浮舟も。
北面に―茶の間に。
君のあと近く―浮舟の後方に近く。
又せむやうも……匂宮は他に方法も無いから。
殿のおはしたるにや―薫君が入らしつたのか知らん。
覺なき程にも……意外な時分にまあお出なされましたこと。
物へ渡り給ふ……浮舟が石山參詣をなさる筈だと。
仲信―大藏大輔仲信。薫の家司で大内記の舅。
驚かれつるまゝに……びつくりして出掛けて來て、隨分ひどい目に遭ひましたよ。
まねび似せ給ひて―薫の聲色を眞似されて。
思ひも寄らず……右近は匂宮とは思ひも寄らず戸をあけ放つた。
來たりとて……私が來たといつて人を起さぬがよい。
らう〳〵じき御心―周到な御用意。
ほのかに似たる―薫の聲に少し似た。
かの御けはひに―薫の御樣子に。
ゆゝしき事の樣と……途中恐しい目に遭つたと仰しやつたのは一體どんなお姿になられたのか知らと、
右近はお氣の毒で。
我も隱ろへて―右近は陰にはひつて。
劣らず―薫に負けない。
近う寄りて……匂宮が浮舟に。
例の御座にこそ―いつもの處で御やすみなされませ。
寢つる人々起して―浮舟の側に寢てゐた侍女達を右近が起して。
御供の人など……薫の御供人等はいつも拂の方に行つて控へて居り、浮舟の方では一切世話やかぬ事に仕馴れてゐるので、猶更人違ひとは氣が附かず。
あはれなる夜の……有り難い今夜のお出で御座いますこと、こんな御深切な御態度を浮舟樣がお酌み取りなさらぬ事よ。
あなかま給へ―まあやかましい、よして下さい。
夜聲は……夜の聲音はさゝやくのが却て耳につく。
女君は……浮舟は人違ひであつたわいと感づくと。
いとつゝましかりし所……非常に憚るべき二條院に於てすら、無理な事をなさらうとした匂宮の御氣象だから。
初より……最初から人違ひと分つて

めての程にもこれは縫ひてむ。急がせ給ふとも、御車は日闌けてぞあらむ」といひて、仕さしたる物ども取り具して、几帳にうち懸けなどして轉寢のさまに寄り臥しぬ。君も少し奥に入りて臥す。右近は北面にいきて、暫しありてぞ來たる。君のあと近く臥しぬ。ねぶたしと思ひければ、いと疾う寢入りぬる氣色を見給ひて、又せむやうもなければ、忍びやかにこの格子を叩き給ふ。右近聞きつけて、「誰ぞ」と問ふ。聲づくり給へば、あてなる咳と聞き知りて、殿のおはしたるにやと思ひて、起きて出でたり。「匂まづこれ開けよ」と宣へば、「右近あやしう覺なき程にも侍るかな。夜はいたう更けて侍らむものを」といふ。「匂物へ渡り給ふべかゝなりと、仲信がいひつれば、驚かれつるまゝに出で立ちて、いとこそわりなかりつれ。まづ開けよ」と宣ふ聲、いとようまねび似せ給ひて忍びたれば、思ひも寄らずかい放つ。「匂道にて、いとわりなくいと恐ろしき事のありつれば、怪しき姿になりてなむ。火暗うなせ」と宣へば、「右近あなゆゝしみじ」とあわて惑ひて、火は取り遣りつ。「匂われ人に見すなよ。來たりとて、人驚かすな」と、いとらう〳〵じき御心にて、もとよりもほのかに似たる御聲を、只かの御けはひにまねびて入り給ふ。「ゆゝしき事の樣」と宣へる、いかなる御姿ならむといとほしくて、我も隱ろへて見奉る。いと細やかになよ〳〵と裝束きて、かの芳ばしき事も劣らず。近う寄りて御衣どもぬぎ、馴れ顏にうち臥し給へれば、「例の御座にこそ」などいへど、物も宣はず。御衾まゐりて、寢つる人々起して、少し退きて皆寢ぬ。御供の人など、例のこゝには知らぬならひにて、「あはれなる夜のおはしまし樣かな。かゝる御有樣を御覽じ知らぬよ」など、さかしらがる人もあれど、「右近あなかま、給へ。夜聲はさゝめくしもぞ、囂がましき」などいひつゝ寢ぬ。女君は、あらぬ人なりけりと思ふに、淺ましういみじけれど、聲をだにせさせ給はず。いとつゝましかりし所にてだに、わりなかりし御心なれば、ひたぶるに淺まし。初よりあらぬ人と知りたらば、聊かいふかひもあるべきを、「浮舟夢の心地するに、やう〳〵その折のつらかりしこと、年頃思ひわたる樣宣ふに、この宮と知りぬ。いよ

ぬたら少しは仕方もあらうに。
その折のつらかりし……あの時二條院で浮舟の態度の心強かつた事や、以來ずつと思ひ續けてゐると仰しやるのによつて、さては匂宮だつたと浮舟は分つた。
かの上の—中の君の。
また猛きこと……別に仕方もない譯なので。
宮もなか〳〵にて—匂宮も生中逢つたものゝこの後は。
又おはしまさむ事も—再びいらつしやる事も。
京には……京では自分が行方不明になつたと大騒で搜されようとも。
何事も生ける限の……すべては生きてゐる間の事だ。拾遺、「戀ひ死なむ後は何せむ生ける身の爲こそ君を見まくほりすれ」の意。
いと心地なしと……誠に思ひやりが無いと思はれようけれど、今日は歸れさうもありません。
男ども—供の者ども。
時方—匂宮の家司、出雲權守。
山寺に忍びて……匂宮樣は密に山寺に御參籠で御座いますと、うまい工合に跋を合はせて置け。
心もなかりける……自分の不注意から起つた昨夜の失態を思ふと。
今はよろづに……かうなつては色々と恣ひ驚いでも。右近の心。
なめげなり—それも匂宮に失禮だ。
怪しかりし折に……二條院で匂宮が浮舟を搖んだ時深く思込みなされたのも。
人の仕たる業かは—人爲での過失でなく全く運命なのだ。
今日御迎にと……石山詣の爲今日母君の方からお迎に來る筈で御座いますのに。
なほ今日は……矢張今日は一旦お歸になつて、思召がありましたら又御ゆつくりお出下さいまし。
およずけても……老巧な事を右近がいふわいと匂宮は思召して。
物思ひつるに—浮舟の事を思ひ續けてゐる爲にぼけてしまつたから。
人のもどかむも……人が非難しようが何といはうが氣にもかゝらず、一途な心持になつてしまつた。
御返りには—お迎が來たらその御返事には。
人に知らるまじきこと……私が忍んで來た事を人に氣付かれぬやうな工夫を、浮舟の爲にも私の爲にもして下さい。
異事は……外の事では斷りの役にたぬ。
この人の……匂宮は浮舟が世にも不思議な位可愛く思はれるにつけ。

いよ恥かしく、かの上の思さむことなど思ふに、また猛きことなければ、限なう泣く。宮もなか〳〵にて、たはやすく逢ひ見ざらむことを思すに、泣き給ふ。

夜はたゞ明けに明く。御供の人來て聲づくる。右近聞きて參れり。出で給はむ心地もなく、飽かずあはれなるに、又おはしまさむ事も難ければ、京には求め騒がるとも、今日ばかりはかくてあらむ、何事も生ける限の爲こそあれ、只今出でおはしまさむは、誠に死ぬべく思さるれば、この右近を召し寄せて、「いと心地なしと思はれぬべけれど、今日はえ出づまじうなむある。男どもは、このわたり近からむ所に、よく隱ろへて侍へ。時方は京へ物して、『山寺に忍びてなむ』と、つき〴〵しからむ樣に答へなどせよ」と宣ふに、いと淺ましくあきれて、心もなかりける夜の過ちを思ふに、心地も惑ひぬべきを思ひ靜めて、今はよろづにおぼほれ騒ぐともかひあらじものから、なめげなり、怪しかりし折に、いと深う思し入れたりしも、かう遁れざりける御宿世にこそありけれ、人の仕たる業かはと思ひ慰めて、「今日御迎にと侍りしを、いかにせさせ給はむとする御事にか。かう遁れ聞えさせ給ふまじかりける御宿世は、いと聞えさせ侍らむ方なし。折こそいとわりなく侍れ。なほ今日は出でおはしまして、御志侍らばのどかにも」と聞ゆ。およずけてもいふかなと思して、「我は、月ごろ物思ひつるにほれ果てにければ、人のもどかむもいはむも知らず、ひたぶるに思ひなりにたり。少しも身の事を思ひ憚らむ人の、かゝるありきは思ひ立ちなむや。御返りには、今日は物忌などいへかし。人に知らるまじきことを、誰が爲にも思へかし。異事はかひなし」と宣ひて、この人の、世に知らずあはれに思さるゝまゝに、よろづの謗も忘れ給ひぬべし。右近出でて、この音なふ人に、「かくなむ宣はするを、『猶いと片はならむ』とを申させ給へ。淺ましうめづらかなる御有樣は、さ思し召すとも、かゝる御供の人どもの御心にこそあらめ。いかでかう心幼うは率て奉り給ひしぞ。なめげなることを聞えさする山賤なども侍らましかば、いかならまし」とい

この晉なふ人に―お歸の催促をしてゐる大内記に。

猶いと片はならむと……矢張それはいけますまいと、貴方から匂宮樣へ申上げて下さい。

淺ましうめづらかなる……呆れる程珍しい匂宮樣のお振舞でさう思召さうとも、お供の方々の心得で然るべくお扱ひ申すべきでせう。

率て奉り給ひしぞ―御案内申されましたか。

なめげなること……こんな無體なお仕打について失禮な事をいふ土地の者共でもありましたら。

さなむ―匂宮樣からその時方にかく御命令がありました。

かく給ふこと……貴女のお叱りが恐しいので匂宮樣の御命令がなくとも逃げて歸りませう、實を申しますと、匂宮樣の並々ならぬ御執心を存じて居りますので皆々一生懸命でお供したのです。

宿直人も……見付からぬうちに出ようの意を含む。

いかゞはたばかるべきと―どうして細工しようぞ到底出來まいと。

殿は……薫君は仔細があつて。

道にて……昨夜いらつしやる途中で何かひどい事があつたに違ない。

例の御前も……いつもの通りお先拂ふ。内記は、げにいと煩はしくもあるかなと思ひ立てり「時方」と仰せらるゝは誰にか、さなむ」と傳ふ。笑ひて、「拙へ給ふことどもの恐ろしければ、さらずとも逃げてまかでぬべし。まめやかには疎ならぬ御氣色を見奉れば、誰も〳〵身を捨てゝなむ。よし〳〵、宿直人もみな起きぬなり」とて、急ぎ出でぬ。右近、人に知らすまじうは、いかゞはたばかるべきと、わりなう覺ゆ。人々起きぬるに、「殿はさるやうありて、いみじう忍びさせ給ふ氣色見奉れば、道にていみじき事のありけるなるめり。御衣どもなど、夜さり忍びて持て參るべくなむ仰せられつる」などいふ。御達「あなむくつけや。木幡山はいと恐ろしかゝなる山ぞかし。例の御前もおはせ給はず、寢れておはしましけむよ。あないみじや」といへば、「あな、かま〳〵。下衆などの座ばかりも聞きたらむに、いといみじからむ」といひ居たる、心地おそろし。あやにくに殿の御使のあらむ時、いかにいはむと、長谷の觀音、今日事なくて暮し給へと、大願をぞ立てける。

もおさせにならず。

塵ばかりも……少しでも樣子を聞いたら色々取沙汰して困りませう。

心地おそろし―右近はそんな風にいひ繕ひつゝも内心は恐しい。

あやにくに……若しも生憎薫君の御使でも來たら何といはうかと。

この人々も―侍女達も。

さらば今日は……薫君が御逗留では今日は浮舟樣はお出かけはむづかしいなあ。

物忌など―簾に物忌といふ簡など。附けたり―貼り附けた。

母君もや……母君が或は御自身迎へに來はなさらぬかと恐れて、右近は浮舟の夢見が穏かでなかつたからと口實を設けて面會おさせ申すまいとしたのである。

まかなひ目醒ましう……匂宮はその器などの十分でないのをひどいと思召して。

そこに洗はせ給はゞ―貴女がお洗ひなされたら私も一緒に洗ひませうよ。浮舟が自分の手水を匂宮に讓つたのに對していふ。

女いと樣よう……浮舟は今まで誠に落着いた奥ゆかしい薫を見馴れてゐたのに、片時も見なければ焦れ死にしさうだといふ激情的な匂宮を見て。

石山に今日詣でさせむとて、母君の迎ふるなりけり。この人々も皆精進し、清まはりてあるに、「御述な。いと口惜しきこと」といふ。日高くなれば、格子など上げて、右近ぞ近く仕うまつりける。母屋の簾は皆おろし渡して、物忌など書かせて付けたり。母君もや自らおはするとて、「夢見さわがしかりつ」といひなすなりけり。御手水など參りたる樣は、例のやうなれど、まかなひ目醒ましう思されて、「そこに洗はせ給はゞ」と宣ふ。女、いと樣よう心にくき人を見慣らひたるに、時の間も見ざらむは死ぬべしと思し焦がるゝ人を、志深しとは、かゝるをいふにやあらむと思ひ知らるゝにも、怪しかりける身かな、誰も物の聞えあらばいかに思さむと、まづかの上の御心を思ひ出で聞ゆれど、「知らぬを、返す〴〵いと心憂し。猶あらむまゝに宣へ。いみじき下衆といふとも、いよ〳〵なむあはれなるべき」と、わりなう問ひ給へど、その御答は絶えてせず。異事は、いとをかしく氣ぢかき樣に答へ聞えなどして靡きたるを、いと限なうらう

怪しかりける……數奇な運命の我が身だなあ。
誰も物の聞え……薫や母君や中の君なども、私と匂宮との間の事が聞えたら何と思召すだらうと。
かの上の御心―中の君の思はく。知らぬを―匂宮の方では浮舟と中の君との關係を知らぬので。
猶あらむまゝに……どうでも御身分を有りの儘に仰しやい、假令貴女がひどい下賤の身分でも益々私は可愛く思ひませう。
異事は―身分種性以外の事は。
迎の人―母君邸より浮舟を迎の人。
品々しからぬけはひ―上品ならぬ樣子をして。
囀りつゝ……母君邸の家來は東人なるゆゑ、物言ひの訛つた趣。
人々かたはら痛がりつゝ―女房達は氣の毒がりつゝ。
あなたに隱れよ……女房達は匂宮を薫と思込んで居り、浮舟の石山詣は薫には秘密の筈だつた故、この迎の者共が薫の目に觸れぬやうとの心遣ひでかくいふ。
如何にせむ……どうしたものだらう、薫君の御入來ゆゑといつて斷つたら、京で薫君程の人の在不在は、然浮舟の母君の方へもよくお分りかも知れない。

たしとのみ見給ふ。日高くなるほどに、迎の人きたり。車二つ、馬なる人々の、例の荒らかなる七八人、男ども多く、品々しからぬけはひ、囀りつゝ入り來たれば、人々かたはら痛がりつゝ、「あなたに隱れよ」といはせなどす。右近、如何にせむ「殿なむおはする」といひたらむに、京にさばかりの人のおはしおはせず、おのづから聞き通ひて、隱れなき事もこそあれと思ひて、この人々にも殊にいひ合はせず、返事書く、右近ノ女

「夜べより穢れさせ給ひて、いと口惜しき事を思ひ歎くめりしに、今宵夢さわがしく見えさせ給へれば、今日ばかり慎ませ給へとてなむ、物忌にて侍る。返す〳〵口惜しく、物の妨げのやうに見奉り侍る」と書きて、人々に物など食はせてやりつ。尼君にも、「今日は物忌にて渡り給はぬ」といはせたり。

例は暮し難くのみ、霞める山際をながめ侘び給ふに、暮れゆくはわびしくのみ思し入らるゝ人に惹かれ奉りて、いとはかなう暮れぬ。紛る事なくのどけき春の日に、見れども〳〵飽かず、その事ぞと覺ゆる

この人々にも……右近は他の侍女達にも談合せずに。
穢れさせ……浮舟樣が月の障がお始りなされて石山詣に行けぬのが誠に殘念と悲んでいらつしやる處に。
夢さわがしく―夢見がわるく。
人々に―迎の男共に。
渡り給はぬ―浮舟樣はお出かけになりません。
例は暮し難くのみ……いつもは浮舟は日々凰託ばかりして。
暮れゆくは……日の暮れるのは歸る時が近づくので只管嫌つていらつしやる匂宮にひかれて。
見れども〳〵……匂宮は浮舟をいくら眺めても飽きず、これが缺點だと思はれる所もなく。
對の御方―中の君。
大殿の君の……六の君の今や盛の立派な御樣子の側に持つて行つてはひどく劣りさうな程の浮舟を、匂宮は丁度夢中になつて居られる折なので、二人とない女のやうに見ていらつしやる。
女は―浮舟は。
こよなくおはしけりと―匂宮の方がこの上なく優れていらつしやるわいと。
手習などし給ふ―匂宮が無駄書きなどなさる。

限なく、愛敬づき懷かしくをかしげなり。さるは、かの對の御方には劣りたり。大殿の君の盛に匂ひ給へるあたりにては、こよなかるべき程の人を、類なく思さるゝほどなれば、まだ知らずをかしとのみ見給ふ。女はまた、大將殿をいと清げに、又かゝる人あらむやと見しかど、こまやかに匂ひ清らなる事は、こよなくおはしけりと見る。硯ひき寄せて手習などし給ふ。いとをかしげに書きすさび、繪などを見處おほく描き給へれば、（浮舟ノ）若き心地には思ひも移りぬべし。「心より外にえ見ざらむ程は、これを見給へよ」とて、いとをかしげなる男女、もろともに添ひ臥したる繪を描き給ひて、「常にかくてあらばや」など宣ふも、涙おちぬ。

「永き世をたのめてもなほ悲しきは
　たゞあす知らぬ命なりけり」

いとかう思ふこそゆゝしけれ、心に身をも更にえまかせず、よろづにたばからむ程、まことに死ぬべくなむ覺ゆる。つらかりし御有樣を、な

思ひも移りぬべし—匂宮は或は氣が移りもしさうだ。心より外に……思ふに任せず私が逢ひに來られぬ時は。永き世を……未來永劫變るまいと約束をしても矢張思ふに任せず悲しいのは明日をも知らぬ果敢ない命ですねえ。

ゆゝしけれ—緣起でもない。

心に身をも……私は思ふ通りに勝手に身を振舞ふ事も出來ず、樣々と貴女に逢ふ工夫を凝す間に。つらかりし御有樣を……無情な御態度だつたものを、生中何で貴女を見つけ出した事やら、いつそあの儘逢はぬがましな位でした。

心をば……定めのないのは命だけだと思つてよいこの世の中なら、男心の定めなさを歎かなくても濟みませうに、男心は猶更定めないもの故不安で御座います。

變らむをば……私が心變りしたら浮舟は怨めしく思ふに相違ないと御覽なさるにつけても。

いかなる人の……誰の心變りに戀りてそんな事を仰しやるのですか。定めて薫の心が變つたのでせうとの諷意。

大將のこゝに……薫が浮舟を此處に隱して置くやうになつた動機を。

かなか何に尋ね出でけむ」など宣ふ。女、濡らし給へる筆を執りて、

「心をばなげかざらまし命のみ
さだめなき世と思はましかば」

とあるを、變らむをば怨めしう思ふべかりけりと見給ふにも、いとらうたし。「いかなる人の心がはりを見習ひて」など、ほゝ笑みて、大將のこゝに渡しそめ給ひけむ程を、返す〴〵ゆかしがり給ひて問ひ給ふを苦しがりて、「えいはぬ事をかう宣ふこそ」と、うち怨じたる樣も若びたり。自らそれは聞き出でむと思すものから、いはせまほしきぞわりなきや。夜さり京へ遣はしつる大夫參りて、右近に逢ひたり。「后の宮よりも御使參りて、左の大臣もむづかり聞えさせ給ひて、「人に知られさせ給はぬ御ありきは、いと輕々しく無禮なる事もあるを、すべて內裏などに聞し召さむ事も、身の爲なむいと辛き」と、いみじく申させ給ひけり。『東山に聖御覽じに』となむ、人には物し侍りつる」など語りて、「女こそ罪深うおはするものにはあれずゝろなるけそうの

えいはぬ事を……私のいへない事をそんなにお責めになるのが怨めしう御座います。

いはせまほしき……浮舟に白狀させたいのが。

大夫—時方。

后の宮—明石中宮。

左の大臣も……夕霧も攫錄わるく小言を仰しやつて。

人に知られさせ給はぬ……人目を避けるお忍び歩きは。

すべて內裏などに……一體帝などのお耳に入つても私(夕霧)の失態になつて迷惑致します。

東山に……そこで、匂宮樣は東山に聖に面會にいらつしやいました、と私(時方)が人にはいひ繕つて置きました。

すゞろなるけさうの人……何でもないそばあたりの私共にまで迷惑をさせ嘘までおつかせなさる。けそうは見處又は顯證の字音と舊註にあるが、宣長は一本にけんそうとあるのに據り眷屬の字音とした。

聖の名をさへ……その聖の名まで貴方がはつきり仰しやつたので好都合です、人は皆信ずるでせう。

私の罪も……それで匂宮樣の內證のお罪滅しにもなりませうよ。聖に逢へば罪滅しにならうとの戯言。

誠にいと怪しき御心……ほんに匂宮様は、こんなとんでもないお心がどうして何時お付きになつたのでせう。

かねてから……前以てかうしてお出下さると承つたにしても、誠に恐れ多い次第ゆゑ當方で何とか取計らひましたものを、輕卒なお忍び歩きですこと。

参りて……右近は匂宮の御前に出てかく〳〵と時方の調を申上げると。

所狹き身こそ……身分高く萬事に窮屈な我が身が迷惑な事だわい。

いかゞすべき……どうしたらよいのか、この通り浮舟戀しさに憚るべき人目も憚り得られさうもない。

さるべき程とは……自分と薫とは元來親しいのが當然の間柄だとはいひながら。

かゝる心の隔の……今更薫の愛人を奪ふやうな、かうした隔意が薫に知られたら。

世の譬に……世間の譬にも我が過失は襖に上げて人の過失のみ咎め立するといふ事もある故。

特遣なる……薫も餘り氣長に構へて浮舟に特遣く思はせた自身の過失をも構はず、それ故出來た密通一件の爲浮舟が薫に怨まれさうな事をまで匂宮は可愛さうに思召す。

人をさへ惑はし給ひて、空言をさへせさせ給ふよ」といへば、「聖の名をさへ告げ聞えさせ給ひてければ、いとよし。私の罪もそれにて滅ぼし給はむ。誠にいと怪しき御心の、げにいかで習はせ給ひけむ。かねてかうおはしますべしと承はらましにも、いと辱なければ、たばかり聞えさせてましものを、奥なき御ありきにこそは」と扱ひ聞ゆ。參りて、さなむとまねび聞ゆれば、げにいかならむと思しやるに、「所狹き身こそわびしけれ。輕らかなる程の殿上人などにて、暫しあらばや。いかゞすべき。かうつゝむべき人目も、え憚りあふまじくなむ。大將もいかに思はむとすらむ。さるべき程とはいひながら、怪しきまで昔より睦ましき中に、かゝる心の隔の知られたらむ時、恥かしう、又いかにぞや。世の譬にいふ事もあれば、待遠なるわが怠をも知らず、怨みられ給はむをさへなむ思ふ。夢にも人に知られ給ふまじき樣にて、こゝならぬ所に率て離れ奉らむ」とぞ宣ふ。今日さへかくて籠り居給ふべきならねば、出で給ひなむとするにも、袖の中にぞとゞめ給へらむかし。明けこゝならぬ所に……どこか他の場處へ貴女をお連れ申しませう。

袖の中にぞ……魂は浮舟の袖の中にお留め置きになりませうよ。古今「飽かざりし袖の中にや入りにけむわが魂のなき心地する」による。

人々咳き……お供の者共が咳拂など して咳に御催促申上げる。

諸共に率ておはして……浮舟を伴つてお出になつて。

世に知らず……今貴女と別れて行くにつけても、先に立つ涙の爲に道も分らぬ程になつて、私は譬て經驗した事もない位惑ふ事でせう。

涙をも……涙さへ狹い私の袖に振き留めかねてゐて、どうして貴方をおのがきぬ〳〵……互の別が冷たくなつた氣がして。古今、「しののめのほがら〳〵と明けゆけばおのがきぬ〳〵なるぞ悲しき」。

引き返すやうに……引返しでもしたい程ひどく溜らないけれど。

いと戯れにくしと……本氣になつて是非お供して歸らねばならぬと。

五位二人……大内記と時方。

おの〳〵……大内記と時方と二人も。

昔もこの道……譬ても匂宮は宇治通ひをなされた時だけ。

怪しかりける里の……不思議なこの果てぬ先にと、人々咳き驚かし聞ゆ。妻戸に諸共に率ておはして、え出でやり給はず。

「世に知らず惑ふべきかな先に立つ
涙も道をかきくらしつゝ」

女も限なくあはれと思ひけり。

「涙をもほどなき袖にせきかねて
いかに別れをとゞむべき身ぞ」

風の音もいと荒ましう、霜ふかき曉に、おのがきぬ〳〵も冷かになりたる心地して、御馬に乘り給ふほど、引き返すやうに淺ましけれど、御供の人々、いと戯れにくしと思ひて、只急がしに急がし出づれば、我にもあらで出で給ひぬ。この五位二人なむ、御馬の口には侍ひける。さかしき山越え果てゝぞ、おの〳〵馬には乘る。汀の氷を踏みならす馬の足音さへ、心ぼそく物悲し。昔もこの道にのみこそは、かゝる山踏はし給ひしかば、怪しかりける里の契かなと思す。

宇治の里の宿縁よ。
女君の……中の君が心外だつた浮舟の事の隠し立も匂宮はつらいので。
心安き方―氣樂な御自分の部屋。
物思まされば―浮舟の懸しさが益々募るので。
心弱く對に―頑張り切れず中の君のお部屋に。
見給ひし人―浮舟。
率て入り―御帳の内に伴つて入り。
まろはいみじく……私は深く貴女を愛してゐても、私の死後は貴女のお心は早速變つて薫に靡くでせうねえ。
人の本意は……人の一念は必ず徹るもの故薫の思は遂げられませう。
かう聞きにくき事の……そんなけしからぬお言葉が薫の方へ知れましたら、私がどんな風に薫の事を貴方に申上げたのかと薫も變に思召しさうなの事―何でもない戯。
すゞろなる事―何でもない戯。
まめだち給ひて―眞顔になられて。
まことにつらしと……戯でなく本當に私が貴女を無情な人と思ふやうな事でもあつたら。
人もあり難しなど……餘り貴女を愛し過ぎると、人も非難する位です。
人にはこよなう―私を薫に比べては甚しく。

二條院におはしまし著きて、女君のいと心憂かりし御物隠しもつらければ、心安き方に大殿籠りぬるに、寢られ給はず、いと寂しきに物思まされば、心弱く對にわたり給ひぬ。何心もなく、いと清げにておはす。珍しくをかしと見給ひし人よりも、亦これは猶あり難き樣はし給へりかしと、見給ふものから、いとよく似たるを思ひ出で給ふも、胸塞がれば、いたく物思したる樣にて、御帳に入りて大殿籠る。女君も率て入りきこえ給ひて、「心地こそいと惡しけれ。いかならむとするにか」と、心細くなむある。まろはいみじくあはれと見置い奉るとも、御有樣はいと變りなむかし。人の本意は必ず叶ふなれば」と宣ふ。怪しからぬ事をも、まめやかにさへ宣ふかなと思ひて、「かう聞きにくき事の漏り聞えたらば、いかやうに聞え成したるにかと、人も思ひ寄り給はむこそ淺ましけれ。心憂き身には、すゞろなる事もいと苦しく」とて、背き給へり。宮もまめだち給ひて、「まことにつらしと思ひ聞ゆることもあらむは、いかゞ思さるべき。まろは御爲には疎なる人かは。人も、あり

ことわらるゝを―合點されるが。
隔て給ふ御心の……私に隠し立なさるお心の深いのが。浮舟の一條をいふ。
宿世の……宿縁が深ければこそ浮舟に逢ひ當つたのだと。
まめやかなるを……匂宮が眞顔なのを中の君はお氣の毒に思ひ、浮舟の身に就いてどんな事をお聞込みなされたのか知らんと。
物はかなき……匂宮が自分を娶る最初が、正式な儀禮もなくずる〳〵であつたといふ事から、總て薫をもそんな輕々しい者と推量なさるのであらう、それについても由ない人(薫)を力にしてその眞情を汲み知り、遂に一夜を共に明したりした失態ゆゑに、かく匂宮の愛情が十分でない我が身なのだと、中の君は思ひ續けるのも。
かの人見つけたる事……匂宮は浮舟を見つけた事は當分中の君に秘して置かうと思召す故、他の事に託して中の君に怨をいふのを、中の君の方では只薫の戀慕の事を匂宮が本氣で邪推なさるのだと思召すので、誰が好い加減な嘘を眞實らしく告口したのだらうと思召す。
ありやなしやを……告口した者の有無を確に聞かぬ中は。

難しなど咎むるまでこそあれ。人にはこよなう思ひ貶し給ふべかめり。それもさるべきにこそはと、ことわらるゝを、隔て給ふ御心の深きなむ、いと心うき」と宣ふにも、宿世の疎ならで尋ね寄りたるぞかしと思し出づるに、涙ぐまれぬ。まめやかなるをいとほしう、いかやうなる事を聞き給へるならむと驚かるゝに、答へ聞え給はむ事もなし。物はかなき樣にて見そめ給ひしに、何事をも輕らかに推し量り給ふにこそはあらめ、すゞろなる人をしるべにて、その心寄せを思ひ知りはじめなどしたる過ちばかりに、覺劣る身にこそと思し續くるも、よろづ悲しくて、いとゞらうたげなる御けはひなり。かの人見つけたる事は、暫し知らせ奉らじと思せば、異樣に思はせて怨み給ふを、只この大將の御事を、まめ〳〵しく宣ふと思すに、人や空言をたしかなるやうに聞えたらむなど思す。ありやなしやを聞かぬ間は、見え奉らむも恥かし。内裏より大宮の御文あるに、驚き給ひて、なほ心解けぬ御氣色にて、あなたに渡り給ひぬ。「昨日のおぼつかなさを惱ましく思されたゝな

大宮—明石中宮。
あなたに—御自分のお部屋に。
昨日の……昨日貴方の參内を待ちぼうけたのを帝が心配していらつしやいます。
久しうも……私も久しくお目にかゝりませんものを。
騒がれ奉らむも—匂宮は父帝や御母中宮に御心配かけるのも。
右大將—薫。
こなたにを—をは歎辭。
宮にも—明石中宮も。
見るからに……匂宮は薫を見るより良心の咎めが一層甚しいので。
聖だつと……薫は如何に清僧めいた態度とはいひながら餘り甚しい脫俗した心持ではある、浮舟のやうなあんな可憐な愛人を捨置いて。
山伏心—山籠りする修行者の道心。
例はさしも……平常は何でもない場合にすら、薫が自分は實直者だと標榜言明なさるのを、匂宮が憎らしく思つて色々辯駁なさるのに。
かゝる事……薫が浮舟を隱してゐる事を匂宮は發見したので何と仰しやつたものだらうか、どんな攻擊でもしてよい筈である。
おどろ〳〵しからぬ……大して重態でもない御氣分の、それでも永く續くのは。

る。よろしくは參り給へ。久しうもなりにけるを」などやうに聞え給へれば、騒がれ奉らむも苦しけれど、まことに御心地も違ひたるやうにて、その日は參り給はず。上達部などあまた參り給へれど、御簾の内にて暮し給ふ。

夕つ方右大將まゐり給へり。「こなたにを」とて、うち解けながら對面し給へり。「惱ましげにおはしますと侍りつれば、宮にもいと覺束なく思し召してなむ。いかやうなる御惱みにか」と聞え給ふ。見るからに、御心騒のいとゞまされば、言少なにて、聖だつといひながら、こよなかりける山伏心かな、さばかりあはれなる人をさて置きて、心のどかに月日を待ち侘びさすらむよと思す。例はさしもあらぬ事の序にだに、我は實人ともてなし名のり給ふを、妬がり給ひて、よろづに宣ひ破るを、かゝる事見顯いたるを、いかに宣はまし。されどさやうの戯れ言もかけ給はず、いと苦しげに見え給へば、いと不便なる業かな、おどろおどろしからぬ御心地の、さすがに日數經るは、いと惡しき業に侍る。御

御風よく……御風邪をよくし療養なさいませ。
恥かしげなる……薫は立派な人だなあ、私の樣子を薫に比較して浮舟がどう思つたか知らん。
只この人を—浮舟の事を。
彼處には石山も……浮舟の處では石山詣も中止になつて。
御文には—匂宮からのお手紙には。
それだに心安からず……お手紙でもまだ御安心が出來ず、時方とお呼びになつたあの五位の男の家來で、事情を知らぬのを擇んで宇治へ使におやりになつた。
右近が舊く……私が舊くから知つてゐた人で先頃薫君のお供で來て私を見つけ出し、更に昔に立返つて親密に使をよこすのですよ。
虛言し慣らひける—匂宮と浮舟との間について一切言ひくるめた。
おはします事は—浮舟の許へいらつしやる事は。
かうのみ物を……こんなに浮舟の事を思ひつめてばかりゐては。
大將殿……薫は少しお暇が出來た頃例の如く忍んで宇治にお出かけになつた。
夕つ方……暮方になつて浮舟の處には忍んで來られたが、薫は匂宮のやうに無暗に姿をお窶しもなさら

風よく繕はせ給へ」など、まめやかに聞え置きて出で給ひぬ。恥かしげなる人なりかし、我が有樣をいかに思ひ比べけむなど、樣々なる事につけつゝも、只この人を時の間忘れず思し出づ。彼處には、石山もとまりて、いと徒然なり。御文には、いといみじき事を書き集め給ひて遣はす。それだに心安からず、時方と召しゝ大夫の從者の、物の心も知らぬしてなむ遣りける。「右近が舊く知れりける人の、殿の御供にて尋ね出でたる、更返りて懇がる」と、友達にはいひ聞かせたり。よろづ右近ぞ虛言し慣らひける。月も立ちぬ（匂宮ハ）かう思し入らるれど、おはします事はいとわりなし。かうのみ物を思はゞ、更にえ永らふまじき身なめりと、心細さを添へて歎き給ふ。

大將殿、少しのどかになりぬる頃、例の忍びておはしたり。寺に佛など拜み給ひ、御誦經せさせ給ふ。僧に物賜ひなどして、夕つ方こゝには忍びたれど、これはわりなくも窶し給はず、烏帽子直衣の姿、いとあらまほしく清げにて、歩み入り給ふより、恥かしげに用意殊なり。女、いか

ないで。

女いかで……浮舟はどうして薫にお目にかゝれようかと。

あながちなりし人の御有樣—無理な程熱心であつた匂宮の御樣子が。

この人に—薫に。

我は年頃……匂宮が、自分は貴女に逢つて以來これまで關係してゐた女をも皆嫌になりさうな氣がすると仰しやつたが、成程その後御氣分が惡いといつて諸方の女方の許へも平素のやうな風にお通ひなさらず。浮舟の心。

又いかに聞きて……又今宵薫の來られた事を聞いてどう思召すだらうかと思ふのも、浮舟は誠に苦しい。

久しかりつる程の……永く御無沙汰をした詫などを仰しやるのも。

戀し悲しと……戀しい可愛いと一生懸命に仰しやらぬが。

いみじくいふには勝りて—大仰に口に出していふ以上に。

占め給へる—具備していらつしやる。

艷なる方は……風流な色つぽい方は乏しいがそれはそれとして。

頼みぬべき人の……信頼してもよいやうな薫の氣風などは匂宮よりも勝つていらつしやる。

思はずなる……匂宮に心率かれてゐる浮舟のとんでもない不料簡など

で見え奉らむとすらむと、空さへ恥かしく恐ろしきに、あながちなりし人の御有樣、うち思ひ出でらるゝに、又この人に見え奉らむを思ひ遣るなむ、いみじう心憂き。「我は年頃見る人をも、皆思ひかはりぬべき心地なむする」と宣ひしを、げにその後、御心地苦しとて、いづくにもいづくにも、例の御有樣ならで、御修法など騒ぐなるを聞くに、又いかに聞きて思さむと思ふもいと苦し。この人はた、いとけはひ殊に心深く、なまめかしき樣して、久しかりつる程の怠など宣ふも、言多からず、戀し悲しとおり立たねど、常に逢ひ見ぬ戀の苦しさを、樣よき程にうち宣へる、いみじくいふには勝りて、いとあはれと人の思ひぬべき樣を、占め給へる人柄なり。艶なる方はさるものにて、行末長く頼みぬべき人の心ばへなど、こよなく勝り給へり。思はずなる樣の心ばへなど漏り聞かせ給はむ時、なのめならずいみじくこそあゝべけれ、怪しう現心もなく思しいらるゝ人を、あはれと思ふも、それはいとあるまじく輕き事ぞかし、この人に憂しと思はれて、忘れ給ひなむ心細さは、いと

を薫が聞れ聞かれたら。

現心もなく……前後の分別もなく浮舟を熱愛なさる匂宮を浮舟が憎からず思ふのも。

この人に—薫に。

忘れ給ひなむ……薫が浮舟をお忘れなされたらその時の心細さは浮舟には非常にこたへるだらうから。

月頃に……この數ケ月の間に浮舟は大變物が分り大人らしくなつて來たなあ、寂しい住居にゐて樣々の物思といふ物思を仕盡した結果であらう、と薫は御覽になるのも。

造らする所—浮舟を引取る爲に修築させてゐる京の家。

一日なむ……先日見分に行つた處がこの宇治川よりもつと人げ近い川のほとりで。賀茂川であらう。

さりぬべくは……差支がなかつたら貴女を引取りませう。

かの人の……匂宮が、浮舟を住ませる爲に閑靜な所を用意したと。

そなたに—匂宮の方に。

ありし御樣の—あの時の匂宮の御樣子が。

御心ばへの……今まで貴女のお氣質がこんなに過敏でなく、もつと大樣だつたのが。

人のいかに……誰か私の事を何とか讒訴した事でもありますか、少し

深う沁みにければ、（浮舟ノ）思ひ亂れたる氣色を、月頃にこよなう物の心知り、ねびまさりにけり、徒然なる住處の程に、思ひ殘すことはあらじかしと見給ふも心苦しければ、常よりも心とゞめて語らひ給ふ。「造らする所、やう〳〵よろしう仕なしてけり。一日なむ見しかば、こゝよりは氣近き水に花も見給ひつべし。三條の宮も近き程なり。日暮おぼつかなき隔も、自らあるまじきを、この春の程に、さりぬべくは渡してむ」と、思ひて宣ふも、かの人の「のどかなるべき所思ひ設けたり」と、昨日も宣へりしを、（薫ガ）かゝる事も知らで、さ思すらむよとあはれながらも、そなたに靡くべきにはあらずかしと思ふからに、ありし御樣の面影に覺ゆれば、（浮舟ハ）我ながらも、うたて心憂の身やと、思ひつゞけて泣きぬ。「御心ばへの、かゝらでおいらかなりしこそ、のどかに嬉しかりしか。人のいかに聞え知らせたる事かある。すこしも疎ならむ志にては、かうまで參り來べき身の程、道の有樣にもあらぬを」など、朔日ごろの夕月夜に、すこし端近く臥して詠め出だし給へり。男は過ぎにし方のあはれ

でも冷淡な心を持つてゐてはかうまでして訪ねて來るやうな輕い身分でもなく、容易な道中の有樣でもありませんものを。

女は今より……浮舟は薫と匂宮と兩方に心牽かれて今より一層加はつた我が身の苦痛をも歎き加へて。

そのかみの事―大君在世當時の事。いとかゝらぬ人を……こんなに大君に似た人でない女を愛するとしてすらも。

珍しき中の……たまの逢瀬の面白さの澤山湧いて來さうな場合である。まいて戀しき人に……まして浮舟は戀しい大君に比較されたのも甚だしい不釣合でなく。

都馴れゆく―浮舟の田舍臭味がぬけてゆく。

こよなく見まさり……以前よりは非常によく見える感じが薫はなさるのに。

女は掻き集めたる……浮舟はあれやこれや物思が錯綜した胸の中に。

宇治橋の……この宇治橋の長いが如く行末長い貴女との約束は決して反古にはなすまいものを、不安に思つて氣を揉むやうな事をなさらぬが宜しい。

今見給ひてむよ―今に私の心底はお分りになりませうよ。

をも思し出で、女は今より添ひたる身の憂さを歎き加へて、かたみに物思はし。山の方は霞へだてゝ、寒き洲崎に立てる鷺の姿も、處がらはいとをかしう見ゆるに、宇治橋のはる〳〵と見渡さるゝに、柴つみ舟の所々に行きちがひたるなど、外にては目馴れぬ事どものみ、取り集めたる所なれば、(薫ハ)見給ふ度ごとに、猶そのかみの事の只今の心地して、いとかゝらぬ人を見かはしたらむにてだに、珍しき中のあはれ多く添ひぬべき程なり。まいて戀しき人に擬へられたるもこよなからず、やう〳〵物の心知り、都馴れゆく有樣のをかしきも、こよなく見まさりしたる心地し給ふに、女は、掻き集めたる心のうちに催さるゝ涙、ともすれば出でたつを、(薫ハ)慰めかね給ひつゝ、

(薫)「宇治橋のながき契は朽ちせじを
あやぶむ方に心さわぐな

(浮舟)「絶間のみ世には危き宇治橋を

絶間のみ……處々絶間ばかり多くて非常に危險な宇治橋なのに、朽ちないものと猶信頼せよと仰しやるのでせうか、近頃絶間勝で甚だ不安な貴方の御態度を、それでも十分信ぜよとのお言葉でせうか。

さき〳〵よりも……浮舟の樣子が以前よりも一層薫は見捨て難く。

人の物いひの……他人の取沙汰がうるさいので。

今更なり―今更長居するでもない。

從來も長居せぬのにの意を含む。

心安き……今に氣樂な處に引取つた上でなどと薫は考へて。

内裏に……宮中で詩の會をお催しになるといふので。

この宮も大將も―匂宮も薫も。

折にあひたる物の調―時季にあはせた樂調。

梅が枝―催馬樂の曲名。(中卷一〇〇四頁頭註參照。)

すゞろなる事……つまらない女の事に御熱心になられる點だけが。

この宮の御宿直所―禁中に於ける匂宮の御宿直部屋。

物參りなどして―食物を召上つたりなされて。

大將人に……薫が誰かに面會しようと思召して。

おぼ〳〵しきを―ぼんやり見えるのさき〳〵よりもいと見捨てがたく、暫しも立ちとまらまほしく思されど、人の物いひの安からぬに、まいて今更なり、心安き樣にてこそ、など思しなして、曉にかへり給ひぬ。(浮舟ガ)いとようも大人びたりつるかな、(薫ハ)心苦しう思し出づること、ありしに勝りけり。

二月の十日のほどに、内裏に文作らせ給ふとて、この宮も大將も參りあひ給へり。折にあひたる物の調どもに、宮の御聲はいとめでたくて、梅が枝など謠ひ給ふ。(匂宮ハ)何事も人よりは、こよなう勝り給へる御樣にて、すゞろなる事思し苛らるゝのみなむ、罪深かりける。雪俄に降りみだれ、風など烈しければ、御遊疾くやみぬ。この宮の御宿直所に、人々參り給ふ。物參りなどして、うち休み給へり。大將、人に物宣はむとて、少し端近く出で給へるに、雪のやう〳〵積るが、星の光におぼ〳〵しきを、闇はあやなしと覺ゆる匂有樣にて、「衣片しき今宵もや」とうち誦じ給へるも、はかなき事を口ずさみに宣へるも、怪しくあはれなる

朽ちせぬものとなほ頼めとや」

を。

闇はあやなしと……薫が闇にも隠れぬ體香や態度で。古今「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るゝ」による。

衣片しき今宵もや―古今、「さむしろに衣片敷き今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫」。浮舟が私を待つて居らうとの寓意。

はかなき事……何でもない事を口任せに仰しやつても。

事しもこそあれと―諧ふべき歌もあらうにあれを口ずさむとは、餘程薫も浮舟を思つてゐるに違ないと。

宮は―匂宮は。

疎には……薫が浮舟を竝大抵に思つてゐるのではないのだ、浮舟が袖を片敷いて待つてゐるだらうとは私だけの推量のやうな氣がしてゐたのに、薫も矢張私と同じ思なのも哀深い事だ。匂宮の心。

かばかりなる……これ程深く思つてゐる最初からの愛人薫を擱いて。

文奉り給はむ……匂宮が自作の詩を御覧に入れようと帝の御前に。

かの君も……薫もほゞ同じ年輩で今二つ三つ匂宮よりも年長の差があらうか、少し老成になつた。

本に―手本に。

帝の御婿……薫は帝の婿君として不足がないと世人も定評を下した。

公々しき方―政務の才幹。

文講じ果てゝ―詩の披講が終つて。

いかなる心地にて……どんな心の餘裕があつて暢氣にこんな詩作など出來るだらうと、魂も落着かぬやうな心地で浮舟の事のみ思つていらつしやる。

かの人の御氣色にも……匂宮は薫の御樣子を見ても益ゝ油斷出來ぬと警戒の心を生じたので無理な工面をして宇治にお出かけになつた。

友待つばかり消え殘りたる雪―あとから追ひかけて降るのを待つやうに見える雪。殘雪をいふ。

紛れの細道―認めかねた細道。

煩はしき事をさへ……宇治通ひのお供は迷惑な事だとまで考へる。

いづ方にも……本官も兼官も何れにしても相當の官職で安つぽい身ではないものゝ、如何にもお供相應に指貫の裾を引上げたりした姿も。

彼處には……浮舟の方では、匂宮が入らつしやる筈と豫め通知はあつたけれど。

うち解けたるに―氣をゆるしてゐたのに。

消息したり―匂宮の來訪の由を家來が申入れた。

淺ましうあはれと……呆れる程深い

氣色添へる人樣にて、いと物深げなり。事しもこそあれと、宮は、寢たるやうにて御心さわぐ。疎には思はぬなゞめりかし。片しく袖を我のみ思ひやる心地しつるを、同じ心なるもあはれなり。侘しくもあるかな。かばかりなる本つ人をおきて、わが方にまさる思はいかでか着くべきぞと、妬う思さる。つとめて雪のいと高う積りたるに、文奉り給はむとて、御前に參り給へる御容貌、この頃いみじく盛りに清げなり。かの君もおなじ程にて、今二つ三つ勝るけぢめにや、少しねびまされる氣色用意などぞ、殊更にも作りたらむやうに、あてなる男の本にしつべく物し給ふ。帝の御婿にて飽かぬ事なしとぞ、世の人もことわりける。才なども、公々しき方も、後れずぞおはすべき。文講じ果てゝ、皆人まかで給ふ。宮の御文を優れたりと誦じのゝしれど、何とも聞き入れ給はず、いかなる心地にて、かゝる事をも仕出づらむと、空にのみ思ほしほれたり。かの人の御氣色にも、いとゞ驚かれ給ひければ、淺ましうたばかりておはしましたり。

京には友待つばかり消え殘りたる雪、山深く入るまゝに、やゝ降り積みたり。常よりもわりなき紛れの細道をわけ給ふ程、御供の人も、泣きぬばかり恐ろしう煩はしき事をさへ思ふ。しるべの內記は式部の少輔をなむかけたりける。いづ方にも事々しかるべき官ながら、いとつきづきしく引き擧げなどしたる姿も、をかしかりけり。彼處には、おはせむとありつれど、かゝる雪にはとうち解けたるに、夜更けて右近に消息したり。淺ましうあはれと、君も思へり。右近は、いかになり果てぬべし。いひ歸さむ方もなければ、同じやうに睦ましく思いたる若き人の、心樣も奥なからぬを語らひて、「いみじくわりなきこと。同じ心にもて隱し給へ」といひてけり。諸共に入れ奉る。道のほどに濡れ給へる御衣の香の所狹う匂ふも、もて煩ひぬべけれど、かの人の御けはひに似せてなむ、もて紛らはしてける。

夜の程にて、立ち歸り給はむもなか〳〵なるべければ、こゝの人目も

お志よと浮舟も思つた。

いかになり果て……板挟みになつて浮舟様は終にはどうなる事やらと一面には迷惑だけれど、今夜は匂宮の眞實故そんな遠慮も忘れて、御もてなし申す氣になりさうだ。

いひ歸さむ方も……斷つてお歸し申しやうもないので、右近は自分同様に浮舟の親しく思召す若い女房で思慮も淺はかでないのを相談相手にして。この女房は名は侍從。

同じ心に……私と協力して知れぬように取繕つて下さい。

かの人の御けはひ—薫の御様子。

なか〳〵なるべければ—却て來ぬ方がましな位だから。

こゝの人目も……邸内の者共に見られるのも誠に憚られるので。

率ておはせむと—浮舟を連れていらつしやらうと。

先立てゝ……前以てその支度をさせに遣つて置いた時方が。

こはいかにし給ふ……これは一體浮舟様をどうなさるお積りかと。

いかでかなども……どうして御一緒に參られませうぞ、などとも浮舟に口をお利かせなさらず。

こゝの後見に……お留守の始末の爲に居殘り、侍從をお供にやつた。

いとはかなげなるものと……誠に心

いとつゝましさに、時方にたばからせ給ひて、河よりをちなる、人の家に率ておはせむと構へたりければ、先立てゝ遣はしたりける、夜更くる程に參れり。「時方いとよく用意して侍ふ」と申さす。こはいかにし給ふ事にかと、右近もいと心あわたゞしければ、寢おびれて起きたる心地もわなゝかれて、あやしき童べの、雪遊したるけはひのやうにぞ慄ひあがりける。いかでかなどもいひ敢へさせ給はず、かき抱きて出で給ひぬ。右近はこゝの後見にとゞまりて、侍從をぞ奉る。いとはかなげなるものと、あけくれ見出だす小さき舟に乘り給ひて、さし渡り給ふほど、遙ならむ岸にしも漕ぎ離れたらむやうに、心ぼそく覺えて、つと著きて抱かれたるも、いとらうたしと思す。在明の月澄みのぼりて、水の面も曇なきに、「これなむ橋の小島」と申して、御舟しばしさしとゞめたるを見給へば、大きやかなる岩のさまして、されたる常磐木の蔭繁れり。「匂かれ見給へ。いとはかなけれど、千年も經べき緣の深さを」と宣ひて、

細いものだと朝夕浮舟が眺めていらつしやるそんな小舟に今お乘りになつて。

つと著きて—浮舟がしかと匂宮に取附いて。

されたる—形のしやれた。

いとはかなけれど……一寸した小島の岩に根を下したもの故にいふ。

年經とも……橋の小島の崎で今行末の約束をするこの心は常磐の色の橋にかたどつて、假令幾年立たうとも變る事がありませうか、決して變りはしませぬ。

女も……浮舟も何だか目馴れぬ旅にでも出たやうな氣持がして。

たちばなの……橋の小島は翠の色も變りますまいが、浪間に浮ぶこの舟はどこへ漂ひ去る事やら心細い事です、貴方のお心は變りますまいが果敢ない私の身はどうなりますやらと、の意。この歌によりてこの女を假に「浮舟の君」と稱する。

折から人の様に……折といひ浮舟の様子といひ、すべてを誠に情趣面白い事と匂宮は思召す。

抱き給ひて……匂宮御自身に浮舟をお抱きになつて、又御自身は人に介錯されて。

いと見苦しく—高貴の御身分で誠に不體裁な。お供の者の心。

時方が叔父の……浮舟を連れてゆくべき家の説明。疎々しきに―まだ出來上らず萬事整頓してゐないのに。網代屏風―檜網代を屏風に仕立てた物。殊にさはらず―十分遮りきらず。人の御容貌……浮舟の。宮も所狭き……匂宮も人目を憚つてゐる道中ゆゑ、今は微行の姿で輕い御服裝である。狩衣であらう。女も脱ぎすべさせ……浮舟も上の衣を脱ぎすべらかしたので。清らなる人―美しい匂宮。紛れむ方もなし―隠れる處もない。白きかぎりを―白い衣裳ばかりを。常に見給ふ人とても―匂宮はいつも見馴れていらつしやる中の君や六の君でも。かゝるさへぞ―浮舟の人柄のみならず、かうした打解け姿までが。いと目安き―見苦しからぬ。これさへかゝるを……右近のみでなくこの侍從までかうした匂宮との關係をすつかり知る事よと、浮舟はひどく恥かしく思ふ。これはまた誰そ―お前は一體誰だ。侍從に向つていふ。わが名洩らすな―私といふことを喋舌るな。古今、「大上のとこの山なるいさや川いさと答へてわが名洩すな。」

このおはします……匂宮と浮舟とのいらつしやる部屋の遣戸を隔てゝ時方が得意顔してゐる。聲引きしゞめ……宿守が時方を敬ひ聲を落して恐縮しつゝ話をしてゐるのを、時方は碌に返事もせず、貴い匂宮のいらつしやるのも知らず自分如きを宿守が敬ふ事よと可笑しく思つてゐる。いと怖ろしう……これは自分の物忌に託して人を遠ざける時方の計略。いひたり―宿守に申付けた。人目も絶えて―匂宮と浮舟とは人に見られる事もなく。

かの人の……薫の來られた時に浮舟が矢張こんな風に打解けて逢つただらうと、匂宮は推量して。二の宮を……匂宮は薫が女二宮を非常に大切にして奥方にお持ち申していらつしやる有樣なども浮舟にお話になる。

かの耳とゞめ……あの宮中の詩會の時に、薫が浮舟を思つて微吟した「さむしろに」の歌の事は。にくきや……薫の實意ある事は避けていはぬ故。いみじくかしづかる……非常に大事に崇められるお客樣が、そんな小

「年經とも變らむものかたち花の
　小島のさきに契るこゝろは」

女も、珍しからむ道のやうに覺えて、

「たちばなの小島は色も變らじを
　このうき舟ぞゆくへ知られぬ」

折から人の樣に、をかしとのみ何事も思しなす。かの岸にさし著きており給ふに、人に抱かせ給はむはいと心苦しければ、抱き給ひて扶けられつゝ入り給ふを、いと見苦しく、何人をかくもて騒ぎ給ふらむと見奉る。時方が叔父の因幡の守なるが領ずる庄に、はかなう造りたる家なりけり。まだいと疎々しきに、網代屏風など、御覽じも知らぬしつらひにて、風も殊にさはらず、垣のもとに雪むら消えつゝ、今もかき曇りつゝ降る。日さし出でて、軒の垂氷の光りあひたるに、人の御容貌もまさる心地す。宮も所狭き道の程に、輕らかなるべき程の御衣どもなり。女も、脱ぎすべさせ給ひてしかば、ほそやかなる姿付、いとをかしげなり。（浮舟ハ）ひき繕ふこともなくうち解けたる樣をいと恥かしく、まばゆきまで清らなる人にさし對ひたるよと思へど、紛れむ方もなし。（浮舟ハ）懷かしき程なる白きかぎりを五つばかり、袖口裾の程までなまめかしく、色々にあまた襲ねたらむよりも、をかしう著なしたり。常に見給ふ人とても、かくまでうち解けたる姿などは、見慣らひ給はぬを、かゝるさへぞ猶珍かにをかしう思されける。侍從もいと目安き若人なりけり。これさへかゝるを殘なう見るよと、女君はいみじと思ふ。宮も「これはまた誰そ。わが名洩らすなよ」と口固め給ふを、（侍從ハ）いとめでたしと思ひ聞えたり。此處の宿守にて住みけるもの、時方を主と思ひてかしづきありけば、このおはします遣戸を隔てゝ、所得顔に居たり。聲引きしゞめ、畏まりて物語しをるを、答へもえせずをかしと思ひけり。「時方いと怖ろしう占ひたる物忌により、京の内をさへ去りて慎むなり。外の人寄すな」といひたり。人目も絶えて心安く語らひ暮し給ふ。かの人の物し給へりけむに、かくて見えけむかしと思しやりて、いみじく怨み給ふ。二

間使のやうな役をしてはいけませんよ。時方に戯れていふ。
この大夫―時方。五位なのでいふ。
峯の雪……峰の雪や汀の氷を踏分けて通つても道は少しも惑ふ事なく只貴女ゆゑ心を惑はすのみです。
木幡の里に……拾遺、「山城の木幡の里に馬はあれどかちよりぞゆく君を思ひて」。もと萬葉の歌。
手習し―無駄書きのやうに書き。
ふり亂れ……降り亂れて汀に凍りつく雪よりも果敢ない身の私は、中空に消える雪の如くどちら附かずで死んでしまふ事でせう。薫と匂宮と兩方に對する愛の煩悶ゆゑ身を滅しませうとの意を暗示した。
この中空を……匂宮は浮舟が薫の事を下に思つてこの「中空を」と詠んだのを、お咎めなされた。
げに憎くも……浮舟はほんに匂宮の感情を害するやうな歌を我ながら書いたものだと。
人の心に……浮舟の心に思ひ込まれようと。
御物忌……匂宮は物忌で宇治に滯在するのは二日間と京の方は取繕つていらつしやるので。
かたみに―匂宮と浮舟と。
濃き衣―紫色の濃い衣。
あはひをかしう……取合せて着た映りがよく。
榾―上衾。
あざやぎたれば―鮮かになつたから。
君に―浮舟に。
姫宮に……今上の女一宮にこの浮舟を侍女として上げたら非常に御寵愛なさるだらう、女一宮の侍女の中には大變身分高い者も多いが。
忍びて……匂宮は密に浮舟を連出して隱してしまひたいといふ計畫を。
その程……それまでの間薫に逢つてはいけないと、隨分ひどい事を浮舟にお誓はせなさるので。
目の前にだに……今私の目の前だけでも薫を私に思ひ換へるつもりは無いのだなあと。
率て歸り給ふ―匂宮は浮舟を連れて山莊へお歸りになつた。
いみじく思すめる……貴女が大事に思つていらつしやる薫はこんなに親切ではよもやありますまい、お分りになりましたか。
やがてこれより―匂宮はそのまゝ此處から。
二條院にぞ―中の君の御許に。
いと憎しう……その後匂宮は氣分がお勝れにならず。
御文だに―浮舟へのお手紙すら。
彼處にも……宇治でも例のおせつかひの乳母が、暫くは娘の出産の世

の宮をいとやむごとなくて持ち奉り給へる有樣なども語り給ふ。かの耳とゞめ給ひし一言は、宣ひ出でぬぞにくきや。時方、御手水御菓子など取り次ぎて參るを御覽じて、「いみじくかしづかるめる客人の主、さてな見えそや」といましめ給ふ。侍從、色めかしき若人の心地に、いとをかしと思ひて、この大夫とぞ物語して暮しける。雪の降り積れるに、わが住む方を見やり給へば、霞の絶え〴〵に、梢ばかり見ゆ。山は鏡を懸けたるやうに、きら〳〵と夕日に輝きたるに、夜〻わけ來し道のわりなさなど、多く添へて語り給ふ。

匂「峯の雪みぎはの氷踏みわけて
　君にぞまどふ道はまどはず」

木幡の里に馬はあれど」など、あやしき硯召し出でて手習し給ふ。

浮舟「ふり亂れ汀にこほる雪よりも
　中空にてぞわれは消ぬべき」

と書き消ちたり。この中空をとがめ給ふ。げに憎くも書きてけるかな

と、恥かしくて引き破りつ。さらでだに見るかひある御樣を、いよ〳〵あはれにいみじと、人の心に沁められむと、盡し給ふ言の葉、氣色いはむ方なし。御物忌二日とたばかり給へれば、少し心のどかなるまゝに、かたみにあはれとのみ深く思しまさる。右近は、よろづに例のいひ紛らはして、御衣など奉りたり。今日は亂れたる髪少しけづらせて、濃き衣に紅梅の織物など、あはひをかしう著換へて居給へり。侍從も、あやしき褶著たりしを、あざやぎたれば、その裳を取り給ひて、君に著せ給ひて、御手水まゐらせ給ふ。姫宮にこれを奉りたらば、いみじきものにし給ひてむかし、いとやむごとなき際の人多かれど、かばかりの樣したるは難くやと見給ふ。片はなるまで遊び戯れつゝ暮し給ふ。忍びてゐて隱してむことを、返す〴〵宣ふ。「その程、かの人に見えたらば」と、いみじき事どもを誓はせ給へば、いとわりなき事と思ひて、答へもやらず涙さへ落つる氣色、更に目の前にだに思ひ移らぬなゝめりと、胸痛う思さる。恨みても泣きても、よろづに宣ひ明して、夜深く率て歸り

話に行つてゐたのが歸つて來たので、安心して浮舟は匂宮のお文を讀む事も出來ぬ。

かくあやしき住居を……浮舟の現在の住居はこんなに變な田舍ではあるが、只薫が大事にして下さるお取扱を樂みにして。

忍びたる樣……晴れての事ではないが近日京へ引取らうと薫が御決心なされたので。

やう〳〵人求め……段々と相當な侍女などを捜し。

おこせ給ふ―浮舟の方へおよこしなされた。

わが心にも……浮舟自身の心にも薫に引取られるのこそ然るべき事と最初から待つてゐた次第であつた、とは思ひながらも。

あながちなる人―熱烈な匂宮。

いとゞ山路……猶更宇治へ行く事も出來ぬと匂宮は斷念なされて。

親の飼ふ蠶……親に大事にされてゐる身は窮屈なものだわいと匂宮が思召すのも勿體ない話だ。萬葉、「たらちねの親の飼ふ蠶の繭籠りいぶせくもあるか妹に逢はずて」。

書き給ひて……浮舟へ。

ながめやる……貴女戀しさにつくづくと眺めやる宇治の方の空は見えぬ程、心ばかりか空までも掻暮さ

給ふ。例の抱き給ふ。「いみじく思すめる人は、かうはよもあらじよ。見知り給ひたりや」と宣へば、げにと思ひて頷きて居たる、いとらうたげなり。右近、妻戸放ちて入れ奉る。やがてこれより別れて出で給ふも、飽かずいみじと思さる。

かやうの歸さは、なほ一條院にぞおはします。いと惱ましうし給ひて、物なども絶えて聞し召さず、日を經て靑み瘠せ給ふ。御氣色も變るを、內裏にもいづくにも思ほし歎くに、いとゞ物騷がしくて、御文だに細かにはえ書き給はず。彼處にもかのさかしき乳母、女の子產むところに出でたりける、歸り來にければ、心安くもえ見ず。かくあやしき住居を、只かの殿のもてなし給はむ樣を、ゆかしく待つことにて、母君も思ひ慰めたるに、忍びたる樣ながらも、近く渡してむことを思しなりにたれば、いと目安く嬉しかるべきことに思ひて、やう〳〵人求め、童の目安きなど迎へておこせ給ふ。わが心にも、それこそはあるべき事に、初より待ち渡れ、とは思ひながら、あながちなる人の御事を思ひ出

れるこの節のたよりないことよ。

殊にいと……殊に餘り重々しからぬ浮舟の若い氣持では、かうした手紙に現れた匂宮のお心を一段と身に沁みて思ひさうであるが。

彼は猶いと物深う―薫は矢張非常に思慮深く。

世の中を知りにし……浮舟は男を知つた最初の相手故なのか。

かゝる憂きこと……匂宮と私との關係を、薫がお聞きになつてお見捨なさるやうな時にはどうして生きて居られよう。浮舟の心。

いつしかと……いつは薫が引取つて下さるかと氣を揉んでゐる母君にも、思ひもかけぬ嫁よと厄介がられよう。

かく心苦られ……こんなに御熱心な匂宮にしても亦誠に浮氣な御氣質と聞いてゐるから、當分かうしてゐる間こそよからうが、又この儘お心は變らぬにしても、自分を京に隱し置いて永く御寵愛下されたら、それにつけては中の君の思はくもどんなものであらう。

怪しかりし……あの二條院で變な工合に一寸お逢ひした手がかりだけですら、こんなに捜し出される位だからまして。

かの人に―薫に。

づるに、（匂宮）恨み給ひし樣、宣ひし事ども、面影につと添ひて、（浮舟）いさゝかまどろめば、夢に見え給ひつゝ、いとうたてあるまで覺ゆ。雨降りやまで、日頃多くなる頃、いとゞ山路思し絶えて、わりなく思されければ、親の飼ふ蠶は所狹きものにこそと思すも辱なし。盡きせぬ事ども書き給ひて、

「（匂）ながめやるそなたの雲も見えぬまで
　空さへくるゝ頃のわびしさ」

筆にまかせて書き亂り給へるしも、見所あり、をかしげなり。殊にいと重くなどはあらぬ若き心地に、いとかゝるを思ひも勝りぬべけれど、初より契り給ひし樣も、流石に彼は猶いと物深う、人柄のめでたきなども、世の中を知りにし初なればにや、かゝる憂きこと聞きつけて、思ひ疎み給ひなむ世には、いかでかあらむ、いつしかと思ひ惑ふ親にも、思はずに心づきなしとこそは、もて煩はれめ、かく心苦られし給ふ人はた、いとあだなる御心の御本性とのみ聞きしかば、かゝる程こそ

かの殿より―薫から。
これかれと……匂宮と薫と両方の手紙を一時に見るのも誠に工合の悪い心持であるから、矢張色々と長く書いてある匂宮のを讀みつゝ。
なほ移りにけり―矢張匂宮の方へお心變りをなされたさうな。
殿の御容貌―薫君の御容姿。
この御有様―匂宮の御風采。
うち亂れ給へる―打寛いだ。
まろならば……私ならば匂宮様のこれ程の御愛情を受けてゐながら此處にじつとしては居れさうにもありません、明石中宮様の處に御奉公して始終匂宮様のお顔をお見上げ申しますねえ。
後めたの……貴女までが劍のんなお心持ですねえ。
けはひなどよ……誠に申ぶんがないの餘意を含む。
猶この御事は―やはり浮舟様のお仕打は。
心一つに……右近一人で氣を揉んでゐた時よりも今は相談相手の侍從が出來て嘘つくにも力が出來た。
後の御文―薫のお手紙。
思ひながら……氣には懸りつゝ御無沙汰して居ります、たまには貴女からもお手紙下されたら嬉しいでせうもの、私の思ふ程貴女は思つて下さらないのでせう。
水まさる……晴れやらぬ長雨に毎日空はかきくらすこの頃、遠方の宇治の里の川水も增したでせうが、物思ひ勝に詠め暮す貴女はどうしていらつしやるでせう。
宮のはいと……匂宮のは非常に長い手紙なのを。
まづ彼を……先づ匂宮への御返事を人目につかぬ中になさいまし。
里の名を……宇治といふ名の「宇」から自分が憂い身だとつく〴〵感じるので、この山城の宇治のほとりは猶更住みづらい。
永らへて……匂宮との仲は所詮永く續くまい事だと。
外に絶え籠り……薫に引取られて匂宮と全く逢ふ事もなくなつてしまはうのは。
かきくらし……我とわが心を定めかねて漂ふやうに世を過してゐるこの身は、いつその事あの眞暗に覆うて晴れぬ峯の雨雲にでもなつてしまひたいものだ。
まじりなば―新勅撰「ゆく舟の跡なき浪にまじりなば誰かは水の泡とだに見む」。
さりとも戀しと……それでも矢張私を戀しく思つてゐるのだらうなあと。

あらめ、又かうながらも、京にも隱しすゑ給ひ、永らへても思し數まへむにつけては、かの上の思さむ事、よろづ隱れなき世なりければ、怪しかりし夕暮のしるべばかりだに、かう尋ね出で給ふめり。まして我が有様のともかくもあらむを、聞き給はぬやうはありなむやと思ひたどるに、わが心にも疵ありて、かの人に疎まれ奉らむは、猶いみじかるべしと思ひ亂るゝ折しも、かの殿より御使あり。これかれと見るもいとうたてあれば、なほ事多かりつるを見つゝ臥し給へれば、侍從右近見合はせて、「なほ移りにけり」と、いはぬやうにていふ。「ことわりぞかし。殿の御容貌を儔おはしまさじと見しかど、この御有様はいみじかりけり。うち亂れ給へる愛敬よ。まろならばかばかりの御思を見る見る、えかくてはあらじ。后の宮にも參りて、常に見奉りてむ」といふ。右近「後めたの御心のほどや。殿の御有様に勝り給ふ人は誰かはあらむ。容貌などは知らず、御心ばへ、けはひなどよ。猶この御事はいと見苦しき業かな。いかゞならせ給はむとすらむ」と、二人して語らふ。心一つに思ひしよりは、空言も便出できにけり。後の御文には、「思ひながら日頃になること、時々はそれよりも驚かい給はむこそ、思ふ樣ならめ。疎なるにやは」など、はしがきに、

薫「水まさるをちの里人いかならむ
晴れぬながめにかきくらす頃」

常よりも思ひやり聞ゆること勝りてなむ」と、白き色紙にて立文なり。御手もこまかにをかしげならねど、書き樣ゆゑ〳〵しう見ゆ。宮のは、いと多かるを小さく結びなし給へる樣々をかし。「まづ彼を人見ぬ程に」と聞ゆ。「今日はえ聞ゆまじ」と恥らひて、手習に、

浮舟「里の名をわが身に知れば山しろの
宇治のわたりぞいとゞ住み憂き」

宮の書き給へりし繪を、時々見て泣かれけり。永らへてあるまじき事ぞと、と樣かう樣に思ひなせど、外に絶え籠りてやみなむは、いとあはれに覺ゆべし。

まめ人は……實直な薫の方は暢氣に浮舟の返事を御覽になりつゝ。

つれ〳〵と……屈託して詠め勝な我が身だといふ事を一層痛感させるこの長雨が暫くもやまないので、宇治川の水が增したやうに私の袖まで猶さら涙が溜ります。

女宮に—薫は女二宮に。

流石に年經ぬる……如何な私でも矢張永年關係してゐる女がありますのを。浮舟を舊くからの愛人のやうに詐りいふ。

異樣なる心ばへ……私は人と違つた性質を持つた身で。

例の人ならで—世間一般の人と違つた獨身で。

かく見奉るに……かうして貴女を妻としましたにつけ一途に世を捨てる事もむづかしいので、それにつけては今までそんな者がゐるとは人にも知らせなかつた隱し妻の事までも、可愛さうに捨てゝ置くのは罪な氣がしまして、それで引取らうと思ふのです。

いかなる事に……どんな事柄に對して嫉妬はするものだといふ事も私は知りませんものを。

内裏になど……浮舟を引取つたら帝に讒訴申上げる人もありませう。

されどそれは……然し浮舟はそんな

「浮舟 かきくらし晴れせぬ峰のあま雲に
浮きて世をふる身をもなさばや

まじりなば」と聞えたるを、宮はよゝと泣かれ給ふ。さりとも戀しと思ふらむかしと思しやるにも、物思ひて居たらむ樣のみ、面影に見え給ふ。まめ人はのどかに見給ひつゝ、あはれいかに詠むらむと思ひやりて、いと戀し。

「浮舟ノ女 つれ〳〵と身を知る雨のをやまねば
袖さへいとゞ水嵩まさりて」

とあるを、うちも置かず見給ふ。女宮に物語など聞え給ひてのついでに、「なめしともや思し召さむとつゝましながら、流石に年經ぬる人の侍るを、怪しき所に捨て置きて、いみじう物思ふなるが心苦しさに、近う呼び寄せてと思ひ侍る。昔より異樣なる心ばへ侍りし身にて、世の中を、すべて例の人ならで見過してむ。思ひ侍りしを、かく見奉るにつけて、ひたぶるにも捨て離ければ、ありと人にも知らせざりし人の

に問題にする程のものでもありますまい。

造りたる所に……豫て修築した家に浮舟を移さうと。

かゝる料……さてはこの爲に造つた家だつたのだ、などと仰山らしく尊する人があらうかと。

この内記が……例の匂宮に同心してゐる大内記の妻の親なる。

大藏の大夫—五位の大藏丞。

聞き繼ぎて……大内記が舅から薫の方の樣子を聞いて匂宮へはすつかり聞えた。

繪師—薫が浮舟を引取る家の室内裝飾の繪を描かせる繪師。

わざとなむ—特別立派に。

遠き受領の妻……遠國の國守の妻で赴任してゆくその家が。

下つ方—下京。

大事と—匂宮が重大事としてお頼みになるので受領は恐入つて。

さらば—では宜しう御座います。

これを設け給ひて—匂宮はこの隱し所をうまく手にお入れになつて。

下るべければ……受領が任國へ赴任する筈ゆゑ早速その日浮舟をその家に移らせようと計畫なされた。

ゆめ〳〵—決して〳〵拔かるな。

いひ遣り給ひつゝ……浮舟の許へ申遣られて匂宮御自身宇治へお出か

上さへ、心苦しう罪得ぬべき心地してなむ」と聞え給へば、「いかなる事に心置くものとも知らぬを」と答へ給ふ。「内裏になど、惡し樣に聞し召さする人や侍らむ、世の人の物いひぞ、いとあぢきなく怪しからず侍るや。されどそれは、さばかりの數にだに侍るまじ」など聞え給ふ。遣りたる所に渡してむと思し立つに、「かゝる料なりけり」など、花やかにいひなす人やあらむなど苦しければ、いと忍びて障子張らすべき事など、人しもこそあれ、この内記が知る人の親、大藏の大夫なるものに、睦ましく心安きまゝに宣ひつけたりければ、聞き繼ぎて、宮には隱れなく聞えけり。「繪師どもなども、御隨身どもの中にある、睦ましき殿人などを選りて、流石わざとなむせさせ給ふ」と申すに、「匂宮ハ」いとゞ思し騷ぎて、わが御乳母の、遠き受領の妻にてくだる家、下つ方にあるを、「いと忍びたる人しばし隱いたらむ」と語らひ給ひければ、いかなる人にかはと思へど、大事と思したるに、辱なければ、「受領」さらば」と聞えけり。これを設け給ひて、少し御心のどめ給ふ。この月の晦日がたに下るべ

けになる事は都合悪かつた間に。
こゝにも……宇治でも乳母が頑張つてゐるので、浮舟が匂宮にお目にかゝる事は困難だらうといふ事を右近等から申越した。
大將殿は—薫は浮舟を引取る日を、誘ふ水あらば……引取つてさへくれたら何處へでも行くといふ氣には浮舟はならず。古今「わびぬれば身を浮草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ」。
思ひめぐらす程……思案をきめる間暫くそこにゐたいと。
少將の妻—常陸介の第二女。母ぞこち渡り給へる—母君の方から浮舟の許へ來られた。
殿より……浮舟樣のお引移りについて薫君から侍女達の衣裳までも。
まゝ—乳母。こゝは自稱。
君は—浮舟は。
怪しからぬ事ども……匂宮との關係からとんでもない事件でも生じて人の物笑にでもなつたら。
あやにくに宣ふ人—むやみに熱心に仰しやる匂宮。
八重立つ山に……深い山奥に逃げ籠るとも。白雲の八重立つ山に籠るとも思ひ立ちなば尋ねざらめや」（花鳥）
我も人も……私も貴女も世ゆすたりければ、やがてその日渡さむと思し構ふ。「かくなむと思ふ。ゆめ〳〵」といひ遣り給ひつゝ、おはしまさむ事はいとわりなくあるうちに、ここにも乳母いとさかしければ、難かるべき由を聞ゆ。

大將殿は、卯月の十日となむ定め給へりける。誘ふ水あらばとも思はず、いと怪しく、いかに仕なすべき身にかあらむと、浮きたる心地のみすれば、母の御許に暫し渡りて、思ひめぐらす程あらむと思せど、少將の妻、子産むべき程近くなりぬとて、修法讀經など隙なく騒げば、石山にもえ出で立つまじう、母ぞこち渡り給へる。乳母出で來て、「殿より人人の裝束なども細かに思しやりてなむ。いかで清げに何事もと思ひ給ふれど、まゝが心ひとつには、怪しくのみぞ仕出で侍らむかし」など、いひ騒ぐが心地よげなるを見給ふにも、君は、怪しからぬ事どもの出で來て、人笑へならば、誰も〳〵いかに思はむ。あやにくに宣ふ人はた、「八重たつ山に籠るとも必ず尋ねて、我も人も徒らになりぬべし。猶心やすく隱れなむ事を思へ」と今日も宣へるを、（浮舟へ）いかにせむと、心地

ものになりませう。
今日も宣へるを—今日も手紙で仰しやつて來たのに。
いかなる御心地にか……どうした御氣分か若しや御姙娠かとも思ふけれど、石山詣も月の障ゆゑ中止した程だからさうも思はれぬ。
在明の空を—匂宮と舟に乘つて川向に行つた曉の情景を。
いと怪しからぬ—我ながら不埒な。
尼君—辨の尼。
故姫君—大君。
さるべき事も……樣々と捨て置けない事を心配なされた間に。
おはしまさましかば……大君が御存命なら、中の君に今晉信していらつしやると同樣に御晉信もなされて、便りない浮舟樣に取つては誠にこの上もないお仕合で御座いませうものを。
わが女は……浮舟だとて何の違ひがあらうか、思ふ通りの運さへあつたら、中の君などにも劣りはすまいものを。
この君につけては—浮舟の爲には。
氣色の少し……氣が少し休まつて。
かく渡り給ひぬ……かうして浮舟が薫君に引取られる筈になりましたから、この後私が宇治に來る事はきつと慥とは思ひ立てますまい。
惡しくて臥し給へり。「母君などかく例ならず、いたく靑み痩せ給へる」と驚き給ふ。「日頃怪しくのみなむ。はかなき物も聞し召さず、惱ましげにせさせ給ふ」といへば、「母君怪しき事かな。物の氣などにやあらむ」「乳母いかなる御心地にかと思へど、石山もとまり給ひにきかし」といふも、（浮舟へ）かたはら痛ければ伏目なり。暮れて月いとあかし。在明の空を思ひ出づるも、涙のいとゞとゞめ難きは、いと怪しからぬ心かなと思ふ。母君、昔物語などして、あなたの尼君呼び出でて、故姫君の御有樣、心深くおはして、さるべき事も思し入れたりし程に、日に見す〳〵消え入り給ひにし事など語る。「おはしまさましかば、宮の上などのやうにて聞え通ひ給ひて、心細かりし御有樣どもの、いとこよなき御幸にぞ侍らましかし」といふにも、わが女は他人かは、思ふやうなる宿世のおはし果てば、劣らじをなど思ひつゞけて、「母君世と共に、この君につけては、物をのみ思ひ亂れし氣色の、少しうち弛びてかく渡り給ひぬべかゝめれば、ここに參りくること、必ずしも殊更にはえ思ひ立ち侍らじ。かゝる對面

承はらまほしけれども……「ども」は周桂本による。

ゆゝしき身とのみ……私は老朽ちた尼法師の緣起でもない身と思ひ込んで居りますので、浮舟樣にしみじみお目見えしてお話など申上げようのも。

うち捨てゝ……浮舟樣が私を置いて京へお移りになつたら。

かゝる御住居は―元々浮舟樣がこんな片田舍にいらつしやる事は。

かく尋ね聞えさせ……かうして浮舟樣を搜し索めてお引取りなさるも一通りの思召ではなさうな、と嘗て私は貴女にもお話申して置きましたが、好い加減の追從口でなかつた事がお分りでせう。

宣ふにつけても―薫君が。

只御しるべを……只貴女が媒して下さつた事を感謝して居ります。

宮の上の……中の君が勿體なくも浮舟を可愛く思召したにも、申しにくい例の一件（匂宮が浮舟を挑まれた事）などが自然起りましたので、どちら附かずで頼り處もない浮舟の身ではあると。

この宮の―匂宮樣が。

色におはします……色めかしくいらつしやる故氣のきいた若い女房は居りにくがつてゐるやうです。

の折々に、昔の事も心のどかに聞え承はらまほしけれども」など語らふ。「ゆゝしき身とのみ思ひ給へ沁みにしかば、こまやかに見奉り聞えさせむも何かはと、つゝましくて過し侍りつるを、うち捨てゝ渡らせ給ひなば、いと心細くなむ侍るべけれど、かゝる御住居は心もとなくのみ見奉るを、嬉しくも侍るべかゝなるかな。世に知らず重々しくおはしますべかゝめる殿の御有樣にて、かく尋ね聞えさせ給ふしも、おぼろげならじと聞え置き侍りにし。浮きたる事にやは侍りける」などいふ。「後は知らねど、只今はかく思し離れぬ樣に宣ふにつけても、只御しるべをなむ思ひ出で聞ゆる。宮の上の辱なくあはれに思したりしも、つゝましき事などの自ら侍りしかば、中空に所狹き御身なりと思ひ歎き侍りて」といふ。尼君うち笑ひて、「この宮の、いと騷がしきまで色におはしますなれば、心ばせあらむ若き人侍ひにくげになむ。」「大方はいとめでたき御有樣なれど、さる筋の事にて、上のなめしと思さむなむわりなき」と、大輔が女の語り侍りし」といふにも、さりや、まし

大方は……一體匂宮樣は結構なお方なのですが、さうした色戀の事で中の君が自分達をまで疑つて、無禮な女だと思召しさうなのがつらいと大輔の娘の右近が申しました。

この右近は匂宮邸の人で、宇治の右近ではないとの說がある。

さりや……全くだ、右近ですらさう思ふもの、私は猶更中の君に憚らねばならぬと、浮舟は臥しながら聞いていらつしやる。

帝の御女を……薫君は內親王を妻にしていらつしやる人でありますが、女二宮と全く關り合ひのない者を善かれ惡かれ他に持つといふ事は何としようぞ已むを得まいと思つて、借越ながら浮舟を上げる氣にもなりました。

よからぬ事を……もし浮舟が匂宮と關係するやうな不都合な事でもしでかしたら、一體私の身にとつて悲しい事とは思つても、再び浮舟の顏は見ますまい。

猶わが身を……矢張私は自殺をしてしまひたい。

かゝらぬ流も……川のほとりに住むにしてもこんなに恐しくない川もあるのに。

あはれと思しぬべき……成程薫君が可愛さうだと思召しさうな筈だ。

てと、君は聞き臥し給へり。「あなむくつけや。帝の御女をもち奉り給へる人なれど、よそ〳〵にて、惡しくも善くもあらむはいかゞはせむと、おほけなく思ひなし侍る。よからぬ事を引き出で給へらましかば、すべて身には悲しくいみじと思ひ聞ゆとも、見奉らざらまし」など、いひ交す事ども、いとゞ心臍もつぶれぬ。猶わが身を失ひてばや、遂に聞きにくき事は出で來なむと思ひ續くるに、この水の音の恐ろしげに響きて行くを、「かゝらぬ流もありかし。世に似ずあらましき所に年月を過し給ふを、あはれと思しぬべき業になむ」など、母君したり顏にいひ居たり。昔よりこの河のはやく恐ろしきことをいひて、「さいつ頃渡守が孫の童、棹さし外して落ち入り侍りにける。すべて徒らになる人多かる水に侍り」と、人々もいひあへり。君は、さても我が身行方も知らずなりなば、誰も〳〵、あへなくいみじと、暫しこそ思ひ給はめ、永らへて人笑へに憂き事もあらむは、いつかその物思の絕えむとすると、思ひかくるには、障り所もあるまじう、さわやかによろづに思ひな

徒らになる人―死ぬる人。君はさても……浮舟は川へでも流れて我が身が妻を消したら母君始め皆が張合ない悲しい事と営座は思召さうが、生きてゐて人の物笑になるやうな心外な事でもあつたら何時その氣苦勞が取れる事か、いつそ一思ひに死んだがましだと、投身を思ひついて見れば惡い所もなさうで、さば〳〵するやうにも思はれるけれど。

御手洗川に……浮舟は思切るにも切りかねた戀ゆゑなのを、さうとも母君は知らず。古今、「戀せじと御手洗川にせし御禊神は受けずもなりにけらしも」。

人少なッめり……侍女達も少いやうです、よく相應な緣類を搜して新參者はとめてお置きなさい。

やむごとなき御中らひ……貴い方々の間柄では女二宮御當人こそ何事も穩かに思召さうけれど、寵を爭ふやうな面白からぬ仲になつたら、周圍の者などもゐる事ゆゑ面倒な事も起きて來ませう。

かい潛めて―萬事祕密にして。

彼處に煩ひ侍る人―屋敷で煩つてゐる人。出產近い次女をいふ。

又逢ひ見でも……或は母君に再び逢ふ折もなく死ぬかも知れぬと思へば。

暫しも……當分暫くでもお側に參つて居りたう御座います。

彼處も―常陸介邸をいふ。

物騷がしく―取込んで。

この人々も……侍女達にしても貴女の供して私の許に來ては、何やかや引移の用意の縫物など落着いて出來さうもなく手狹な處ゆゑ、およしなさい。

武生の國府に……越前守の妻となつて武生の國府に行かれるやうな、そんな遠方でも私の方から忍んで逢ひに行きませうとの意。催馬樂道の口、道の口武生の國府に我はありと、親には申したべ、心あひの風や、サキンダチヤ」。武生は越前の國府の所在地。

なほ〳〵しき身の程は―何でもない私の身分では。

殿の御文―薫のお手紙。

自らと……私自身でお見舞に行きたいと存じますけれど。

この程の暮し難さ……愈貴女を引取らない間の落着かぬ心持は、却て引取ると決心しない前よりも苦しく思はれます。

思したどよふ―躊躇する。

風の靡かむ方……もしや又薫の方へ靡くのではないかと心懸りです。

さるれど、うち返しいと悲し。親のよろづに思ひいふ有樣を、（浮舟ハ）寢たるやうにてつく〳〵と思ひ亂る。惱ましげにて痩せ給へるを、乳母にもいひて、「（母君）さるべき御祈などせさせ給へ。祭祓などもすべきやう」などいふ。御手洗川に禊もせまほしげなるを、かくも知らでよろづにいひ騷ぐ。「（母君）人少なッめり。よくさるべからむあたりを尋ねて、今參はとゞめ給へ。やむごとなき御中らひは、正身こそ何事もおいらかに思さめ、よからぬ中となりぬるあたりは、煩はしき事もありぬべし。かい潛めて、さる心し給へ」など、思ひいたらぬ事なくいひ置きて、「（母君ガ）彼處に煩ひ侍る人も覺束なし」とて歸るを、（浮舟ハ）いと物思はしくよろづ心細ければ、又逢ひ見でもこそと思へば、「（浮舟）心地の惡しく侍るにも、見奉らぬがいと覺束なく覺え侍るを、暫しも參り來まほしくこそ」と慕ふ。「（母君）さなむ思ひ侍れど、彼處もいと物騷がしく侍り。この人々も、はかなき事などえ仕やるまじく、狹くなど侍ればなむ。武生の國府に移ろひ給ふとも、忍びては參り來なむを、なほ〳〵しき身の程は、かゝる御爲こそいとほしく侍れ」など、うち泣きつゝ宣ふ。

殿の御文は今日もあり。惱ましと聞えたりしを、いかゞと訪らひ給へり。「（薫ノ文）自らと思ひ侍るを、わりなき障多くてなむ。この程の暮し難さこそなか〳〵苦しく」などあり。宮は、昨日の御返りもなかりしを、「（匂ノ文）いかに思したゞよふぞ。風の靡かむ方も後めたくなむ、いとゞほれ勝りて詠め侍る」など、これは多く書き給へり。雨の降りし日、來あひたりし御使どもぞ、今日も來たりける。殿の御隨身（隨身）、かの少輔が家にて時々見る男なれば、「（隨身）眞人は何しにこゝには度々參るぞ」と問ふ。「（匂ノ使）私に訪らふべき人の許に詣でくるなり」といふ。「（隨身）私の人にや、艶なる文はさし取らする。氣色ある眞人かな。物隱しはなぞ」といふ。「（匂ノ使）まことはこの守の君の御文、女房に奉り給ふ」といへば、事違ひつゝ怪しと思へど、此處にて定めいはむも異樣なるべければ、おの〳〵參りぬ。かど〳〵しき者にて、共にある童を、「（隨身）この男にさりげなくて目つけよ。左衞門の大夫の家にや入る」と見せければ、「（童）宮に參りて、式部の少輔になむ御文は

古今「須磨の蜑の鹽やく煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり」。
來あひたりし御使どもぞ—嘗て偶然落合つた薫の使と匂宮の使とが。
殿の御隨身……薫の御家來は相手の使が例の大内記の家で時々見た事のある男なので。大内記が兼式部少輔であつた事は前に見えた。
眞人は—お前さんは。
私に—自分の私用で。
私の人にや……私用の相手に贈書を渡すといふ事があらうか、何か曰くありさうなお前さんだわい。
守の君—出雲權守時方をいふ。
事違ひつゝ……推量に外れて胡散だとは思ふけれど、此處で彼是事實を確めようのも變なものゆゑ。
かど〳〵しき者にて—薫の隨身は氣のきいた男で。
左衞門の大夫—時方は出雲權守で左衞門佐を兼任したと見える。
宮に參りて……匂宮邸に行つて大内記に返事を渡しました。
さまで……それ程まで先方が自分の行動を探つてゐるものとも、知慧の劣つた匂宮の下部は考へず。
舍人の人—隨身の供した童をいふ。
殿に參りて—隨身は薫の邸に參つて。
六條院に……お里の六條院に明石中宮が御退出の時分であるから。
御前など—御前驅の侍ども。
御文參らする人に—隨身はお手紙を薫に取次ぐ人に向つて。
怪しき事の侍り……變な事が御座いましたのを見極めようと思ひまして今までかゝりました。
この人の聞かむも……隨身はこの取次の人が聞いてゐるのも憚るべき事と思つて。
宮例ならず—明石中宮が甚しく。
宮達—明石中宮腹の皇子方。
異なる事も……中宮は變つた御容態もおありなさらない。
かの内記は……内記は政官であり且この人は式部少輔も兼ねてゐて政務多忙であるから。
政官—太政官の官吏の略稱。
この御文も……内記が浮舟からの御返事をもお渡し申すのを、匂宮は臺盤所に居られて。
臺盤所—清涼殿なる女房の詰所、それに擬してこゝは六條院の女房の溜りをいふ。
切にも……餘程深く思ふ女の手紙らしい樣子だわいと。
大臣も—夕霧も。
この君は—薫は。
大臣出で給ふと……夕霧が出ていらつしやるといふことを、咳拂で匂宮に御注意を申上げられた。

取らせ侍りつる」といふ。さまで尋ねむものとも、おとりの下衆は思はず、事の心をも深う知らざりければ、舍人の人に見顯されにけむぞ口惜しきや。殿に參りて、今出で給はむとする程に、御文奉らす。直衣にて、六條院に后の宮出でさせ給へる頃なれば、參り給ふなりけり。事々しく御前など數多もなし。御文參らする人に、怪しき事の侍りつる、見給へ定めむとて、今まで侍ひつる」といふを、ほの聞き給ひて歩み出で給ふまゝに、「何事ぞ」と問ひ給ふ。この人の聞かむもつゝましく思ひて、畏まりて居り。殿もしか見知り給ひて、出で給ひぬ。宮例ならず惱ましげにおはしますとて、宮達みな參り給へり。上達部など多く參り集ひて騒がしけれど、異なる事もおはしまさず。かの内記は政官なれば、後れてぞ參れる。この御文も奉るを、宮、臺盤所におはしまして、戸口に召し寄せて取り給ふを、大將、御前の方より出で給ふ側目に見通し給ひて、切にも思すべかゝめる文の氣色かなと、をかしさに立ちとまり給へり。引きあけて見給ふ。紅の薄樣にこまやかに書きたるべしと見ゆ。文に心入れて、とみにも向き給はぬに、大臣も立ちて外樣におはすれば、この君は障子より出で給ふとて、「大臣出で給ふ」とうち咳きて、驚かい奉り給ふ。ひき隱し給へるにぞ、大臣さし覗き給へる。驚きて御紐さし給ふ。殿もついゐ給ひて、「まかゝで侍りぬべし。例の御邪氣の久しく起らせ給はざりつるを、恐ろしき業なりや。山の座主たゞ今請じに遣はさむ」と、急がしげにて立ち給ひぬ。夜更けて皆出で給ひぬ。大臣は宮を先に立て奉り給ひて、あまたの御子どもの上達部、君達引きつゞけて、あなたに渡り給ひぬ。
この殿はおくれて出で給ふ。隨身氣色ばみつる、あやしと思しければ、御前などおりて火ともす程に、隨身召しよす。「申しつる事は何事ぞ」と問ひ給ふ。「今朝かの宇治に、出雲の權守時方の朝臣のもとに侍る男の、紫の薄樣にて櫻につけたる文を、西の妻戸に寄りて、女房に取らせ侍りつる、見給へつけて、しか〳〵問ひ侍りつれば、言違ひつゝ、空言のやうに申し侍りつるを、いかに申すぞとて、童べして見せ侍りつれ

ひき隠し給へるにぞ―匂宮が手紙を急にお隠しになつたので。御紐さし給ふ―匂宮が直衣の胸の紐をお懸けになる。殿も……夕霧も跪き會釋なされて。例の御邪氣―中宮様は、いつもの邪氣が久しく起らなかつたのが、又起るとは恐ろしい事です。山の座主……叡山の貫主様をお祈の爲に只今呼びにやりませう。大臣は宮を……夕霧は匂宮を先にお立て申して。あなたに―夕霧邸に。この殿はおくれて―薫はあとから。隨身氣色ばみつる……隨身が浮舟の返事を持つて歸つた時何か様子ありげであつたのが變だと、薫は思召したので。御前など……前驅の侍どもが下り立つて松明をつける間に。見給へつけて―私が發見致しまして。言違ひつゝ―本當の事をいはず。いかに申すぞとて―何をいふんだ、好い加減な嘘をつくわいと私は思ひましまして。兵部卿の宮―匂宮。式部少輔道定―即ち大内記の事。異方より……私のゐた方と違つた所でその使に渡して居りました。思し合はするに……薫は考へ合はせると先程匂宮が六條院で見て居られた手紙に相違ない。さまで見せつらむを……そこまで見屬けさせたこの隨身の働を薫は才はじけたものだと思召すけれど。猶いと恐ろしく……矢張どうも恐しく拔目のない匂宮ではあるわい。さる人ありと―浮舟が宇治にゐると。田舍びたるあたり……宇治は片田舍でかうした筋の間違ひはある筈がないと信じてゐたのが、我ながら子供らしい考であつた。さても知らぬあたり……それにしても匂宮も全く無關係の女にこそそんな戀をお仕懸けなさるのもよからうが。怪しきまでしるべし……並々ならず匂宮を手引して上げ宇治へもお連れ申して中の君を媒したこの私だのに、その私の女に思を懸けるとはあるべき事かと薫は思召すと。對の御方の……中の君の事を自分が戀しく思ひつゝも年來怀へて過してゐるのは、私の心の慎重さは無類な事だわい。薫の心。それは今始めて……自分が中の君を思ふ事は昨今始つた不體裁な戀でもなく以前からの懇情も原因してゐるのを、只衷心に幾分疚しく感ずる所のあるのが自分の爲にも苦

ば、兵部卿の宮に參り侍りて、式部少輔道定の朝臣になむ、その返事は取らせ侍りける」と申す。君怪しと思して、「薫その返事は、いかやうにしてか出だしつるぞ」。「隨身それは見給へず。異方より出だし侍りにける。下人の申し侍りつるは、『赤き色紙のいと清らなる』となむ申し侍りつる」と聞ゆ。思し合はするに違ふ事なし。さまで見せつらむを、かど〳〵しと思せど、人近ければ委しくも宣はず。道すがら、猶いと恐ろしく隈なくおはする宮なりや、いかなりけむ序に、さる人ありと聞き給ひけむ、いかでいひ寄り給ひけむ、田舍びたるあたりにて、かやうの筋の紛れはえしもあらじと思ひけるこそ幼けれ、さても知らぬあたりにこそ、さる好き事をも宣はめ、昔より隔なくして、怪しきまでしるべし、率てありき奉りし身にしも、後めたく思し寄るべしやと思ふに、いと心づきなし。對の御方の御事を、いみじく思ひつゝ、年頃過すは、わが心の重さはこよなかりけり、さるは、それは今始めて樣惡しかるべき程にもあらず、もとよりの便にもよれるを、只心のうちの隈あらむが、我が爲も苦しかるべきによりこそ、思ひ憚るも嗚滸なる業なりけれ、この頃かく惱ましくし給ひて、例よりも人繁き紛れに、いかではる〳〵と書き遣り給ひつらむ、おはしや初めにけむ、いと遙なる懸想の道なりや、怪しく、おはし所尋ねられ給ふ日もありと聞えきかし、さやうの事に思し亂れて、そこはかとなく惱み給ふなるべし、昔を思し出づるにも、えおはせざりし程の歎いといとほしげなりきかしと、（薫八）つく〳〵と思ふに、女のいたく物思ひたる樣なりしも、片はし心得そめ給ひては、よろづ思し合はするに、いと憂し。あり難きものは人の心にもあるかな、（浮舟八）らうたげにおほどかなりとは見えながら、色めきたる方は添ひたる人ぞかし。この宮の御具にては、いとよきあはひなりと、思ひも讓りつべく、退く心地し給へど、やむごとなく思ひそめし人ならばこそあらめ、猶さるものにて置きたらむ、今はとて見ざらむはた、いと戀しかるべしと、人わろくいろ〳〵に心のうちに思す。我すさまじく思ひなりて、（浮舟八）捨て置きたらば、必ずかの宮呼び取り給ひてむ、人の爲後のいと

痛だらうと思ふからこそ遠慮してゐるのも、かうなつて見れば馬鹿正直な事だわい。

この頃……近來明石中宮が御不例で平生よりも混雑してゐる際、どうして遙々と匂宮が浮舟へ御文などお書送りなさるのだらう、もう實際浮舟の許にお通ひそめなされたかも知れぬ。

怪しく—匂宮が行方不明で。

さやうの事に……さうした浮舟との問題に匂宮は煩悶なされて。

昔を……過去を追想して見ても、匂宮が宇治の中の君の許に差支があつて行けない折の御愁歎は、實に氣の毒な程ひどかつたがと。

女の……浮舟がひどく物思ひ勝の樣子だつたのも薫はこれでその理由の一部がお分りになると。

あり難きものは……理想通りに有りにくいものは人の心だ。薫の心。

この宮の御具……浮氣な匂宮の持物としては誠によい似合のものと、いつその事浮舟を匂宮に讓つてもよく自分は手を引きたい氣もなさるけれど、本妻とする積りで愛し初めた女ならともかく元々それ程でもないのだから、矢張浮舟はあの儘にして置かう。

かの宮—匂宮が。

ほしさをも、殊にたどり給ふまじ、さやうに思す人こそ、一品の宮の御方に二三人參らせ給ひたゝなれ、さて出で立ちたらむを見聞かむいとほしくなど、なほ捨て難く氣色見まほしくて、御文つかはす。例の御隨身、御自ら人間に召し寄せたり。「道定の朝臣は、なほ仲信が家にや通ふ」。「隨身」「さなむ侍る」と申す。「宇治へは、常にやこのありけむ男は遣るらむ。かすかにて居たる人なれば、道定も思ひかくらむかし」と、うちうめき給ひて、「人に見えでを罷れ。嗚滸なり」と宣ふ。畏まりて、少輔が常にこの殿の御事案内し、彼處の事問ひしも思ひ合はすれば、もの慣れてえ申し出でず。君も下衆に委しくは知らせじと思せば、問はせ給はず。彼處には、御使の例より繁きにつけても、物思ふこと樣々なり。只かくぞ宣へる。

薫「波こゆるころとも知らず末の松
　まつらむとのみ思ひけるかな

人に笑はせ給ふな」とあるを、いとあやしと思ふに、胸塞がりぬ。御返

人の爲……匂宮は然し浮舟の將來の幸不幸まで特に考へておやりになりさうもない、そんな風で最初熱愛して居られた女を今は飽いて女一宮の御許に侍女にお遣りになつたのが二三人ある、浮舟も結局そんな風になつたらそれを見聞する自分は可愛さうに思はうなどと。

人間—人のゐない間。

道定の朝臣……大内記は矢張舅の家に來るか。仲信は前出の大藏大夫で、薫の家司大内記の妻の父。

このありけむ男—先日匂宮から宇治へ使に行つた男をいふ。

かすかにて……浮舟はひつそり暮してゐるので大内記もまさか私の愛人とは知らずに懸想してゐるのであらうよ。態と知らぬ顔でいふ。

人に見えでを……人に見つからぬやうにして宇治へ行け、知れては氣がきかない。をは歎辭。

少輔が……大内記がいつも薫の動靜を問ひ、又浮舟の事を問うたのも成程と隨身は思ひ當つたけれど。

君も—薫も。

彼處には—浮舟の方では。

只かくぞ……薫の手紙には只かう書いてあつた。

波こゆる……貴女にあだし心があるとも心づかず只私を待つてくれる事を心得顔に聞えむもいとつゝましく、僻事にてあらむも怪しければ、御文はもとのやうにして、「所違へのやうに見え侍ればなむ。怪しく惱ましくて何事も」と、書き添へて奉りつ。見給ひて、流石にいたくもしたるかな、かけて見及ばぬ心ばへよと、ほゝ笑まれ給ふも、憎しとはえ思し果てぬなゝめり。まほならねどほのめかし給へる氣色を、彼處にはいとゞ思ひ添ふ。遂にわが身はけしからず怪しくなりぬべきなゝめりと、いとゞ思ふ所に、右近來て、「殿の御文は、などて返し奉らせ給ひつるぞ。ゆゝしく忌み侍るなるものを」といへば、「ひが事のあるやうに見えつれば、所違へかとて」と宣ふ。あやしと見ければ、道にてあけて見けるなりけり。よからずの右近が樣やな。見つといはで、あないとほし。「苦しき御事どもこそ侍れ。殿は物の氣色御覽じたるべし」といふに、面さと赤みて、物も宣はず。文見つらむとは思はねば、異樣にて、かの御氣色見る人の語りたるにこそはと思ふに、「誰かさいふぞ」なども、え問ひ給はず。この人々の見思ふらむ事もいみじく恥かし、わ

事とばかり思つてゐました事よ。古今「君をおきてあだし心を我がもたば末の松山浪も越えなむ」による。

人に笑はせ給ふな―私を人の笑物にしないで下さい。

心得顔に……この歌の意が分つたやうな顔で返事するのも憚られるしまるで附かぬ返事をするのも妙なものだから。

所違へのやうに……餘處へのお文が門違ひで來たやうに見えますのでお返し申上げます。

何事も―何事も書きません。

流石に……流石にうまくやつたな、こんな氣のきいた應酬は今まで全く見られなかつた用意だと。

まほならねど……薫の手紙は正面から露骨にはいはぬが匂宮の事を仄めかされた樣子なのゆゑ。

ゆゝしく……手紙をその儘返す事は不吉な事として居りますものを。

ひが事の……見當違ひの事が書いてあるやうに思はれたので。

あやしと見ければ―文を返す時右近は變だと思つたので實は途中で。

苦しき御事……困つた事で御座いますよ、薫君は事の樣子をお感づきなされたので御座いませう。

異樣にて……他の方面から薫の御樣が心もてあり初めし事ならねども、心憂き宿世かなと、思ひ入りて寢たるに、侍從と二人して「右近が姉の常陸にて人二人見侍りしを、程々につけては、只かくぞかし。これもかれも劣らぬ志にて思ひ惑ひて侍りし程に、女は、今の方に今すこし心寄せまさりてぞ侍りける。それに妬みて、遂に今のをば殺してしぞかし。さて我も住み侍らずなりにき。國にもいみじきあたらつは者一人失ひつ。又この過ちしたるもよき郎等なれど、かゝる過ちしたるものを、いかでかは使はむとて、國の内をも追ひ拂はれぬ。すべて女のたい〳〵しきぞとて、館のうちにも置い給へらざりしかば、東の人になりて、まゝも今に戀ひ泣き侍るは、罪深くこそ見給ふれ。ゆゝしき序のやうに侍れど、上も下も、かゝる筋の事は、思し亂るゝはいと惡しき業なり。御命までにはあらずとも、人の御程々につけて侍る事なり。死ぬるに勝る恥なることも、よき人の御身にはなか〳〵侍るなり。一方々々に思し定めてよ。宮も御志勝りて、まめやかにだに聞えさせ給はば、そなた樣にも靡かせ給ひて、物な

子を知つた人が右近に語つたに相違ないと思ふに。

この人々―右近その他の侍女達。

わが心もて……匂宮との關係はわが心から進んでした事ではないが。

人二人……二人の男に關係しましたが尤も身分身分に隨つて下々ではそんなものですがね、どちらの男にも同じ位の愛情で、どちらに定めたものかと思迷つて居りました中に、姉は新しい男の方に少し愛を傾けて來ました。

それに妬みて―前の男が嫉妬して。

さて我も……さうして置いて前の男自身も姉と切れてしまひました。

國にも―國府でも。

過ちしたるも―人殺しをした男も。

すべて女の……これは皆女の思慮至らぬ罪だといつて、常陸介樣がお屋敷にもお置にならなかつたので姉は遂に常陸の者になつてしまひ。

まゝ―浮舟の乳母、即ち右近姉妹の爲には母。

ゆゝしき序の……今こんな話をするのは折が惡いやうですけれど。

御命までには……假令命を棄てるやうな事は無いにしても。

人の御程々に―その階級次第に。

よき人―高貴の人。

一方々々に……薫君か匂宮樣か、何いたく歎かせ給ひそ。痩せ衰へさせ給ふもいと益なし。さばかり上の思ひいたづき聞えさせ給ふものを、まゝかこの御急ぎに心を入れて、惑ひゐて侍るにつけても、それより此方にと聞えさせ給ふ御事こそ、いとゞ苦しくいとほしけれ」といふに、今一人、「侍從」「うたて恐ろしきまでな聞え給ひそ。何事も御宿世にてこそあらめ。たゞ御心のうちに少し思し靡かむ方を、さるべきに思しならせ給へ。いでや、いと辱なく、いみじき御氣色なりしかば、人のかく思し急ぐめりし方に心も寄らず、暫しは隱ろへても、御思の增さらせ給はむに寄らせ給ひね、とぞ思ひ侍る」と、宮をいみじくめで聞ゆる心なれば、ひた道にいふ。「右近いさや、右近は、とてもかくても事なく過させ給へと、長谷石山などに願をなむ立て侍る。この大將殿の御庄の人々といふものは、いみじきふたうの者どもにて、一類この里に滿ちて侍るなり。大方この山城大和に、殿の領じ給ふ所々の人なむ、皆この内舍人といふ者のゆかりかけつゝ侍るなる。それが婿の右近の大夫といふものを本として、よろづの事

れか一方に御きめになつてほしいものです。

宮も御志……匂宮様も御愛情が増して眞面目にさへなつて下されたら浮舟様もそちらにお靡き遊ばして。さばかり上の……あれ程母君が大事になさるものを、乳母がお引移りの御用意に熱中して奔走して居りますにつけても、匂宮様がそれより前に自分の方へ引取らうと仰しやるのが。

うたて恐ろしきまで……まあ嫌な、恐しいまでにそんな事を浮舟様にお聞かせ申さないで下さい。

さるべきに……さうした宿縁と思つて御決心なされたいものです。

いみじき御氣色……熱烈な匂宮様の御態度だつたので、浮舟様は薫君がこんなに引取をお急ぎ遊ばすのにお心も傾かないのです。

暫しは隠ろへても—當分は薫の目を忍んでも。

宮を—侍從は匂宮を。

ひた道に—一途に。

とてもかくても—どちらにしても。

この大將殿—薫。

ふたうの者—不當の者。無道の者。

宣長はいふ武道の者か。一本「ふてうし」は不調の意。

一氣—一族。

を捉て仰せられたるなっなり。よき人の御中どちは、情なき事仕出でよと思さずとも、物の心得ぬ田舎人どもの、宿直人にて代り〴〵侍へば、おのが番に當りて、聊かなる事もあらせじなど、過ちもし侍りなむ。ありし夜の御ありきは、いとこそむくつけく思ひ給へられしか。宮はわりなくつゝませ給ふとて、御供の人も率ておはしまさず、窶れてのみおはしますを、さる者の見つけ奉りたらむは、いといみじくなむ」といひ續くるを、君、なほ我を宮に心寄せ奉りたると思ひて、この人人のいふ、いと恥かしく、心にはいづれとも思はず、たゞ夢のやうにあきれていみじく苛られ給ふをば、などかくしもとばかり思へど、頼み聞えて年頃になりぬる人を、今はともて離れむと思はぬによりこそ、かくいみじと物も思ひ亂るれ。げによからぬ事も出で來たらむ時と、つく〴〵と思ひ居たり。「まろはいかで死なばや。世づかず心憂かりける身かな。かく憂き事あるためしは、下衆などの中にだにも多くやはある」とて、うつぶし臥し給へれば、「かくな思し召しそ。安らかに思し

この内舎人—薫の宇治附近の莊園を支配する一族中の長老をさす。内舎人は禁中宿衛の下級武官。

ゆかりかけつゝ—親族關係になつて。

右近の大夫—右近將監で五位の者。

よろづの事を捉て……この邸の警固萬端を手管をきめて薫君がお命じになつたのです。

よき人の……高貴の方の間柄では、亂暴な事などを仕出來せとは思召さぬにしても。

おのが番に……自分の當番の時少しの失態も無いやうにしようなど考へて、却て間違も起りませう。

ありし夜の……先夜あの川向にいらしつた事は實に氣味わるい感じが致しました。

宮はわりなく……匂宮様は飽くまで事を秘密になさらうとして。

さる者の—あの警固の武士達が。

君なほ我を……浮舟は、矢張自分を匂宮に傾いてゐるものと思つて侍女達が尊してゐるのが誠に極り悪く、自分の本心では實は薫と匂宮と何れがよいとも分らず。

いみじく苛られ給ふをば……ひどく匂宮が焦慮なさるのを、何故それ程まで思召すのかとばかり浮舟は思ふが、年來力にして來た薫を、これ限に振捨てようと思はないかなせとてこそ聞えさせ侍れ。思しぬべきことをも、さらぬ顔にのみ、のどかに見えさせ給へ。給へば、いとあやしくなむ見奉る」と、心知りたるかぎりは、皆かく思ひみだれ騒ぐに、乳母おのが心をやりて、物染めいとなみ居たり。今まゐり童などの目やすきを呼び取りつゝ、「かゝる人御覽せよ。あやしくてのみ臥させ給へるは、物の氣などの妨げ聞えさせむとするにこそ」と歎く。

殿よりは、かのありし返事をだに宣はで、日頃經ぬ。この威しゝ内舎人といふ者ぞ來たる。げにいと荒々しく、ふつゝかなる樣したる翁の、聲嗄れ、さすがに氣色ある、「女房に物執り申さむ」といはせたれば、右近しも逢ひたり。「殿に召侍りしかば、今朝參り侍りて、只今なむまかり歸り侍りつる。雑事ども仰せられつる序に、かくておはします程に、夜中曉のことにも、某等かくて侍ふと思ほして、宿直人わざとさし奉らせ給ふ事もなきを、この頃聞し召せば、女房の御許に、知らぬ所の人通

らこそ。

げによからぬ事も……ほんに不祥な事が起つたらどうしようかと。

世づかず—世間並でなく。

聞えさせ侍れ—こんな色々の事も申上げるので御座います。

思しぬべき事をも……御心配なされて然るべき事にも從來は何でもないお賴付で。

この御事の後……匂宮との事が出來て以來ひどく氣をお揉み遊ばす故。

乳母おのが心を……匂宮との祕密を知らぬ乳母は一人で嬉しがつて、染物をしたりその他引移りの支度をしてゐる。

かゝる人御覽ぜよ—こんな可愛らしい童女でもお相手にしてお氣分をお慰めなさいまし。

殿よりは……薫からは浮舟がお手紙をその儘お返し申したについての御返事すらなくて。

この威しゝ内舍人—右近が尊をして浮舟を威したあの内舍人。

物執り申さむ—申上げませう。

殿に召侍りしかば—薫君からお召がありましたので。

雜事ども……雜用などを私にお命じになつた序に仰せられました。

かくておはします……かうして浮舟樣が此處にいらつしやる間、夜中ふやうになむ聞し召すことある。『たい〳〵しき事なり。宿直に侍ふものどもは、その案内問ひ聞きたらむ。知らではいかでか侍ふべき』と問はせ給ひつるに、承はらぬことなれば、『某は身の病重く侍りて、宿直仕うまつることは、月ごろ怠りて侍れば、案内もえ知り侍らず。さるべき男どもは、懈怠なく催し侍はせ侍るを、さのごとき非常の事のさぶらはむをば、いかでか承はらぬやうは侍らむ』となむ申させ侍りつる。用意して侍へ、便なき事もあらば重く勘當せしめ給ふべき由なむ、仰言侍りつれば、いかなる仰言にかと、恐れ申し侍る」といふを聞くに、梟の鳴かむよりも、いと物恐ろし。答へもやらで、「さりや、聞えさせしに違はぬ事どもを聞し召せ。物の氣色御覽じたるなゝめり。御消息も侍らぬよ」など歎く。乳母はほのうち聞きて、「いと嬉しく仰せられたり。盜人多かゝなるわたりに、宿直人も初のやうにもあらず、皆身の代りぞといひつゝ、怪しき下衆をのみ參らすれば、夜行をだにえせぬに」と喜ぶ。君は、げに只今いと惡しくなりぬべき身なゝめりと思す

曉の警蹕にも私共がかうして御警衛申上げてゐるからと薫君は思召して、宿直の侍を京から態々御差向けになる事も御座いませんが。

女房の御許に……浮舟といふべきを態と諷してかくていふ。

知らぬ所の人……見知らぬ男が通つて來るやうに薫君がお聞込の事がありますのを。

たい〳〵しき……寛怠至極な事だ、警固の者共はその眞相を調べてゐる筈だ、知らないではどうして濟まうぞ。

承はらぬことなれば—私は全く知らぬ事で御座いますから。

某は—私は。内舍人の自稱。

さるべき男どもは—相當心きいた部下の男どもは。

さのごとき……そんなやうなとんでもない事が御座いましたら私の耳に入らぬ筈が御座いません。

用意して侍へ……十分氣をつけて御警固申せ、不都合な事があつたら重い罪科に行ふぞといふ旨を私共に仰がありましたので。

さりや……それ〳〵前に私が申上げたのにそつくりな事を内舍人が申すのをお聞き遊ばせ、事の樣子を薫君がお感づきなされたので御座いませう。浮舟にいふ詞。

に、宮よりは、いかに〳〵と苦の亂るゝわりなさを宣ふ、いと煩はしくてなむ。とてもかくても、一方々々につけて、いとうたてある事は出で來なむ。我が身一つのなくなりなむのみこそ目安からめ、昔は懸想する人の有樣の、いづれとなきに思ひ煩ひてだにこそ、身を投ぐる例もありけれ、永らへば、必ず憂き事見えぬべき身の、亡くならむは何か惜しかるべき、親も暫しこそ歎き惑ひ給はめ、あまたの子ども扱ひに、おのづから忘れ草摘みてむ、在りながらもて損ひ、人笑へなる樣にてさすらへむは、まさる物思なるべしなど思ひなる。兒めきおほどかに、たをたをと見ゆれど、氣高う、世の有樣をも知る方少なくて、おふし立てたる人にしあれば、少しおずかるべき事を思ひ寄るなりけむかし。むづかしき反古など破りて、おどろ〳〵しく一度にも認めず、燈臺の火に燒き、水に投げ入れさせなど、やう〳〵失ふ。心知らぬ御達は、物へ渡り給ふべければ、徒然なる月日を經て、はかなく仕集め給へる手習などを破り給ふなゝめりと思ふ。侍從などぞ見つくる時は、「などかくは

いと嬉しく……誠に有難く薫君が御注意して下された事よ。
皆身の代り……皆自分の代理だと稱して。
夜行―夜廻り。
君はげに只今……浮舟はほんに即刻にも不祥事が起つて悲慘な結果になりさうな我身だと思召すのに。
宮よりは―匂宮からは。
苔の亂るゝ……下り苔の亂れるやうな心の亂れる術なさを。新勅撰、
「君に逢はむその日をいつと松の木の苔の亂れて物をこそ思へ」。
とてもかくても……とにもかくにも何れの一方にしろ、厄介な事は起きて來よう。浮舟の心。
懸想する人の……自分に戀する二人の男の樣子の何れに靡きやうもないのに煩悶して。萬葉の櫻兒や菟原處女の傳說をいふのであらう。
あまたの子ども扱ひ―母君も澤山の子供の世話で。
忘れ草摘みてむ―忘れておしまひなさるだらう。
在りながらもて損ひ―生きてゐながら身を持ち崩し。
まさる物思なるべし―死んでしまふ以上に親の歎になるだらう。
兒めき……浮舟は娘らしく大樣で。氣高う……親が田舍生活で、氣高い

せさせ給ふ。あはれなる御中に、御心とゞめて書きかはし給へる文は、人にこそ見せさせ給はざらめ、物の底におかせ給ひて御覽ずるなむ、程々につけてはいとあはれに侍る。さばかりいとめでたき御紙づかひ、辱なき御言の葉を盡させ給へるを、かくのみ破らせ給ふ、情なきこと」といふ。「何か、むづかしく、永かるまじき身にこそあめれ。落ちとゞまりて、人の御爲もいとほしからむ。さかしらにこれを取り置きたりけむよなど、漏り聞き給はむこそ恥かしけれ」など宣ふ。心細き事を思ひもてゆくには、又え思ひ立つまじき業なりけり。親をおきて亡くなる人は、いと罪深かゝなるものをなど、流石にほの聞きたる事をも思ふ。
二十日餘にもなりぬ。かの家あるじ、二十八日に下るべし。宮は、その夜必ず迎へむ。下人などに、よく氣色見ゆまじき心遣ひし給へ。此方樣よりは、夢にも聞えあるまじ。疑ひ給ふな」など宣ふ。さてあるまじき樣にておはしたらむに、今ひと度物をもえ聞えず、覺束なくて返し奉

點や世の中の有樣を知る事は少くて育て上げた人であるから。
おずかるべき事―無勘辨な事、即ち身を投げる事をさす。
むづかしき反古……問題を若起しさうな文殼など破り、それも大袈裟に一度には始末せずに。
心知らぬ御達―事情を知らぬ女房。
物へ渡り給ふ……近々薫に引取られてどこかへお移りの筈だから。
あはれなる御中に―深い匂宮とのお間柄に。
さばかりめでたき……こんなに結構な匂宮樣の御料紙といひ、勿體ない深切なお言葉を盡されたお手紙をこんなにお破り遊ばすのは。
永かるまじき……どうせ私は長生しさうもない身なのです。
落ちとゞまりて……死後こんな文殼が殘つてゐたら匂宮樣の御爲にもお氣の毒でせう、又生意氣にも匂宮の手紙を保存して置いたのだなあ、などと薫君に聞かれても恥かしいのです。
又え思ひ立つまじき……又自殺を決行しかねる次第であつた。
親をおきて……親に先立つて死ぬ者は罪障が深いので地獄に落ちるなど。
二十日餘―三月二十日過。

らむことよ、また時の間にても、いかでこゝには寄せ奉らむとする、かひなく恨みて歸り給はむ樣などを思ひやるに、例の面影離れず、堪へず悲しくて、この御文を顏におし當てゝ、暫しはつゝめども、いといみじく泣き給ふ。右近「あが君、かゝる御氣色遂に人見奉りつべし。やうやう怪しなど思ふ人も侍るべかめり。かうかゝづらひ思ほさで、さるべき樣に聞えさせ給ひてよ。右近侍らば、おほけなき事もたばかり出だし侍らば、かばかり小さき御身ひとつは、空よりも率て奉らせ給ひなむ」といふ。とばかりためらひて、「かくのみいふこそいと心憂けれ。さもありぬべき事と思ひかけばこそあらめ、あるまじき事と皆思ひ取るに、わりなく、かくのみ賴みたるやうに宣へば、いかなる事を仕出で給はむとするにかと思ふにつけて、身のいと心憂きなり」とて、返事さへも聞え給はずなりぬ。宮かくのみ猶うけひく氣色もなくて、返事さへ絶え〳〵になるは、かの人のあるべき樣にいひ認めて、少し心安かるべき方に思ひ定まりぬるなめり、道理と思すものから、いと口惜しく

かの家あるじ―匂宮に家を貸す約束をした受領。下るべし―赴任する事になつた。その夜必ず……二十八日の夜きつと貴女をお迎へ申しますよ。氣色見ゆまじき……樣子を感づかれぬやうに御用意なさい、私の方からは決して漏れぬ積りです。さてあるまじき……さて匂宮が勿體ない委でお出なされた時、警固嚴重な折柄ゆゑ今一度お目にかゝつてお話申上げる事も叶はず、氣懸りの儘でお歸し申す事か知らん。また時の間にても……又暫くの間でもどうしてこの屋敷へお入れ申す事が出來ようぞ。例の面影……浮舟は例の如く匂宮の面影が目先にちらついて。遂に人……とう〳〵人に感づかれてしまひせう。かうかゝづらひ……そんなに屈託なさらずと、然るべきやうに御返事をなさいまし。おほけなき事も……僭越ながらも工面をして貴女をお出し申したら。「おほけなくとも」の誤寫か。空よりも……何とでもして例へば空を翔つてでも匂宮樣がお連れ出し遊ばしませう。かくのみいふこそ……私が全く匂宮妬く、さりとも我をば(浮舟ハ)あはれと思ひたりしものを、逢ひ見ぬとだえに、人々のいひ知らする方に寄るならむかしなど詠め給ふに、行く方知らず、むなしき空に滿ちぬる心地し給へば、例のいみじく思し立ちておはしましぬ。葦垣の方を見るに、例ならず、「番衆あれは誰ぞ」といふ聲々、いざとげなり。立ち退きて、心知りの男を入れたれば、それをさへ問ふ。前々のけはひにも似ず、煩はしくて、「男京よりとみの御文あるなり」といふ。右近が從者の名を呼びて逢ひたり。(右近ハ)いと煩はしくいとゞ覺ゆ。「更に今宵は不用なり。いみじく辱なき事」といはせたり。宮、などかくもて離るらむと思すに、わりなくて、「匂まづ時方入りて、侍從に逢ひて、さるべき樣にたばかれ」とて遣はす。かど〳〵しき人にて、とかくいひ構へて、尋ね逢ひたり。「侍從いかなるにかあらむ、かの殿の宣はす事ありとて、宿直にある者どもの、さかしがり立ちたる頃にて、いとわりなきなり。御前にも、物をのみいみじく思したゞめるは、かゝる御事の辱なきを思し亂るゝにこそはと、心苦しくなむ見奉る。更に今宵は、人氣色見

に靡いてゐるやうにばかりお前達がいふのが心外です、匂宮に靡くが當然と私が本當に思つてゐるならともかく、私は道ならぬ事とすべて分別してゐるのに、匂宮は無暗にもう私が同心してお縋り申してでも居るやうに取つて仰しやるので。

宮かくのみ……匂宮は浮舟が矢張いひやつた事を承知する樣樣もなく。かの人の……薫が然るべきやうに說得して、それで浮舟は多少その方が安心だと思つて薫に附く決心をしたのだ、それも尤だと匂宮は思召すものゝ。

逢ひ見ぬとだえに……暫く逢はずにゐる間に、侍女達が色々智慧をつける方に傾くのであらうよ。

行く方知らず―物思の果もなく。むなしき空に……古今「我が戀はむなしき空に滿ちぬらし思ひやれども行く方もなし」。

おはしましぬ―匂宮が宇治へ。例ならず―いつもと違つて警戒が嚴重で。

いざとげなり―目ざめ易い。立ち退きて……匂宮は退いて常に使によこす樣子知りの男を邸内へお入れになつたら。

京より―浮舟の母君から。

右近が從者―右近が召使の下婢。
更に今宵は……全く今晩は駄目です、誠に恐多い事で御座いますがと、
その下婢にいはせた。
かど〳〵しき人にて―時方は氣のきいた男で。
かの殿の……薫君の御命令があつたとやらで警固の者が特に用心嚴しくして居る折柄で。
御前にも―浮舟樣も。
かゝる御事の……匂宮樣を空しくお歸し申すやうなこんな恐多い事を色々御心配なさるのであらうと。
人氣色見侍りなば―人の來る樣子を警固の武士が見附けましたら。
やがてさも……近い中にお連れ出しの用意をなされてもよさうな夜に、當方でも密に工面してお知らせ申す事に致しませう。
べかゝめる―の下「と」の辭を補ふ。
大夫―時方。
おはします道……匂宮樣の此處まで入らつしやる途中は大抵の困難でなく非常なお意氣込だのに、首尾が駄目と申上げよう事は私の怠慢のやうで迷惑です、それでは貴女も其處まで來て下さい、そして一緒に委しく譯を申上げて下さい。
いとわりなからむ―それは御無理と申すものでせう。

侍りなば、なか〳〵にいと惡しかりなむ。やがてさも御心遣ひせさせ給ひつべからむ夜、こゝにも人知れず思ひ構へてなむ、聞えさせ侍るべかゝめる」と、乳母のいざとき事なども語る。大夫、おはします道のおぼろげならず、あながちなる御氣色に、あへなく聞えさせむことなむたい〳〵しき。さらば、いざ給へ。共に委しく聞えさせ給へ」といざなふ。「いとわりなからむ」といひしろふ程に、夜もいたく更け行く。宮の御馬にて少し遠く立ち給へるに、里びたる聲したる犬どもの出で來てのゝしるもいと怖ろしく、人少なにいと怪しき御ありきなれば、すゞろならむ者の走り出で來たらむも、いか樣にかと、侍ふかぎり心をぞ惑はしける。「なほ疾く〳〵參りなむ」といひ騷がして、この侍從を率て參る。髮脇よりかい越して、樣體いとをかしき人なり。馬に乘せむとすれど、更にきかねば、衣の裾を取りて立ち添ひて行く。わが沓をはかせて、自らは供なる人のあやしき物を穿きたり。參りて、かくなむと聞ゆれば、語らひ給ふべきやうだになければ、山賤の垣根のおどろむぐ

人少なに―お供の者も少く。
すゞろならむ者の……無禮者などが出て來たらどうなる事かと。
髮脇より……侍從は下げ髮を脇の下から前に廻して持つて。
馬に乘せむと……時方が侍從を馬に乘せようとするけれど。
わが沓を……時方は自分の沓を侍從に履かせて。
參りて―匂宮の待つていらつしやる處へ行つて。
語らひ給ふべき……立つた儘では相談なされやうもないから。
障泥―馬の鞍の下兩側に垂れて泥を防ぐもの。河内本は行縢（むかばき）。
かゝる道に……色戀沙汰に身を持崩して、遂にしかとした地位でゐる事は出來さうもない身だらうと。
心弱き人は―氣の弱い侍從は。
いみじき仇を……恐しい仇敵、而もその仇敵を一層恐しい鬼にしたつて。
人の御樣―匂宮の御樣子。
え聞えさすまじきか―浮舟と話をする事は出來まいか。
いかなれば……どうして今更こんなに警戒が嚴しいのか、矢張誰か薫に密告した事があるのだらう。
さ思し召さむ日を……浮舟樣を連出さうと思召す日を豫め定めて然る

らの蔭に、障泥といふ物を敷きておろし奉る。（匂宮）わが御心地にも、怪しきまじき人の御樣なり。ためらひ給ひて、「（匂）たゞ一言もえ聞えさすまじきか。いかなれば今更にかゝるぞ。猶人々のいひなしたるやうあるべし」と宣ふ。（侍從ハ）有樣くはしく聞えて、「（侍從）やがて、さ思し召さむ日を、かねてさゝべき樣にたばからせ給へ。かく辱なき事どもを見奉り侍れば、身を捨てゝも思ひ給へたばかり侍らむ」と聞ゆ。我も人目をいみじく思せば、一方に怨み給はむやうもなし。夜はいたく更けゆくに、この物咎めする犬の聲絶えず、人々追ひさけなどするに、弓引き鳴らし、あやしき男どもの聲して、「火危し」などいふも、いと心あわたゞしければ、（匂宮ハ）歸り給ふほど、いへば更なり。

「（匂）いづくにか身をば捨てむと白雲の

べく御計畫なされませ。
かく辱なき事……こんな勿體ない御苦勞の事など拜見致しますれば。
我も人目を……匂宮御自身も人目をお憚りなさるので一途に侍從に怨を仰しやりやうもない。
追ひさけなど……供の人が犬を追ひ遠ざければ、その聲に番の者が怪しんで。
弓引き鳴らし—警戒の武士達が空引して弓弦を鳴らし。
火危し—火の用心。
いへば更なり—その悲しさはいふだけ餘計である。
いづくにか……生きて甲斐もないこの身は何處に捨てゝしまつたものかと思ひつゝ、白雲のかゝらぬ山も無いやうに、あの山この山と心をかけて泣く〳〵辿りゆく事ではある。
さらばはや……では早く歸るがよいと侍從をお歸しになる。
右近は……侍從が出て行つたあとで右近はきつぱり匂宮をお斷り申した旨を浮舟に申上げてゐた處が。
君は—浮舟は。
入り來て—侍從が歸つて來て。
答へもせねど……浮舟は返答もなさらぬが、涙で枕も浮くばかりになつて來たのを、侍從や右近が同情

さらばはや」とて、この人を返し給ふ。御氣色なまめかしくあはれに、夜深き露にしめりたる御香の芳ばしさなど、譬へむ方なし。泣く〳〵ぞ行く

かゝらぬ山もなく〳〵ぞ行く

右近は、いひ切りつる由いひ居たるに、君はいよ〳〵思ひ亂るゝことの多くて臥し給へるに、入り來て、ありつる樣語るに、答へもせねど、枕のやう〳〵浮きぬるを、且はいかに見るらむとつゝまし。つとめても、怪しからむまみを思へば、無期に臥したり。物はかなげに帶うち懸けなどして、經讀む。親に先立ちなむ罪うしなひ給へとのみ思ふ。ありし繪を取り出でて見て、書き給ひし手つき、顏の匂などの、向ひ聞えたらむやうに覺ゆれば、夜べ一言をだに聞えずなりにしは、なほ今ひとへ勝りていみじと思ふ。かの心のどかなる樣にて見むと、行末遠かるべき事を宣ひわたる人も、いかゞ思さむといとほしう、憂き樣にいひなす人もあらむこそ、思ひやり恥かしけれど、心淺く怪しからず、人笑へはしつゝも一面にはどう思はうかと恥かしい。
つとめても……翌朝も泣き腫した變な自分の目付を思ふので浮舟はいつまでも寢ていらつしやる。
帶うち懸け—掛帶して。婦人の掛帶は禮裝。
親に先だちなむ罪—自殺して親に先だつ不孝の罪を。
ありし繪—嘗て匂宮のお書きになつた繪。（一九六七頁本文參照）
向ひ聞えたらむやうに—直接匂宮と對坐してゐるやうに。
今ひとへ……今一層增して悲しいと浮舟は思ふ。
かの心のどかなる……あの引取つた上でゆつくり落着いて語らひをしようと、行末永く變らぬ由をいひ續けていらつしやる薫君も。
憂き樣に……死後に色々嫌な噂を立てる人もありさうなのが、今考へても恥かしいけれど、生きてゐて、思慮淺く不埒な女よと人の物笑になるのを薫君に聞かれるよりは、いつそ死んだが增しだ。
歎きわび……苦しい戀路に煩惱して遂に身を捨てるけれども、死後に嫌な評判を流さう事が氣遣はれる。
兄弟—常陸介の實子等をいふ。
宮の上—中の君。

ならむを聞かれ奉らむよりはなど思ひつゞけて、

「歎きわび身をば捨つともなき影に
うき名流さむことをこそ思へ」

親もいと戀しく、例は殊に思ひ出でぬ兄弟の、醜やかなるも戀しく、宮の上を思ひ出で聞ゆるにも、すべて今ひと度ゆかしき人多かり。人は皆おの〳〵物染め急ぎ、何やかやといへど、耳にも入らず。夜となれば、人に見つけられず出でて行くべき方を思ひ設けつゝ、寢られぬまに心地も惡しく皆違ひにたり。明けたてば川の方を見遣りつゝ、羊の歩よりも程なき心地す。宮はいみじき事どもを宣へり、今更に人や見むと思へば、この御返事をだに、思ふまゝにも書かず。

「からをだに憂き世の中にとゞめずは
いづこをはかと君もうらみむ」

とのみ書きて出だしつ。かの殿にも、今はの氣色見せ奉らまほしけれど、處々に書きおきて、離れぬ御中なれば、遂に聞き合はせ給はむこ

今一度ゆかしき人……もう一度逢ひたい人が多い。
人は皆……侍女達は皆引移りの支度で銘々染物など取急ぎ。
皆違ひにたり―正氣を失つたやうになつてしまつた。
明けたてば―夜があけると。
羊の歩みよりも―屠所に引かれる羊の足どりよりも。
宮はいみじき事ども……匂宮は御歸邸後、切なるお心持を手紙で仰せ越された。
からをだに……亡骸すらもこの嫌な世の中に留めずに死んでしまつたら何處をあてに匂宮も私をお怨みなさらうぞ、怨の持つて行き場が無くて結局互に心安い事でせう。
かの殿にも……薫にも最後の決心の樣子をお見せ申したいけれど、そんなに方々へ手紙を書いては。
離れぬ御中なれば―薫と匂宮とは何といつても親しい御關係ゆゑ。
いかになりけむと……浮舟といふ女は一體どうなつたのだらうと、誰にもしかと分らぬやうな風にして死なうと。
いと騒がしくて……穏かならぬ樣子で貴女が夢の中に現れたので。
人の忌むといふ事……世人の不吉としてゐる事が貴女の身に起つてお

といと憂かるべし。すべていかになりけむと、誰にも覺束なくて止みなむと思ひ返す。京より母の御文持て來たり。「寢ぬる夜の夢に、いと騒がしくて見え給ひつれば、誦經所々にせさせなどし侍るを、やがてその夢の後、寢られざりつるけにや、只今晝寢して侍る夢に、人の忌むといふ事なむ見え給ひつれば、驚きながら奉る。よく慎ませ給へ。人離れたる御住居にて、時々立ち寄らせ給ふ人の御ゆかりもいと恐ろしく、惱ましげに物せさせ給ふ折しも、夢のかゝるをよろづになむ思ひ給ふる。參り來まほしきを、少將の方の猶いと心もとなげに、物の氣だちて惱み侍れば、片時も立ち去ることゝ、いみじくいはれ侍りてなむ。その近き寺にも御誦經せさせ給へ」とて、その料の物、文など書き添へて持て來たり。限と思ふ命の程を知らで、かくいひ續け給へるも、いと悲しと思ふ。寺へ人遣りたるほど返事書く。いはまほしき事多かれど、つゝましくてただ、

浮舟「後にまたあひ見むことを思はなむ

見えになつた故、驚いてこの手紙を上げるのです。
時々立ち寄らせ給ふ……時々お通ひになる薫君の御關係の人、即ち女二宮などの嫉妬も誠に恐しく、貴女が病氣勝でいらつしやる折も折とて、夢見がこんなに惡いのを樣樣に心配して居ります。
參り來まほしきを―私自身に行つて見たいのですが。
少將の方―左近少將の妻、即ち出産をした次女をいふ。
片時も……暫くも側を離れる事を嚴しく夫に禁じられて居りますので行かれません。
その料の物―祈禱の布施物。
文など―僧への依頼狀などを。
限と思ふ……自分は最後と思つてゐる命を母君が少しも知らずに。
寺へ人遣りたるほど―母君からの布施物や依頼狀を持たせて寺へ使をやつてゐる間に。
後にまた……現世の恩愛は全く一場の夢で御座いますからそれに心を惑はさず、來世に又再會する事を樂みにして下さいまし。
鐘のおとの……あの山寺の祈禱の鐘の聲が絶えようとする餘韻に私の泣く音を添へて、私の命はこれで盡きてしまつたと母君へ傳へてく

誦經の鐘の、風につきて聞え來るを、つくづくと聞き臥し給へり。

浮舟「鐘のおとの絶ゆる響に音をそへて
わが世盡きぬと君につたへよ」
この世のゆめに心まどはで」

卷數持て來たるに書きつけて、「今宵はえ歸るまじ」といへば、物の枝に結ひつけて置きつ。乳母「あやしく心走りするかな『夢も騒がし』と宣はせたりつ。宿直人よく侍へ」といはするを、苦しと聞き臥し給へり。「物聞し召さぬいとあやし。御湯漬」などよろづにいふを、賢しがるめれどいと醜く老いなりて、我なくばいづくにかあらむと思ひ遣りて給ふも、いとあはれなり。世の中にえ在り果つまじき樣を、ほのめかしていはむなど思すには、まづ驚かされて先だつ涙をつゝみ給ひて、物もいはれず。右近程ちかく臥すとて、「かくのみ物を思ほせば、物思ふ人の魂はあくがるなるものなれば、夢も騒がしきならむかし。いづ方と思し定まりて、いかにも〳〵おはしまさなむ」とうち歎く。浮舟「萎えたる

衣を顔におしあてゝ、臥し給へりとなむ。

れよ。
卷數—經文陀羅尼などを讀誦した度數を記して僧侶から願主に贈る文書をいふ。
持て來たるに……山寺から卷數を持つて來たのにこの歌を書付けて。
物の枝に……木の枝に卷數を附けるのは例。
心走り—胸騷ぎ。
宣はせたりつ—母北方が手紙で仰せ越された。
物聞し召さぬ—食事なさらぬのが。
御湯漬—御湯漬を差上げよ。
賢しがるめれど……あんなに乳母が氣のきいたやうな世話燒いてゐるけれど、「鶴く老いぼれてしまつて、若し私が死んでしまつたらあれも何處へ行く事だらうと。
世の中に……とてもこの世に生き永らへて居られさうもない事情を。
まづ驚かされて……目の方が先に知つてこぼれて來る涙を。
あくがるなる……體から離れてふらふらと迷ひ歩くものだから。
夢も騷がしき……貴女の魂が物思にあくがれ出るので、それで母君の夢見も不穩なのでせうよ。
いづ方と……薫君なり匂宮樣なりどちらか一方にお考をきめて。

彼處には……宇治の邸では翌朝になつて浮舟のいらつしやらぬのに驚いて覺め騷ぐが何の效もない。この卷は前卷に直に引續くものであるが、浮舟が前夜家出した事は省筆に從つてゐる。がその委しい事

蜻蛉

この卷は薫二十七歳の春から秋までの事。或朝宇治の山莊では浮舟がゐないので大騷となり、母も京から驅けつけた。侍女の右近と侍從とは浮舟の煩悩の事情を知つてゐるので、さては投身かと思つたが、母は或は侍女達が誰か男に語らはれて隱したのではあるまいかとも疑つた。然し遺書が出て來て愈死んだと分つた。匂宮も悲みの極茫然としてゐる。御母女三ノ宮の病氣祈禱の爲、石山に參籠してゐた薫も、浮舟の變を聞いて直に歸京した。右近は浮舟の死因を薫に隱すことは出來なかつた。薫は涙ながら懇に弔つて、せめてもの心やりとした。蓮の花盛の頃、匂宮の御母明石中宮は、叔父君の喪で六條院に下つてゐたが、源氏や紫ノ上の爲に法華八講を營んだ。この時薫は、匂宮やわが北ノ方の姉君に當る女一ノ宮に心を動かして、我ながら道心の危くなるのを恥ぢた。又故式部卿宮の姫君で宮ノ君といふのが、女一ノ宮の許に來てゐたのを、多情な匂宮はまた思ふやうになつた。
卷の名は卷末の「蜻蛉のものはかなげに飛びちがふを」とある詞、及び薫の歌「ありと見て手には取られず見ればまた行方もしらず消えしかげろふ」に由つてつけた。

彼處には人おはせぬを、覺め騷げどかひなし。物語の姫君の、人に盜まれたらむ朝のやうなれば、委しくもいひ續けず。京より、ありし使の歸

情は手習の卷の始に至つて書かれてある。

委しくも……委しい記述も出來ぬと草紙地。

京より……母君の許から、昨日宇治へ差出した使が歸らないので氣懸りだといつて又人をよこされた。出だし立てさせ……私を出發おさせになりました。

いかに聞えむと―何と御返事申上げようかと。

更に思ひ得る方なくて―全くよい思案が浮ばないで。

かの心知れる……事情を知つたあの右近や侍從等は、浮舟が大變心配していらつしやつた御樣子を思ひ出すので。

この御文―今母君から來た手紙。

夢にだに……夢にすら貴女の姿がゆるりと見られず全く睡らぬ故。

物へ渡らせ給はむ事は―薫君に引取られて行かれる事は。

その程……それまでの間私の處にお迎へ申しませう、然し今日は雨が降りさうですから見合せます。

夜べの御返りを……昨夜母君からの使に持たせて歸す筈だつた浮舟の御返事をも開いて見て。

さればよ……案の定、こんなお覺悟ゆゑ心細い事も仰しやつた譯だ。

らずなりしかば、覺束なしとて、又人おこせたり。「まだ鷄の鳴かぬにな(より)む出だし立てさせ給ひつる」と、使のいふに、いかに聞えむと、乳母(のめと)よりはじめて、あわて惑ふこと限なし。更に思ひ得る方なくて、只騒ぎあへるを、かの心知れるどちなむ、いみじく物を思ひ給へりし樣(さま)を思ひ出づるに、身を投げ給へるかとは思ひ寄りける。泣く〳〵この御文を(母ノ文)あけたれば、「いと覺束なきになむ、思ひ續けまどろまれ侍らぬけにや、今宵は夢にだにうち解けても見えず、物におそはれつゝ、心地も例(れい)ならずうたて侍るを、猶いと恐ろしく、物へ渡らせ給はむ事は近かゝなれど、その程こゝに迎へ奉りてむ。今日は雨降り侍りぬればいと心もとなく」などあり。夜べの御返りをあけて見て、右近いみじく泣く。されば(ば)よ、心細き事は聞え給ひけり、我に、などか聊か宣ふ事のなかりけむ、幼かりし程より、つゆ心おかれ奉る事なく、塵ばかり隔なくて慣(な)らひたるに、今は限の道にしも我をおくらかし、氣色をだに見せ給はざりけるがつらき事と思ふに、足摺(あしずり)といふ事をして泣く樣、若き子供の

塵ばかり……少しも立て隔なくお仕へ申して來たのに。

氣色をだに―お覺悟のそぶりすら。

かう物思したる……浮舟樣がひどく屈託なされた御樣子はお見上げ申してゐたけれど。

かくなべてならず……こんな並はづれた恐しい事(自殺の事)をお考へ付きなさるものとは見えなかつた浮舟樣の御樣子だのに。

いか樣にせむ……どうしよう〳〵といふより外の事はない。

宮にも……匂宮もいつもと大變樣子の違つた浮舟の返事に、はて浮舟は何と思つてゐるのだらう、私を流石に愛してはゐる樣だが、實は浮氣だらうとばかり豫て深く疑つてゐた故、他へ身を隱さうといふ積りでこんな返事をよこしたのもあらうと。

ある限……邸内の者皆泣いて途方にくれてゐる處に匂宮の使が來合はせて。

上の―浮舟樣が。

物もおぼえ給はず―邸内の皆樣が正氣も無いのです。

頼もしき人も……力と頼む薫君もいらつしやらぬ折柄ゆゑ。

只物にあたりてなむ―只うろ〳〵物に突當つて。

やうなり。侍從、かう物思(おぼ)したる御氣色は見奉り渡れど、かくてもかくなべてならずおどろ〳〵しき事、思し寄らむものとは見えざりつる人の御心樣(おぼしさま)を、猶いかにしつる事にかと、覺束なくいみじ。乳母(めのと)は、なかなか物も覺えで、只、「いか樣(さま)にせむ、いか樣にせむ」とぞいはれける。宮にも、いと例ならぬ氣色の御返りに、いかに思ふならむ、我を流石にあひ思ひたる樣(さま)ながら、あだなる心なりとのみ、深く疑ひたれば、外(ほか)へいき隱れなむとにやあらむと思し騒ぎて、御使あり。ある限泣きまどふ程に來て、御文(おん)もえ奉らず。「(使)いかなるぞ」と、下衆女(ゆすんな)に問へば、「(下女ノ)上の今宵にはかに失せ給ひにければ、物もおぼえ給はず。頼もしき人もおはしまさぬ折なれば、侍(さぶら)ひ給ふ人々は、只物にあたりてなむ惑ひ給ふ」といふ。心も深く知らぬ男(をのこ)にて、委しくも問はで參りぬ。かくなむと申させたるに、(匂宮ハ)夢と覺えていと怪しう、いたく煩ふとも聞かず、日頃惱ましとのみありしかど、昨日の返事(かへりごと)はさりげもなくて、常よりもいとをかしげなりしものをと、思しやる方なければ、「(匂)時方(ときかた)いきて氣色見、たし

心も深く知らぬ……この使は事情も深く知らぬ男で。
申させたるに―使が取次を以て匂宮に復命すると。
いたく煩ふとも……浮舟がひどく煩つてゐるといふ事も聞かなかつたし。匂宮の心。
さりげもなくて―重態らしい樣子も無くて。
大將殿―薫。
宿直するもの……警衛の者が疎漏だ。
言づくる事なくて……何か口實にする用も無くて私が參りそれが薫君に聞えましたら、此方の祕密をお感づきなさらうも知れません。
さりとていと……それといつて事情曖昧の儘で居られようか。
猶とかく……矢張何とかうまい工合に思案して。
いかなる事を……どんな事件なら一體そんなにいひ騷ぐのかと樣子を聞合はせよ。
いとほしき御氣色も……時方はお可愛さうな匂宮の御樣子も勿體ないので。
かやすき人は―時方のやうな身分重からぬ者の一德には。
今宵やがて……今晩すぐ御歛葬を營むのだ、など話してゐるのを。
右近に消息したれど―時方は自分が

かなる事問ひ聞け」と宣へば、「時方」かの大將殿、いかなる事か聞き給ふこと侍りけむ。宿直するもの疎なりなど、いましめ仰せらるとて、下人のまかり入るをも、見咎め問ひ侍るなれば、言づくる事なくて、時方まかりたるらむを、物の聞え侍らば、思し合はする事などや侍らむ。さて俄に人の失せ給へらむ所は、論なう騷がしく、人しげく侍らむを」と聞ゆ。「匂さりとていと覺束なくてやあらむ。猶とかくさるべき樣にかまへて、例の心知れる侍從などに逢ひて、いかなる事をかくいふぞと案內せよ。下衆は僻言もいふなり」と宣へば、いとほしき御氣色もかたじけなくて、夕つ方ゆく。

かやすき人は疾く往きつきぬ。雨少し降りやみたれど、わりなき道に窶れて、下衆の樣にて來たれば、人多く立ちさわぎて、「人々今宵やがて歛め奉るなり」などいふを、聞く心地も淺ましく覺ゆ。右近に消息したれども、え逢はず。「右近只今物覺えず、起きあがらむ心地もせでなむ。さるは今宵ばかりこそは、かくも立ち寄り給はめ。え聞えさせぬ事」といはせた

使に來た由を右近に申入れたが。
さるは今宵ばかり……それにしても貴方が此處にお立寄り下さる事も今晩限でせう、それだのに逢つてお話も出來ぬのが殘念です。
かく疊東なくては―事情がよく分らないでは。
今一所だに―せめてもう一人の方、卽ち侍從さんでも逢つて下さい。
思しもあへぬ樣にて―浮舟樣御自身でも思ひもつかぬやうにして。
少し心地も……少し氣分も落着きましてから、浮舟樣が今までも物案じて居られた御樣子や、先夜匂宮樣に無駄足おさせ申した事をお氣の毒に存じて居られた御樣子などお話し申しませう。
この穢らひ―死人の穢れ。
あが君や―浮舟をさしていふ。
かひある御有樣を―浮舟樣が幸福なお身の上におなり遊ばすのを。
うち捨て給ひて―私共をあとにお殘しになつて。
え領じ奉らじ―奪つて行く事は出來まい。
帝釋も……故事があらうと思はれるが未勘。
取り奉りたらむ―奪つて行つた者は。
心得ぬ事ども……乳母の繰言の中に不審な事がまじつてゐるのを時方

り「時方」さりとも、かく覺束なくては、いかでか歸り參り侍らむ。今一所だに」と、切にいひたれば、侍從ぞ逢ひたりける。「侍從いと淺ましく、思しもあへぬ樣にて失せ給ひにたれば、いみじといふにも、飽かず夢のやうにて、誰も〳〵惑ひ侍るよし申させ給へ。（匂宮ニ）少し心地ものどめ侍りてなむ、日頃も物思したりつる樣、一夜いと心苦しと思ひ聞えさせ給へりし有樣なども、聞えさせ侍るべきに、この穢らひなど、人の忌み侍るほど過して、今ひと度立ちより給へ」といひて、泣くことといみじ。內にも泣く聲々のみして、乳母なるべし、「乳母あが君や、何方にかおはしましぬる。返り給へ。空しき死骸をだに見奉らぬが、かひなく悲しくもあるかな。日暮見奉りても飽かず覺え給ひ、いつしかかひある御樣を見奉らむと、朝夕べに頼み聞えつるこそ、命も延び侍りつれ。うち捨て給ひて、かく行方も知らせ給はぬこと。鬼神もあが君をばえ領じ奉らじ。人のいみじく惜む人をば、帝釋も返し給ふなり。あが君を取り奉りたらむ人にまれ鬼にまれ、返し奉れ。なき御死骸をも見奉らむ」といひつゝ續

は變だと思つて。死骸の無いことをいふ。

もし人の……或は誰か浮舟樣をお隱し申されたのではありませんか。

確かに聞し召さむと……私は、匂宮樣が事情を確實に知りたいと仰しやつて御自身の名代にお遣しなされた使なのです。

後にも聞し召し合はする……後日匂宮樣が事の眞相をお聞合せになる事があつた時私の復命と違ふ事がまじつてゐたら、參上した私の罪になりませう。

又さりともと……又浮舟樣死去といつても若しやそれは何かの誤聞ではあるまいかと一縷の望を匂宮樣がお繫ぎなされ、それで貴女方に面會して眞相を聞いて來いと私にお命じなされたそのお心持をも。

人の朝廷―異朝、支那をさす。

またかゝる事―他に、匂宮樣の今度の御熱情ほどの事は。

げにいとあはれなる……ほんにまあ御親切なお使ではある。

例ならぬ事の樣……こんな非常な事件は自然匂宮のお耳に入らう。

かくしも在る限……何のまあこれ程まで一同で途方にくれて歎きませうぞ。上の「などか」に接する句。

いといみじく物を……浮舟樣が大變に物思に沈むやうに見えましたので、薫君がうるさい程引取の件を仰しやる事などもありました。

かくのゝしる―かう大騒してわめいてゐる。

初より……最初から關係し始めた薫君の方に浮舟が引取られるやうにと。

この御事をば……匂宮樣を浮舟樣が一人で窃に勿體なく身に沁みてお慕ひ申して居られた爲に。

心と身を……自殺なされた樣子故。

心の惑に―一同が途方にくれて。

まほならず―露骨ではなく。

さらばのどかに……では又ゆる〳〵

參上致しませう、かうした立ちながらの話も餘り疎略過ぎるやうです、今に匂宮樣御自身も御來訪なされませう。

今更に……今更浮舟樣と匂宮樣との事が人に知られようのも、浮舟樣の爲には却て名譽な御運命が分る譯ではあるが、何分祕密になされた事ゆゑこの儘隱し通しておしまひなさるのが、結局御深切でせう。

此處には……この宇治邸では皆がかうして世間竝でなく横死なされた事を人に聞かせまいと色々に苦心してゐるものを、時方に長居されては自然事の樣子が顯はれる事もくるが、心得ぬ事どもまじるを。怪しと思ひて、「なほ宣へ。もし人の隱し聞え給へるか。確かに聞し召さむと、御身の代りに出だし立てさせ給へる御使なり。今は、とてもかくてもかひなき事なれど、後にも聞し召し合はする事の侍らむに、違ふ事のまじらば、參りたらむ御使の罪になるべし。又さりともと賴ませ給ひて、君達に對面せよと仰せられつる御心ばへも、辱なしとは思されずや。女の道に惑ひ給ふことは、人の朝廷にも、古き例どもありけれど、またかゝる事この世にはあらじとなむ見奉る」といふに、げにいとあはれなる御使にこそあれ、隱すとも、かくて例ならぬ事の樣、おのづから聞えなむと思ひて、「などか聊かにても、人や隱い奉りたらむと思ひ聞ゆべき事のあらむには、かくしも在る限惑ひ侍らむ。日頃いといみじく物を思し入るめりしかば、かの殿の煩はしげに、ほのめかし聞え給ふ事などもありき。御母に物し給ふ人も、かくのゝしる乳母なども、初より知り初めたりし方に渡り給はむとなむ急ぎ立ちて、この御事をば、人知れぬ樣にのみ、辱なく

あらうかと右近は思ふので、何彼と時方を勸めて歸らせた。目の前に……目の前で死なせたらその悲しさは。

かゝる事どもの……匂宮とのあんなごたゴ〳〵があつて浮舟がひどく心痛をしたといふ事も、母君は知らないので。

怖ろしと思ひ聞ゆる……豫て恐れ憚つてゐる女二宮のお側に。

かう迎へ給ふべしと……薫君が浮舟をお引取なさる筈と聞いて、不都合千萬だと思つて。

今參の……新參の奉公人で氣心の知れぬ者でも居りはせぬかと。

いと世離れたり……此處は邊鄙だといつて、居りつけぬ新參などは此處では碌な仕事も出來ず、追つ付け急いで歸つて參りませうといひながら、皆引移りの準備に要する雜物などを抱へて歸京しました。

片へはなくて｜一部は今居らず。

なきかげに｜前卷の浮舟の歌「歎きわび云々。」二〇一九頁參照。

響きのゝしる｜蠢々と高鳴る。

さて失せ給ひにけむ人を……あんなにして亡くなられた浮舟樣を私達が色々にいひくるめて、母君や薫君匂宮樣なども、一體浮舟は本當はどうなつたのか知らんとお疑ひあはれと思ひ聞えさせ給へりしに、御心亂れけるなるべし。淺ましう、心と身をなくなし給へるやうなれば、かく心の惑に、ひが〳〵しくいひ續けらるゝなゝめり」と、流石にまほならずほのめかす。心得がたく思ひて、「さらばのどかに參らむ。立ちながら侍るも、いと事そぎたるやうなり。今御自らもおはしましなむ」といへば、あな辱な、今更に人の知り聞えさせむも、亡き御爲は、なか〳〵めでたき御宿世見ゆべき事なれど、忍び給ひし事なれば、又洩らさで止ませ給はむなむ、御志に侍るべき」といふ。此處には、かく世づかず亡せ給へるよし、人には聞かせじと、よろづに紛らはすを、自然に事どもの氣色もこそ見ゆれと思へば、とかくそゝのかし遣りつ。

雨のいみじかりつる紛れに、母君も渡り給へり。更にいはむ方もなく、目の前に亡くなしたらむ悲しさは、いみじくとも世の常にて、類ある事なり、これはいかにしつる事ぞと惑ふ。かゝる事どもの紛れありて、いみじう物思ひ給ひつらむとも知らねば、身を投げ給へらむとも思

なさらうのも誠にお氣の毒な譯です、と右近と相談をして。

忍びたる事……匂宮との一條とても浮舟樣が造んでなされた事では無し、母君が浮舟樣の死後お聞になつたにしてもひどく恥かしい事でもないものを、いつそ母君に事實をお話申して、こんなに屍骸の無い便りなさまで旁々歎いていらつしやるのを、少しでも合點のゆくやうにして上げませう。

世づかぬ氣色にて……屍骸も無いといふ異樣な有樣で日を過したら、必ず世間の評判になりませう。

なほ聞えて……矢張事實を母君に申上げて、かうなつた上は世間の手前だけでもうまく繕ひませう。

忍びてありし樣を……密に事實を母君に申上げると。

さば｜それでは。以下母君の心。

いとゞ我も……母君は猶更悲しく自分も河水に落込んでしまひたい氣がして。

おはしましにけむ方｜死體の行方。

はか〳〵しく收めむ｜しかと引上げよう。

さるものから……ですから水中を捜索などしては恥の上塗で世間の人の噂も誠に聞きにくう御座います。

と樣かう樣に……母君はあれこれと

ひも寄らず、鬼や食ひつらむ、狐めくものや取りもていぬらむ、いと昔物語の怪しき物の事のたとひにか、さやうなる事もいふなりしと思ひ出づ。さてはかの怖ろしと思ひ聞ゆるあたりに、心など惡しき御乳母やうの者や、かう迎へ給ふべしと聞きて、目醒ましがりて、たばかりたる人もやあらむと、下衆などを疑ひ、今參の心知らぬやある」と問へば、女房いと世離れたりとて、在りならはぬ人は、此處にてはかなき事もえせず、今疾く參らむといひつゝなむ、皆その急ぐべき物どもなど取り具しつゝ、歸り出で侍りにし」とて、元よりある人だに、片へはなくて、いと人少なゝる折になむありける。侍從などこそ、日頃の御氣色思ひいで、身を失ひてばや」など泣き入り給ひし折々の有樣語り、書き置き給へる文をも見るに、「なきかげに」と書きすさび給へるものゝ、硯の下にありけるを見つけて、河の方を見やりつゝ、響きのゝしる水の音を聞くにも、疎ましく悲しと思ひつゝ、「さて失せ給ひにけむ人を、とかくいひ騒ぎて、何處にも〳〵、いかなる方になり給ひにけむと、思し

思案なさると。
この人々二人―右近と侍従。
御座ども―浮舟の常用の茵など。
皆ながら……そつくりその儘脱け出して行かれたお夜具などのやうな品々を車の中に取入れて。
御乳母子の大徳―浮舟の乳母の子なる僧。
御忌に籠るべき……浮舟の中陰に籠るべき人々一同連れ立つて。
人の亡くなり……人の事実死んだ風によそつて。
出だし立つるを―車を引出すと。
大夫内舎人―薫の命で宇治邸を警衛した内舎人や、蛤の右近大夫。
おどし聞えしもの―厳重に警戒して浮舟を恐しがらせた人々。
殿に事の由……薫君に事情をお申上げなされて。
殊更に……わざと今夜の中に、と致しませう、密に處置したいと思ふ仔細がありますから。
この案内知りたる……この様子を知つた僧達だけで以て。
いとはかなくて……まことの火葬でない故いふ。
なかなかなることを……却てこんな葬儀などの事は大袈裟に誓み。
言忌など……縁喜など面倒にかつぐものなので。

疑はむもいとほしき事」といひ合はせて、侍従等「忍びたる事とても、御心より起りてありし事ならず。親にて亡き後に聞き給へりとも、いとやさしき程ならぬを、ありのまゝに聞えて、かくいみじく覺束なき事どもをさへ、かたぐ〳〵思ひ惑ひ給ふさまを、少しあきらめさせ奉らむ。亡くなり給へる人とても、死骸を置きてもて扱ふこそ世の常なれ、世づかぬ氣色にて日頃も經ば、更に隠れあらじ。なほ聞えて、今は世の聞えをだにつくろはむ」と語らひて、忍びてありし樣を聞ゆるに、いふ人も消え入り、えいひやらず。聞く心地も惑ひつゝ、さば、このいと荒ましと思ふ河に流れ失せ給ひ（母君）にけりと思ふに、いとゞ我も落ち入りぬべき心地して、北方「おはしましにけむ方を尋ねて、死骸をだにはか〳〵しく收めむ」と宣へど、右近等「更に何のかひ侍らじ。行方も知らぬ大海の原にこそはおはしましにけめ。さるものから、人のいひ傳へむ事はいと聞きにくし」と聞ゆれば、と樣かう樣に思ふに、胸のせきのぼる心地して、いかにもいかにも、すべき方も覺え給はぬを、この人々二人して、車寄せさせて、御座ども、氣ぢかく使ひ給ひし御調度ども、皆ながら脱ぎ置き給へる御衣などやうの物を取り入れて、御乳母子の大徳、それが叔父の阿闍梨、その弟子の睦ましきなど、もとより知りたる老法師など、御忌に籠るべきかぎりして、人の亡くなりたるけはひにまねびて、出だし立つるを、乳母、母君、いとゆゝしくいみじと伏しまろぶ。大夫、内舎人など、おどし聞えし者どもも參りて、内舎人「御葬送のことは、殿に事のよし申させ給ひて、日定められて、厳めしうこそ仕うまつらめ」などいひけれど、右近等「殊更に、今宵過すまじ。いと忍びてと思ふやうあればなむ」とて、この車をむかひの山の前なる原に遣りて、人も近くも寄せず、この案内知りたる法師のかぎりして焼かす。いとはかなくて烟は果てぬ。田舎人どもは、なか〳〵かゝることを事々しくしなし、言忌など深くするものなりければ、田舎人「いとあやしく、例の作法ある事どももし給はず、下衆下衆しく、あへなくてせられぬることかな」と謗りければ、又ノ田舎人「片へおはする人は、殊更にかくなむ京の人はし給ふなる」など、樣々になむ安

例の作法ある……當然行ふべき作法もなさらず、まるで下々の葬送のやうに、あつけなくお済しなされた事だなあ。
片へおはする人―兄弟ある人の義と舊註にいふ。
殊更にかくなむ―わざと疎略に。
かゝる人どもの……こんな賤しい者共の取沙汰や思はくすら憚られるのに。以下右近等の心。
大將殿わたりに―薫君が。
宮はた……匂宮樣にしても薫君とは御同族の間柄で、浮舟樣が薫樣にかくまはれて居るか居らぬか、當座の間こそ薫樣方に潜しでゐるとも思召さうが、結局は分らう。
又定めて……又きつと薫君は匂宮樣をお疑ひはなさるまい。
生き給ひての……御存命中の御運は誠に立派でいらつしやつた浮舟樣が、ほんに亡き後にはひどい事までお疑をお受けなさらうと思へば。
此處の内なる―邸内の。
氣色も見聞きつる……凡その樣子を感づいた者どもには口どめをし。
案内知らぬには―樣子を知らぬ者には。
永らへてば―時が立つたら。
只今は……當分は自殺の事が知れては薫君や匂宮樣の悲歎も醒めさう

な嫁な事ゆゑ、それが卒爾に傳聞でゝもお耳に入らう事は、矢張浮舟様の爲にお氣の毒な事でせう。
二人―侍從と右近。
心の鬼―良心の咎め。
大將殿は……薫は御母女三宮が御病氣なので。
さていとゞ彼處をば……そんな譯で猶更宇治邸をお案じなされたが。
さなむといふ人は……かやう〳〵の譯と浮舟の今度の事件を薫に申上げる者は無かつたので。
まづ御使の無きを……第一に薫から見舞の使が來ないのを宇治邸の人人は外聞も惡いと思つてゐると。
御庄―薫の宇治の御庄。
しか〳〵と申させければ―かく〳〵の次第と浮舟の事を薫へ取次を以て申上げたので。
その又の日―その翌日。即ち投身の日からは翌々日に當る。
自ら物すべきに……私自身出向くべきですが、かうして母宮の御病氣によつて。
かゝる所に……石山に日ぎりの參籠をしてゐるので往かれません。
夜べの事は……昨夜の葬送は何でまあ、私の方に通知して目を延べても營むべきものを、非常に簡略な風に慌てゝなされたのですか。

からずいひける。かゝる人どものいひ思ふことだにつゝましきを、まして物の聞え隱れなき世の中に、大將殿わたりに、死骸もなく失せ給ひにけりと聞し召さば、必ず思ほし疑ふこともあらむを、宮はたおなじ御中らひにて、さる人のおはしおはせずは、暫しこそ忍ぶとも思さめ、遂には隱れあらじ。又定めて宮をしも疑ひ聞え給はじ、いかなる人か率て隱しけむなどぞ、思し寄せむかし、生き給ひての御宿世は、いと氣高くおはせし人の、げに亡き影に、いみじきことをや疑はれ給はむと思へば、此處の內なる下人どもにも、今朝のあわたゞしかりつる惑に、氣色も見聞きつるには口がため、案內知らぬには聞かせじなどぞ、たばかりける。「右近等」「永らへてば、誰にもしづやかに、ありし樣をも聞えてむ。只今は悲しさ醒めぬべきこと、ふと人傳に聞し召さむは、猶いといとほしきことなるべし」と、この人二人ぞ深く心の鬼添ひたれば、もて隱しける。
大將殿は、入道の宮の惱み給ひければ、石山に籠り給ひて、騷ぎ給ふ頃

とぢめの事をしも―一生の終の大事な葬儀だといふのに。
こゝの爲も―私自身の爲にも。
大藏の大夫―薫の家司、仲信。
いとゞいみじきに―宇治の人々は一層悲しいので。
只涙に……只涙に沈んで物もいへぬといふ事を口實にして、委しい御返事もせずに濟した。
殿は……薫はどう考へてもあつけなく悲しい事と思召すにつけ。
心憂かりける……宇治はいやな處だつたなあ。以下薫の心。
思はずなる筋の……匂宮が怨んで通ふやうになつたあんな間違の生じたのも。
人も―匂宮も。
我が餘り……薫は自分があんまりうつかりで戀路に疎い心が悔しく。
惱ませ給ふあたりに……御母女三宮の御病氣で御心痛の處に、又こんな事で御心配なさるのも堪へ難いので。
宮の御方―奥方女二宮。
事々しき程にも……大した忌でもありませんけれど、近い關係の者に不吉な事があつたのを聞きましたので、心が落着かぬ間だけを緣起でもないと思つて貴女の方へは態と遠慮して參上しません。

なりけり。さていとゞ彼處をば覺束なく思しけれど、はか〳〵しく、さなむといふ人はなかりければ、かゝるいみじき事にも、まづ御使の無きを、人目も心憂しと思ふに、御庄の人なむ參りて、しか〳〵と申させければ、（薫ハ）淺ましき心地し給ひて、御使、その又の日、まだつとめて參りたり。「（薫ノ口上）いみじき事を聞くまゝに、自ら物すべきに、かく惱み給ふ御事により、愼みて、かゝる所に日を限りて籠りたればなむ。夜べの事は、などか、こゝに消息して、日を延べてもさる事はするものを、いと輕らかなる樣にて、急ぎせられにける。とてもかくても同じいふかひなさなれども、とぢめの事をしも、山賤の謗をさへ負ふなむ、こゝの爲も辛き」など、かの睦まじき大藏の大夫して宣へり。御使の來たるにつけても、いとゞいみじきに、聞えむ方なき事どもなれば、只涙に溺ほれたるばかりをかごとにて、はか〳〵しうも答へ遣らずなりぬ。殿は、猶いとあへなくいみじと聞き給ふにも、心憂かりける所かな、鬼などや住むらむ、などて今までさる所にする（浮舟ヲ）たりつらむ、思はずなる筋の

現の世には……浮舟の存命中は、私は何であんなにまあ熱心に愛せず暢氣に過したらう。

かゝる事の筋に……かうした悲しい戀ゆゑにひどく煩悶すべき自分の運命なのだなあ。

樣異に……出家しようと望んでゐた自分が、案外にもかうして俗體でいつまでもゐるのを。

人の心を……道心を起させようとして佛樣のなさる方便は、表面に慈悲を隱して一見こんなに殘酷な事もあるものだ。

かの宮はた—匂宮も亦。

屢ぐに—お側の者が心配してゐると。

ありし樣は—浮舟の存命中の樣子が。

かくすゞろなる……こんな埒もない涙がちな目付の樣子を人に見られまいと、匂宮はうまく隱したお積りであるが、自然御悲歎の樣子が際立つて見えるので。

かの殿にも—薫の方でも。

この御氣色を……匂宮の悲歎の御樣子をお聞きになると。

さればよ……案の定だ、浮舟と匂宮との關係は矢張餘所ながらの文通だけではなかつたのだ、一體浮舟は匂宮が御覽になつたら必ず率き込まれさうな人體だつたのだ。

永らへましかば—浮舟が若し長く生紛れある樣なりしも、かく放ち置きたるに心安くて、人もいひ犯し給ふなりけむかしと思ふにも、我が餘りたゆく世づかぬ心のみ悔しく、御胸いたく覺え給ふ。惱ませ給ふあたりに、かゝる事思し亂るゝもうたてあれば、京におはしぬ。宮の御方にも渡り給はず。「事々しき程にも侍らねど、ゆゝしき事を近う聞き侍れば、心の亂れ侍るほどを、忌まし忌ましくてなむ」と聞え給ひて、盡きせずはかなく、いみじき世を歎き給ふ。ありし樣容貌いと愛敬づき、をかしかりしけはひなどの、いみじく戀しく悲しければ、現の世には、などかくしも思ひ入れず、のどかにて過しけむ、只今は更に思ひ靜めむ方なきまゝに、悔しき事の數知らず、かゝる事の筋につけて、いみじう物思ふべき宿世なりけり、樣異に志したりし身の、思の外にかく例の人にて永らふるを、佛などの憎しと見給ふにや、人の心を起させむとて佛のし給ふ方便は、慈悲をも隱して、かやうにこそはあゞなれと思ひ續け給ひつゝ、行をのみし給ふ。かの宮はた、まして一二三日は物もおぼえ給はず、現心もなき御樣にて、いきてゐたら。

我が爲に—薫自身の爲に。

宮の御訪らひに—匂宮の御病氣見舞に。

事々しき際ならぬ……薫は大した身分でもない浮舟位の死を歎くといつて引籠つてゐて、お見舞に參上せぬのも拗ねたやうだと思召して。

式部卿の宮—源氏の弟。

薄鈍なるも……薫は鈍色を着ていらつしやるのも、内々浮舟の死を歎く爲の喪服とも考へられて。

宮臥し沈み給ひて……匂宮は枕も上らぬといふ風にばかりは見えぬ御容態なので。

例入り給ふ—何時もお這入なさる。

見え給はむも……匂宮は薫にお逢ひになるのも工合惡く氣が引けて。

おどろ〳〵しき……ひどく重態といふ程でも御座いませんが。

物すれば—申しますので。

宮にも—御母明石中宮にも。

いとはしたなけれど……匂宮は我ながら工合が惡いけれど、この涙を浮舟ゆゑの涙とは薫が必しも感付きはなさるまい、只女々しく氣が弱いからだと見られるだらうと思召すのも極りがわるい。

さりや……果してさうだ、匂宮は只浮舟の事ばかり思つて居られるのかなる御物の氣ならむなど騷ぐに、やう〳〵涙盡し給ひて、思し靜まるにしもぞ、ありし樣は戀しくいみじく思ひ出でられ給ひける。人には只御病の重きさまにのみ見せて、かくすゞろなるいやめの氣色知らせじと、賢くもて隱すと思しけれど、自らいと著かりければ、いかなる事にかく思し惑ひ、御命も危きまで沈み給ふらむ」といふ人もありければ、かの殿にも、いとよくこの御氣色を聞き給ふに、さればよ、なほ餘所の文通はしのみにはあらぬなりけり、見給ひては必ずさ思しぬべかりし人の樣ぞかし、浮舟が永らへましかば、たゞなるよりは、我が爲に嗚滸なることも出できなましと思すになむ、焦がるゝ胸も少し醒むる心地し給ひける。

宮の御訪らひに、日々に參り給はぬ人なく、世の騷となれる頃、事々しき際ならぬ思に籠りゐて、參らざらむも僻みたるべしと思して、參り給ふ。その頃、式部卿の宮と聞ゆるも失せ給ひにければ、御叔父の服にて薄鈍なるも、心の中のあはれに思ひ擬へられて、つき〴〵しく見ゆ。

だわい、浮舟との關係は何時頃からなのだらう。薫の心。
我をいかにをかしと—匂宮が私をどんなに迂濶な男だと。
この君は……薫はさう思ふと悲しさは少し醒めて居られるのを。
こよなくも疎なるかな—薫はひどくまあ浮舟の死に冷淡だなあ。以下匂宮の心。
いとかゝらぬ事に……こんな死別といふやうな重大事でなくてすら。
若し心得たらむにも—若し私の涙を浮舟ゆゑと薫が感付かれても。
さいふばかり—それ程に薫は。
世の中の常なき……現世の無常を痛切に感じてゐる薫が猶更平氣でゐる事よと。
眞木柱は……浮舟の形見と思へば薫が懷かしいとの意。わぎも子が來ては倚り添ふ眞木柱そも睦しやゆかりと思へば」。(細流)
これに向ひたらむ……嘗て浮舟が薫に差向ひでゐただらうが、その有樣をも匂宮は想像なさると。
形見ぞかし—亡き浮舟の記念で薫はあるぞ。
いと籠めてしも……薫は浮舟の事をひどく秘して置くでもあるまいと思召して。
聞えさせぬ事殘し……貴方にお話申

(薫八)少し面痩せて、いとゞなまめかしき事まさり給へり。人々まかでて、しめやかなる夕暮なり、宮臥し沈み給ひてのみはあらぬ御心地なれば、疎き人にこそ逢ひ給はね、御簾の内にも例入り給ふ人には、對面し給はずもあらず。見え給はむもあいなくつゝましく、見給ふにつけても、いとゞ涙のまづ堰き難さを思せど、思ひ靜めて、「匂おどろ〳〵しき心地にも侍らぬを、皆人は慎むべき病の樣なりとのみ物すれば、内裏にも宮にも思し騒ぐがいと苦しく、げに世の中の常なさをも、心細く思ひ給ふる」とて、押し拭ひ紛らはし給ふと思す涙の、やがて滯らず零り落つれば、いとはしたなけれど、必ずしもいかでか心得む、只めゝしく心弱きとや見ゆらむと、思すも恥かし。さりや、只この事をのみ思すなりけり、いつよりなりけむ、我をいかにをかしと、物笑し給ふ心地に、月頃思し渡りつらむと思ふに、この君は悲しさは忘れ給へるを、こよなくも疎なるかな、物の切に覺ゆる時は、いとかゝらぬ事につけてだに、空飛ぶ鳥の鳴き渡るにも催されてこそ悲しけれ、わがかくすゞ

さずにゐる事がある間は。
今はなか〳〵の……今では私も生中の高官となりまして、まして貴方は猶更御閑暇も無い御有樣で。
宿直—話相手の意を謙遜していふ。
その事となくては……これといふ特別の用が無くては參上も出來ず、取紛れて過して居ります。
山里—宇治。
はかなくて失せ……空しく死にました大君の妹に當る浮舟が意外の處に居ると聞きまして、時々通つて逢はうかと存じましたが丁度女二宮を娶つた當時で、不都合なと人の非難もありさうな折でした故。
怪しき所—邊鄙な宇治。
又彼も……又浮舟も私一人を守つてゐる心も格別無いらしいとは見ましたけれど。匂宮への諷意。
やむごとなく……正式な本妻にする積りならとにかく、只時々逢ふ位の女としては大して不都合もないと思つたりして、餘裕ある氣分で愛してゐた浮舟が。
聞し召すやうも……或はお聞になつた次第も御座いませうか。
これもいとかうは……薫もこれ程の愁ひ顔はお見せ申すまい、我ながら未練がましいと思はれたが。
つれなくて—何げない顔で。

ろに心弱きにつけても、もし心得たらむにも、さいふばかり、物のあはれを知らぬ人にもあらず、世の中の常なき事を、沁みて思へる人しもつれなきと、羨ましくも憎くも思さるゝものから、眞木柱はあはれなり。これに向ひたらむ樣も思しやるに、形見ぞかしとうちまもり給ふ。やう〳〵世の物語聞え給ふに、いと籠めてしもあらじと思して、
「薫昔より心に籠めて、暫しも聞えさせぬ事殘し侍る限は、いといぶせくのみ思う給へられしを、今はなか〳〵の上萬になりにて侍り。まして御暇なき御有樣にて、心のどかにおはします折も侍らねば、宿直などに、その事となくてはえ侍はず、そこはかとなくて過し侍りてなむ。昔御覽ぜし山里に、はかなくて失せ侍りにし人の、同じゆかりなる人、覺えぬ所に侍りと聞きつけ侍りて、時々さて見つべくやと思う給へしに、あいなく人の謗も侍りぬべかりし折なりしかば、この怪しき所に置きて侍りしを、をさ〳〵まかりて見る事もなく、又彼も、某一人をあひ頼む心も殊になくてやありけむとは見給ひつれど、やむごとなく

いかにとも聞ゆべく……實はお見舞も申上げようと存じながら、特に人に祕していらつしやる事と聞いて居りましたのでねえ。

さる方にても……私一人を信頼してゐた風でもなかつた故、さうした意味で貴方に差上げてもよいと思つてゐた女なので御座います、或は自然御覽になつた事もおありでせうか、中の君の許にも出入する仔細が御座いましたから。（皮肉）

いみじくも思したりつる……匂宮が深くもまあ浮舟の事を思召したものだ、その一生は果敢なかつたけれど流石に立派な浮舟の運ではあつた。以下薫の心。

御子―匂宮をさす。

見給ふ人とても……匂宮は、妻妾方とても並大抵ならず樣々の點で勝れた方々だのに、それを擱いて浮舟にお心を打込み。

道々に驚ぐは―その專門々々で一生懸命に奉仕してゐるのは。

この人を思すゆかりの……畢竟匂宮が浮舟を思込まれたが原因で御不例になつた爲なのだ。

我も―薫自身をいふ。

この人のらうたく……浮舟の可愛さといふ心持は匂宮に劣つたかい、まして今は亡き人と思へば心を落

物々しき筋に思ひ給へばこそあらめ、見るにはた異なる咎も侍らずなどして、心安くらうたしと思ひ給へつる人の、いとはかなくなり侍りにける、なべて世の有樣を思う給へつゞけ侍るにも悲しくなむ。聞し召すやうも侍るらむかし」とて、今ぞ泣き給ふ。これもいとかうは見え奉らじ、嗚滸なりと思ひつれど、こぼれ初めてはいととめ難き氣色の、聊か亂り顏なるを、（匂宮ハ）怪しくいとほしと思せど、つれなくて、「（匂）いとあはれなる事にこそ。昨日ほのかに聞き侍りき。いかにとも聞ゆべく思う給へながら、わざと人に聞かせ給はぬことゝ聞き侍りしかばなむ」とつれなく宣へど、いと堪へ難ければ、言少なにておはします。（薫）さる方にても御覽せさせばやと思ひ給へし人になむ。自らさもや侍りけむ。宮にも參り通ふべきゆゑ侍りしかば」など、少し氣色ばみて、（侍）御こゝち例ならぬ程は、すゞろなる世の事聞し召しいれ、御耳驚くもあいなき業になむ。よく愼ませ給ふべく」など、聞えおきて出で給ひぬ。いみじくも思したりつるかな、いとはかなかりけれど、流石にたかき人の宿

蓋けやうもなく悲しいわい。

人木石に……白氏文集「人非二木石一皆有レ情、不レ如レ不レ逢二傾城色一」。

後のしたゝめ……死後の處置即ち葬式回向なども簡單に濟したのを。

宮にも―中の君も。

母のなほ〳〵しくて……浮舟の母が上品ならぬ考で、兄弟ある者は葬送を簡略にするものだなどと、そんな下々の者は緣喜を擔ぐ事があるのを思ひ、それで簡略にしたのであらう、と薫は不愉快に思召す。

覺束なさも……薫は宇治の樣子も非常に氣がかりなので、浮舟死去當時の有樣も自身親しく聞きたいと思召すが、長逗留なさるも不都合だし、態々往つて直に歸るも氣の毒だなどと迷つていらつしやる。

月立ちて……四月になつて薫が今日こそ宇治へ往かうと。

宿に通はゞ―古今「亡き人の宿に通はゞ時鳥かけて音にのみ鳴くと告げなむ」。

北の宮に……二條院に、今日は匂宮が此處にいらつしやる日だから。

橘折らせて……橘の枝に時鳥の歌の文をつけた。橘と時鳥は附物。

忍び音や……人知れず貴君もお泣きになる事でせう、甲斐なく死んだあの死出の田長即ち浮舟の上に心

世なりけり、當時の帝后のさばかりかしづき奉り給ふ御子、顏容貌よりはじめて、只今の世には儔おはせざめり、見給ふ人とてもなのめならず、樣々につけて、限なき人をおきて、これに御心を盡し、世の人立ち騷ぎて、修法、讀經、祭、祓と、道々に騷ぐは、この人を思すゆかりの、御心地のあやまりにこそはありけれ、我もかばかりの身にて、時の帝の御女をもち奉りながら、この人のらうたく覺ゆる方は劣りやはしつる、まして今はと覺ゆるには、心をのどめむ方なくもあるかな、さるは嗚滸なり、かゝらじと思ひ靜むれど、樣々に思ひ亂れて、「人木石にあらざれば皆情あり」と、うち誦して臥し給へり。後のしたゝめども、いとはかなくしてけるを、宮にもいかゞ聞き給ふらむと、（薫ハ）いとほしく敢へなく、母のなほ〳〵しくて、兄弟あるはなど、さやうの人は忌む事あゝなるを思ひて、事そぐなりけむかしなど、心づきなく思す。覺束なさも限なきを、ありけむ樣もみづから聞かまほしと思せど、永籠りし給はむも便なし。往きと往きて立ちかへらむも心苦しなど

がお通ひなら。死出の田長は時鳥の一名。冥途の鳥との俗説がある。女君の……中の君の御様子の浮舟によく似たのを。二所―匂宮と中の君と。橘の……橘の香は昔の人を思出させるといふにその橘の薫る貴方のお屋敷附近では、時鳥も心して啼いてくれ、餘り啼いたら貴方が猶更浮舟を思出して歎かれように。女君……中の君は匂宮と浮舟との關係は皆お氣づきなされた。あはれに淺ましき……大君といひ浮舟といひ、ほんにまあひどく果敢ない運命で。中の君の心。物思ひ知らねば―暢氣だから。それもいつまで―永らへるといつた處が、それも何時まで生きる人の命かいと。宮も隱れなき……匂宮もどうせ分つてゐる事を中の君に立て隔なさるのも苦しいので。他人よりは……戀しい浮舟の姉妹ゆゑ他の人よりは匂宮が中の君を一層睦しく思召す。事々しくうるはしくて……萬事に大袈裟で折目正しく、匂宮が病氣などの時も驚き慌てるといつた風の六の君の所では。父大臣―夕霧。

思し煩ふ。

月立ちて、今日ぞ渡らましと思し出で給ふ日の夕暮、いと物あはれなり。御前近き橘の香の懐かしきに、時鳥の二聲ばかり鳴きて渡る。「宿に通はゞ」と、獨言ち給ふも飽かねば、北の宮に、こゝに渡り給ふ日なりければ、橘折らせて聞え給ふ。

「薫」忍び音や君もなくらむかひもなき
　　死出のたをさに心かよはゞ」

宮は、女君の御様のいとよく似たるを、いみじうあはれに思して、二所ながめ給ふ折なりけり。氣色ある文かなと見給ひて、

「匂」橘の薫るあたりはほとゝぎす
　　心してこそ鳴くべかりけれ

煩はし」と書き給ふ。女君この事の氣色は、皆見知り給ひてけり。あはれに淺ましきはかなさの、様々につけて心深きなかに、我一人物思ひ知らねば、今まで永らふるにや、それもいつまでと、心細く思す。宮も隱

隙なきゆ―お見舞の絶間がないのも。此處は―中の君の許は。いと夢のやうにのみ……匂宮は浮舟の事を夢のやうにのみ思はれ、矢張どうしてあんなになつたのだらう、餘り急に死んだものだとのみ思はれて氣になるので。この一節字句省略に過ぎてゐる。例の人々―大内記や時方をさす。母君―浮舟の母。のどまるべくもあらねば―字治にゐては薄らぎさうにもないから。いと幽かなるに―宇治邸の人々がひつそり過してゐる處に。入り來たれば―時方等が來たので。事々しく俄に……義に仰山らしく急に警戒して廻つた番人共も今度は咎め立てをしない。生憎に……生憎匂宮が最後の度忍んで來られた時、この者共が咎めて遂にお入れ申さなかつた殘念さよと時方等が思出すもお氣の毒だ。さるまじき事を……由ない事を御執心遊ばす事よと、見苦しい事にお見上げ申すけれど。おはしましゝ……匂宮様のお通ひなされた夜々の御様子や。心強き人なく―泣かぬ人無く。かく宣はせて―匂宮様がかく〳〵仰しやつて。

れなきものから、隔て給ふもいと心苦しければ、ありし様など、少しは取り直しつゝ語り聞え給ふ。「隱し給ひしがつらかりし」など、泣きみ笑ひみ聞え給ふにも、他人よりは睦ましくあはれなり。事々しくうるはしくて、例ならぬ御心地の様も、驚き惑ひ給ふ所にては、御訪らひの人繁く、父大臣兄人の君だち隙なきもいとうるさきに、此處はいと心安くて、懐かしくぞ思されける。

いと夢のやうにのみ、猶いかで、いと俄なりける事にかは、とのみいぶせければ、例の人々召して、右近を迎につかはす。母君も、更にこの水の音けはひを聞くに、我もまろび入りぬべく、悲しく心うき事のどまるべくもあらねば、いと侘しうて歸り給ひにけり。念佛の僧どもを頼もしき者にて、いと幽かなるに、入り來たれば、事々しく俄に立ちめぐりし宿直人ども見咎めず。生憎に限の度しも、入れ奉らずなりにしよと、思ひ出づるもいとほし。さるまじき事を思ほし焦がるゝ事と、見苦しく見奉れど、こゝに來ては、おはしましゝ夜な〳〵の有様、いだ

人も怪しと……私が匂宮様の方へ参上したら、人も變な事だと尊しさうなのも憚られますし。

聞し召し明らむばかり—事情がはつきりお分りになる程に。

あからさまに……一寸外出して來ますと人に嘘ついても不自然でなく思はれる頃まで待つて、その頃意外にもまだ命がありましたら、少し氣分の落着いた時お召が無くとも參上して。

大夫—時方。

この御中—匂宮様と浮舟様との仲。

君達をも……貴女方をも、何の急いで陀懇に願ふ事もあるまい、どうせ結局は浮舟様のお供で京に來られて、私共も御懇意にお世話申す事になる方だからと存じてゐましたに。

私の御志も……私自身の貴女に對する御同情も却て深くなりました。

わざと御車など……貴女の爲に特に匂宮様がお車など配慮遊ばして。

今一所にても—せめて侍從さんでも。

まして—私は猶の事。

この御忌の程……匂宮様はこんな中陰の期間に、どうして死の穢をお嫌ひ遊ばさぬのでせう。宇治の侍女達は浮舟の死穢がかゝつてゐて

かれ奉り給ひて、船に乘り給ひしげはひのあてに美しかりし事などを思ひ出づるに、心強き人なくあはれなり。右近逢ひて、いみじう泣くも道理なり。時方「かく宣はせて、御使になむ參り來つる」といへば、右近「今更に、人も怪しといひ思はむもつゝましく、參りても、はか〳〵しく聞し召し明らむばかり、物聞えさすべき心地もし侍らず。この御忌はてゝ、あからさまに物になむと、人にいひなさむも、少し似つかはしかりぬべき程になしてこそ、心より外の命侍らば、いさゝか思ひ靜まらむ折になむ、仰言なくとも參りて、げにいと夢のやうなりし事どもも、語り聞えさせ侍らまほしき」といひて、今日は動くべくもあらず。大夫も泣きて、時方「更にこの御中の事、こまかに知り聞えさせ侍らず。物の心も知り侍らずながら、類なき御志を見奉り侍りしかば、君達をも、何かは急ぎてしも聞え承はらむ。遂には心寄せ仕うまつるべき あたりにこそと思う給へしを、いふかひなく悲しき御事の後は、私の御志も、なか〳〵深さまさりてなむ」と語らふ。時方「わざと御車など思しめぐらして奉れ給

宮邸には入れられぬ筈故いふ。

惱ませ給ふ御ひゞきに……匂宮様は御病氣の騒で様々の禁忌はお有りでせうが、浮舟様戀しさの餘、その忌中の穢だけは忌みきれさうもない御様子なのです。

籠らせ給ひても……穢を忌むどころか御自身で忌にお籠りになつてもよい位でせう。

殘の日—七七日までの殘の日數。

ありし御様—昔てお見上げ申した匂宮のお姿。

衾は只今……衾は敬意を表するもので匂宮の前に出るには勿論必要であるが、今は主人浮舟もなく隨つて衾の必要もないといふ考から油斷して鈍色の衾を作つてゐなかつたので、平常の薄紫のを召使に持たせて參上する。

おはせましかば……浮舟様が御存命ならこの道を忍んで京へいらつしやるだらうのに、私も密に匂宮様とお二人の仲に御同情申上げてゐたものを。この道は宇治と京との間の道。

宮はこの人—匂宮は侍從が。

女君には—中の君へは。

聞え給はず—侍從の來た事を。

おろさせ—車から下ろさせ。

思し歎きし様—浮舟の物思に煩悶し

へるを、空しくてはいと〳〵口惜しくなむ。今一所にても參り給へ」といへば、侍從の君呼び出でて、右近「さば參り給へ」といへば、侍從「まして何事をかは聞えさせむ。さても猶この御忌の程には、いかでか忌ませ給はぬ」といへば、時方「惱ませ給ふ御ひゞきに、様々の御つゝしみどもは侍るめれど、忌みあへさせ給ふまじき御氣色になむ。又かく深き御契にては、籠らせ給ひてもこそはおはしまさめ、殘の日いくばくならず、なほ一所參り給へ」と責むれば、侍從ぞ、ありし御様もいと戀しく思ひ聞ゆるに、いかならむ世にかは見奉らむ、かゝる折にと思ひなして參りける。黑き衣ども著て、引き繕ひたる容貌もいと清げなり。衾は、只今我より上なる人なきにうちたゆみて、色も變へざりければ、薄色なるを持たせて參る。おはせましかば、この道にぞ忍びて出で給はまし、人知れず心寄せ聞えしものをなど、思ふにもあはれなり。道すがら泣く〳〵なむ來ける。

宮は、この人參れりと聞し召すもあはれなり。女君には、餘りうたてあ